

文化庁委託事業報告書

平成29年度

危機的な状況にある言語・方言の
アーカイブ化を想定した実地調査研究

2018年3月

琉球大学
国際沖縄研究所

はじめに

石原昌英 (琉球大学)

本書は、平成29年文化庁委託事業「平成29年度の危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」の報告書である。「危機的な状況にある言語・方言」に関する文化庁の委託事業は、平成23年度から平成26年度までの4カ年間にわたり、「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」(平成23年度・平成25年)と「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業」(平成24年度・26年度)として実施された。八丈方言および奄美・琉球諸方言の危機の実態と保存・継承に係る取組等の実態については、これまでの研究である程度の目途がついたと思える。(集落により方言に差異があるということを考慮すると、これまでの実態に関する研究で十分とは言えないことは明らかではある。)平成27年度から危機的な状況にある言語・方言の保存・継承にむけた取組のひとつとなるアーカイブ化を想定した記録・保存を目的とした実地調査研究が開始され、平成27年度及び平成28年度は鹿児島県の喜界方言・瀬戸内方言、沖縄県の津堅方言、平安座方言、久高方言、奥武方言、黒島方言、宮良方言、黒島方言が対象となった。今年度は、平成27年度と同じ調査内容で、鹿児島県の佐仁方言(笠利町)、沖縄県の奥方言(国頭村)、大兼久方言(大宜味村)、島尻方言(伊平屋村)、阿嘉方言(座間味村)、大神方言(宮古島市)、小浜方言(竹富町)及び船浮方言(竹富町)の調査を行った。今年度の調査では、「大きな燕」の方言訳(阿嘉島方言を除く)を記述した。また、方言の保存継承について、方言劇がどのような効果を持ち得るのかについて、沖縄県の北谷町及び宜野湾市と鹿児島県の与論町及び瀬戸内町で調査した。当初予定していた浦添市の小学校でのインタビュー調査は実施できなかった。また、インタビューは実演者のみを対象とし、指導者のインタビューはできなかった。なお、昨年度に採録した「桃太郎」の黒島方言訳を修正し、再録音する計画であったが都合により実施できなかった。

以下に、本事業の目的・計画を記しておく。本報告書を利用していただくことの参考となれば幸いである。

【業務の目的と概要】

我が国における言語・方言のうち、消滅の危機にあるものについて、ユネスコが平成21年に発行した“Atlas of the World's Languages in Danger”の内容及び、平成23年度から平成26年度にかけて大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所及び琉球大学国際沖縄研究所が実施した文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」及び「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実体に関する調査研究事業」を参照の上、消滅の危機にある七つ(八丈方言、奄美方言、国頭方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言)の区画において、音声資料や映像資料、調査研究が十分とは言えない区画内の地域の方言について、当該地域の方言の保存・継承に資するため、アーカイブとして公開することを想定した実地調査及びその分析(以下「アーカイブ研究」とする)、方言の保存継承に資する諸研究(以下「保存調査研究とする」)を行う。なお、本事業は、アーカイブ研究と保存調査研究の二部構成とする。

アーカイブ研究については、琉球大学国際沖縄研究所が平成27年度に喜界島方言、南奄美(瀬戸内)方言、津堅島方言、平安座島方言、久高島方言、奥武島方言、宮良方言及び黒島方言について実施した研究と同じ内容の調査を、別の調査地において実施する。

平成27年度及び平成28年度の調査で示したように、沖縄県及び鹿児島県の奄美地域における方言については、研究蓄積の多い島・地域と不足している島・地域とがあり、その質と量は様ではない。また、同じ島とはいっても大きな島もあれば小さな島もあり、一つの島の中にも大きな言語差がある。同じ島の中でも研究蓄積の多い地域と全く不足している地域がある。沖縄島、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、久米島、宮古島、石垣島、西表島などの大きな島の内部には、母音の数や子音の数が異なったり、文法体系や語彙体系の大きく異なったりする個性的な下位方言が多くある。沖縄島、奄美大島、喜界島、石垣島等の大きな島の内部には多くの個性的な下位方言が存在する。

島ごとの研究蓄積の多寡の差が大きいだけでなく、島の内部でも研究蓄積の多寡に大きな差がある。奄美大島については、旧名瀬市市街地の方言の研究は多いが、北部地域（例えば笠利方言）の研究が不足している。沖縄県の沖縄島南部の那覇方言、首里方言、北部の今帰仁方言に関しては数多くの研究と音声資料がある。しかし、那覇方言、首里方言、今帰仁方言以外の個性的な小規模集落や沖縄島の周辺離島については研究も研究蓄積も不足している。石垣島の中心市街地の方言については多くの研究があるが、その周辺の集落や地域、石垣島以外の離島では研究が不足している。宮古島市の旧平良地区の方言について、多くの研究があるが、その周辺の集落や地域、宮古島以外の離島の研究が不足している。

公開されている音声・映像資料については、琉球大学附属図書館のホームページ上に公開している琉球語音声データ、日本放送協会編『全国方言資料第11巻琉球編Ⅰ』、『全国方言資料第12巻琉球列島編Ⅱ』等があるが、琉球諸語全体の多様性の維持と継承を考慮すると、質、量ともに絶対数が不足している。

本事業で調査対象地としている8地点での調査（音声資料・映像資料を含む）は2年計画のものである。本年度は、当該方言の特徴、当該方言に対する意識、方言継承のあり方、危機の程度を調査し、また、アーカイブ化を想定して、言語的な特徴（音節・格助詞・取り立て助詞）を調べ、そのサンプル語彙の音声と「大きな蕪」の方言訳を収録する。収録した音声資料に注釈（アノテーション）をつけて、将来の公開に備える。収録した資料は、琉球大学附属図書館のデータベースや琉球大学国際沖縄研究所のホームページで公開できるようにする。来年度は、上記8地点の方言についての文法概要がわかるような動詞、形容詞の基本的な活用形の一覧表と例文の記述と録音、5分程度の自然談話の音声・映像記録を収録し、収録した音声・映像資料に字幕（方言とその日本語訳）をつけて、当該方言の全容が分かるようにして、将来のアーカイブ化に備える。

保存研究については、方言劇の効果について予備的調査を実施する。調査地点は鹿児島県の瀬戸内町と与論町及び沖縄県の宜野湾市と北谷町とする。当該地域では、学校やNPO等が子ども達に方言劇の上演を通して方言を指導する取組を行っているが、方言劇に演者として参加することが、児童生徒及び成人の方言意識及び方言修得にどのような影響があるのかをインタビュー調査等を通じて分析する。

3. 業務の期間

契約締結日～平成30年3月30日

4. 当該年度における業務実施計画（アーカイブ研究）

(1) 消滅の危機に瀕しているとされ、音声資料、調査研究が、保存・継承にとって十分ではない7区画内の8地点（鹿児島県の奄美大島北部（笠利町）、沖縄県の沖縄島北部の国頭村奥及び大宜味村大兼久、伊平屋島、阿嘉島、大神島、西表島船浮、小浜島）において、その特徴、地域における当該方言に対する意識、地域での

継承のありかた、危機の程度等に関する調査およびその分析を行う。なお、ユネスコの消滅危機言語に関する専門家グループ(UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages)が2003年に発表した「言語の活力と危機度」(Language Vitality and Endangerment)で提唱された基準を適用し、当該方言の活力と危機度を分析する。なお、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所及び琉球大学国際沖縄研究所が実施した文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」及び「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係わる取組等の実体に関する調査研究事業」においてもユネスコの基準に基づいた分析がなされている。

(2) 消滅の危機に瀕しているとされる7方言の区画内で、緊急度の高い以下の8地点の伝統方言の調査を実施する。

鹿児島県

1. 奄美大島北部・笠利町(奄美方言)

沖縄県

2. 国頭村奥(国頭方言)、3. 大宜味村大兼久(国頭方言)、4. 伊平屋島(国頭方言)、5. 座間味村阿嘉島(沖縄方言)、5. 宮古島市大神島(宮古方言)、7. 八重山郡竹富町小浜島(八重山方言)、8. 八重山郡竹富町西表島船浮(八重山方言)

当該区画内での地域方言の調査については、将来のアーカイブ化を想定して、次の項目の臨地調査と、伝統方言話者をインフォーマントとした音声記録の収録を行う。

- (2-1) 当該方言の発音(音声)の特徴が分かるように作成された音節一覧表とその単語例(3単語前後)の記述と録音。
- (2-2) 当該方言の文法的な特徴が分かるように作成された格助詞、とりたて助詞の基本的な意味と例文の記述と録音。
- (2-3) 「大きな蕪」の当該方言訳を伝統方言のインフォーマントに読んでもらい音声記録として収録する。併せて、その文字化作業を行なう。

(3) 調査研究の結果については、事業報告書で発表する。

5. 当該年度における業務実施計画(保存研究)

方言継承の意識が高いとされる与論町(教育委員会)と伝統的な「村芝居」で生徒が方言劇に参加する瀬戸内町諸鈍及び沖縄方言劇指導の実績がある浦添市内の小学校及び沖縄方言劇の取組が沖縄県内のマスコミで取り上げられている北谷町のNPO法人において、児童生徒及び成人を対象とした方言劇の取組について当事者(指導者および実演者)にインタビュー調査を行う。(浦添市の小学校でのインタビューは実施できなかった。また、インタビュー協力者は実演者のみであった。)方言劇に取り組む前と公演したあとで方言意識と方言能力にどのような変化があったのか、考えられる課題は何か等について質問をする。また、公演に際しては、許可を得た上で、観客にもアンケート調査を実施する。これらのインタビュー調査及びアンケート調査の内容を分析する。調査結果については、事業報告書で発表する。

なお、言語・方言(例えば「奄美語」「沖縄語」)の名称については調査担当者が提出した原稿に記されて名称をそのまま使用し、報告書全体で統一させてはいない。

平成29年度
危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した
実地調査研究

目次

はじめに……………石原昌英

第1部：アーカイブ化を想定した調査研究

鹿児島県奄美大島佐仁方言……………	白田理人	1
沖縄県国頭村奥方言……………	狩俣繁久・島袋幸子	41
沖縄県国頭村奥方言の音韻体系……………	狩俣繁久・島袋幸子	43
沖縄県国頭村奥方言の名詞の格……………	狩俣繁久・島袋幸子	57
沖縄県大宜味村大兼久方言の記述		
一格助詞・とりたてを中心に……………	中本謙	83
沖縄県伊平屋村島尻方言……………	當山奈那・目差尚太	103
沖縄県座間味村阿嘉島方言……………	横山晶子	147
沖縄県宮古語大神方言……………	金田章宏	153
沖縄県竹富町小浜島・八重山語小浜言葉……………	Christopher Davis	181
沖縄県西表船浮方言……………	荻野千砂子	201

第2部：保存調査研究-しまことば劇の効果

諸鈍シバヤ……………	前田達朗	227
与論島『もうひとつの按司根津栄伝説』……………	前田達朗	231
ユンヌフトゥバ劇に関するアンケート調査結果の分析……………	石原昌英	235
しまことば劇の効果について 沖縄県内でのインタビュー調査から……………	石原昌英	245

第 1 部

アーカイブ化を想定した調査研究

鹿児島県奄美大島佐仁方言

鹿児島県奄美大島佐仁方言

白田 理人（日本学術振興会／琉球大学）

1 鹿児島県奄美大島佐仁方言の概要

鹿児島県奄美大島佐仁方言（以降佐仁方言）は、奄美大島の北端の佐仁（さに）集落（鹿児島県大島郡奄美市笠利町佐仁、旧大島郡笠利町）で話される（以下地図参照）。奄美市役所発行の資料によれば、2017年7月現在の佐仁集落の人口は289人（178世帯、男性125人、女性164人）である。

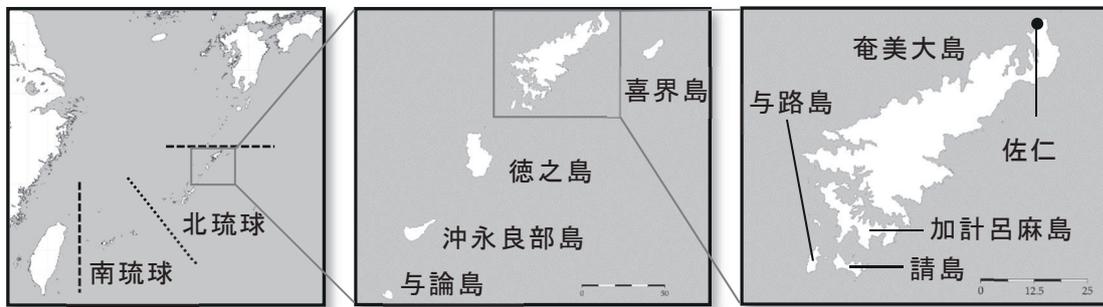


図 1 琉球列島／奄美群島／奄美大島／佐仁集落の位置

佐仁方言を流暢に話すのは主に 65～70 歳以上である。地域における方言継承に関わる活動として、現在、小学校の朝の朗読・給食時・学習発表会におけるあいさつが方言で行われており、また小学生及び PTA による伝統的な八月踊りの継承活動が行われている。また、奄美市笠利町中金久にある大島北高等学校では 2014 年から高校生が地元のお年寄りを訪問し、昔の暮らしを記述する「聞き書き調査」を実施し、報告書としてまとめ発行している。

佐仁方言の先行研究として、語彙集（狩俣 2003）、アクセント付き名詞・用言資料集（上野 1996・1997）、敬語形式の報告（重野 2014, 重野・白田 2018）がある。佐仁方言は近隣の方言との差が大きく、「言語の島」と言われている。先行研究によれば、主な特徴ⁱⁱとして、両唇破裂音の保持（例 *pana*「花」、*piɕi*「肘」、*punī*「船」）、語頭で広母音、半広母音に遡る母音の前での *k* の摩擦音化（例 *hata*「肩」、*xībuji*「煙」、*huji*「腰」）、母音間の *m* の弱化／脱落及び鼻母音化（例 *jaã ~ ja:*「山」）があるⁱⁱⁱ（狩俣 2003, 上野 1996, 1997 参照）。

以下、筆者の調査^{iv}に基づき、2 節で佐仁方言のモーラー一覧、3 節で格助詞と取り立て助詞の形式と機能について記述し、4 節に「おおきなかぶ」の佐仁方言訳を示す。表記は形態素境界付きの音素表記及び小川（2014）に基づくかな表記を用いる。

2 佐仁方言のモーラ一覧

2.1 佐仁方言の音韻体系

佐仁方言の音素一覧を、本稿における音素表記を用いて以下の表に示す。[]内は主な音声実現である。

表 1 母音音素

	前		後
狭	i	ï	u
	e	ë	o
広			a

表 2 子音音素

調音方法		調音点	両唇	歯茎～硬口蓋	軟口蓋～声門
破裂音	無声	非喉頭化	p[p~pʲ]	t	k[k~x~kʲ~ç]
		喉頭化	p' [pʲ~pʲʷ]	t' [tʲ]	k' [kʲ~kʲʷ]
	有声	b[b~bʲ]	d	g[g~ɣ~gʲ~ɣʲ]	
破擦音	無声	非喉頭化		c[ts~tç]	
		喉頭化		c' [tsʲ~tçʲ]	
摩擦音	無声			s[s~ç]	h
	有声			z[z~ʒ~dz~dʒ]	
鼻音	非喉頭化		m	n[n~ɲ~ŋ~N]	
	喉頭化		m' [mʲ~mʲʷ]	n' [nʲ]	
弾音				r[r~rʲ]	
接近音	非喉頭化		w	y[j]	
	喉頭化		w' [wʲ]	y' [jʲ]	

母音について、語頭母音の前には声門破裂音[ʔ]が挿入される。前舌母音と中舌母音の対立について、歯茎破裂音/t/, /d/, /t'/の前では対立がなく、中舌母音のみが分布する。また、語頭及び歯茎破擦音/c/, /c'/または硬口蓋接近音/y/, /y'/の後には前舌母音のみが分布する。中舌狭母音/i/について、両唇音や母音/u/に隣接する環境で/u/に変化してきており（例 nabu < *nabī 「鍋」、t'uttusi < *t'ittusi 「同年」 cf. t'iiçī 「一つ」 + tusi 「年」）、以上の環境で/i/が分布しなくなりつつある。狭母音/i/, /i/, /u/は、無声阻害音に挟まれる環境で無声化する。また、語末で無声阻害音の後でも随意的に無声化することがある。

子音について、/i/, /e/, /j/の前では口蓋化して実現する。有声歯茎摩擦音/z/は母音間以外

では破擦音として実現する。軟口蓋破裂音（喉頭化音を除く）は母音間では随意的に摩擦音として実現する。/n/は後続する子音に調音点が同化して実現し、語末では[N]となる。喉頭化／非喉頭化の対立について、/p/と/p'/の対立は外来語に限られる。それ以外について、語頭では対立を持つすべての子音対立が見られるが、語中は単子音の両唇／軟口蓋無声破裂音に限られる。さらに、後続する音素によって対立の制限がある。/k/と/k'/の対立は母音/i/, /u/が後続する場合に限られる。/c/と/c'/の対立は/j/が後続する場合に限られる。/m/と/m'/の対立は母音/a/が後続する場合に限られる。また、母音が無声化する環境では先行する阻害音の喉頭化／非喉頭化の対立が中和し、非喉頭化音のみが分布する（例 kicya [kiṭ̚ca]「着た」cf. k'iryun [kʰiriʔun]「着る」）。

音節構造は子音を C、半母音を S、母音を V とすると(C)(S)V(V)(C)である。S には/j/, /w/が分布する。半母音/w/の前には軟口蓋破裂音のみが分布する。半母音/j/の前には接近音以外の子音が分布する。ただし、本来語では/h/と/y/の連続は見られない。長母音、二重母音は短母音の連続と解釈する。語末の音節末子音には鼻音/n/のみが現れる。語中の音節末子音は後続子音と調音点が同じ子音に限られる。語境界、複合境界は音節境界に、接語境界は音節境界または音節核と音節末子音の境界に一致する。

2.2 佐仁方言のモーラー一覧

上述の音素解釈に基づき、以下に佐仁方言の頭子音と母音の組み合わせの一覧を示す。—は音素解釈／音素配列上設定していない組み合わせである。括弧内は比較的新しい借用語に限られる。二重括弧内に示しているものは見つからない組み合わせである。

	i	ĩ	u	e	ë	o	a
なし	i	ĩ	u	e	((ë))	o	a
p	pi	pĩ	pu	((pe))	pë	po	pa
py	—	—	pyu	—	—	pyo	pya
p'	(p'i)	((p'ĩ))	(p'u)	(p'e)	((p'ë))	(p'o)	(p'a)
p'y	—	—	((p'yu))	—	—	((p'yo))	((p'ya))
b	bi	bĩ	bu	be	bë	bo	ba
by	—	—	byu	—	—	byo	bya
m	mi	mĩ	mu	me	më	mo	ma
my	—	—	((myu))	—	—	((myo))	mya
m'	((m'i))	((m'ĩ))	((m'u))	((m'e))	((m'ë))	((m'o))	m'a
m'y	—	—	((m'yu))	—	—	((m'yo))	((m'ya))
t	—	tĩ	tu	—	të	to	ta

t'	—	t'ï	t'u	—	((t'ë))	((t'o))	t'a
d	—	dï	du	—	dë	do	da
c	c'i	cï	(cu)	((ce))	((cë))	((co))	((ca))
cy	—	—	cyu	—	—	cyo	cya
c'	c'i	c'ï	c'u	c'e	c'ë	((c'o))	((c'a))
c'y	—	—	c'yu	—	—	c'yo	c'ya
s	si	sï	su	se	së	so	sa
sy	—	—	syu	—	—	syo	sya
z	zi	zï	zu	ze	zë	zo	za
zy	—	—	zyu	—	—	zyo	zya
n	ni	nï	nu	((ne	në	no	na
ny	—	—	nyu	—	—	nyo	nya
n'	n'i	((n'ï))	((n'u))	((n'e))	((n'ë))	((n'o))	n'a
ny	—	—	n'yu	—	—	((n'yo))	((n'ya))
r	ri	rï	ru	re	rë	ro	ra
ry	—	—	ryu	—	—	ryo	rya
k	ki	kï	ku	((ke))	kë	ko	ka
ky	—	—	kyu	—	—	kyo	kya
kw	—	((kwï))	—	—	kwë	—	kwa
k'	k'i	((k'ï))	k'u	k'e	((k'ë))	k'o	((k'a))
k'y	—	—	((k'yu))	—	—	k'yo	k'ya
k'w	—	((k'w)ï)	—	—	k'wë	—	k'wa
g	gi	gï	gu	ge	gë	go	ga
gy	—	—	gyu	—	—	gyo	gya
gw	—	((gwï))	—	—	((gwë))	—	gwa
h	(hi)	hï	hu	(he)	hë	ho	ha
hy	—	—	((hyu))	—	—	(hyo)	(hya)
y	yi	—	yu	ye	—	yo	ya
y'	—	—	y'u	y'e	—	y'o	y'a
w	—	((wï))	wu	—	wë	wo	wa
w'	—	w'ï	—	—	((w'ë))	((w'o))	w'a

以下に佐仁方言のモーラ一覧を語例とともに示す。括弧内に語形の音素的バリエーションと、比較的新しい借用語を示す。

	語例
i	/ikya/ [ʔik ^h ja] 「イカ」 /pai/ [p ^h ai] 「灰」 /hui/ [ɸui] 「声」 /syooi/ [çoi] 「醤油」
ī	/nuī/ [nuī] 「飲め」 (/nuu/[nu:]とも) /k'ui/ [k ^h ui] 「履け」 (/k'uu/[k ^h u:]とも)
u	/usi/ [ʔuçi] 「牛」 /uuka/ [ʔu:k ^h a] 「多い」 /tau/ [t ^h au] 「タコ」
e	/kae/ [k ^h ae] 「粥」
o	/o/ [ʔo] 「泡」 /ooka/ [ʔo:k ^h a] 「青い」 /oosiruka/ [ʔo:çiruk ^h a] 「面白い」 /ao/ [ʔao] 「日 (の長さ)」
a	/asi/ [ʔasi] 「汗」 /au/ [ʔau] 「雨」 /aa/ [ʔa:] 「あそこ」
pi	/pigi/ [p ^h ij ^h i] 「毛」 /piru/ [p ^h iru] 「昼」 /apiru/ [ap ^h iru] 「アヒル」
pī	/pī/ [p ^h i] 「屁」 (/pu/ [p ^h u]とも)
pu	/pu/ [p ^h u] 「帆」 /puni/ [p ^h uni] 「骨」 /pura/ [p ^h ura] 「へら」 /tēpu/ [t ^h ēp ^h u~t ^h ēɸu] 「台風」 /haputa/ [hap ^h ūta~ ^h aɸūta] 「被った」
pē	/pēka/ [p ^h ē:k ^h a] 「早い」 /kopēka/ [k ^h op ^h ēk ^h a] 「苦しい」
po	/poro/ [p ^h oro] 「風呂」 /pooraka/ [p ^h o:rak ^h a] 「嬉しい」
pa	/pa/ [p ^h a] 「歯」 /gapa/ [gap ^h a] 「げんこつ」 /yaparaka/ [jap ^h arak ^h a] 「柔らかい」
pyu	/pyuuri/ [p ^h u:r ^h i] 「日より」
pyo	/pyoo/ [p ^h o:] 「暇」
pya	/pyak'u/ [p ^h ak ^h ʔu~p ^h ak ^h u] 「百」
p'i	(/p'in/ [p ^h iN] 「ピン」)
p'u	(/p'uuru/ [p ^h u:ru] 「プール」)
p'e	(/p'en/ [p ^h eN] 「ペン」)
p'o	(/pompu/ [p ^h omp ^h u] 「ポンプ」)
p'i	(/p'an/ [p ^h aN] 「パン」)
bi	/bira/ [b ^h ira] 「ニラ」 /bikya/ [b ^h ikk ^h a] 「カエル」 /k'ubi/ [k ^h ub ^h i] 「首」
bī	/abīn/ [abīN] 「呼ぶ」 (/abun/ [abun]とも)
bu	/buri/ [bur ^h i] 「棒」 /buryun/ [bur ^h uN] 「吠える」 /nabu/ [nabu] 「鍋」

	/kubu/ [k ^h ubu] 「昆布」
be	/c'eberëta/ [tɕʰeberët ^h a] 「漬れた」
bë	/uk'ibë/ [ʔukʰʲibë] 「北北西の風」
bo	/asibo/ [ʔasibo] 「遊ぼう」
ba	/basya/ [baɕa] 「バナナ」 /saba/ [saba] 「草履」
byu	/asibyun/ [ʔasib ^ɰ uN] 「遊ぶ」
byo	/byooki/ [b ^ɰ o:kʰʲi] 「病気」
bya	/asibya/ [ʔasib ^ɰ a] 「遊び人」
mi	/mici/ [m ^ɰ i:ɕi] 「道」 /min/ [m ^ɰ iN] 「耳」
mī	/mi/ [mi] 「目」 /yak'umi/ [jakʰʲumi] 「お兄さん」
mu	/muci/ [mutɕi] 「餅」
me	(/meizi/ [meizi] 「明治」)
më	/mën/ [mën] 「燃える」
mo	/moo/ [mo:] 「腿」
ma	/masyu/ [maɕu] 「塩」 /amma/ [amma] 「おばあさん」 /pasirik'uma/ [p ^h aɕir ^ɰ ikʰʲuma] 「かけっこ」 /taruyasima/ [t ^h aruɾyaɕima] 「誰も」
mya	/ummya/ [ʔumm ^ɰ a] 「これは」
m'a	/m'a/ [m ^ɰ a] 「ここ」 /m'aci/ [m ^ɰ atsi~m ^ɰ atsi] 「火」 /m'a(a)ga/ [m ^ɰ a(:)ga] 「孫」 /m'aka/ [m ^ɰ ak ^h a] 「おいしい」
tī	/ti/ [t ^h i] 「手」 /tīdan/ [t ^h idaN] 「太陽」 /utin/ [ʔut ^h iN] 「落ちる」 /wuttī/ [wuttī] 「一昨日」
tu	/tuu/ [t ^h u:] 「十」 /tuzi/ [t ^h uzi] 「妻」 /turi/ [t ^h ur ^ɰ i] 「鳥」
të	/tëë/ [t ^h ë:] 「背丈」 /patë/ [p ^h at ^h ë] 「畑」
to	/tora/ [t ^h ora] 「俵」 /toosyun/ [t ^h o:ɕuN] 「倒す」 /tonëgë/ [t ^h onëɾgë] 「手ぬぐい」 /pato/ [p ^h at ^h o] 「鳩」
ta	/ta/ [t ^h a] 「田」 /hata/ [hat ^h a] 「肩」
t'i	/t'ïci/ [t ^h ï:tsi~t ^h ï:tsi] 「一つ」
t'u	/t'uttusi/ [t ^h uttuɕi] 「同い年」
t'a	/t'aari/ [t ^h a:r ^ɰ i] 「二人」 /t'aaci/ [t ^h a:tsi~t ^h a:tsi] 「二つ」
dī	/din/ [diN] 「どの」 /nudi/ [nudi] 「飲んで」
du	/du/ [du] 「自分」 /dusi/ [duɕi] 「友」 /wuduryun/ [wudur ^ɰ uN] 「踊り」

dē	/dēē/ [dē:] 「竹」 /podēta/ [p ^h odēt ^h a] 「育った」
do	/doro/ [doro] 「泥」 /doosok'u/ [do:sok̄ʔu] 「ロウソク」 /ado/ [ʔado] 「踵」 /dokkwaci/ [dokkwatsi] 「六月」
da	/da/ [da] 「どこ」 /dagu/ [dagu] 「団子」 /nada/ [nada] 「涙」
ci	/cikyaka/ [t̄ɕik̄ak ^h a] 「近い」 /mici/ [m̄it̄ɕi] 「道」
cī	/naci/ [natsi] 「夏」
cu	(/hyoosacu/ [ço:sats̄u] 「表札」)
cyu	/cyuuzara/ [t̄ɕ ^h u:zara] 「中皿」 /maccyuri/ [matt̄ɕuri] 「待っている」
cyo	/mucyokka/ [muf̄ɕokka] 「持ちますよ」
cya	/cya/ [t̄ɕ ^h a] 「茶」 /cyapun/ [t̄ɕ ^h ap ^h uN] 「石鹸」 /iccyā/ [ʔitt̄ɕa] 「良い」
c'i	/c'i/ [t̄ɕ'i] 「血」 /c'izi/ [t̄ɕ'izi] 「頂上」
c'ī	/c'ira/ [ts̄'ira] 「顔」 /c'ina/ [ts̄'ina] 「綱」
c'u	/c'uburu/ [ts̄'uburu] 「頭」 /c'uyun/ [ts̄'uyun] 「積む」 /c'uu/ [ts̄'uu:] 「爪」
c'e	/c'eberēta/ [t̄ɕ'ēberēt ^h a] 「潰れた」
c'ē	/c'ēpusē/ [ts̄'ēp ^h usē~ts̄'ēφusē] 「膝小僧」
c'yu	/c'yu/ [t̄ɕ'yu] 「人」 /c'yuri/ [t̄ɕ'yu:ri] 「一人」 /c'yuuka/ [t̄ɕ'yu:k ^h a] 「強い」
c'yo	/c'yook'u/ [t̄ɕ'yo:k̄ʔu] 「チョーク」
c'ya	/c'yaa/ [t̄ɕ'ya:] 「そう」 /c'yakkana/ [t̄ɕ'akkana] 「ついでに」
si	/siwa/ [çiwa] 「心配」 /usi/ [ʔuçi] 「牛」
sī	/sī/ [si] 「巢」 /sina/ [sina] 「砂」 /asi/ [ʔasi] 「汗」
su	/suugana/ [su:yana] 「みなさん」 /misu/ [m̄isu] 「味噌」
se	/ase/ [ʔaçe] 「お母さん」
sē	/sēē/ [sē:] 「酒」 /sētēt̄si/ [sēt ^h ēt̄si] 「蘇鉄」 /nēsē/ [nēsē] 「青年」
so	/so/ [so] 「竿」 /sokē/ [sok ^h ē~soxē] 「平たいザル」
sa	/saba/ [saba] 「草履」 /hasa/ [hasa] 「傘」
syu	/syu/ [çu] 「潮」 /hussyu/ [φuççu] 「おじいさん」
syo	/syokē/ [çok ^h ē~çoxē] 「ごちそう」 /isyo/ [ʔiço] 「漁」
sya	/sya/ [ça] 「下」 /basya/ [baça] 「バナナ」
zi	/zi/ [d̄zi] 「地面」 /tuzi/ [t ^h uzi] 「妻」
zī	/zīn/ [d̄ziN] 「金銭」 /hazi/ [hazi] 「風」 /k'izi/ [k̄'izi] 「傷」
zu	/huzu/ [φuzu] 「去年」
ze	/ze/ [d̄ze] 「お姉さん」

zë	/taagozë/ [t ^h a:gozë] 「卵酒」
zo	/arazokë/ [arazok ^h ë~arazoxë] 「大きな平たいザル」
za	/siza/ [siza] 「年上」 /aza/ [ʔaza] 「ほくろ」
zyu	/zyuuri/ [d̥zu:r̥i] 「料理」 /mizyu/ [m̥ʲizu] 「溝」
zyo	/zyoo/ [d̥zo:] 「斧」
zya	/pizyari/ [p ^h i:zar̥i] 「左」
ni	/ni/ [ni] 「荷」 /nisi/ [niçi] 「北」 /ani/ [ani] 「お兄さん」
nī	/nī/ [nī] 「胸」 /nību/ [nību] 「ひしゃく」 /punī/ [p ^h unī] 「骨」
nu	/nuu/ [nu:] 「何」 /nuyun/ [nuyun] 「飲む」 /k'inu/ [k̥ʲinu] 「昨日」
në	/nëN/ [nëN] 「ない」 /yonë/ [jonë] 「今晚」
no	/noosyun/ [no:çun] 「治す」 /koonoci/ [k ^h o:nots̥i] 「9つ」
na	/nabu/ [nabu] 「鍋」 /nan/ [nan] 「あなた」 /pana/ [p ^h ana] 「花」
nyu	/nyu/ [nyu] 「蓑」 /sinyun/ [çi:nun] 「死ぬ」
nyo	/nyoo/ [no:] 「匂い」 /sinyo/ [çi:po] 「死のう」
nya	/nyan/ [nan] 「見ない」 /nya/ [na] 「貝」 /hënnya/ [x̥ëŋna] 「腕」
n'i	/n'i/ [n̥ʲi] 「稲」
n'a	/n'aa/ [n̥ʲa:] 「今」
n'yu	/n'yucci/ [n̥ʲuttçi] 「命」
ri	/mari/ [mar̥i] 「尻」
rī	/urī/ [ʔurī] 「売れ」
ru	/siru/ [çi:ru] 「汁」
re	/wure/ [wur̥e] 「居るか（疑問詞疑問）」
rë	/yorë/ [jorë] 「寄り合い」 /warëgwa/ [warëɣ ^w a] 「子ども」
ro	/poro/ [p ^h oro] 「風呂」
ra	/cira/ [ts̥ʲira] 「顔」
ryu	/uryun/ [ʔur̥un] 「売る」
ryo	/uryokka/ [ʔur̥okka] 「売りますよ」
rya	/parya/ [p ^h ar̥a] 「柱」 /puturya/ [p ^h ütur̥a] 「稲光」
ki	/kiidaka/ [k ^h i:dak ^h a] 「来も」 /iki/ [ʲik ^h i~ʲiçi] 「行け」 /ikidaka/ [ʲik ^h idak ^h a~ʲiçidak ^h a] 「行きも」 /ukidaka/ [ʲuk ^h idak ^h a~ʲuçidak ^h a] 「置きも」
kī	/kīga/ [k ^h iɣa] 「怪我」 /uki/ [ʲuk ^h i~ʲuxi] 「置け」 /makika/ [mak̥i ^h k ^h a~max̥i ^h k ^h a] 「大きい」

ku	/kubu/ [k ^h ubu] 「昆布」 /ukuna/ [ʔuk ^h una~ʔuxuna] 「置くな」
kë	/këkku/ [k ^h ëkku] 「稽古」 /sokë/ [sok ^h ë~soxë] 「ザル」
ko	/koro/ [k ^h o:ro] 「心」 /kosyo/ [k ^h oçɔ] 「唐辛子」 /makko/ [makko] 「真向かい」 /uko/ [ʔuk ^h o~ʔuxo] 「置こう」
ka	/kayun/ [k ^h ayun] 「食べる」 /ukan/ [ʔuk ^h aŋ] 「置かない」
kyu	/kyun/ [k ^h yun] 「来る」 /ikyun/ [ʔik ^h yun] 「行く」
kyo	/kyoodë/ [k ^h yo:dë] 「きょうだい」 /ikyo/ [ʔik ^h yo] 「行こう」
kya	/kyasi/ [k ^h jaçi] 「どう」 /ikya/ [ʔik ^h ja] 「イカ」
kwë	/kyokkwë/ [k ^h okkwë:] 「肥桶」
kwa	/dokkwaci/ [dokkwatsi] 「六月」
k'i	/k'inu/ [k ^h i ^h inu] 「昨日」 /k'iika/ [k ^h i:k ^h a] 「黄色い」 /k'in/ [k ^h i ^h in] 「着物」 /ik'i/ [ʔik ^h i] 「息」 /uk'i/ [ʔuk ^h i] 「沖」
k'u	/k'ubi/ [k ^h ub ^h i] 「首」 /pak'u/ [p ^h ak ^h u] 「箱」 /taak'u/ [t ^h a:k ^h u] 「タバコ」
k'e	/k'esyun/ [k ^h eçun] 「壊す」
k'o	/k'o:/ [k ^h o:] 「雲」
k'yo	/k'yo:/ [k ^h yo:] 「肝」
k'ya	/k'ya/ [k ^h ja] 「喜界」
k'wë	/k'wën/ [k ^h wën] 「肥える」
k'wa	/k'wa/ [k ^h wa] 「子」 /k'waagi/ [k ^h wa:gi] 「桑の木」
ga	/gapa/ [gap ^h a] 「げんこつ」
gi	/gi/ [g ^h i] 「棘」 /gipa/ [g ^h ip ^h a] 「髪留め」 /pigi/ [p ^h iy ^h i] 「髭」
gï	/nagïn/ [nayin] 「投げる」
gu	/gusyan/ [guçan] 「杖」 /uguwa/ [ʔuyuwa] 「ごま」 /puguru/ [p ^h uyuru] 「垢」
ge	/misige/ [m ^h içiy ^h e] 「しゃもじ」
gë	/togë/ [t ^h oçë] 「鍬」 /tonëgë/ [t ^h onëçë] 「手ぬぐい」
go	/go/ [go] 「とぐろ」 /gotë/ [got ^h ë] 「上腕」 /agoka/ [ʔayok ^h a] 「眠い」
ga	/gapa/ [gap ^h a] 「げんこつ」 /gaja/ [gaja] 「茅(かや)」
gyu	/hugyun/ [ɸuyun] 「漕ぐ」
gyo	/mingyo/ [m ^h iŋg ^h o] 「掴もう」
gya	/gyaaka/ [g ^h ja:k ^h a] 「苦い」 /tugya/ [t ^h ug ^h ja] 「銚」 /mingyan/ [m ^h iŋg ^h aŋ] 「掴まない」
gwa	/syoogwaci/ [ço:ç ^h atsi] 「正月」 /warëgwa/ [warëç ^h wa] 「子ども」

hi	(/hikook'i/ [ç̣iko:ḳʔi] 「飛行機」)
hī	/hī/ [hī] 「木」
hu	/hu:/ [φ̣u:] 「今日」 /husi/ [φ̣ụçi] 「腰」
he	(/heitai/ [ç̣eit ^h ai] 「兵隊」)
hē	/hēkku/ [x̣ēkku] 「早く」 /hēn/ [x̣ēN] 「変える」
ho	/ho/ [ho] 「井戸」 /moho/ [moho] 「婿」 /yaho/ [jaho] 「權」
ha	/hata/ [hat ^h a] 「肩」 /hasa/ [hasa] 「傘」
hyo	(/hyo:sacu/ [ç̣o:satṣu] 「表札」)
hya	(/gohyak'u/ [goç̣aḳʔu] 「500」)
yi	/yi/ [ji] 「柄」 /yinga/ [jiŋga] 「男」
yu	/yu/ [ju] 「湯」 /yuu/ [ju:] 「嫁」 /yuda/ [juda] 「枝」 /mayu/ [maju] 「眉」
ye	/yen/ [jeN] 「痩せる」
yo	/yonē/ [jonē] 「夜」 /yoo/ [jo:] 「祝い」 /yoota/ [jo:t ^h a] 「言葉」
ya	/ya/ [ja] 「家」 /maya/ [maya] 「猫」 /uya/ [ʔuja] 「親」
y'u	/y'u/ [jʔu] 「魚」 /y'uu/ [jʔu:] 「夢」
y'e	/y'esika/ [jʔeç̣ik ^h a] 「汚い、みすぼらしい」 /y'een/ [jʔe:N] 「開ける」
y'o	/y'o/ [jʔo] 「言おう」
y'a	/y'a/ [jʔa] 「お前」
wu	/wutu/ [wut ^h u] 「夫」
wē	/wēē/ [wē:] 「桶」 /wēn/ [wēN] 「分ける」
wo	/wooka/ [wo:k ^h a] 「おかしい」
wa	/wan/ [waN] 「私」
w'i	/w'i/ [wʔi] 「上」 (/u/[ʔu]とも)
w'a	/w'a/ [wʔa] 「豚」
t	/wutti/ [wutti] 「一昨日」 /sitta/ [sitta] 「節田 (集落名)」
c	/acci/ [ʔaṭṭçi] 「歩いて」 /mucci/ [muṭṭçi] 「持って」
k	/akkan/ [ʔakkan] 「歩かない」 /pukkan/ [p ^h ukkan] 「ほどかない」
m	/amma/ [ʔamma] 「おばあさん」 /tamban/ [t ^h amban] 「頼まない」
n	/hannari/ [hannari] 「雷鳴」 /min/ [m ⁱ n] 「耳」 /yan/ [jan] 「屋仁 (集落名)」

3 佐仁方言の格助詞と取り立て助詞

佐仁方言の格助詞／取り立て助詞を以下の表に示す。

表 3 格助詞／取り立て助詞

格助詞		取り立て助詞	
ラベル	形式	ラベル	形式
主格 (1/2)	ga/nu	主題	(m)ya
属格 (1/2)	nu/n	焦点	du
対格 (1/2)	ba/φ (無標)	添加 (1/2/3)	daka/gari/yasima
与格	ni	限定	bari
所格	nanti	さえ	sae
方向格	(c)ci	こそ	kusa
奪格	raga	なんか	(nu)nkyā
限界格	gari	やら	zya
具格	si		
共格	tu		
比較格	nika		

以降、各形式の機能について詳述する^{vi}。取り立て助詞の機能の詳細はまだ明らかでないため、例文を示すにとどめる。

3.1 主格

動作／状態の主体には主格 = ga / = nu が用いられる。基本的に = ga はヒト代名詞、呼称名詞に用い、= nu はそれ以外に用いる。ただし、名詞述語、及び、閉じた集合を前提とした排他の文脈では名詞によらず = ga を用いる。

(1) 【主格：ga：自動詞：呼称名詞】

un syasin = nanti taru = ga usi-tur-ee?
 この 写真 = LOC 誰 = NOM1 写る -PROG.NPST-WHQ
 「この写真に誰が写っているか？」

(2) 【主格：ga：自動詞：呼称名詞】^{vii}

{ wan = ga / ari = ga / ak'ira = ga } usi-tut = too.
 1.SG = NOM1 3.SG = NOM1 アキラ = NOM1 写る -PROG.NPST = SFP
 「{私が／彼が／アキラが} 写っているよ。」

(3) 【主格：nu：自動詞：無生物】

un syasin=nantī nuu=nu usi-tur-ee?
 この 写真=LOC 何=NOM2 写る-PROG.NPST-WHQ
 「この写真に何が写っているか？」

(4) 【主格：nu：自動詞：呼称名詞以外】

{ ututu=nu / an yinga=nu / ari=nu / an pana=nu } usi-tut=too.
 弟=NOM2 あの 男=NOM2 あれ=NOM2 あの 花=NOM2 写る-PROG.NPST=SFP
 「{弟が/あの男が/あれが/あの花が} 写っているよ。」

(5) 【主格：ga：他動詞：呼称名詞】

ak'ira=ga cuk'ue=ba huya-syut=too.
 アキラ=NOM1 机=ACC1 運ぶ-PROG.NPST=SFP
 「アキラが机を運んでいるよ。」

(6) 【主格：ga：自動詞：呼称名詞】

ak'ira=ga poori=nantī oo-zyuk=kaa.
 アキラ=NOM1 池=LOC 泳ぐ-PROG.NPST=SFP
 「アキラが池で泳いでいるよ。」

(7) 【主格：ga：自動詞（存在）：呼称名詞】

m'aa=nantī ak'ira=ga wut=too.
 ここ=LOC アキラ=NOM1 居る.NPST=SFP
 「ここにアキラがいるよ。」

(8) 【主格：ga：自動詞：呼称名詞】

ak'ira=ga un=nantī ubuk'uri-ta.
 アキラ=NOM1 海=LOC 溺れる-PST
 「アキラが海で溺れた。」

(9) 【主格：ga：自動詞：人称代名詞】

wan=ya isyona-kan=kana y'a=ga yakuba=cci ik-i=yoo.
 1.SG=TOP 忙しい-ADJ.NPST=CSL 2.SG=NOM1 役場=ALL 行く-IMP=SFP
 「私は忙しいからお前が役場へ行け。」

(10) 【主格：ga：名詞述語：呼称名詞】

n'aa=ya ak'ira=ga kucyoo zya=gaa.
 今=TOP アキラ=NOM1 区長 COP.NPST=SFP
 「今はアキラが区長だよ。」

(11) 【主格：ga：形容詞1（排他）：呼称名詞】

kīnzuk'u=nu naa=nantī ak'ira=ga iciban gina-ka.
 家族=GEN1 中=LOC アキラ=NOM1 一番 小さい-ADJ.NPST
 「家族の中でアキラが一番小さい。」

(12) 【主格：ga：形容詞2（排他）：呼称名詞】

kīnzuk'u=nu naa=nantī ak'ira=ga iciban uta=φ zyoozī zya.
 家族=GEN1 中=LOC アキラ=NOM1 一番 歌=ACC2 上手 COP.NPST
 「家族の中でアキラが一番歌が上手だ。」

(13) 【主格：ga/nu：自動詞（排他）：無生物】

ak'ira=ya mu{=ga/=nu} yinga=nu uya=tu ni-syuk=kaa.
 アキラ=TOP 目=NOM1/NOM2 男=GEN1 親=COM 似る-PROG.NPST=SFP
 「アキラは目が父親と似ているよ。」

(14) 【主格：ga：自動詞（排他）：呼称名詞】

kīnzuk'u=nu naa=nantī ak'ira=ga iciban pēē-ka yaa=φ iji-ta.
 家族=GEN1 中=LOC アキラ=NOM1 一番 早い-ADJ 家=ACC2 出る-PST
 「家族の中でアキラが一番早く家を出た。」

(15) 【主格：ga：自動詞（排他）：呼称名詞】

kyoodē=nu naa=nantī ak'ira=ga iciban c'han=tu ni-syur-i.
 家族=GEN1 中=LOC アキラ=NOM1 一番 父=COM 似る-PROG-NPST
 「家族の中でアキラが一番父と似ている。」

(16) 【主格：nu：他動詞：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

ututu=nu cuk'ue=φ huya-syu-tat=too.
 弟=NOM2 机=ACC2 運ぶ-PROG-PST=SFP
 「弟が机を運んでいたよ。」

(17) 【主格：nu：自動詞：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

ututu=nu poori=nantī oo-zyur-i
 弟=NOM2 池=LOC 泳ぐ-PROG-NPST
 「弟が池で泳いでいる。」

(18) 【主格：nu：自動詞（存在）：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

m'aa=nantī ututu=nu wuur-i.
 ここ=LOC 弟=NOM2 居る-NPST
 「ここに弟がいる。」

- (19) 【主格：nu：自動詞：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

ututu = nu un = nantī ubuk'urī-ta.
 弟 = NOM2 海 = LOC 溺れる -PST
 「弟が海で溺れた。」

- (20) 【主格：ga：名詞述語：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

n'aa = ya ututu = ga kucyoo zya = ga
 今 = TOP 弟 = NOM1 区長 COP.NPST = SFP
 「今は弟が区長だよ。」

- (21) 【主格：ga：形容詞1（排他）：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

kīnzuk'u = nu naa = nantī ututu = ga iciban gina-ka.
 家族 = GEN1 中 = LOC 弟 = NOM1 一番 小さい -ADJ.NPST
 「家族の中で弟が一番小さい。」

- (22) 【主格：nu：形容詞2：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

kīnzuku = nu naa = nantī ututu = ga iciban uta = φ zyoozī zya.
 家族 = GEN1 中 = LOC 弟 = NOM1 一番 歌 = ACC2 上手 COP.NPST
 「家族の中で弟が歌が一番上手だ。」

- (23) 【主格：ga：自動詞（排他）：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

kīnzuuk'u = nu naa = nantī ututu = ga iciban pēē-ka yaa = φ iji-ta.
 家族 = GEN1 中 = LOC 弟 = NOM1 一番 早い -ADJ 家 = ACC2 出る -PST
 「家族の中で弟が一番早く家を出た。」

- (24) 【主格：ga：自動詞（排他）：ヒト名詞（呼称名詞以外）】

kyoodē = nu naa = nantī ututu = ga iciban c'han = tu ni-syur-i.
 家族 = GEN1 中 = LOC 弟 = NOM1 一番 父 = COM 似る -PROG-NPST
 「家族の中で弟が一番父と似ている。」

- (25) 【主格：nu：自動詞：無生物】

hoora = nu mura = nu naa = ba tuu-tuk = kaa
 川 = NOM1 村 = GEN1 中 = ACC1 通る -PROG.NPST = SFP
 「川が村の中を通っているよ。」

- (26) 【主格：nu：形容詞1:無生物】

hūu = ya hazī = nu c'hūu-ka.
 今日 = TOP 風 = NOM2 強い -ADJ.NPST
 「今日は風が強い。」

この他、主格は所有の対象、感情の対象、能力の対象にも用いられる。

(27) 【主格：nu：自動詞（所有構文）：所有の対象（親族）】

ak'ira=ya m'aga=nu isitari wun=cyukaa.
 アキラ=TOP 孫=NOM2 5人 居る.NPST=REP
 「アキラは孫が5人いるそうだ。」

(28) 【主格：nu：自動詞（感情の対象）】

ak'ira=ya yanaka zin=nu ir-yun.
 アキラ=TOP たくさん 金銭=NOM2 要る-NPST
 「アキラはたくさんお金が要る。」

(29) 【主格：nu：形容詞1（感情の対象）】

wan=ya zin=nu pusy-ar-i.
 1.SG=TOP 金銭=NOM2 欲しい-ADJ-NPST
 「私はお金がほしい。」

(30) 【主格：nu：形容詞2（感情の対象）】

ak'ira=ya agimun{=ga/=nu} sik'i zya=gaa.
 アキラ=TOP 天ぷら=NOM1/NOM2 好き COP.NPST=SFP
 「アキラはてんぷらがすきだ。」

(31) 【主格：nu：形容詞2（能力の対象）】

sensei=ya wuduri=nu zyoozi dar-yon=yaa.
 先生=TOP 踊り=NOM1 上手 COP-POL.NPST=SFP
 「先生は踊りが上手ですね。」

3.2 属格

属格=nu/=nは名詞修飾部の標示に用いられる。ヒト代名詞／呼称名詞には=nが用いられ、それ以外には=nuが用いられる。属格=nuは他の格助詞に後続しうる。

(32) 【属格：nu：所有】

ututu=nu ti
 弟=GEN1 手
 「弟の手」

(33) 【属格：nu：所有】

sëkkunin = nu ya

大工 = GEN1 家

「大工の家」

(34) 【属格：n：所有】

{ y'a = n / taru = n / ak'ira = n } ti

2.SG = GEN2 誰 = GEN2 アキラ = GEN2 手

「{誰の／お前の／アキラの} 手」

(35) 【属格：n：所有】^{viii}

{ wa = n / na = n / akka = n } ti

1.SG = GEN2 2.SG.HON = GEN2 3.SG = GEN2 手

「{私の／あなたの／彼の} 手」

(36) 【属格：nu：時間の限定】

k'inu = nu simbun

昨日 = GEN1 新聞

「昨日の新聞」

(37) 【属格：nu：場所の限定】

nazë = nu misiya

名瀬 = GEN1 店

「名瀬の店」

(38) 【属格：nu：材料の限定】

kabi = nu pak'u

紙 = GEN1 箱

「紙の箱」

(39) 【属格：nu：種類の限定】

sak'ura = nu pana

桜 = GEN1 花

「桜の花」

(40) 【属格：nu：種類の限定】

warëgwa = nu hon

子供 = GEN1 本

「子供の本」

(41) 【属格：nu：同格】

ututu = nu saburoo
 弟 = GEN1 サブロウ
 「弟のサブロウ」

(42) 【属格：nu：方向格との共起】

akira = n mu = cci = nu zyoo = ya daa = wuriï?
 アキラ = GEN2 FN = ALL = GEN1 手紙 = TOP どこ = WHQ
 「アキラへの手紙はどこか？」

(43) 【属格：nu：奪格との共起】

k'uukoo = raga = nu basu = ya ici k-yur-ee?
 空港 = ABL = GEN1 バス = TOP いつ 来る -NPST-WHQ
 「空港からのバスはいつ来るか？」

(44) 【属格：nu：限界格との共起】

syoo = raga k'uukoo = garï = nu basucin = ya kyakki = wuriï?
 集落 = ABL 空港 = TERM = GEN1 バス賃 = TOP いくら = WHQ
 「集落から空港までのバス賃はいくらだろうか。」

3.3 対格

対格 = ba は動作の対象、移動の起点／経路、知覚・認識の対象、対格 = φ（無標）は動作の対象、移動の起点／経路、知覚・認識の対象、感情の対象、能力の対象に用いられる。

(45) 【対格：ba：動作の対象】

ak'ira = ga { wan = ba / takasi = ba / yagi = ba / cuk'ue = ba } cïc-cya.
 アキラ = NOM1 1.SG = ACC1 タカシ = ACC1 ヤギ = ACC1 机 = ACC1 叩く -PST
 「アキラが {私を／タカシを／ヤギを／机を} 叩いた。」

(46) 【対格：ba：動作の対象】

ak'ira = ga cuk'ue = ba suku-ta.
 アキラ = NOM1 机 = ACC1 作る -PST
 「アキラが机を作った。」

(47) 【対格：ba：動作の対象】

ak'ira = ga cuk'ue = ba yabura-sya.
 アキラ = NOM1 机 = ACC1 壊す -PST
 「アキラが机を壊した。」

(48) 【対格：ba：移動の起点】

ak'ira=ya hacizi nar-in ya=ba izi-ti-zya.
 アキラ=TOP 8時 なる-TEMP 家=ACC1 出る-ていく -PST
 「アキラは8時になると家を出た。」

(49) 【対格：ba：移動の経路】

ak'ira=ya an mici=ba ac-cyuk=kaa.
 アキラ=TOP あの 道=ACC1 歩く -PROG.NPST=SFP
 「アキラはあの道を歩いているよ。」

(50) 【対格：ba：移動の経路】

hoora=nu mura=nu naa=ba tuu-tuk=kaa.
 川=NOM1 村=GEN1 中=ACC1 通る -PROG.NPST=SFP
 「川が村の中を通っている。」

(51) 【対格：ba：知覚・認識の対象】

ak'ira=ga yubi makī-kan utu=φ ki-cyan=cyukaa.
 アキラ=NOM1 昨夜 大きい-ADJ.NPST.ADN 音=ACC2 聞く -PST=REP
 「アキラが昨夜大きな音を聞いたそうだ。」

(52) 【対格：φ：感情の対象】

wan=ya muzi=φ pussy-a
 1.SG=TOP 水=ACC2 欲しい-ADJ.NPST
 「私は水が欲しい。」

(53) 【対格：ba：能力の対象】

kīnzuk'u=nu naa=nanti ututu=ga iciban uta=φ zyoozi zya.
 家族=GEN1 中=LOC 弟=NOM1 一番 歌=ACC2 上手 COP.NPST
 「家族の中で弟が一番上手だ。」

(54) 【対格：φ：知覚・認識の対象】

ak'ira=ya wa=n denwabangoo{=φ/=ba} sic-cyur-i.
 アキラ=TOP 私=GEN2 電話番号=ACC2/ACC1 知る-PROG-NPST
 「アキラは私の電話番号を知っている。」

(55) 【対格：φ：動作の対象】

ak'ira=ya k'inu yanaka sēē=φ nu-da.
 アキラ=TOP 昨日 たくさん 酒=ACC2 飲む-PST
 「アキラはたくさん酒を飲んだ。」

(56) 【対格：φ：移動の経路】

ak'ira=ya un pasi=φ wata-ti-zya.
 アキラ=TOP この 橋 渡る-ていく -PST
 「アキラは橋を渡っていった。」

(57) 【対格：φ：変化結果】

un arezi=ba asikat-i patë=φ nas-am-ba.
 この 荒地 耕す-SEQ 畑 なす-NEG-COND
 「この荒地を耕して畑にしなければ。」

(58) 【対格：φ：変化結果】

ak'ira=ya huzu cy'uugakkoo=nu kyooiin=φ na-tat=too.
 アキラ=TOP 去年 中学校=GEN1 教員=ACC2 なる-PST-SFP
 「アキラは去年中学校の教員になった。」

3.4 与格

与格=niは動作の受け手、受身文の動作主、使役文の被使役者に用いられる（なお、自動詞から派生した使役動詞の場合、被使役者には対格baが用いられる）。

(59) 【与格：ni：動作の受け手】

ak'ira=ya wan=ni hëkku kuu=ci i-syan zya=gaa.
 アキラ=TOP 俺=DAT 早く 来る .IMP=QUOT 言う -PST.NMLZ COP.NPST=SFP
 「アキラは俺に早く来いと言ったんだよ。」

(60) 【与格：ni：動作の受け手】

ak'ira=ya du=nu ya=ba ututu=ni k'urī-tan=cyukaa.
 アキラ=TOP 自分=GEN1 家=ACC1 弟=DAT くれる -PST=REP
 「アキラは自分の家を弟にやったそうだ。」

(61) 【与格：ni：動作の受け手】

ak'ira=ya asibi+mun=ba ututu=ni k'urī-ta.
 アキラ=TOP 遊び+もの=ACC1 弟=DAT くれる -PST
 「アキラはおもちゃを弟にやった。」

(62) 【与格：ni：受け身動作主】

ak'ira=ya ututu=ni cikk-at-ta.
 アキラ=TOP 弟=DAT 殴る -PASS-PST
 「アキラは弟に殴られた。」

(63) 【与格：ni：受け身動作主】

ak'ira=ya ututu=ni uusikī-rat-ta.
 アキラ=TOP 弟=DAT 追いかける-PASS-PST
 「アキラは弟に追いかけられた。」

(64) 【与格：ni：使役の被使役者】

ak'ira=ya ututu=ni yasī=ba ka-a-sya.
 アキラ=TOP 弟=DAT 野菜=ACC1 食べる-CAUS-PST
 「アキラは弟に野菜を食べさせた。」

(65) 【対格：ba：使役の被使役者】

ak'ira=ya ututu=ba oogi-sya-kan=pondë oog-a-sya.
 アキラ=TOP 弟=ACC1 泳ぐ-DES-ADJ.NPST=だけ 泳ぐ-CAUS-PST
 「アキラは弟に好きなだけ泳がせた。」

3.5 所格

所格=nantī は場所または範囲に用いられる。場所の文脈で、場所名詞以外に後続するときには形式名詞 mī ~ mu 「前」が“名詞=属格 形式名詞=格助詞”の形で用いられる。

(66) 【所格：nantī：場所（存在）】

m'aa=nantī ak'ira=ga wut=too
 ここ=LOC アキラ=NOM1 居る.NPST=SFP
 「ここにアキラがいるよ。」

(67) 【所格：nantī：場所（存在）】

ak'ira=ya n'aa punī=nantī nu-tun=cyukaa.
 アキラ=TOP 今 船=LOC 乗る-PROG.NPST=REP
 「アキラは今船に乗っているようだ。」

(68) 【所格：nantī：場所（存在）】

uraita=nantī tokee=nu pokkë-rat-tuk=kaa.
 壁=LOC 時計=NOM2 掛ける-PASS-PROG.NPST=SFP
 「壁に時計が掛かっているよ。」

(69) 【所格：nantī：場所（存在）】

ak'ira=ya m'ari-ti=raga n'aa=gari syoo=nantī=du wut=too.
 アキラ=TOP 生まれる-SEQ=ABL 今=TERM 集落=LOC=FOC 居る.NPST=SFP
 「アキラは生まれてからずっと（佐仁）集落にいるよ。」

(70) 【所格：nantĩ：場所（存在）】

an yaa = nantĩ = ya inosisi = nu wun = cyukaa.
 あの山 = LOC = TOP イノシシ = NOM2 居る .NPST = REP
 「あの山にはイノシシがいるそうだ。」

(71) 【所格：nantĩ：場所（出来事）】

k'inu ak'ira = ya nazë = nantĩ mun = φ ka-dan = cyukaa
 昨日 アキラ = TOP 名瀬 = LOC ご飯 = ACC2 食べる -PST = REP
 「昨日アキラは名瀬でご飯を食べたそうだよ。」

(72) 【所格：nantĩ：場所（出来事）】

akira = ya wëë = nantĩ maari = φ ara-tur-i.
 アキラ = TOP 桶 = LOC 食器 = ACC2 洗う -PROG-NPST
 「アキラは食器を桶で洗っている。」

(73) 【所格：nantĩ：場所（存在）：形式名詞との共起】

hanazici = ya { ututu = nu / ak'ira = n / wa = n } mu = nantĩ ak = kaa.
 金槌 = TOP 弟 = GEN1 アキラ = GEN2 1.SG = GEN2 FN = LOC ある .NPST = SFP
 「金槌は {弟の / アキラの / 私の} ところにあるよ。」

(74) 【所格：nantĩ：範囲】

kĩnzuk'u = nu naa = nantĩ ututu = ga iciban uta = φ zyoozi zya
 家族 = GEN1 中 = LOC 弟 = NOM1 一番 歌 = ACC2 上手 COP.NPST
 「親族の中で弟が一番歌が上手だ」

(75) 【所格：nantĩ：範囲】

yuwandëë = ya uusya = nantĩ iciban taa-kan yaa zya = gaa.
 湯湾岳 = TOP 大島 = LOC 一番 高い -ADJ.NPST.ADN 山 COP.NPST = SFP
 「湯湾岳は大島で一番高い山だ。」

(76) 【所格：nantĩ：範囲】

huu = ya icinën = nantĩ piru = nu iciban naga-kan pyuuri zya = gaa.
 今日 = TOP 一年 = LOC 昼 = NOM2 一番 長い -ADJ.NPST.ADN 日より COP.NPST = SFP
 「今日は一年で一番昼が長い日だよ。」

(77) 【限界格：nantĩ：範囲】

yozi = garĩ = nantĩ modo-tĩ k-yut = too.
 四時 = TERM = LOC 戻る -SEQ くる -NPST = SFP
 「四時までに家に帰ってくるよ。」

3.6 方向格

方向格=(c)ci は移動の方向、移動の着点、接触の対象、態度の対象、変化の結果に用いられる。移動の方向／着点で場所名詞以外に後接する場合、形式名詞 mi ~ mu 「前」が介在する。

(78) 【方向格：(c)ci：自動詞文：移動の着点】

n'aa ak'ira=ya kagosyaa=ci i-zyut=to
今 アキラ=TOP 鹿児島=ALL 行く-PROG.NPST=SFP
「今アキラは鹿児島へ行っている。」

(79) 【方向格：(c)ci：自動詞文：移動の着点】

k'inu ak'ira=ya kagosyaa=ci i-zya.
昨日 アキラ=TOP 鹿児島=ALL 行く-PST
「昨日アキラは鹿児島へ行った。」

(80) 【方向格：(c)ci：自動詞：移動の着点】

ak'ira=ya sakki k'uukoo=ci si-cyan=cyukaa.
アキラ=TOP さっき 空港=ALL 着く-PST=REP
「アキラはさっき空港に着いたようだ。」

(81) 【方向格：(c)ci：他動詞：移動の着点】

un dookusak'u=φ k'uruma=cci c'u-u.
その 荷物=ACC2 車=ALL 積む-IMP
「その荷物を車に積み。」

(82) 【方向格：(c)ci：他動詞：移動の着点】

un isu=cci yir-ii.
この 椅子=ALL 座る-IMP
「この椅子に座れ。」

(83) 【方向格：(c)ci：移動着点：形式名詞と共起】

ak'ira=ya ututu=nu muc=ci zyoo=ba uku-ta.
アキラ=TOP 弟=GEN1 FN=ALL 手紙=ACC1 送る-PST
「アキラは弟（のところに）に手紙を送った。」

(84) 【方向格：(c)ci：他動詞：移動の着点】

cuke=nu u=cci k'wabin=φ uk-ii.
机=GEN1 上=ALL 花瓶=ACC2 置く-IMP
「机の上に花瓶を置け。」

(85) 【方向格：(c)ci：移動の方向】

hanadoru{=φ/=ba} migi + potē = cci muguras-īi.
 ハンドル = ACC2/ACC1 右 + 方 = ALL 回す -IMP
 「ハンドルを右の方へ回せ。」

(86) 【方向格：(c)ci：方向】

un kado = φ pizyari = cci magar-īi.
 その 角 = ACC2 左 = ALL 曲がる -IMP
 「その角を左に曲がれ。」

(87) 【方向格：(c)ci：他動詞：移動の方向】

booru = φ m'a = cci nagī-rīi.
 ボール = ACC2 ここ = ALL 投げる -IMP
 「ボールをこっちに投げろ。」

(88) 【方向格：(c)ci：他動詞：移動の方向】

{ ututu = nu / ak'ira = n / wa = n } mu = cci booru = φ nagī-rīi.
 弟 = GEN1 アキラ = GEN2 1.SG = GEN2 FN = ALL ボール = ACC2 投げる -IMP
 「{弟に/アキラに/私に} (向かって) ボールを投げろ。」

(89) 【方向格：(c)ci：他動詞：接触の対象】

ak'ira = ya mangē-ti parya = cci c'uburu = φ tokkan + syan = cyukaa.
 アキラ = TOP 転ぶ -SEQ 柱 = ALL 頭 = ACC2 OMP + LV.PST = REP
 「アキラは転んで柱に頭をぶつけたそうだ。」

(90) 【方向格：(c)ci：自動詞：接触の対象】

booru = nu c'uburu = cci ata-ti kīga + syan = cyukaa.
 ボール = NOM2 頭 = ALL 当たる -SEQ 怪我 + LV.PST = REP
 「ボールが頭に当たって怪我したそうだ。」

(91) 【方向格：(c)ci：他動詞：態度の対象】^{ix}

yuru akk-yun tuk'i = ya naga + mun = ci k'ii = φ siki-ri = yoo.
 夜 歩く -NPST.ADN 時 = TOP 長い + もの = ALL 気 = ACC2 付ける -IMP = SFP
 「夜歩くときはハブに気を付けろよ。」

(92) 【方向格：(c)ci：他動詞：変化結果】

ak'ira = ya ton = ba t'aaci = cci wēē-ta.
 アキラ = TOP さつまいも = ACC1 2つ = ALL 分ける -PST
 「アキラはさつまいもを2つに分けた。」

(93) 【方向格：(c)ci 自動詞：変化結果】

kucyoo=ya huzu ak'ira=raga takasi=cci kaa-ta.
 区長=TOP 去年 アキラ=ABL タカシ=ALL 変わる-PST
 「区長は去年アキラからタカシに変わった。」

3.7 奪格

奪格=raga は起点、経路、順序に用いられる。移動の起点で場所名詞以外に後接する場合、及び、授受／情報の起点の場合、形式名詞 mu ~ mi 「前」が介在する。

(94) 【奪格：raga：自動詞：起点（移動）】

ak'ira=ya yaa=raga izi-ta.
 アキラ=TOP 家=ABL 出る-PST
 「アキラは家から出た。」

(95) 【奪格：raga：他動詞：起点（移動）】

ak'ira=ya k'unugu+gi=raga k'unugu=ba mu-ta.
 アキラ=TOP ミカン+木=ABL ミカン=ACC1 もぐ-PST
 「アキラはミカンの木からミカンをもいだ。」

(96) 【奪格：raga：自動詞：起点（移動）：形式名詞との共起】

ak'ira=n mu=raga zyoo=nu ki-cya.
 アキラ=GEN2 FN=ABL 手紙=NOM2 来る-PST
 「アキラ（のところ）から手紙が来た。」

(97) 【奪格：raga：自動詞：起点（移動）：形式名詞との共起】

ututu=nu mu=raga zyoo=nu ki-cya.
 弟=GEN2 FN=ABL 手紙=NOM2 来る-PST
 「弟（のところ）から手紙が来た。」

(98) 【奪格：raga：自動詞：起点（出現）】

haaci=raga c'hi=nu izi-tun=mya nugaa?
 頭=ABL 血=NOM2 出る-PROG.NPST.NMLZ=TOP なぜ
 「頭から血が出ているのはどうして？」

(99) 【奪格：raga：他動詞：起点（時間）】

c'han=ya asya=raga kucyoo=nu sigutu=ba s-yut=too.
 父=TOP 明日=ABL 区長=GEN1 仕事=ACC1 する-NPST=SFP
 「父は明日から区長の仕事をするよ。」

(100) 【奪格：raga：他動詞：起点（授受）】

ak'ira=ya uya=nu mu=raga zin=φ yi-ta.
 アキラ=TOP 親=GEN1 FN=ABL 金銭=ACC2 貰う-PST
 「アキラは親からお金を貰った。」

(101) 【奪格：raga：他動詞：起点（授受）】

ak'ira=ya ani=n mu=raga ya=ba yi-ta.
 アキラ=TOP お兄さん=GEN2 FN=ABL 家=ACC1 貰う-PST
 「アキラはお兄さんに家を貰った。」

(102) 【奪格：raga：他動詞：起点（情報）】

ak'ira=ya ututu=nu byook'i=φ na-tan=ci uya=nu mu=raga ki-cya.
 アキラ=TOP 弟=NOM1 病気=ACC2 なる-PST=QUOT 親=GEN1 FN=ABL 聞く-PST
 「アキラは弟が病気になったと親から聞いた。」

(103) 【奪格：raga：他動詞：起点（情報）】

ak'ira=ya mutabi=φ nur-yun=ba uya=nu mu=raga nara-ta
 アキラ=TOP 竹馬=ACC2 乗る-NPST.NMLZ=ACC1 親=GEN FN=ABL 習う-PST
 「アキラは竹馬に乗ることを親から習った。」

(104) 【奪格：raga：他動詞：起点（情報）】

wa=n mu=raga panasi=φ si-roo.
 1.SG=GEN2 FN=ABL 話=ACC2 する-INT
 「私から話をしよう。」

(105) 【奪格：raga：経路】

hoora=nu mura=nu naa=raga tuu-tuk=kaa.
 川=NOM2 村=GEN1 中=ABL 通る-PROG.NPST=SFP
 「川が村の中を通っている。」

(106) 【奪格：raga：順序】

y'aa=raga sak'i huni=cci nur-ii.
 お前=ABL 先 船=ALL 乗る-IMP
 「お前から先に船に乗れ。」

(107) 【奪格：raga：順序】

y'aa=raga sak'i nyaagē=φ tur-as-oo.
 お前=ABL 先 土産=ACC2 取る-CAUS-INT
 「お前から先にお土産をやろう。」

3.8 限界格

限界格 = *gari* は終点に用いられる。移動の終点で場所名詞以外に後接する場合、形式名詞 *mu ~ mi* 「前」が介在する。

(108) 【限界格：*gari*：終点（移動）】

ak'ira=ya kagosyaa=raga puni=si uusyaa=gari modo-tic-cya.
 アキラ=TOP 鹿児島=ABL 船=INST 大島=TERM 戻る-てくる-PST
 「アキラは鹿児島から船で大島まで帰ってきた。」

(109) 【限界格：*gari*：終点（移動）】

{ *ututu=nu / ak'ira=n* } *mu=gari pasir-ik'uma=φ si-roo.*
 弟=GEN1 アキラ=GEN2 FN=TERM 走る-REC=ACC2 する-INT
 「弟のところまでかけっこしよう。」

(110) 【限界格：*gari*：終点（時間）】

yozi=gari yaa=nanti mac-cyur-ii.
 四時=TERM 家=LOC 待つ-PROG-IMP
 「四時まで家でまっている。」

(111) 【限界格：*gari*：終点（範囲）】

aa=raga m'aa=gari=ya wa=n patë zya=gaa.
 あそこ=ABL ここ=TERM=TOP 私=GEN2 畑 COP.NPST=SFP
 「あそこからここまでは私の畑だよ。」

3.9 具格

具格 = *si* は道具・手段、材料、原因、基準、動作主の構成員に用いられる。

(112) 【具格：*si*：道具】

ak'ira=ya maari=ba muzi=si ara-tur-i.
 アキラ=TOP 食器=ACC1 水=INST 洗う-PROG-NPST
 「アキラは食器を水で洗っている。」

(113) 【限界格：*si*：手段】

ak'ira=ya kagosyaa=raga puni=si uusyaa=gari modo-tic-cya.
 アキラ=TOP 鹿児島=ABL 船=INST 大島=TERM 戻る-てくる-PST
 「アキラは鹿児島から船で大島まで帰ってきた。」

(114) 【具格：si：手段】

un uwagi=ya honēda tookyoo=nantī nisen+yen=si hau-tan zya=gaa.
 この 上着=TOP この間 東京=LOC 2000+円=INST 買う-PST.NMLZ COP.NPST=SFP
 「この上着はこの間東京で二千円で買ったんだよ。」

(115) 【具格：si：材料】

topu=ya deezī=si sukur-yut=too.
 豆腐=TOP 大豆=INST 作る-NPST=SFP
 「豆腐は大豆でつくるよ。」

(116) 【具格：si：材料】

hussyu=ga wara=si saba suku-ta.
 おじいさん=NOM1 わら=INST 草履=ACC2 作る-PST
 「おじいさんがわらで草履を作った。」

(117) 【具格：si：材料】

un pak'u=ya kami=si sukur-at-tuk=kaa.
 この 箱=TOP 紙=INST 作る-PASS-PROG.NPST=SFP
 「この箱は紙で作られている。」

(118) 【具格：si：原因】

k'inu=nu tēpu=si hī=nu mangē-ta.
 昨日=GEN1 台風=INST 木=NOM1 倒れる-PST
 「昨日の台風で木が倒れた。」

(119) 【具格：si：基準】

un yehagak'i=ya isīcī=si gohyak'u+yen zya.
 この 絵葉書=TOP 5つ=INST 500+円 COP.NPST
 「この絵葉書は5枚で五百円だ。」

(120) 【格：si：動作主の構成員】

ni=nu ubu-ka a-tī t'aari=si muc-cya.
 荷物=NOM2 重い-ADJ STV-SEQ 2人=INST 持つ-PST
 「荷物が重かったので二人でもった。」

3.10 共格

共格=tu は共同動作の相手、道具、相似の基準に用いられるほか、名詞句の等位接続にも用いられる。

(121) 【共格：tu：共同動作の相手】

ak'ira=ya mīci=nantī dusi=tu au-ta.
 アキラ=TOP 道=LOC 友達=COM 会う-PST
 「アキラは道で友達にあった。」

(122) 【共格：tu：共同動作の相手】

ak'ira=ya ututu=tu asi-dur-i.
 アキラ=TOP 弟=COM 遊ぶ-PROG-NPST
 「アキラは弟と遊んでいる。」

(123) 【共格：tu：道具】

ak'ira=ya maari=ba muzi=tu ara-tur-i.
 アキラ=TOP 食器=ACC1 水=INST 洗う-PROG-NPST
 「アキラは食器を水で洗っている。」

(124) 【共格：tu：相似の基準】

ak'ira=ya mu{=nu/=ga} yinga=nu uya=tu ni-syuk=kaa.
 アキラ=TOP 目=NOM2/NOM1 男=GEN1 親=COM 似る-PROG.NPST=SPF
 「アキラは目が父親と似ているよ。」

(125) 【共格：tu：相似の基準】

un kucu=ya ak'ira=n kucu=tu yinsiko kucu zya.
 この靴=TOP アキラ=GEN2 靴=COM 同じ 靴 COP.NPST
 「この靴はアキラ靴と同じ靴だ。」

(126) 【共格：tu：等位接続】

ak'ira=tu ututu=tu asib-iga i-zya.
 アキラ=COM 弟=COM 遊ぶ-PURP 行く-PST
 「アキラと弟が遊びに行った。」

3.1.1 比較格

比較格=nika は比較の基準に用いられる。

(127) 【比較格：nika：比較の基準】

ak'ira=ya ututu=nika tēē=nu taa-kar-i.
 アキラ=TOP 弟=CMPR 背丈=GEN1 高い-ADJ-NPST
 「アキラは弟より背が高い。」

(128) 【比較格：nika：比較の基準】

k'nu=ya huu=nika hazi=nu c'yuu-ka a-ta.
 昨日=TOP 今日=CMPR 風=NOM2 強い-ADJ STV-PST
 「昨日は今日より風が強かった。」

3.1.2 取り立て助詞

以下に取り立て助詞の用例を示す。主題助詞は指示詞の n 終わりの形及び名詞節(-n)に後続する場合に異形態=mya を取る。

(129) 【主題：ya】

wan=ya cyaa=ya nu-yun=ba koohii=ya nuw-an=doo.
 1.SG=TOP 茶=TOP 飲む-NPST=ADVRS コーヒー=TOP 飲む-NEG.NPST=SFP
 「私はお茶は飲むがコーヒーは飲まないよ。」

(130) 【主題：ya/mya】

{ urī=ya / un=mya } taru-n=wurīi?
 これ=TOP これ=TOP 誰-NMLZ=WHQ
 「これは誰のものか？」

(131) 【主題：mya】

haaci=raga c'hi=nu izi-tun=mya nugaa?
 頭=ABL 血=NOM2 出る-PROG.NPST.NMLZ=TOP なぜ
 「頭から血が出ているのはどうして？」

(132) 【主題：ya】 【焦点：du】

wan=ya ar-azī { ak'ira=ga=du / ututu=du } pando=φ wa-ta=ga.
 1.SG=TOP COP-NEG.SEQ アキラ=NOM1=FOC 弟=FOC 壺=ACC2 割る-PST=SFP
 「私じゃなくて {アキラ/弟が} 壺を割った。」

(133) 【主題：ya】 【焦点：du】

wa-kya=ya w'aa=ya ar-azī yagi=du sīkana-tut=too.
 1-PL=TOP 豚=TOP COP-NEG.SEQ ヤギ=NOM1=FOC 飼う-PROG.NPST=SFP
 「私たちは豚じゃなくてヤギを飼っているよ。」

(134) 【焦点：du】

ak'ira=bari=du hontoo=nu kutu sic-cyun.
 アキラ=LMT=FOC 本当=GEN1 こと知る-PROG.NPST.NMLZ
 「アキラだけが本当のことを知っている。」

(135) 【焦点：du】

unya = ya wunagu = bari = du wun = doo.
 この家 = TOP 女 = LMT = FOC 居る .NPST.NMLZ = SFP
 「この家には女しかいない。」

(136) 【添加：daka】

ak'ira = ya sēē = daka nuw-am-ba taak'u = daka puk-an.
 アキラ = TOP 酒 = ADD1 飲む-NEG.NPST-COND タバコ = ADD1 吹く-NEG.NPST。
 「アキラは酒も飲まなければタバコも吸わない。」

(137) 【添加：gari】

ak'ira = ya yaa + yasik'i = gari u-ta.
 アキラ = TOP 家 + 屋敷 = ADD2 売る -PST
 「次郎は家屋敷まで売ってしまった。」

(138) 【添加：gari】

macuri = nu duki = ya amma = gari wudu-ta.
 祭り = GEN1 とき = TOP おばあさん = ADD2 踊る -PST
 「祭りのときはおばあさんも踊った。」

(139) 【添加：gari】

ak'ira = ya warēgwa = ni = gari otosidama k'uri-ta.
 アキラ = TOP 幼児 = DAT = ADD2 お年玉 くれる -PST
 「アキラは幼児にもお年玉をやった。」

(140) 【添加：gari：範囲】

uri = gari k'uri-syo-rii.
 これ = ADD2 くれる -HON-IMP
 「(店で) これもください。」

(141) 【添加：yasima】

mun + sir-ya = nu ak'ira = yasima un pana = nu naa = ya sir-an.
 物 + 知る -NMLZ = GEN1 アキラ = ADD3 この 花 = GEN1 名 = TOP 知る -NEG.NPST
 「物知りのアキラさえ、その花の名前は分からない。」

(142) 【添加：yasima】 【さえ：sae】

sēē = sae ar-iba nuu = yasima iran.
 酒 = さえある -COND 何 = ADD3 要る -NEG.NPST
 「酒さえあれば何もいらぬ。」

(143) 【限定：bari】

ak'ira=ya manzyu=nu hoo=bari ka-da.
 アキラ=TOP まんじゅう=GEN1 皮=LMT 食べる-PST
 「アキラはまんじゅうを皮だけ食べた。」

(144) 【限定：bari】

ak'ira=ya yaa=nanti manga=bari=du yu-dun.
 アキラ=TOP 家=LOC マンガ=LMT =FOC 読む-PROG.NPST.NMLZ
 「アキラは家でマンガばかり読んでいる。」

(145) 【こそ：kusa】

wan=kusa kannin=doo.
 1.SG=こそ 堪忍=SFP
 「私こそごめんね。」

(146) 【なんか：(nu)nkyā】

wan=ya ton=nunkya ka-n=doo.
 1.SG=TOP さつまいも=なんか 食べる-NEG.NPST=SFP
 「私はさつまいもなんか食べないよ。」

(147) 【やら：zya】

doobucuyen=nanti=ya zoo=zya kirin=zya muzira-kan
 動物園=LOC=TOP ゾウ=やら キリン=やら 珍しい-ADJ.NPST.ADN
 ik'imun=bari wu-ta.
 生き物=LMT 居る-PST
 「動物園にはゾウやらキリンやら珍しい動物ばかりいた。」

4 「おおきなカブ」佐仁方言版

- (1) だい しゅん うでえ°
 dai syun udë
 大 LV.PROG.NPST.ADN カブ
 「大きなカブ」
- (2) ふっしゅが うでえ°ぬ たぬい°ば まし
 hussyu = ga udë = nu tanī = ba ma-si
 おじいさん = NOM1 カブ = GEN1 種 = ACC1 蒔く -SEQ
 おじいさんがカブの種を蒔いて、
- (3) ‘まーかん ‘まーかん うでえ°なるい°
 m'aa-kan m'aa-kan udë nar-ī
 旨い-ADJ.NPST.ADN 旨い-ADJ.NPST.ADN カブ なる-IMP
 「おいしい、おいしいカブになれ。」
- (4) だいしゅん だい しゅん うでえ°なるい°
 dai syun dai syun udë nar-ī
 大 LV.PROG.NPST.ADN 大 LV.PROG.NPST.ADN カブ なる-IMP
 大きな、大きなカブになれ」
- (5) あーかん ‘きまえぬ あん
 m'aa -kan k'imae = nu an
 旨い-ADJ.NPST.ADN 元気 = GEN1 ある .NPST.ADN
 おいしい、元気のある、
- (6) とうんがく ねん だい しゅん
 tungak'u nën dai syun
 とつとも ない.NEG.NPST.ADN 大 LV.PROG.NPST.ADN
 とつともない、大きな
- (7) うでえ°ぬ でえ°くえ°た
 udë = nu dëkë-ta
 カブ = NOM2 できる -PST
 カブができた。

(8) ふっしゅや うでえ° ば ぴきよっち し
 hussyu = ya udë = ba piky-o = cci si
 おじいさん = TOP かぶ = ACC 引き抜く -INT = QUOT LV.SEQ
 おじいさんはカブを抜こうとして、

(9) よいとこしよ どっこいしよ
 yoitokosyo dokkoisyo
 INTJ INTJ
 「うんとこしよ、どっこいしよ」

(10) あし しゅんば うでえ° や ぴきやらん
 asi s-yun = ba udë = ya piky-ar-an
 そう LV-NPST = ADVRS カブ = TOP 引き抜く -POT-NEG.NPST
 ところが、カブは抜けない。

(11) ふっしゅや あんまば あぶてい° っち
 hussyu = ya amma = ba abu-tic-ci
 おじいさん = TOP おばあさん = ACC1 呼ぶ -てくる -SEQ
 おじいさんはおばあさんと呼んできて、

(12) あんまが ふっしゅば はがてい°
 amma = ga hussyu = ba haga-ti
 おばあさん = NOM1 おじいさん = ACC1 引っ張る -SEQ
 おばあさんがおじいさんを引っ張って、

(13) ふっしゅが うでえ° ば はがてい°
 hussyu = ga udë = ba haga-ti
 おじいさん = NOM1 カブ = ACC1 引っ張る -SEQ
 おじいさんがカブを引っ張って、

(14) よいとこしよ どっこいしよ
 yoitokosyo dokkoisyo
 INTJ INTJ
 「うんとこしよ、どっこいしよ」

(15) うるいしだか うでえ° や ぴきやらん
 uri = si = daka udë = ya piky-ar-an
 それ = INST = ADD1 カブ = TOP 引き抜く -POT-NEG.NPST
 それでも、カブは抜けない。

- (16) あんまや ‘まがば あぶてい° っち
 amma = ya m’aga = ba abu-tic-ci
 おばあさん = TOP 孫 = ACC1 呼ぶ-てくる-SEQ
 おばあさんは孫を呼んできて、
- (17) ‘まがぬ あんまば はがてい°
 m’aga = nu amma = ba haga-ti
 孫 = NOM2 おばあさん = ACC1 引っ張る-SEQ
 孫がおばあさんを引っ張って、
- (18) あんまが ふっしゅば はがてい°
 amma = ga hussyu = ba haga-ti
 おばあさん = NOM1 おじいさん = ACC1 引っ張る-SEQ
 おばあさんがおじいさんを引っ張って、
- (19) ふっしゅが うでえ° ば はがてい°
 hussyu = ga udë = ba haga-ti
 おじいさん = NOM1 カブ = ACC1 引っ張る-SEQ
 おじいさんがカブを引っ張って
- (20) よいとこしよ どっこいしよ
 yoitokosyo dokkoisyo
 INTJ INTJ
 「うんとこしよ、どっこいしよ」
- (21) あてい° だん うでえ° や ぴきやらん
 atidan udë = ya piky-ar-an
 CONJ カブ = TOP 引き抜く -POT-NEG.NPST
 まだまだ、カブは抜けない。
- (22) ‘まがや いんば あぶてい° っち
 m’aga = ya in = ba abu-tic-ci
 孫 = TOP イヌ = ACC1 呼ぶ-てくる-SEQ
 孫はイヌを呼んできて、
- (23) いんぬ ‘まがば はがてい°
 in = nu m’aga = ba haga-ti
 イヌ = NOM2 孫 = ACC1 引っ張る-SEQ
 イヌが孫を引っ張って、

- (24) ‘まがぬ あんまば はがてい°
 m’aga = nu amma = ba haga-ti
 孫 = NOM2 おばあさん = ACC1 引っ張る-SEQ
 孫がおばあさんを引っ張って、
- (25) あんまが ふっしゅば はがてい°
 amma = ga hussyu = ba haga-ti
 おばあさん = NOM1 おじいさん = ACC1 引っ張る-SEQ
 おばあさんがおじいさんを引っ張って、
- (26) ふっしゅが うでえ°ば はがてい°
 hussyu = ga udë = ba haga-ti
 おじいさん = NOM1 カブ = ACC1 引っ張る-SEQ
 おじいさんがカブを引っ張って
- (27) よいとこしよ どっこいしよ
 yoitokosyo dokkoisyo
 INTJ INTJ
 「うんとこしよ、どっこいしよ」
- (28) あしゅんち あしゅんち ぴきゅらん
 asyanci asyanci piky-ar-an
 CONJ CONJ 引き抜く-POT-NEG.NPST
 まだまだ、まだまだ、抜けない。
- (29) いんや まやば あぶてい° っち
 in = ya maya = ba abu-tic-ci
 イヌ = TOP ネコ = ACC 呼ぶ-てくる-SEQ
 イヌはネコを呼んできて、
- (30) まやぬ いんば はがてい°
 maya = nu in = ba haga-ti
 ネコ = NOM2 犬 = ACC 引っ張る-SEQ
 ネコがイヌを引っ張って、
- (31) いんぬ ‘まがば はがてい°
 in = nu m’aga = ba haga-ti
 イヌ = NOM2 孫 = ACC1 引っ張る-SEQ
 イヌが孫を引っ張って、

- (32) ‘まがぬ あんまば はがてい°
 m’aga = nu amma = ba haga-ti
 孫 = NOM2 おばあさん = ACC1 引っ張る-SEQ
 孫がおばあさんを引っ張って、
- (33) あんまが ふっしゅば はがてい°
 amma = ga hussyu = ba haga-ti
 おばあさん = NOM1 おじいさん = ACC1 引っ張る-SEQ
 おばあさんがおじいさんを引っ張って、
- (34) ふっしゅが うでえ° ば はがてい°
 hussyu = ga udë = ba haga-ti
 おじいさん = NOM1 カブ = ACC1 引っ張る-SEQ
 おじいさんがカブを引っ張って、
- (35) よいとこしよ どっこいしよ
 yoitokosyo dokkoisyo
 INTJ INTJ
 「うんとこしよ、どっこいしよ」
- (36) うるいしだか うでえ° や ぴきやらん
 uri = si = daka udë = ya piky-ar-an
 それ = INST = ADD1 カブ = TOP 引き抜く -POT-NEG.NPST
 それでも、カブは抜けない。
- (37) まやや ぬい° ずい° んば あぶい° てい° っち
 maya = ya nizin = ba abi-tic-ci
 ネコ = TOP ネズミ = ACC1 呼ぶ-てくる-SEQ
 ネコはネズミを呼んできて、
- (38) ぬい° ずい° んぬ まやば はがてい°
 nizin = nu maya = ba haga-ti
 ネズミ = NOM2 ネコ = ACC 引っ張る-SEQ
 ネズミがネコを引っ張って、
- (39) まやぬ いんば はがてい°
 maya = nu in = ba haga-ti
 ネコ = NOM2 犬 = ACC 引っ張る-SEQ
 ネコがイヌを引っ張って、

- (40) いんぬ ‘まがば はがてい°
 in = nu m'aga = ba haga-ti
 イヌ = NOM2 孫 = ACC1 引っ張る -SEQ
 イヌが孫を引っ張って、
- (41) ‘まがぬ あんまば はがてい°
 m'aga = nu amma = ba haga-ti
 孫 = NOM2 おばあさん = ACC1 引っ張る -SEQ
 孫がおばあさんを引っ張って、
- (42) あんまが ふっしゅば はがてい°
 amma = ga hussyu = ba haga-ti
 おばあさん = NOM1 おじいさん = ACC1 引っ張る -SEQ
 おばあさんがおじいさんを引っ張って、
- (43) ふっしゅが うでえ°ば はがてい°
 hussyu = ga udë = ba haga-ti
 おじいさん = NOM1 カブ = ACC1 引っ張る -SEQ
 おじいさんがカブを引っ張って
- (44) よいとこしよ どっこいしよ
 yoitokosyo dokkoisyo
 INTJ INTJ
 「うんとこしよ、どっこいしよ」
- (45) やっとかっと うでえ°や ぴきやった
 yattokatto udë = ya piky-at-ta.
 やっと カブ = TOP 引き抜く -POT-PST
 やっと、カブは抜けた。

グロス略号一覧

1	first person	一人称	LV	light verb	軽動詞
2	second person	二人称	NEG	negative	否定
3	third person	三人称	NMLZ	nominalizer	名詞化接辞
ABL	ablative	奪格	NOM	nominative	主格
ACC	accusative	対格	NPST	non-past	非過去
ADD	additive	添加	OMP	onomatopoeia	オノマトペ
ADJ	adjectivizer	形容詞化	PASS	passive	受身
ADN	adnominal	連体	PL	plural	複数
ADVRS	adversative conjunction	逆接	POT	potential	可能
			PROG	progressive	継続
ALL	allative	方向格	PST	past	過去
CAUS	causative	使役	POL	polite	丁寧
CMPR	comparative	比較格	PURP	purp	目的
COM	comitative	共格	QUOT	quotative	引用
COND	conditional	条件	REC	reciprocal	相互
COP	copula	コピュラ	REP	reportative	伝聞
CSL	causal	理由	SEQ	sequential	継起
DAT	dative	与格	SFP	sentence final particle	文末助詞
DES	desiderative	願望			
FN	formal noun	形式名詞	SG	singular	単数
FOC	focus	焦点	STV	stative verb	状態動詞
GEN	genitive	属格	TEMP	temporal	時間
HON	honorifics	尊敬	TERM	terminative	限界格
IMP	imperative	命令	TOP	topic	主題
INST	instrumental	具格	WHQ	wh-question	疑問詞疑問
INT	intentional	意志	-		接辞境界
LMT	limitative	限定	=		接語境界
LOC	locative	所格	+		複合境界

ⁱ 国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図を編集した。

ⁱⁱ また、先行研究で明示的に言及されていないが、語頭が Vkv に遡る形式に生じた音

変化が佐仁方言と奄美大島北部の他の方言とでは異なっている（例 佐仁方言：ʔa:ka「赤い」、ʔu:ɕun「起こす」、他方言：ha:sa~ha:ka「赤い」、ɸuɕɕun「起こす」）。

iii 狩俣（2003）は、ĩ, ā, õ, ã, の4つの鼻母音を音素として立てているが、調査した中で鼻母音を持つのは80代~90代の数人であったと報告している。筆者は昭和8年~18年生まれの話者を確認したが、やはり鼻母音は見られなかった。

iv 2017年2月~2018年2月に断続的に行った、佐仁集落出身・在住の安田重照氏（昭和13年生）、安田絹枝氏（昭和18年生）、前田和郎氏（昭和15年生）、前田幸代氏（昭和14年生）への聞き取り調査である。本稿では主に安田重照氏と安田絹枝氏への調査で得たデータを用いている。

v 語例の収集にあたっては上野（1996,1997）、狩俣（2003）を参照した。

vi 用例の収集にあたっては国立国語研究所の本プロジェクトの過去の成果物及び危機方言プロジェクトの調査票を参照した。

vii 一人称代名詞単数形 wan、二人称敬称代名詞単数形 nan は、格助詞=ga が付くと語末の n が随意的に削除される（例 wan=ga ~ waga「私が」 nan=ga ~ naga「あなたが」）。

viii 一人称代名詞単数形、二人称敬称代名詞単数形、三人称代名詞単数形について、単独形はそれぞれ wan, nan, ari である。

ix nagamun はハブ（mazyun）の婉曲表現である。

参考文献

- 上野善道（1996）「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告—名詞の部」『琉球の方言』20:26-57.
- 上野善道（1997）「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告—用言の部」『琉球の方言』21:1-42.
- 小川晋史（編）（2015）『琉球のことばの書き方』東京：くろしお出版.
- 狩俣繁久（2003）『奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙』吹田：大阪学院大学情報学部.
- 重野裕美（2014）「北琉球奄美大島佐仁方言の敬語形式」『広島経済大学論集』36(4)：75-85.
- 重野裕美・白田理人（2018）[印刷中]「北琉球奄美大島笠利佐仁方言の尊敬動詞について」『琉球の方言』42：25-59.

沖縄県国頭村奥方言

沖縄県国頭村奥方言

狩俣繁久・島袋幸子（琉球大学）

1 国頭村奥の概要

奥方言とは、ここでは、国頭村奥集落で話されている地域言語のことをさす。奥集落は沖縄本島の最北端の辺戸岬から東に位置する。平成 30（2018）年 1 月時点での実人口は 183 人（111 戸）。

2 国頭村奥方言の概要

国頭村奥の方言は、UNESCO の Atlas of the World's language in Danger にあげられた国頭語のなかの一つの下位方言である。国頭語は、UNESCO のリストによると、「危険」と判定されている。しかし、同じ国頭語に属する今帰仁方言が『沖縄今帰仁辞典』のような本格的な辞典、談話資料と文法記述を有しているのに対して、奥方言は、方言母語話者は存在するが、人の流出が激しく、継承する若い人が少ない状況である。

奥方言は、北琉球諸語の下位言語の沖縄語北部方言に属する。音韻的には、奥方言は、古代ハ行子音の *p* を保存し、広母音 *a*、半広母半狭母音 *e*、*o* と結合する *k* が摩擦音化して *h* に変化している。また、無声破裂音に喉頭・非喉頭の対立を有する。

3 人口構成からみた奥方言

奥集落の平成 22 年 10 月末現在の年代別人口（国勢調査）は以下のとおりである。

75 歳以上	32 人
70 歳～74 歳	14 人
60 歳～69 歳	41 人
50 歳～59 歳	20 人
21 歳～49 歳	46 人
20 歳以下	30 人
計	183 人

複数の人の話から、伝統的な奥方言の話者は 65 歳以上であろうとのことである。20 歳以下の人口は 16% で、60 歳以上の人口は 47.5% で、そのうち 75 歳以上は 17.4% である。

沖縄県国頭村奥方言の音韻体系

沖縄県国頭村奥方言の音韻体系

狩俣繁久・島袋幸子（琉球大学）

1 国頭村奥方言の位置づけ

国頭村奥集落の方言（以下、奥方言）は、琉球諸語の沖縄諸語の沖縄本島北部方言の下位方言である。沖縄本島北部方言（以下、北部方言）は、名護市教育委員会編 2000 によると、名護市、本部町、今帰仁村で話されている中央山原方言と、国頭村、大宜味村、東村で話されている北山原方言と、恩納村、宜野座村、金武町で話されている南山原方言に区分される。

奥方言は、短母音が a、i、u、e、o の 5 母音体系であること、動詞と形容詞の叙述法断定の形式の末尾に N の現れる 1 形式しかないことなどから、沖縄語諸方言に区分される。

奥方言は、以下のような北山原方言に見られる音韻論的特徴が見られる。

- 1) 広母音 *a、半広母音 *e、*o と結合する軟口蓋破裂音 *k が摩擦音化して h に変化している。
- 2) 広母音 *a、半広母音 *e、*o に挟まれた軟口蓋破裂音 *k が摩擦音化して h に変化している。

国頭村の一集落である奥方言ではあるが、音韻論的な特徴において、以下のような中央山原方言的な特徴を有する。

- 3) 古代ハ行子音の p を保持する。
- 4) 無声破裂音と無声摩擦音に喉頭・非喉頭の対立が見られる。
- 5) 有声の両唇接近音と両唇鼻音に喉頭・非喉頭の対立が見られる。

奥方言に特徴的に見られる音韻的特徴を示すものとして、語中の r の接近音化と音消失、および接近音 j の r への変化が見られる。*i と結合する r が音消失する現象は他の沖縄語諸方言にも見られるが、奥方言のそれは、母音の韻質を問わず見られる。

- 6) 語中の r が接近音に変化する例が見られる。
- 7) r から接近音化した j が音消失している語例が見られる。
- 8) 接近音 j が流音 r に変化している語例が見られる。

奥方言の母音音素には長短の区別があり、5 個の短母音と音色を同じくする 5 個の長母音の計 10 個の母音音素がある。

/a、i、u、e、o、aː、iː、uː、eː、oː/

奥方言の子音音素には、破裂音と破擦音に有声・無声の対立があり、無声破裂音と無声破擦音には喉頭・非喉頭の対立が見られる。また鼻音と流音と接近音には有声音しかない。鼻音と接近音には、喉頭・非喉頭の対立が見られる。軟口蓋破裂音に唇音化したものがあり、唇音化と非唇音化の対立がある。促音と撥音もある。

/ ʼ, k, g, t, d, p, b, ts, dz, s, n, m, r, j, w /
 / kʼ, tʼ, pʼ, tʼs, ʔm, ʔj, ʔw /
 / kw, kʼw, gw /
 / q, N /

2 国頭村奥方言の母音

奥方言では琉球祖語の母音音素 *e、*o が狭母音化して i、u がに変化し、*i、*u と統合している。歯茎破擦音、歯茎摩擦音と結合する *u が先行する歯茎音と同化したのち、口蓋音化した子音とさらに同化して i に変化している。

/ i /

/ʔi/ ʔiru (魚)、ʔiru (色)、ʔiei (石)、ʔitei (息)、ʔita (板)、ʔisa: (烏賊)、ʔinu (蓑)、ʔina (蝮)、ʔiNni (胸)、ʔiNdu (溝)、ʔiNdaha:N (苦い)、ʔiNdanaba: (苦菜)、ʔidzijaN (出ない)、ʔiNnukwa (犬)、ʔidzi:ba (出れば)、ʔisunahaN (忙しい)、ʔisa: (医者)、
 ʔibi (蝦)、ʔiNdzi (棘)、

/ ʼi / judai (涎)、mai (尻)、saʔui (咳)、pugui (睾丸)、nai (実)、kusui (薬)、ʔui (瓜)、eibui (冬瓜)、mo:ʔui (アカウリ)、tui (鶏)、ʔahagai (灯)、haNnai (雷)、tunai (隣)、kuimi (暦)、tʼui (一人)、tʼai (二人)、pakai (秤)、mahai (椀)、

/hi/ hisa (下)、hikara (力)、suruhina: (棕櫚縄)、
 hitu: (月)、hibuei (煙)、bahi (箒)、ʔuhi (桶)、dahi (竹)、so:hi (箒)、hiN (船)、

/kʼi/ kʼinu: (昨日)、kʼiN (衣)、(sakʼi (酒)、

/ki/ʔaki (秋)、

/gi/ eigi (杉)、

hagi (陰)、sa:gi (白髪)、kwa:gi (桑)、ʔagi (陸)、pukugi (フクギ)、ma:gi (土産)、

/ti/ tida (太陽)、tiN (天)、tiru (籠)、

/pʼi/ pʼidzi (髭)、pʼidzi (肘)、pʼiru (昼)、pʼima (暇)、pʼidai (左)、pʼida (東)、

/pi/piru (大蒜)、

pija (へら)、pitu (海豚)、

/bi/ kʼubi (首)、teibija (萋)、abi (足袋)、tʼubi (帯)、ʔuibi (指)、
 ʔibi (蝦)、habi (紙)、nabi (鍋)、warabi (子ども)、

- /t'si/ t'eija (顔)、t'eiru (露)、t'eiru (弦)、t'eiNci (膝)、
t'eimu (肝)、
- /t'si/ teiri (塵)、teige:N (違う)、mitei (道)、kutei (口)、ʔutei (内)、kutei (東風)、
ʔitei (息)、nutei (命)、me:nitei (毎日)、
teimi (爪)、teinu (角)、t'eija (顔)、matei (松)、natei (夏)、tututei (蘇鉄)、
mutsikahaN (難しい)、niNgwatei (二月)、ʔieitei (五つ)、kuʔunutei (九つ)、
hatei (垣)、satei (先)、tatei (滝)、wa:eitei (天気)、
tatei (縦)、ʔasatei (明後日)、misunatei (一昨年)、tatei (臍臓)、
- /dzi/ dziN (膳)、dziN (銭)、dziko: (とても)、dziriri (茶筒)、hadzi (風)、midzi
(水)、k'udzi (釘)、mudzi (麦)、p'idzi (髭)、sudzi (袖)、nudzi (喉)、haradzi
(頭髪)、mimidzi (ミミズ)、mateidzi (旋毛)、ʔiNdzi (棘)、ʔunadzi (鰻)、
ho:dzi (麴)、ʔadzimi (杵)、mukadzi (百足)、sadzi (手拭)、bo:dziei (ヒレ肉)
sudziru (キビナゴ)、ʔidzijaN (出ない)、
- /si/ eika (柄)、eima (島)、eina (砂)、eiba (舌)、eibui (冬瓜)、eigi (杉)、eiru
(汁)、ʔuei (牛)、ʔiei (石)、puei (星)、ʔuei (腰)、paei (橋)、tuei (年)、
daei (出汁)、muei (虫)、ʔuei (臼)、haei (糟)、ʔaei (汗)、ʔacida (下駄)、paei
(蜂)、ʔieitei (五つ)、gaei (飢饉)、baNci: (グァバ)、gisaei (虱の卵)、
garaei (鳥)、wa:eitei (天気)、hibuei (煙)、ʔabuei (蛙)、niei (北)、he:eima
(裏返し)、ko:gwa:ei (落雁)、eitu (苞)、eirumage: (杓子)、
- /ni/ nito:N (似ている)、nidzi: (右)、k'uni (国)、ʔuni (鬼)、me:nitei (毎日)、
gani (蟹)、hani (金)、puni (骨)、pani (羽)、ʔiNni (胸)、ja:ni (来年)、
niNgwatei (二月)、ʔani (蟻)、
- /mi/ mimi (耳)、mimidzi (ミミズ)、misu (味噌)、midzi (水)、mitei (道)、numi
(蚤)、ʔumi (海)、ʔami (網)、kami (神)、sumi (墨)、nami (波)、numi
(鑿)、sa:mi (虱)、
mami (豆)、jumi (嫁)、teimi (爪)、hami (甕)、ʔami (雨)、ʔumi (米)、ka:mi
(亀)、kuimi (曆)、
- /ri/ teiri (塵) p'a:ri (旱魃)、

/ e /

- /ʔe/ʔeheraku (少なく)、
- /he/ ʔeheraku (少なく)、kehera (削り屑)、
- /he:/he:na (腕)、he:eima (裏返し)
- /ʔe:/ ʔe: (藍)、ʔe:ruN (和える)、
- /ke:/ʔake:da: (蜻蛉)、ʔuke:me: (粥)、
- /kwe:/ kwe: (鍬)、kwe:to:N (肥えている)、
- /ge/ gekkeN (片足飛び遊び)、pisageNma:ra (片足飛び)、
- /ge:/ ge: (貝)、ʔupuge: (胃)、mage: (おたま)、sa:ru:ge: (蠐螬)、duge:taN (転ん
だ)、teige:N (違う)、eirumage: (杓子)、

/gwe:/ p'a:gwe: (平鋏)、
 /t'e:/ hataʔutt'e: (肩車)
 /te:/ te:paku (白糖)、pute: (額)、su:te: (節約)、ma:raʔute: (毬つき)、
 /de/ ga:deN (~まで)
 /de:/ de:kuni (大根)、ʔade: (味見)、
 /pe:/ pe: (灰)、pe: (蠅)、pe: (南)、pe:ku (早く)、tuNpe: (唾)、

/ʔʔ/

/ʔi/ ʔiru (魚)、ʔiru (色)、ʔibi (蝦)、ʔici (石)、ʔitci (息)、ʔita (板)、ʔisa: (鳥賊)、ʔinu (蓑)、ʔina (蝮)、ʔiNni (胸)、ʔiNdu (溝)、ʔiNdaha:N (苦い)、
 ʔiNdanaba: (苦菜)、ʔitei (雲脂)、ʔiNdzi (棘)、ʔidzijaN (出ない)、ʔiNnukwa (犬)、
 ʔidzi:ba (出れば)、ʔino: (礁湖)、ʔiri (西)、ʔisunahaN (忙しい)、ʔisa: (医者)、
 ʔikk'uN (炒る)、ʔinabime: (碎米)、ta:ʔiru (鮒)、
 /ʔe/ʔeheraku (少なく)、
 /ʔa/ ʔani (蟻)、ʔak'u (灰汁)、ʔada (痣)、ʔatu (跡)、ʔasa (麻)、ʔaki (秋)、ʔami (網)、
 ʔami (雨)、ʔawa (粟)、ʔaci (汗)、ʔara (綾)、ʔaka: (赤)、ʔadza (痣)、
 ʔada (腫)、ʔadani (アダン)、ʔaha (垢)、ʔahagai (灯)、ʔasa: (明日)、
 ʔagi (陸)、ʔake:da: (蜻蛉)、ʔasagani (ヤシガニ)、ʔamamu (ヤドカリ)、
 ʔadzimi (杵)、ʔatabita (蛙)、ʔapo:pu (ヤンマ)、ʔabu:ci (蛙)、ʔaeida (下駄)、
 ʔakk'a: (姉)、ʔahagwa: (赤子)、ʔade: (味見)、
 /ʔo/ ʔoku (奥)
 /ʔu/ ʔui (上)、ʔui (瓜)、ʔuibi (指)、ʔuei (牛)、ʔuei (臼)、ʔut'a (歌)、ʔumi (海)、
 ʔutei (内)、ʔumu (芋)、ʔut'u (音)、ʔura (裏)、ʔura (汝)、ʔuhi (桶)、
 ʔuma (馬)、ʔuni (鬼)、ʔudzi: (腕)、ʔunadzi (鰻)、ʔuguma (胡麻)、ʔupuha:N (多い)、
 ʔuru (珊瑚)、ʔutte: (一昨日)、ʔuridzuN (うりずん)、ʔuke:me: (粥)、
 mo:ʔui (アカウリ)、ma:ʔuta (猫)、ʔuNkasuN (動かす)、
 /ʔi:/ ʔi:gutci (入口)、
 /ʔe:/ ʔe: (藍)、ʔe:ti (和えて)、ʔe:ruN (和える)、
 /ʔa:/ ʔa: (泡)、ʔa:sa (アオサ)、
 /ʔo:/ ʔo:pa (菜)、ʔo: (はい、応答詞)
 /ʔu:/ —

/ʔ'/

/ʔ'i/ judai (涎)、mai (尻)、saʔui (咳)、pugui (辜丸)、nai (実)、kusui (菓)、ʔui (瓜)、
 eibui (冬瓜)、mo:ʔui (アカウリ)、tui (鶏)、ʔahagai (灯)、haNnai (雷)、
 tunai (隣)、kuimi (暦)、t'ui (一人)、t'ai (二人)、pakai (秤)、mahai (椀)、

/ h /

/hi/ hiN (船)、hisa (下)、hikara (力)、hikama (昼後)、hita:N (たくさん)、hitu:
(月)、hittei (ナマコ)、hibuei (煙)、hik'o:ruN (作る)、bahi (箆)、?uhi
(桶)、dahi (竹)、suruhina: (棕櫚縄)、hik'u (アイゴの稚魚)、so:hi (箆)、

/he/ ?eheraku (少なく)、kehera (削り屑)、

/ha/ hadzi (風)、hani (金)、hama (釜)、hami (甕)、hatei (垣)、habi (紙)、hagi
(陰)、hasa (笠)、haei (糟)、hat'a (肩)、hadu (角)、hada (臭い)、haradzi
(頭髪)、hara (茅)、hateitei (ウニ)、hagami (鶏冠)、haNnai (雷)、taha
(鷹)、naha (中)、junaha (夜中)、?aha (垢)、?ahagai (灯)、mahai (椀)、
?ahagwa: (赤子)、puha (外)、mutseikahaN (難しい)、tsu:haN (強い)、ha:hasuN
(乾かす)、

/ho/ —

/hu/ φui (声)、φubi (壁)、φuei (腰)、φumi (米)、φuba: (クバ)、φudu (去年)、
φuga (卵)、φutabi (今年)、φubutei (燻製)、paφu (箱)、muφu (婿)、taφu
(蛸)、saφui (咳)、kuφunutei (九つ)

/hi:/ hi: (毛)、hi: (木)、?uhi: (ゑけり)、kahi:N (架ける)、

/he:/ he:na (腕)、he:sima (裏返し)

/ha:/ ha: (皮)、ha:ra (川)、ha:rakuN (乾く)、ha:bui (蝙蝠)、?upuha:N (多い)、
ha:padza (カワハギ)、ha:hasuN (乾かす)、

/ho:/ ho:dzi (麴)、k'uruho:dzi (黒麴)、kaho: (ぼろ布)、kusugaho: (おしめ)、

/hu:/ φu: (粉)、

/hwa/ juφa (床)、

/ k' /

/k'i/ k'inu: (昨日)、k'iN (衣)、(sak'i (酒)、

/k'u/ k'udzi (釘)、k'udzi (葛・澱粉)、k'ubi (首)、k'ura (鞍)、k'ura (倉)、k'uni
(国)、k'umu (雲)、k'umuN (履く)、k'ure:N (喰う)、k'uruho:dzi (黒麴)、
hik'u (アイゴの稚魚)、suk'u (底)、?ak'u (灰汁)、?ikk'uN (炒る)、

/k'wa/ k'wattei: (ご馳走)

/k'a:/ t'su:k'a: (急須)、?akk'a: (姉)、

/k'o:/ hik'o:ruN (作る)、

/k'wa:/ k'wa: (子)、k'wa:maga (子孫)、

/ k /

/ki/ ?aki (秋)、

/ke/ kehera (削り屑)、gekkeN (片足飛び遊び)、

/ka/ kami (神)、katsu: (鯉)、kahi:N (架ける)、eika (柄)、nuka (糠)、hikara
(力)、hikama (昼後)、mukadzi (百足)、mutseikahaN (難しい)、pakama (袴)、
pakai (秤)、kueikabu (切干大根)、?uNkasuN (動かす)、

/ko/ komagi: (シロミズキ)、

/ku/ kusa (草)、kutu (事)、kubu (谷)、kusu (糞)、kusui (薬)、kutu: (琴)、kunubu (九年母)、kutei (口)、kuimi (暦)、kutei (東風)、kurajama (雀)、kuNda (脹脛)、kuɸujaki (胸焼け)、kuɸunutei (九つ) kudaNso: (フダンソウ)、juku (横)、ʔoku (奥) de:kuni (大根)、pukugi (フクギ)、pe:ku (早く)、ʔeheraku (少なく)、makura (枕)、kucikabu (切干大根)、

/kwa/ naNkwaN (南瓜)、ʔiNnukwa (犬)、

/ki:/ ka:ki: (指切り)

/ke:/ ʔake:da: (蜻蛉)、ʔuke:me: (粥)、

/ka:/ ʔaka: (赤)、ka:mi (亀)、

/ko:/ko:sa: (げんこつ)、ko:re: (唐辛子)、ko:dza: (霧)、ko:gwa:ei (落雁)、dziko: (ととも)、

/ku:/ku:teiba: (蓬)、ku:ridzato: (氷砂糖)、ku:gu:tu (濃く)、ku:be:haN (風味がある)、

/kwe:/ kwe: (鋏)、kwe:to:N (肥えている)、

/kwa:/ kwa:gi (桑)、kwa:ei (菓子)、saraNkwa: (小皿)、

/ g /

/gi/ gisaei (風の卵)、eigi (杉)、hagi (陰)、sa:gi (白髪)、kwa:gi (桑)、ʔagi (陸)、pukugi (フクギ)、p'a:gi (竹籠)、ma:gi (土産)、

/ge/ gekkeN (片足飛び遊び)、pisageNma:ra (片足飛び)、

/ga/ gani (蟹)、gamaku (腰)、gadami (蚊)、gata (飛蝗)、garaei (鳥)、gaei (飢饉)、ɸuga (卵)、ʔasagani (ヤシガニ)、hagami (鶏冠)、ʔmaga (孫)、kusugaho: (おしめ)、

/go/ —

/gu/ guNbo: (牛蒡)、piguru (垢)、pugui (睾丸)、ʔuguma (胡麻)、ʔi:gutei (入口)、teimagu (蹄)、gusumita (軟骨)、do:gu (上戸)、dzo:gu (漏斗)

/gwa/ niNgwatei (二月)、

/gi:/ kaegi: (檜木、オキナワウラジロガシ)

/ge:/ ge: (貝)、ʔupuge: (胃)、mage: (おたま)、sa:ru:ge: (螻蛄)、duge:taN (転んだ)、teige:N (違う)、eirumage: (杓子)、

/ga:/ ga:deN (~まで)、ga:dzu: (強情)、ga:re: (がなり合い)、

/go:/go:ja: (苦瓜)、go:ru:ma:rae: (独楽回し)、ʔugo: (クワズイモ)、pago:haN (汚い)、

/gu:/ku:gu:tu (濃く)、

/gwe:/ p'a:gwe: (平鋏)、

/gwa:/ ko:gwa:ei (落雁)、ʔahagwa: (赤子)、

/gjo:/ niNgjo: (人形)、

/ t' /

/t'a/ t'ai (二人)、t'aNme: (祖父)、ʔut'a (歌)、pat'a (旗)、hat'a (肩)、wat'a (腹)、

/t'u/ t'u: (人)、t'ui (一人)、t'ubi (帯)、ʔt'unabi (一鍋)、ut'u (音)、

/t'e:/ hataʔutt'e: (肩車)

/t'a:/t'a:t'u: (双子)、t'a:t'ei (二つ)、t'a: (ずっと)

/t'u:/t'a:t'u: (双子)、

/t/

/ti/ tida (太陽)、tiN (天)、tiru (籠)、

/ta/ taha (鷹)、taN (炭)、tama (玉)、tatei (滝)、taφu (蛸)、tatuN (立つ)、tabi (足袋)、tatei (臍臓)、puta (蓋)、hata (肩)、wata (綿)、wat'a (腹)、ʔita (板)、tatei (縦)、ma:ʔuta (猫)、ʔatabita (蛙)、paNta (崖)、φutabi (今年)、taNpuru: (チャンプル)、

/to/ dottoi (象皮病)、

/tu/ tura (虎)、tui (鶏)、tuei (年)、tui (鶏)、tututei (蘇鉄)、tuNpe: (唾)、tuda:kuN (飛んでいる)、tunai (隣)、ʔatu (跡)、kutu (事)、nibutu (できもの)、pitu (海豚)、tatuN (立つ)、eitū (苞)、

/ti:/ti: (手)、

/te:/ te:paku (白糖)、pute: (額)、su:te: (節約)、ma:raʔute: (毬つき)、

/ta:/ ta: (田)、ta:suN (取らせる)、hita:N (たくさん)、nata:kuN (鳴いている)、ta:ʔiru (鮒)、

/to:/ to:pu (豆腐)、gatto: (らっきょう)、sato: (砂糖)、ku:ridzato: (氷砂糖)、sato:N (咲いている)、nito:N (似ている)、puto:N (吹いている)、mutto:N (持っている)、kwe:to:N (肥えている)、

/tu:/ kutu: (琴)、hitu: (月)、

/d/

/di/ —

/de/ ga:deN (～まで)

/da/ dahi (竹)、daNdaN (蟬)、daremi (晩酌)、daci (出汁)、ʔada (痣)、juda (枝)、hada (臭い)、nada (涙)、kuNda (踵)、judai (涎)、tida (太陽)、ʔadani (アダン)、mada (烏賊墨)、gadami (蚊)、p'ida (東)、p'idai (左)、p'idara: (左利き)、ʔaeida (下駄)、hadama: (風車)、

/do/ dottoi (象皮病)、

/du/ duru (泥)、duge:taN (転んだ)、hadu (角)、ʔadu (踵)、ʔiNdu (溝)、φudu (去年)、p'idui (寒さ)、

/di:/ —

/de:/ de:kuni (大根)、ʔade: (味見)、

/da:/ da: (どこ)、pada: (肌)、ʔake:da: (蜻蛉)、kada:kuN (食べている)、tuda:kuN (飛んでいる)、

/do:/ do:eitei (料理)、so:do:ma (急所)、do: (～よ、終助詞)、do:gu (上戸)、eimado:pu (島豆腐)、

/du:/ du: (尾)、du: (体)、du:ei: (雑炊)、du:baku (重箱)、

/ p' /

/p'i/ p'idzi (髭)、p'idzi (肘)、p'iru (昼)、p'ima (暇)、p'iNp'i: (鷹)、p'idai (左)、
p'idara: (左利き)、p'ida (東)、p'idui (寒さ)、
/p'a/ p'app'a: (祖母)、p'ateip'atei (パチパチ、燃えるさま)、
/p'u/ p'uru: (冬)、
/p'i:/p'i: (日)、p'i: (火)、p'i: (樋)、p'i: (屁)、p'i:da: (山羊)、p'iNp'i: (鷹)、
/p'a:/ p'a: (坂)、p'a:ri (旱魃)、p'a:ta: (平ら)、p'a:gwe: (平鋏)、p'app'a: (祖母)、
p'a:mi (ヒメハブ)、p'a:gi (竹籠)、
/p'u:/ p'u:ruN (拾う)

/ p /

/pi/pisa (足)、pija (へら)、pitu (海豚)、piru (大蒜)、
/pa/ paφu (箱)、pani (羽)、pai (針)、paci (橋)、pat'a (旗)、pama (浜)、pana
(鼻)、pana (花)、pada: (肌)、paci (蜂)、paru (畑)、paci: (戸)、paNta
(崖)、?o:pa (菜)、pakama (袴)、patteibakai (百斤秤)、pakai (秤)、te:paku
(白糖)、
/pu/ puta (蓋)、puni (骨)、puçi (星)、pute: (額)、pugui (辜丸)、pukugi (フク
ギ)、puka (鱻)、puto:N (吹いている)、puha (外)、?upuha:N (多い)、?apo:pu
(ヤンマ)、puru:ruN (震える)、taNpuru: (チャンプル)、eimado:pu (島豆腐)、
/pi:/ pi: (屁)、
/pe:/ pe: (灰)、pe: (蠅)、pe: (南)、pe:ku (早く)、tuNpe: (唾)、
/pa:/ pa: (齒)、pa: (刃)、pa: (葉)、pa:re: (駆けっこ)、
/po:/po:tu (鳩)、?apo:pu (ヤンマ)、?ipo:na (妙な)、po:mi (トコブシ)、
/pu:/pu: (帆)、pu: (穂)、pusu (臍)、pu:ka (風船)、

/ b /

/bi/ ?ibi (蝦)、k'ubi (首)、habi (紙)、nabi (鍋)、φubi (壁)、warabi (子ども)、
t'ubi (帯)、?uibi (指)、teibija (菰)、nasubi (苺)、?atabita (蛙)、φutabi (今
年)、tabi (足袋)、?inabime: (碎米)、
/be/ beN (～ばかり)
/ba/ bahi (箎)、baNçiru: (グァバ)、suba (側)、çiba (舌)、naba (茸)、pattçibakai
(百斤秤)、du:baku (重箱)、
/bo/ —
/bu/ kubu (谷)、teiburu (頭)、çibui (冬瓜)、hibuei (煙)、kunubu (九年母)、?abuei
(畦)、kucikabu (切干大根)、
/bi:/ bi:N (坐る)
/be:/ nabe:ra (糸瓜)、teirube: (酢)、ku:be:haN (風味がある)、
/ba:/ φuba: (クバ)、ku:teiba: (蓬)、?iNdanaba: (苦菜)、
/bo:/bo: (棒)、bo:dziei (ヒレ肉)、guNbo: (牛蒡)、
/bu:/ —

/ t's /

/t'si/ t'eija (顔)、t'eiru (露)、t'eiru (弦)、t'eimu (肝)、t'eiNēi (膝)、
 /t'se/ —
 /t'sa/ —
 /t'so/ —
 /t'su/ —
 /t'si:/ t'ei: (血)、t'ei: (乳)、te'i:t'ei (一つ)、ʔutt'ei: (一昨日)、mutt'ei: (餅)、
 /t'se:/ —
 /t'sa:/ t'ea: (茶)
 /t'so:/ —
 /t'su:/ t'su:k'a: (急須)、

/ ts /

/tsi/ teiri (塵)、teimi (爪)、teinu (角)、t'eija (顔)、teiburu (頭)、teibija (葦)、
 teiNnaNee: (蝸牛)、teirube: (酢)、teige:N (違う)、teimagu (蹄)、mitei (道)、
 kutēi (口)、ʔutei (内)、kutēi (東風)、ʔi:gutei (入口)、hatei (垣)、satei (先)、
 tatei (滝)、ʔitei (息)、matei (松)、mateidzi (旋毛)、natei (夏)、tatei (縦)、
 ʔasatei (明後日)、ʔitei (雲脂)、nutei (命)、ku:teiba: (蓬)、tututei (蘇鉄)、
 hateitei (ウニ)、hitteitēi (ナマコ)、muteikahaN (難しい)、wa:eitei (天気)、
 me:nitei (毎日)、misunatei (一昨年)、niNgwatei (二月)、tatei (臍臓)、ʔieitei
 (五つ)、kuϕunutei (九つ)、
 /tse/ —
 /tσα/ —
 /tso/ —
 /tsu/ —
 /tsi:/ k'watteitēi: (ご馳走)
 /tse:/ —
 /tσα:/ tea: (茶)、
 /tso:/ teo:teo: (蝶)、nateo:ra (海人草)、
 /tsu:/ katsu: (鰹)、tsu:haN (強い)、

/ dz /

/dzi/ dziN (膳)、dziN (銭)、dziko: (とても)、dziriri (茶筒)、hadzi (風)、midzi
 (水)、k'udzi (釘)、mudzi (麦)、p'idzi (髭)、sudzi (袖)、nudzi (喉)、haradzi
 (頭髪)、mimidzi (ミミズ)、mateidzi (旋毛)、ʔiNdzi (棘)、ʔunadzi (鰻)、
 ho:dzi (麴)、ʔadzimi (杵)、mukadzi (百足)、sadzi (手拭)、bo:dziei (ヒレ肉)
 sudziru (キビナゴ)、ʔidzijaN (出ない)、
 /dze/ —
 /dza/ʔadza (痣)、ha:padza (カワハギ)、kadzai (飾り)、kudzara (小皿)、ku:ridzato: (氷
 砂糖)、

/dzo/ ——

/dzu/ ?uridzuN (うりずん)、?uidzune: (瓜の和え物)、

/dzi:/ dzi: (地面)、dzi:ʔaNda (脳)、?udzi: (腕)、nidzi: (右)、ʔidzi:ba (出れば)、

/dze:/ ——

/dza:/ ko:dza: (霧)、

/dzo:/ dzo:ri (草履)、dzo:gu (漏斗)、ti:dzo:hi (下げ箆)、

/dzu:/ ga:dzu: (強情)、

/s/

/si/ eika (柄)、eima (島)、eina (砂)、eiba (舌)、eibui (冬瓜)、eigi (杉)、eiru (汁)、?uei (牛)、?iei (石)、puei (星)、φuei (腰)、paei (橋)、tuei (年)、daei (出汁)、muei (虫)、?uei (臼)、haei (糟)、?aei (汗)、?aeida (下駄)、paei (蜂)、?ieitei (五つ)、gaei (飢饉)、baN̄eiru: (グァバ)、gisaei (虱の卵)、garaei (烏)、wa:eitei (天気)、hibuei (煙)、?abuei (蛙)、niei (北)、he:eima (裏返し)、ko:gwa:ei (落雁)、eitu (苞)、eirumage: (杓子)、

/se/ ——

/sa/ sak'i (酒)、sara (皿)、satei (先)、saφui (咳)、sadzi (手拭)、pisa (足)、hisa (下)、?asa (麻)、kusa (草)、hasa (笠)、misa (土)、ʔa:sa (アオサ)、?asagani (ヤシガニ) ?asatei (明後日)、gisaei (虱の卵)、na:sa (翌日)、

/so/suso (裾)、

/su/ suso (裾)、suk'u (底) sudi (袖)、sumi (墨)、sura (梢)、suba (側)、suruhina: (棕櫚縄)、susō: (裾)、sudzi (袖)、kusu (糞)、misu (味噌)、masu (塩)、pusu (臍)、kusui (薬)、nasubi (苺)、?weNsu (鼠)、misunatei (一昨年)、ja:nimisu (再来年)、?isunahaN (忙しい)、sura:ku (すっかり)、

/si:/ ei: (巢)、ei:gumi (玄米)、?aei: (昼食)、paei: (戸)、du:ei: (雑炊)、

/se:/ teiNnaNee: (蝸牛)、go:ru:ma:raee: (独楽回し)、

/sa:/ sa:ru (猿)、sa:gi (白髪)、sa:mi (虱)、sa:ju: (白湯)、ko:sa: (げんこつ)、ʔasa: (明日)、?isa: (烏賊)、sa:ru:ge: (蠶螂)、masa:N (美味しい)、?isa: (医者)、

/so:/ so: (竿)、so:hi (箆)、jaso: (灸)、susō: (裾)、

/su:/ su: (今日)、su: (潮)、su:misu (白味噌)、nasu: (茄子)、su:te: (節約)、su:dziki (塩漬け)、

/ʔn/

/ʔna/ʔnaNma (今)、

/n/

/ni/ niei (北)、nito:N (似ている)、nidzi: (右)、k'uni (国)、?uni (鬼)、gani (蟹)、?ani (蟻)、hani (金)、puni (骨)、pani (羽)、?iNni (胸)、de:kuni (大根)、?adani (アダン)、?asagani (ヤシガニ)、me:nitei (毎日)、ja:ni (来年)、ja:nimisu (再来年)、niNgwatei (二月)、

/ne/ —

/na/ naha (中)、nabi (鍋)、nami (波)、natei (夏)、nada (涙)、nai (実)、naba (茸)、naNkwaN (南瓜)、nasubi (苺)、nabe:ra (糸瓜)、nata:kuN (鳴いている)、pana (鼻)、pana (花)、eina (砂)、tunai (隣)、he:na (腕)、?ina (蝮)、?unadzi (鰻)、jo:Nna (ゆっくり)、teiNnaNee: (蝸牛)、haNnai (雷)、misunatei (一昨年)、?isunahaN (忙しい)、junaha (夜中)、?ipo:na (妙な)、nasu: (茄子)、

/no/ —

/nu/ numi (蚤)、numi (鑿)、nuka (糠)、nunu (布)、nutci (命)、nudzi (喉)、teinu (角)、?inu (蓑)、kunubu (九年母)、?iNnukwa (犬)、

/ni:/ ni: (荷)、ni: (根)、

/ne:/ ne: (稲、苗)、ne:N (無い)、ne: (地震)、ne: (~に)、jo:ne: (宵)、?uidzune: (瓜の和え物)

/na:/ na: (名)、na: (縄)、na: (もう)、na:sa (翌日)、suruhina: (棕櫚縄)、

/no:/ ?ino: (礁湖)、

/nu:/ nu: (何)、k'inu: (昨日)、

/?m/

/?ma/ ?maga (孫)、

/ m /

/mi/ mimi (耳)、mimidzi (ミミズ)、misa (土)、misu (味噌)、midzi (水)、mitei (道)、numi (蚤)、mami (豆)、?umi (海)、?ami (網)、kami (神)、sumi (墨)、nami (波)、numi (鑿)、jumi (嫁)、teimi (爪)、hami (甕)、?ami (雨)、?umi (米)、ka:mi (亀)、?adzimi (杵)、gadami (蚊)、hagami (鶏冠)、sa:mi (虱)、misunatei (一昨年)、ja:nimisu (再来年)、kuimi (暦)、

/me/ —

/ma/ mami (豆)、masu (塩)、matei (松)、maju: (眉)、mai (尻)、mateidzi (旋毛)、mada (烏賊墨)、makura (枕)、masa:N (美味しい)、makabi (嘘)、mahai (腕)、hama (釜)、pama (浜)、?uma (馬)、eima (島)、jama (山)、tama (玉)、p'ima (暇)、gamaku (腰)、?uguma (胡麻)、?amamu (ヤドカリ)、kurajama (雀)、?naNma (今)、hikama (昼後)、pakama (袴)、he:eima (裏返し)

/mo/ —

/mu/ mumu (腿)、mumu (桃)、muφu (婿)、mudzi (麦)、muei (虫)、mura (村)、mumu (桃)、muttei: (餅)、mukadzi (百足)、mutto:N (持っている)、k'umu (雲)、?umu (芋)、teimu (肝)、muteikahaN (難しい)、?amamu (ヤドカリ)、

/mi:/mi: (実)、mi: (目)、mi: (身)、mi:jaN (見えない)、

/me:/ me: (前)、me: (稲)、me:bi (真似)、me:nitei (毎日)、jaNme: (庭)、jaNme: (病)、?uke:me: (粥)、?inabime: (碎米)、

/ma:/ ma:gi (土産)、ma:?uta (猫)、ma:ra?ute: (毬つき)、hadama: (風車)、

/mo:/ mo: (藻)、mo: (野)、mo:ʔui (アカウリ)、mo:suN (燃やす)、
/mu:/ mu:tei (六つ)、

/r/

/ri/ teiri (塵) ʔiri (西)、ʔuridzuN (うりずん)、p'a:ri (旱魃)、

/re/ daremi (晩酌)、ma:reppa (遊戯名)、

/ra/ sara (皿)、tura (虎)、k'ura (鞍)、k'ura (倉)、ʔara (綾)、hara (茅)、teira
(面)、wara (藁)、mura (村)、sura (梢)、ʔura (裏)、ʔura (汝)、warabi (子ど
も)、haradzi (頭髪)、hikara (力)、nabe:ra (糸瓜)、kurajama (雀)、garaei
(烏)、makura (枕)、nateo:ra (海人草)、go:ru:ma:rae: (独楽回し)、

/ro/ —

/ru/ ʔiru (魚)、teiru (露)、ʔiru (色)、tziru (弦)、p'iru (昼)、juru (夜)、duru
(泥)、sa:ru (猿)、eiru (汁)、k'uruho:dzi (黒麴)、paru (畑)、piru (大蒜)、
teiburu (頭)、piguru (垢)、suruhina: (棕櫚縄)、ʔuru (珊瑚)、teirube: (酢)、
eirumage: (杓子)、ta:ʔiru (鮒)、

/ri:/ hakuri:N (隠れる)、

/re:/ ko:re: (唐辛子)、pa:re: (駆けっこ)、ʔibure: (ものもらい)、k'ure:N (喰う)、
ga:re: (かなり合い)、

/ra:/ p'idara: (左利き)、sura:ku (すっかり)、

/ro:/ —

/ru:/ p'uru: (冬)、baNciru: (グアバ)、sa:ru:ge: (蟻螂)、taNpuru: (チャンプル)、
go:ru:ma:rae: (独楽回し)、

/ʔj/

/ʔje/ —

/ʔja/ —

/ʔjo/ —

/ʔju/ —

/ʔje:/ —

/ʔja:/ —

/ʔjo:/ —

/ʔju:/ —

/j/

/je/ —

/ja/ jama (山)、jaNme: (庭)、jaNme: (病)、jaso: (灸)、t'eija (顔)、pija (へら)、
teibija (葦)、ʔidzijaN (出ない)、mi:jaN (見えない)、kurajama (雀)、kukujaki
(胸焼け)、ʔibija (しゃもじ)、

/jo/ —

/ju/ juɸa (床)、juru (夜)、juku (横)、jumi (嫁)、juda (枝)、judai (涎)、junaha (夜中)、

/je:/ —

/ja:/ ja: (矢)、ja: (家)、ja:ni (来年)、ja:nimisu (再来年)、go:ja: (苦瓜)、

/jo:/ jo:ne: (宵)、jo:Nna (ゆっくり)、jo:ka (~より)、

/ju:/ ju: (世)、ju: (湯)、ju: (夜)、maju: (眉)、sa:ju: (白湯)、

/ʔw/

/ʔwi/ —

/ʔwe/ ʔweNsu (鼠)、

/ʔwa/ —

/ʔwo/ —

/ʔwi:/ —

/ʔwe:/ —

/ʔwa:/ʔwa: (豚)、ʔwa:ei (豚肉)、

/ʔwo:/ —

/w/

/wi/ —

/we/ —

/wa/ wat'a (腹)、wara (藁)、wata (綿)、ʔawa (粟)、warabi (子ども)、teawaki (茶請け)

/wo/ —

/wi:/ —

/we:/ —

/wa:/ wa: (私の)、wa:citei (天気)、

3 国頭村奥方言の音節一覧

母音 子音	i	e	a	o	u	i:	e:	a:	o:	u:
無し	i	e	a	o	u	i:	e:	a:	o:	u:
'	'i	—	—	'o	'u	'i:	—	—	'o:	'u:
h	hi	he	ha	ho	hu	hi:	he:	ha:	ho:	hu:
k'	k'i	k'e	k'a	k'o	k'u	k'i:	k'e:	k'a:	—	—
k'w	—	k'we	k'wa	—	—	—	k'we:	k'wa:	—	—
k	ki	ke	ka	ko	ku	ki:	ke:	ka:	ko:	ku:
kw	—	kwe	kwa	—	—	—	kwe:	kwa:	—	—
g	gi	ge	ga	go	gu	gi:	ge:	ga:	go:	gu:
gw	—	gwe	gwa	—	—	—	gwe:	gwa:	—	—
t'	t'i	t'e	t'a	t'o	t'u	t'i:	t'e:	t'a:	t'o:	t'u:
t	ti	te	ta	to	tu	ti:	te:	ta:	to:	tu:
d	di	de	da	do	du	di:	de:	da:	do:	du:
p'	p'i	p'e	p'a	p'o	p'u	p'i:	p'e:	p'a:	p'o:	p'u:
p	pi	pe	pa	po	pu	pi:	pe:	pa:	po:	pu:
b	bi	be	ba	bo	bu	bi:	be:	ba:	bo:	bu:
t's	t'si	t'se	t'sa	t'so	t'su	t'si:	t'se:	t'sa:	t'so:	t'su:
ts	tsi	tse	tsa	tso	tsu	tsi:	tse:	tsa:	tso:	tsu:
dz	dzi	dze	dza	dzo	dzu	dzi:	dze:	dza:	dzo:	dzu:
s	si	se	sa	so	su	si:	se:	sa:	so:	su:
n	ni	ne	na	no	nu	ni:	ne:	na:	no:	nu:
ʔm	—	—	ʔma	—	—	—	—	—	—	—
m	mi	me	ma	mo	mu	mi:	me:	ma:	mo:	mu:
r	ri	re	ra	ro	ru	ri:	re:	ra:	ro:	ru:
ʔj	—	ʔje	ʔja	ʔjo	ʔju	—	ʔje:	ʔja:	ʔjo:	ʔju:
j	—	—	ja	jo	ju	—	je:	ja:	jo:	ju:
ʔw	ʔwi	ʔwe	ʔwa	ʔwo	—	ʔwi:	ʔwe:	ʔwa:	ʔwo:	—
w	wi	we	wa	wo	—	wi:	we:	wa:	wo:	—

沖縄県国頭村奥方言の名詞の格

沖縄県国頭村奥方言の名詞の格

狩俣繁久・島袋幸子（琉球大学）

1 はじめに

国頭村奥集落では、名詞の格体系の概要を把握するための調査を6月3日～4日、7月2日～3日、9月23日～25日、10月8日～9日、12月24日～26日に実施した。名詞の格体系の概要を把握するための調査と民俗語彙の調査臨地調査は、主として狩俣繁久と狩俣幸子が行なった。

2 格ととりたて

名詞は、文のなかでの構文論的な機能や構文論的な意味をあらわしわけけるために、さまざまに形をかえます。名詞の語形変化のことを「曲用」という。琉球語の名詞は、日本語の名詞とおなじく助詞^{注1)}とよばれる接辞をくっつけて、それをとりかえることによって形をかえる。

2.1. 格

名詞は、文のなかで構文論的な機能をはたしながら、自らのあらわすことがら他の単語のあらわすことがらとのあいだにあるさまざまな関係をあらわしたり、現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手の立場からあらわしたりする。名詞が文中の他の単語に対することがら上の関係をあらわす文法的なカテゴリーを「格」という^{注2)}。格をあらわすためのさまざまな文法的な形である「格の形」は、名詞のうしろに格助詞をくっつけてあらわす。格助詞のつかない名詞の形も、ほかの格の形と対立しながら、格の体系のメンバーとして、文のなかでの他の単語に対することがら上の関係をあらわしたり、文のなかでの機能をあらわしたりする。

国頭村奥方言には、ga（が）、nu（の）、ne:（に）、ni（に）、ne:ti（に）、Nkai（へ、に）、dzi（で）、ei:（で）、hara（から）、Nta:na:（まで）、ga:de:（まで）、tu（と）、jo:kaN（より）の格助詞を含む格形式と格助詞を含まないハダカ格の形式がある。

¹ 助詞は、名詞や動詞、形容詞などの品詞とはことなり、助詞単独で文を直接に構成する単位となることができず、名詞や動詞、形容詞の文法的な形の構成要素となつてはたらく形態素である。

² 平凡社世界大百科事典の「格」の項にはつぎのように記述されている。

「名詞・代名詞などの、文中における他の語との関係。それがどのように表わされるかは言語の構造によって異なる。日本語では、名詞に格による変化がなく、<ガ、ノ、ニ、ヲ、デ、ト、へ、カラ、ヨリ>などの、いわゆる格助詞で<格>が表示される」（三根谷徹 1981）。

2.2. とりたて

文のなかにはあらわされているものごとが、現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手の立場からあらわしわかる文法的なカテゴリーを「とりたて」という。名詞も「とりたて助詞」をともなってそこに表現されているできごとが現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手のたちばかりからあらわしわかる。名詞のばあい、連用的な格が「とりたての形」を分化させている。具体的にいうと、次の例文がしめすように名詞の格の形のうしろにとりたて助詞をつけてあらわれる。とりたて助詞は、格助詞のさらにうしろにくっつけることができる。名詞に格助詞がついているとき、係助詞は、その格助詞のうしろにつける。

【表 1】意味面からみた格

∅	対格／主格／属格	ACC／NOM／GEN	accusative／nominative／genitive
ga	主格／属格	NOM／GEN	nominative／genitive
nu	主格／属格	NOM／GEN	nominative／genitive
ne:	与格 1	DAT1	dative
ni	与格 2	DAT2	dative
ne:ti	与格 3	DAT3	dative
Nkai	方向格	ALL	allative
dzi	場所格	LOC	location
ei:	具格	INS	instrumental
hara	奪格	ABL	ablative
Nta:na	目標格 1	LMT1	limitative
:			
ga:de:	目標格 2	LMT2	limitative
tu	共格	COM	comitative
jo:kaN	対比	CMP	comparative

2. ハダカ格

奥方言では格助詞「を」に対応する助詞がなく、他動詞を述語にもつ文の《直接対象》を表す対格専用の形式はなく、ハダカ格の名詞が表す。なお、《直接対象》を表すのはハダカ格の名詞だけである。

1. ?aN midzi-ja numuna. numiba-ja huN midzi numi.

(あの 水は 飲むな。飲むなら この 水を 飲め。)

2. dziro:-ni jamme:-nu kusatui eimija.
(次郎に 庭の 草取りを させよう。)
3. dziro:-ja bo:-ei saburo: p'icidaN.
(次郎は 棒で 三郎を たたいた。)
4. dziro:-ga duge:ti para-Nkai teiburu ?utta:N.
(次郎が 転んで 柱に 頭を 打った。)
5. nu: ho:ruNgaja:.
(何を 買おうかな。)
6. kadzuko muN-tu junu kutsu hanako-ne:-N ho:ti ta:ha.
(和子の ものと 同じ 靴を 花子にも 買って やろう。)
7. taro:-ja ?uttu-ne: kwa:ei wahiti ta:taN.
(太郎は 弟に 菓子を 分けて やった。)
8. parito:ru p'i:-ja saburo:-ja ?umi:-dzi ?iru kwa:suN.
(晴れた 日は 三郎は 海で 魚を 釣る。)
9. kinu: mebaru mi:tei kwa:teaN.
(昨日 メバルを 三匹 釣った。)
10. dziro:-ja habi-ei: koinobori hikute:N.
(次郎は 紙で 鯉のぼりを 作ってある。)
11. ?isa-nu t'a:t'aru kusui numiba no:ruNdo:.
(医者の くれた 薬を 飲めば 治るよ。)
12. hanako-ja ?aNma:-ne:ti munu kamahattaN
(花子は 母に ご飯を 食べさせられた。) 食べさせてもらったの訳
13. ?okka:-ga dziN ta:taN.
(母が 金を 呉れた。取らした。)
「母からお金をもらった」の質問に
14. waN-ja su:ta:-ga dziN ta:taN.
(私は 父が 金を 呉れた。取らした?)
「母からお金をもらった」の質問に
15. dziro:-Nkai jamme:-nu kusatui eimija.
(次郎に 庭の 草取りを させよう。)
16. ?uNme:-ga teiburu-ne: sadzi kutte:N.
(祖父が 頭に タオルを しばっている。)
17. waN-ja kinu:-ja eiNbuN jumaNtaN.
(俺は 昨日は 新聞を 読まなかった。)
18. papp'a:-ja nibaNdza-ne: terebe mi:takuNdo:.
(祖母は 二番座で テレビを 見ているよ。)
19. dzikaN-nu ?aihutu godzi-ga:de: terebe mijaja:.
(時間が あるから 五時まで テレビを 見ようね。)
20. ?uNme:-ja hitumiti-hara jama-Nkai mimigui tuiga ?idaN.
(祖父は 朝から 山に キノコを 取りに 行った。)

21. dziro: huN nimutei basutei-ga:de: hatamiti ?idzi turahaNna:.
 (次郎、この 荷物を バス停まで かついで いった くないか。)
22. dziro: huN nimutei basutei-ga:de: hatamiti ?idzi turahaNna:.
 (次郎、この 荷物を バス停まで かついで いった くないか。)

jumibu:suN (弾ける)、jumibu:suN (読める) などの能力可能をあらわす可能動詞が述語になって、ハダカ格の名詞がその《能力の対象》をあらわす例が確認できた。

23. taro:-ja eigo-nu hoN jumibu:suN.
 (太郎は 英語の 本が 読める。)
24. hanako-ja mukaei-hara saNeiN pikibusuN.
 (花子は 昔から 三線が 弾ける。)

ハダカ格の名詞が主格として主語になって動作の《持ち主》を表す例が確認できた。

25. a: ?ami putuhiNdo:.
 (あ、雨が 降ってきたよ。)

ハダカ格の名詞が属格として後続の名詞を限定、修飾する例が確認できた。一人称、二人称、三人称の代名詞や、人をあらわす名詞がある。

26. wa: kutsu-ja da:-ne: ?aiNgaja.
 (おれの 靴は どこに ある。)
27. wasu: odzi-ja saki-N tabaku-N numaNdo:.
 (うちの 祖父は 酒も 煙草も のまないよ。)
28. huN kasa-ja wa: muN daNdo:.
 (その 傘は おれの ものだよ。)
29. ?ura bo:si-ja dziruga.
 (おまえの 帽子は どれだ。)
30. huN huroeiki-ja ?ura muN daNna:.
 (その 風呂敷は おまえの ものか。)
31. kadzuko muN-tu junu kutsu hanako-ne:-N ho:ti ta:ha.
 (和子の ものと同じ 靴を 花子にも 買って やろう。)
32. huN kumimuN-ja taro: muN daNna:.
 (その 履物は 太郎の ものか。)
33. huri-ja ?uttu muN jaru padzi
 (それは 妹の 物 だろう。)

奥方言のハダカ格の空間名詞が移動動詞と組み合わさって《移動する空間》を表す例が確認できた。

34. juru mitei ?akkuru ba:-ja pabu-ne: ki: hikirijo:.
 (夜 道を 歩く ときは ハブに 気を つけるよ。)

kinu: (昨日)、asa: (明日) などの deictic な性質をおびたハダカ格の時間名詞が動作や変化の行われる《時間》を表す例が確認できた。

35. ʔaNma:-ja ʔasa: to:kjo:-Nkai kwa:-ni ʔitte:ga ʔikuNdo:.

(母が 明日 東京に 子に 会いに 行くよ。)

36. kinu: mebaru mi:tei kwa:teaN.

(昨日 メバルを 三匹 釣った。)

ハダカ格の数量名詞が他動詞と組み合わせさって、述語動詞の表す動き客体の数量を限定する例が確認できた。

37. kinu: mebaru mi:tei kwa:teaN.

(昨日 メバルを 三匹 釣った。)

38. wanu-ja ja:tei kwa:taN.

(おれは 八匹 釣った。)

現代日本語で「～に なる」「～に する」という連語には「に格」がつかわれるが、奥方言では、ハダカ格の名詞が動詞 naiN(なる)と組み合わせさって使われる例が確認できた。

39. uttu-ja hudu: teu:ga-nu seNse: nataN.

(妹は 去年 中学の 先生(に) なった。)

慣用句

40. ʔaNma:-N kadze hita:N.

(母も 風邪を ひいた。)

3. ga 格

ga 格の人名詞が主語になって動作や変化の主体、質や特性など、属性のもちぬしなどを表す例が確認できた。

41. ko:teo:ceNci:-ga basu-hara ʔuriti teaN.

(校長先生が バスから おりて きた。)

42. dziro:-ga duge:ti para-Nkai teiburu ʔutta:N.

(次郎が 転んで 柱に 頭を 打った。)

43. ʔuNme:-ga teiburu-ne: sadzi kutte:N.

(祖父が 頭に タオルを しばっている。)

44. waN-ja su:ta:-ga dziN ta:taN.

(私は 父が 金を 呉れた。取らした?) 「父からお金をもらった」の質問に

45. waN-ja ʔaNma:-ga dziN ta:taN.

(私は 母が 金を 呉れた。取らした?) 「母からお金をもらった」の質問に

46. ʔokka:-ga dziN ta:taN.

(母が 金を 呉れた。取らした?) 「母からお金をもらった」の質問に

47. kadzuko-nu udu-ga ja:ui-ne: pusatuN.
 (かず子の 布団が やねに 干されている。)

48. ?aN kwa:-ga dzuNni-nu suramuN.
 (あの むすめがほんとうの 美人だ。)

通常主語を言わないのがふつうの命令文に ga 格の人名詞が現れて動作主を明示的に指定する例が確認できた。

49. ura:-ga jakuba-Nkai ?idu:baja.
 (おまえが 役場に 行け。)

ga 格の名詞が《評価の対象》を表す例が確認できた。

50. teNpura-du macina:. sacimi-du macina:. dziru-ga macijaNga
 (天ぷらが いいか。刺身が いいか。 どれが いいの。)

人の体の部分を表す名詞に格助詞 ga が後接して主語になり、述語とあわさって、全体が述語になって、その部分のもちぬしの人が総主語になる例が確認できた。

51. hanako-ja teira-ga ?aNma-Nkai hikatu nito:N.
 (花子は 顔が 母に よく 似ている。)

4. nu 格

奥方言の nu 格の名詞は主語になることも連体修飾語になることもできる。奥方言のばあい、ga 格の名詞だけでなく、nu 格の名詞も主語としてはたらく。これは現代日本語とは異なる幸喜方言の特徴だが、古典日本語と共通の特徴でもある。

奥方言の nu 格の名詞が主語になる例が確認できた。

52. kuruma-nu wattamikatji tfa:tu, tamasu nugitaN.
 (車が 飛び出して きたので、驚いた。)

53. ?aN jama-ne:ti jamasi-nu uiNdo:.
 (あの 山に イノシシが 居るよ。)

54. tiN-hara su:sadzi-nu tuda:kuN.
 (空を 白鷺が 飛んでいる。)

55. su:tui-nu tuda:kuN.
 (白い鳥が 飛んでいる。)

56. hame:, ami-nu puipadzimitaN.
 (あ、雨が 降り始めた。)

57. ma:uta-nu puha-hara ja:-N ?utci-Nkai ?ittciitt'ado:.
猫が 外から 家の中に入ってきたよ。)

58. dzikaN-nu ?aihutu godzi-ga:de: terebi mijaja:.
 (時間が あるから 五時まで テレビを見ようね。)

奥方言の nu 格の名詞が連体修飾節の主語になる例を確認できた。

59. ami-nu pui ru p'i:-ja saburo:-ja ja:-ne: maNga-beN-du juda:kuru.
 (雨の 降る 日は 三郎は 家で 漫画ばかり 読んでいる。)
60. isa-nu t'a:t'aru kusui numiba no:ruNdo:.
 (医者の くれた 薬を 飲めば 治るよ。)

人の体の部分を表す名詞に格助詞 nu が後接して主語になり、述語とあわさって、全体が述語になって、その部分のもちぬしの人総主語になる例を確認できた。

61. hanako-ja teija-nu ?aNma:-Nkai hikatu nito:N.
 (花子は 顔が 母に よく 似ている。)
62. taro:-ja mi:-nu su:ta:-Nkai hikatu nito:N.
 (太郎は 眼が 父に よく 似ている。)
63. taro:-ja mi:-nu su:ta:-ne: dziko: nito:N.
 (太郎は 眼が 父に よく 似ている。)

nu 格の名詞が属格として後続の名詞を限定、修飾する例を確認できた。ハダカ格の名詞も連体修飾語として名詞を修飾することができるが、ハダカ格のばあい、1 人称、2 人称、の代名詞や親族名詞等の人名詞に限られるのに対して、nu 格の名詞は、制限が無く広く使用できるようである。

64. jakuba-Nkai huma-nu mitci-hara ?ikuci-du ma:ido.
 (役場に そこの 道を 行くのが いいよ。)
65. ?abunahatu mitci-nu suba-hara-ja ?akkuna.
 (危ないから 道の 側は 歩くな。)
66. mitci-nu maNnaha-hara ?attci-ja naraNdo:
 (道の 真ん中を 歩いては いけないよ。)
67. ?uimi-nu posuta:-ja ko:miNkwaN-nu pa:ci:-ne: pate:taNdo:.
 (祭りの ポスターは 公民館の 戸に 貼ってあったよ。)
68. posuta:-ja ko:miNkwaN-nu hubi-ne: pate:taNdo:.
 (祭りの ポスターは 公民館の 壁に 貼ってあったよ。)
69. saki-ja suido:-nu midzi-:ei:-ru hikuiru.
 (酒は 水道の 水で 作るんだ。)
70. taro:-ja ?eigo-nu hoN jumibu:suN.
 (太郎は 英語の 本が 読める。)
71. huN eiNbuN-ja kinu:-nu daru. su:N muN-ja huri daru.
 (その 新聞は 昨日のだ。今日の ものは これだ。)
72. huN eiNbuN-ja kinu:-nu daru. su:N muN-ja huri daru.
 (その 新聞は 昨日のだ。今日の ものは これだ。)

73. kadzuko-nu ʔudu-ga ja:ui-ne: pusatuN.
 (かず子の 布団が やねに 干されている。)

74. dziro:-ja ʔuttu-nu saburo:-tu ʔo:taN.
 (次郎は 弟の 三郎と 喧嘩した。)

75. cinugu-nu ba:-ja papp'a:-ga:deN udutaN.
 (シヌグの ときは 祖母まで 踊った。)

76. waN-ja ʔirabutea:-nu namaei-du kamibusa:N
 (俺は イラブチャーの 刺身が 食いたい。)

5. ne:格

ne: 格の空間名詞が aiN (有る)、uiN (居る) などの存在動詞とむすびついて人やものの存在する《ありか》を表す例が確認できた。

77. wa: kutsu-ja da:-ne: ʔaiNgaja.
 (おれの 靴は どこに あるかなあ。)

78. kudzi-ga:de: taro:-tu komiNkwaN-ne: uitaNdo:.
 (九時まで 太郎と 公民館に 居たよ。)

ne: 格の人名詞が授受動詞、使役動詞と組み合わさって授受や使役の《相手》を表す例が確認できた。

79. taro:-ja ʔuttu-ne: kwa:ei wahiti ta:taN.
 (太郎は 弟に 菓子を 分けて やった。)

80. kadzuko muN-tu junu kutsu hanako--ne:-N ho:ti ta:ha.
 (和子の ものと 同じ 靴を 花子にも 買って やろう。)

81. dziro:-ja ʔuNme:-ne: ʔabiNnadzitei nurata:N.
 (次郎は 祖父に 喋るなって 叱られた。)

82. dziro:-ja gaNmaru-ei: ʔuNme:-ne: nura:taN.
 (次郎は いたずらして 祖父に 叱られた。)

ne: 格の空間名詞が状況語になって動作の行われる《場所》を表す例が確認できた。

83. mit~~ei~~-ne: eo:gakko:nu ko:teo:ceNcei-tu ʔita:taN.
 (道で 小学校の 校長先生と 会った。)

84. papp'a:-ja nibaNdza-ne: terebi mi:takuNdo:.
 (祖母は 二番座で テレビを 見ているよ。)

85. ʔami-nu pui~~ru~~ p'i:-ja saburo:-ja ja:-ne: naNga-beN-du juda:kuru.
 (雨の 降る 日は 三郎は 家で 漫画ばかり 読んでいる。)

86. jodzi-Nta:na basutei-ne: matto:ri.
 (四時まで バス停で 待っている。)

くつつくところ

87. ʔuimi-nu posuta:-ja ko:miNkwaN-nu paɕi:-ne: pate:taNdo:.
 (祭りの ポスターは 公民館の 戸に 貼ってあったよ。)
88. ma:uta-nu puha-hara ja:-N ʔutei-ne: ʔittɕitt'ado:.
 (猫が 外から 家の 中に 入ってきたよ。)
89. ʔuNme:-ga tɕiburu-ne: sadzi kutte:N.
 (祖父が 頭に タオルを しばっている。)

向けられる対象

90. juru mitɕi akkuru ba:-ja pabu-ne: ki: hikirijo:.
 (夜 道を 歩く ときは ハブに 気をつけるよ。)
91. taro:-ja mi:-nu su:ta:-ne: dziko: nito:N.
 (太郎は 眼が 父に よく 似ている。)
92. dziro:-ja ʔami-ne: ʔiNdziti ja:-Nkai ke:titto:N.
 (次郎は 雨に 濡れて 家に 帰ってきている。)
93. kadzuko-nu ʔudu-ga ja:ui-ne: pusatuN.
 (かず子の 布団が やねに 干されている。)

6. ni 格

ni 格の時間名詞が時間の状況語としてはたらいて、文のあらわす出来事の実現する時間を表す例が確認できた。

94. basu-ja p'i:-ni mine:-du ʔaiN-do:.
 (バスは 一日に 三回 ある。)
95. hatɕigatsu-ni ke:ti huiNdo:.
 (八月に 帰って 来るよ。)

ni 格の人名詞は、使役動詞とくみあわさって、使役の《相手》を表す例が確認できた。

96. dziro:-ni jamme:-nu kusatui ɕimi:ja.
 (次郎に 庭の 草取りを させよう。)
97. ʔaNma:-ja ʔasa: to:kjo:-Nkai kwa:-ni ʔitte:ga ʔikuNdo:.
 (母が 明日 東京に 子に 会いに 行くよ。)

7. ne:ti 格

ne:ti 格の空間名詞が存在動詞 uiN (居る) と組み合わせさせて人が存在する《ありか》を表す例が確認できた。

98. ʔaN jama-ne:ti jamaɕi-nu uiNdo.
 (あの 山に イノシシが 居るよ。)

ne:ti 格の人名詞が使役動詞や受身動詞とくみあわさって使役や受身の《相手》をあらわす例が確認できた。

99. hanako-ja ʔaNma:-ne:ti munu kamahattaN
 (花子は 母に ご飯を 食べさせられた。) **食べさせてもらったの訳**

8. Nkai 格

奥方言の Nkai 格の空間名詞が方向性の移動動詞と組み合わせさって、《ゆくさき》を表す例が確認できた。

100. ʔaNma:-ja ʔasa: to:kjo:-Nkai kwa:-ni ʔitte:ga ʔikuNdo:.
 (母が 明日 東京に 子に 会いに 行くよ。)
101. ʔuNme:-ja hitumiti-hara jama-Nkai mimigui tuiga ʔidaN.
 (祖父は 朝から 山に キノコを 取りに 行った。)
102. dziro:-ja ʔami-ne: ʔiNdziti ja:-Nkai ke:titto:N.
 (次郎は 雨に 濡れて 家に 帰ってきている。)
103. taro:-ja hudu-hara to:kjo:-Nkai ʔidoNdo:.
 (太郎は 去年から 東京に 行っているよ。)
104. jakuba-Nkai-ja takuei:-ei ʔikuei-jo:kaN basu-ei ʔikueiru maei jaru.
 (役場には タクシーで 行くより バスで 行くのが いい。)
105. jakuba-Nkai huma-hara ʔikueidu maei:do:
 (役場に ここを 行くのが いいよ。)
106. jakuba-Nkai huma-nu mitei-hara ʔikueidu maei:do:
 (役場に この 道を 行くのが いいよ。)
107. pidu-Nkai eba ʔunu mitei-hara ʔikuei maei:ja:
 (辺戸に なら この 道を 行くのが いいね。)
108. ma:uta-nu puha-hara ja:-N utei-Nkai itteitt'ado:.
 (猫が 外から 家の 中に 入ってきたよ。)
109. ʔura-ga jakuba-Nkai ʔidu:baja.
 (おまえが 役場に 行け。)
110. ʔaNma:-ja mattea-Nkai ho:rimuN si:ga ʔida:N.
 (母は 町に 買い物を しに 行った。)
111. dziro:-ga duge:ti para-Nkai teiburu ʔutta:N.
 (次郎が 転んで 柱に 頭を 打った。)

基準格

112. hanako-ja teija-nu ʔaNma:-Nkai hikatu nito:N.
 (花子は 顔が 母に よく 似ている。)
113. taro:-ja mi:-nu su:ta:-Nkai hikatu nito:N.
 (太郎は 眼が 父に よく 似ている。)

奥方言の *Nkai* 格の人名詞が使役動詞や授受動詞と組み合わせあって、使役や授受の《相手》を表す例が確認できた。

114. *dziro:-Nkai jamme:-nu kusatui eimija.*
 (次郎に 庭の 草取りを させよう。)
115. *taro:-ja ?uttu-Nkai kwa:ei wahiti ta:taN.*
 (太郎は 弟に 菓子を 分けて やった。)

9. *dzi* 格

dzi 格の空間名詞が状況語になって動作の行われる《場所》を表す例が確認できた。

116. *parito:ru p'i:-ja saburo:-ja ?umi:-dzi ?iru kwa:suN.*
 (晴れた 日は 三郎は 海で 魚を 釣る。)

10. *ei*:格

117. *jakuba-Nkai-ja takuei:-ei ?ikuei-jo:kaN basu-ei: ?ikuei-ru maei jaru.*
 (役場には タクシーで 行くより バスで 行くのが いい。)
118. *dziro:-ja habi-ei: koinobori hikute:N.*
 (次郎は 紙で 鯉のぼりを 作ってある。)
119. *dziro:-ja bo:-ei saburo: p'icidaN.*
 (次郎は 棒で 三郎を たたいた。)
120. *saki-ja suido:-nu midzi-ei:-ru hikuiru.*
 (酒は 水道の 水で 作るんだ。)
121. *to:pu-ja to:pumami-ei: hikuiNdo:.*
 (豆腐は 大豆で 作るんだよ。)
122. *niseNeN-ei: hurariNdo:*
 (二千元で 来れるよ。)
123. *hanako-ja kinu:-hara jaNme:-ei: nitto:N.*
 (花子は 昨日から 病気で 寝ている。)

11. *hara* 格

奥方言の *hara* 格の空間名詞が方向性の移動動詞と組み合わせあって、《出発点》を表す例が確認できた。

124. *nagu-hara naha-Nta:na basuteiN-ja ?ieita: suNga.*
 (名護から 那覇まで バス賃は いくら するか。)
125. *ko:teo:ceNci:-ga basu-hara ?uriti teaN.*
 (校長先生が バスから おりて きた。)
126. *ma:uta-nu puha-hara ja:N ?utei-Nkai ?itteitt'ado:.*
 (猫が 外から 家の中に入ってきたよ。)
127. *taro:-ja ?itei to:kjo:-hara ke:-ti huiNga.*
 (太郎は いつ 東京から 帰って くるの。)

奥方言の hara 格の人名詞が受身動詞と組み合わせあって、《受身の相手》を表す例が確認できた。

128. dziro:-ja ʔuNme:-hara ʔabija: suNna-dzitei ʔabijajaN.

(次郎は 祖父から 喋るなって 叱られた。)

129. dziro:-ja ʔuNme:-hara ʔabiNna dzitei nura:taN.

(次郎は 祖父から 喋るなって 叱られた。)

奥方言の hara 格の時間名詞が述語動詞の表す運動や状態の《開始時間》を表す例が確認できた。

130. ʔuNme:-ja hitumiti-hara jama-Nkai mimigui tuiga ʔidaN.

(祖父は 朝から 山に キノコを 取りに 行った。)

131. hanako-ja mukaçi-hara saNciN pikibusaN.

(花子は 昔から 三線が 弾ける。)

132. hanako-ja kinu:-hara jaNme:-ei nitto:N.

(花子は 昨日から 病気で 寝ている。)

133. taro:-ja hudu-hara to:kjo:-Nkai ʔidoNdo:.

(太郎は 去年から 東京に 行っている。)

原料

134. saki-ja humi-hara-du hikuiru.

(酒は 米から 作るんだ。)

奥方言の hara 格の空間名詞が移動動詞と組み合わせあって《移動する空間》を表す例が確認できた。

135. jakuba-Nkai huma-hara ʔikuei-du maçido:

(役場に ここを 行くのが いいよ。)

136. jakuba-Nkai huma-nu mitei-hara ʔikuei-du maçido:

(役場に この 道を 行くのが いいよ。)

137. abunahatu mitei-nu suba-hara -ja ʔakkuna.

(危ないから 道の 側は 歩くな。)

138. mitei-nu maNnaha-hara ʔattei-ja manaraNdo:

(道の 真ん中を 歩いては いけないよ。)

139. pidu-Nkai eba ʔunu mitei-hara ʔikuei maçija:

(辺戸に なら この 道を 行くのが いいね。)

140. tiN-hara su:sadzi-nu tuda:kuN.

(空を 白い鷺が 飛んでいる。)

相手

141. huri-ja da:-hara ho:ti:.
 (それは どこで 買ったの。)
142. huri-ja da: mateija-hara ho:ti:.
 (それは どの 店で 買ったの。)
143. hunu k'iN-ja hune:da to:kjo:-hara niseNeNci ho:taN.
 (その 服は この間 東京で 二千元で 買った。)

1 2. Nta:na 格まで格

144. nagu-hara naha-Nta:na basuteiN-ja ?icita: suNGa.
 (名護から 那覇まで バス賃は いくら するか。)
145. ?aN jaNkwa:-Nta:na: paibe:ku: eija:ja:.
 (あの 小屋まで 駆けっこ しようよ。)

奥方言の Nta:na 格の時間名詞が述語動詞の表す運動や状態の《終了時間》を表す例が確認できた。

146. jodzi-Nta:na basutei-ne: matto:ri.
 (四時まで バス停で 待っている。)

1 3. ga:de:格

奥方言の ga:de:格の時間名詞が述語動詞の表す運動や状態の《終了時間》を表す例が確認できた。

147. dzikaN-nu ?aihutu godzi-ga:de: terebi mijaja:.
 (時間が あるから 五時まで テレビを 見ようね。)
148. godzi--ga:de: taro:-tu ko:miNkwaN-ne: uitaNdo:.
 (五時まで 太郎と 公民館に 居たよ。)
149. kudzi-ga:de: taro:-tu komiNkwaN-ne: uitaNdo:.
 (九時まで 太郎と 公民館に 居たよ。)
150. dziro: huN nimutei basutei-ga:de: hatamiti ?idzi turahaNna:.
 (次郎、この 荷物を バス停まで かついで 行って くないか。)

1 4. tu 格

奥方言の tu 格の人名詞が相互動作を表す動詞と組み合わせさせて《相互動作の相手》を表す例が確認できた。

151. mitci-ne: co:gakko:nu ko:teo:ceNcei-tu ?ita:taN.
 (道で 小学校の 校長先生と 会った。)
152. dziro:-ja ?uttu-nu saburo:-tu ?o:taN.
 (次郎は 弟の 三郎と 喧嘩した。)

153. hanako-ja kadzuko-tu naha ?itahaN.
 (花子は かず子と 仲(が) よい。)

奥方言の tu 格の人名詞と一緒に動作を行なう《仲間》を表す例が確認できた。

154. kudzi-ga:de: taro:-tu komiNkwaN-ne: uitaNdo:.
 (九時まで 太郎と 公民館に 居たよ。)
155. kadzuko muN-tu junu kutsu hanako-ne:-N ho:ti ta:ha.
 (和子の ものと 同じ 靴を 花子にも 買って やろう。)

ならべ

156. kadzuko-tu hanako-ja du:ido:.
 (和子と 花子は 友達だ。)

15. jo:ka 格

157. teNpura-jo:ka-N sacimi-du masa:ru.
 (天ぷらよりも さしみ(が) おいしい。)
158. ta:-jo:ka pudzibe:haN.
誰より 成長が早い。
159. su:-jo:ka-N hado:hataN.
 (今日よりも 風が強かった。)
160. jakuba-Nkai-ja taku:ei:-ei ?iku:ei-jo:ka-N basu-:ei ?iku:ei-ru maci jaru.
 (役場には タクシーで 行くよりも バスで 行くのが いい。)

16. ja のとりたて

奥方言のとりたて助詞 ja は、現代日本語の「は」と同じく、同類のものごととの《対比》と《主題》を表す。ヤの前にくるものごととがとりたてられ、同類のものごととの違いが対比される。

161. hanako-ja teja-nu ?aNma:-Nkai hikatu nito:N.
 (花子は 顔が 母に よく 似ている。)
162. taro:-ja mi:-nu su:ta:-Nkai hikatu nito:N.
 (太郎は 眼が 父に よく 似ている。)
163. taro:-ja mi:-nu su:ta:-ne: dziko: nito:N.
 (太郎は 眼が 父に よく 似ている。)
164. hanako-ja kadzuko-tu naha ?itahaN.
 (花子は かず子と 仲(が) よい。)
165. ?uttu-ja hudu: te:u:ga-nu seNse: nataN.
 (妹は 去年 中学の 先生(に) なった。)

166. papp'a:-ja nibaNdza-ne: terebi mi:takuNdo:.
 (祖母は 二番座で テレビを 見ているよ。)
167. ?aNma:-ja mattɕa-Nkai ho:rimuN si:ga ?ida:N.
 (母は 町に 買い物を しに 行った。)
168. taro:-ja ?eigo-nu hoN jumibu:suN.
 (太郎は 英語の 本が 読める。)
169. dziro:-ja habi-ɕi: koinobori hikute:N.
 (次郎は 紙で 鯉のぼりを 作ってある。)
170. dziro:-ja bo:-ɕi saburo: p'icidaN.
 (次郎は 棒で 三郎を たたいた。)
171. dziro:-ja ?uNme:-kara ?abija: suNna-dzitei ?abijajaN.
 (次郎は 祖父から 喋るなって 叱られた。)
172. dziro:-ja ?uNme:-ne: ?abiNnadzitei nurata:N.
 (次郎は 祖父に 喋るなって 叱られた。)
173. hanako:-ja kinu:-hara jaNme:-ɕi nitto:N.
 (花子は 昨日から 病気で 寝ている。)
174. hanako:-ja ?aNma:-ne:ti munu kamahattaN
 (花子は 母に ご飯を 食べさせられた。) **食べさせてもらったの訳**
175. parito:ru p'i:-ja saburo:-ja ?umi:-dzi ?iru kwa:suN.
 (晴れた 日は 三郎は 海で 魚を 釣る。)
176. parito:ru p'i:-ja saburo:-ja ?umi:-dzi ?iru-beN-du kwa:suru.
 (晴れた 日は 三郎は 海で 魚ばかりを 釣る。)
177. dziro:-ja uttu-nu saburo:-tu ?o:taN.
 (次郎は 弟の 三郎と 喧嘩した。)
178. dziro:-ja gaNmaru-ɕi: ?uNme:-ne: nura:taN.
 (次郎は いたずらして 祖父に 叱られた。)
179. dziro:-ja ?uNme:-hara ?abiNna dzitei nura:taN.
 (次郎は 祖父から 喋るなって 叱られた。)
180. dziro:-ja ?ami-ne: ?iNdziti ja:-Nkai ke:titto:N.
 (次郎は 雨に 濡れて 家に 帰ってきている。)
181. hanako:-ja mukaei-hara saNɕiN pikibu:saN.
 (花子は 昔から 三線が 弾ける。)
182. kadzuko-tu hanako:-ja duɕido:.
 (和子と 花子は 友達だ。)
183. ?uNme:-ja hitumiti-hara jama-Nkai mimigui tuiga ?idaN.
 (祖父は 朝から 山に キノコを 取りに 行った。)
184. waN:-ja kinu:-ja ɕiNbuN jumaNtaN.
 (俺は 昨日は 新聞を 読まなかった。)

185. wanu-ja ja:tei kwa:taN.
 (おれは 八匹 釣った。)
186. einugu-nu ba:-ja papp'a:-ga:deN udutaN.
 (シヌグの ときは 祖母まで 踊った。)
187. parito:ru p'i:-ja saburo:-ja ?umi:-dzi ?iru-beN-du kwa:suru.
 (晴れた 日は 三郎は 海で 魚ばかりを 釣る。)
188. parito:ru p'i:-ja saburo:-ja ?umi:-dzi ?iru kwa:suN.
 (晴れた 日は 三郎は 海で 魚を 釣る。)
189. ?ami-nu puiru p'i:-ja saburo:-ja ja:-ne: naNga-beN-du juda:kuru.
 (雨の 降る 日は 三郎は 家で 漫画ばかり 読んでいる。)
190. juru mitei ?akkuru ba:-ja pabu-ne: ki: hikirijo:.
 (夜 道を 歩く ときは ハブに 気を つけるよ。)
191. ?uimi-nu posuta:-ja ko:miNkwaN-nu paci:-ne: pate:taNdo:.
 (祭りの ポスターは 公民館の 戸に 貼ってあったよ。)
192. ?uimi-nu posuta:-ja ko:miNkwaN-nu hubi-ne: pate:taNdo:.
 (祭りの ポスターは 公民館の 壁に 貼ってあったよ。)
193. na:: kamari:ei-ja miNna kadaN.
 (もう 食べられるのは みんな 食べた。)
194. dziro:-ja uttu-nu saburo:-tu ?o:taN.
 (次郎は 弟の 三郎と 喧嘩した。)
195. sato:-ja ?amahaN. kusui-ja ?amaku neN.
 (砂糖は 甘い。 薬は 甘く ない)
196. huN eiNbuN-ja kinu:-nu daru. su:N muN-ja huri daru.
 (その 新聞は 昨日のだ。今日の ものは これだ。)
197. waN-ja kinu:-ja eiNbuN jumaNtaN.
 (俺は 昨日は 新聞を 読まなかった。)
- ヤは、格助詞のさらに後ろに付いて、とりたてる。
198. abunahatu mitei-nu suba-hara-ja ?akkuna.
 (危ないから 道の 側は 歩くな。)
199. mitei-nu maNnaha-hara ?attei-ja naraNdo:
 (道の 真ん中を 歩いては いけないよ。)
200. jakuba-Nkai-ja takuci:-ei ?ikuci-jo:kaN basu-ci ?ikuci-ru maci jaru.
 (役場には タクシーで 行くより バスで 行くのが いい。)

17. Nのとりたて

奥方言の N のとりたての形がとりたてられたものごとと同類のものごとが他にもあることを表す《累加》の意味を有する例が確認できた。那覇方言などでは《累加》の他に《極

端》、《ぼかし》を表すことも可能であるので、奥方言も同様に存在すると考えられるが、確認できていない。

201. wasa: ʔodzi:-ja saki-N tabaku-N numaNdo:.

(うちの 祖父は 酒も 煙草も のまないよ。)

202. ʔaNma:-N kadze hita:N.

(母も 風邪を ひいた。)

203. kadzuko muN-tu junu kutsu hanako-ne:-N ho:ti ta:ha.

(和子の ものと 同じ 靴を 花子にも 買って やろう。)

18. du のとりたて

奥方言のとりたて助詞の **du** は、現代日本語の「こそ」と同じく、前にあるものごとを特に目立たせて示す特立を表す。**du** のとりたての形は、現代日本語の「こそ」に比べて制限が少なく、いろいろなタイプの文に現れるが、疑問詞疑問文と命令文には現れないようである。

204. ʔami-nu puiuru p'i:-ja saburo:-ja ja:ne: naNga-beN-du juda:kuru.

(雨の 降る 日は 三郎は 家で 漫画ばかりを 読んでいる。)

205. parito:ru p'i:-ja saburo:-ja ʔumi:-dzi ʔiru-beN-du kwa:suru.

(晴れた 日は 三郎は 海で 魚ばかりを 釣る。)

206. waN-ja irabutca:-nu namaçi-du kamibusa:N

(俺は イラブチャーの 刺身が 食いたい。)

207. teNpura-jo:kaN sacimi-du masa:ru.

(天ぷらより さしみ(が) おいしい。)

208. ura-ja teNpura-du maeina: sacimi-du maeina:.

(君は 天ぷらが いいか。 刺身が いいか。)

209. jakuba-Nkai huma-nu mitçi-hara ʔikuçi-du maeido.

(役場に ここを 行くのが いいよ。)

210. basu-ja p'i:-ni mine:-du ʔaiN-do:.

(バスは 一日に 三回 ある。)
「三回しかない」の質問への回答

211. saki-ja humi-hara-du hikuiru.

(酒は 米から 作るんだ。)

212. jakuba-Nkai huma-hara ʔikuçi-du maeido:

(役場に ここを 行くのが いいよ。)

213. jakuba-Nkai huma-nu mitçi-hara ʔikuçi-du maeido:

(役場に ここの 道を 行くのが いいよ。)

214. teNpura-du u maeina: sacimi-du maeina: dziru-ga maeijaNga

(天ぷらが いいか。 刺身が いいか。どれが いいの。)

19. beN のとりたて

奥方言のとりたて助詞の beN は、名詞に付いて同類のものごとを排し、前にあるものごとを限定してとりたてる。

215. huN panaei-ja ?uttu-ni-beN panaei saN.

(その話は 妹にだけ 話した。)

216. parito:ru p'i:-ja saburo:-ja ?umi:-dzi ?iru-beN-du kwa:suru.

(晴れた日は 三郎は 海で 魚ばかりを釣る。)

217. ?ami-nu puiuru p'i:-ja saburo:-ja ja:-ne: naNga-beN-du juda:kuru.

(雨の降る日は 三郎は 家で 漫画ばかりを 読んでいる。)

20. eba のとりたて

奥方言の eba は、名詞述語を構成する繋詞の条件形で、名詞の格形式と組み合わせ、主題を差し出す。聞き手がそれについて質問し、それについて答えるとき、主題にして差し出しながら情報を述べる。

218. pidu-Nkai eba ?unu mitai-hara ?ikuai maaija:

(辺戸に なら この道を行くのが いいね。)

21. ga:deN のとりたて

奥方言のとりたて助詞の ga:deN は、想定された基準を尺度にして、前にあるものごとがその想定外であったこと示す。ga:deN は、到達点を表す格助詞 ga:deN と同音であり、意味的にも形式的にも現代日本語の「まで」に対応している。

219. einugu-nu ba:-ja papp'a:-ga:deN udutaN.

(シヌグのときは 祖母までも 踊った。)

大きな だいこん (かぶ)

アップデークニ

ʔup'ude:k'uni

- 1 おじいさんが、かぶの たねを まきました。

ウンメーガ デークニ サニ マタン

ʔuNme:ga de:k'uni sani mat'aN.

- 2 「あまい あまい かぶに なれ。

「アマハール アマハール デークニンカイ ナリドー

「ʔamaha:ru ʔamaha:ru de:k'uniNkai narido:

- 3 おおきな おおきな かぶに なれ。」

アップハール アップハール デークニンカイ ナリドー」

ʔup'uha:ru ʔup'uha:ru de:k'uniNkai narido:」

- 4 あまい めずらしい、(げんきの よい、)

アマハール ミジヤーハール

ʔamaha:ru miɕija:ha:ru

- 5 とてつもなく おおきい かぶが できました。

ジコー アップハール デークニヌ ジキトーン/イットーン

ɕik'o: ʔupuha:ru de:k'uninu ɕik'ito:N/ʔitt'o:N.

- 6 おじいさんは、かぶをぬこうとしました。

ウンメーガ デークニ ピクンジ サン

?uNme:ga de:k'uni p□ik'uNɕi saN.

- 7 「うんとしょ、どっこいしょ。」

エイヤ サッサ

?eija sassa

- 8 ところが、かぶはひけなかった/ひけない(ぬけません)。

ヤシガ デークニヤ ピカランタン/ピカラン

jaʃiga de:k'unija p□ik'araNt'aN/p□ik'araN.

- 9 おじいさんは、おばあさんをよんできました。

ウンメーヤ パッパー ユジッタン

?uNme:ja p'app'a: juɕitt'aN.

- 10 おばあさんがおじいさんをひっぱって、

パッパーガ ウンメー ピッパティ

p'app'a:ga ?uNme: p'ipp'at'i

- 11 おじいさんがかぶをひっぱって。

ウンメーガ デークニ ピッパティ

?uNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i

- 12 「うんとしょ、どっこいしょ。」

エイヤ サッサ

?eija sassa

- 13 それでも、かぶは ぬけません。
 ヤシガ デークニ ピカランタン
 jaʃiga de:k'unija p'ik'araNt'aN.
- 14 おばあさんは まごを よんできました。
 パッパーヤ マガ ユジッタン
 p'app'a:ja ?maga juʒitt'aN.
- 15 まごが おばあさんを ひっばって、
 マガガ パッパー ピッパティ
 ?magaga p'app'a: p'ipp'at'i
- 16 おばあさんが おじいさんを ひっばって、
 パッパーガ ウンメー ピッパティ
 p'app'aga ?uNme: p'ipp'at'i
- 17 おじいさんが かぶを ひっばって。
 ウンメーガ デークニ ピッパティ
 ?uNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i
- 18 「うんとしょ、 どっこいしょ。」
 エイヤ サッサ
 ?eija sassa
- 19 まだまだ、かぶは ぬけません。
 ナマ デークニヤ ピカラン
 ?nama de:k'unija p'ik'araN.

20 まごは、 イヌを よんできました。

マガヤ インヌクワ ユジッタン.

?magaja ?iNnuk'wa juʒitt'aN.

21 イヌが まごを ひっぱって、

インヌクワヌ マガ ピッパティ

?iNnuk'wanu ?maga p'ipp'at'i

22 まごが おばあさんを ひっぱって、

マガガ パッパー ピッパティ

?magaga p'app'a: p'ipp'at'i

23 おばあさんが おじいさんを ひっぱって、

パッパーガ ウンメー ピッパティ

p'app'a:ga ?uNme: p'ipp'at'i

24 おじいさんが かぶを ひっぱって。

ウンメーガ デークニ ピッパティ

?uNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i

25 「うんとしょ、 どっこいしょ。」

エイヤ サッサ

?eija sassa

26 まだまだ、 まだまだ、 ぬけません。

ナマン ナマン ピカラン

namaN namaN p'ik'araN.

27 イヌは、 ネコを よんできました。

インヌクワヤ マーウタ ユジッタン

?iNnuk'waja ma:ut'a juʒitt'aN.

28 ネコが イヌを ひっばって、

マーウタヌ インヌクワ ピッパティ

ma:ut'anu ?iNnuk'wa p'ipp'at'i

29 イヌが まごを ひっばって、

インヌクワヌ マガ ピッパティ

?iNnuk'wa ?maga p'ipp'at'i

30 まごが おばあさんを ひっばって、

マガガ パッパー ピッパティ

?magaga p'app'a: p'ipp'at'i

31 おばあさんが おじいさんを ひっばって、

パッパーガ ウンメー ピッパティ

p'app'a:ga ?uNme: p'ipp'at'i

32 おじいさんが かぶを ひっばって。

ウンメーガ デークニ ピッパティ

?uNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i

33 「うんとこしょ、どっこいしょ。」

エイヤ サッサ

?eija sassa

35 それでも、かぶはぬけません。

アンシン デークニヤ ピカラン

?aNʃiN de:k'unija p'ik'araN.

36 ネコはネズミをよんできました。

マーウタヤ ウェンス ユジッタン

ma:ut'aja ?weNsu juʒitt'aN.

37 ネズミがネコをひっばって、

ウェンスヌ マーウタ ピッパティ

?weNsunu ma:ut'a p'ipp'at'i

38 ネコがイヌをひっばって、

マーウタヌ インヌクァ ピッパティ

ma:ut'anu ?iNnuk'wa p'ipp'at'i

39 イヌがまごをひっばって、

インヌクワヌ マガ ピッパティ

?iNnuk'wanu ?maga p'ipp'at'i

40 まごがおばあさんをひっばって、

マガガ パッパー ピッパティ

?magaga p'app'a: p'ipp'at'i

41 おばあさんが おじいさんを ひっぱって、

パッパーガ ウンメー ピッパティ

p'app'a:ga ?uNme: p'ipp'at'i

42 おじいさんが かぶを ひっぱって。

ウンメーガ デークニ ピッパティ

?uNme:ga de:k'uni p'ipp'at'i

43 「うんとこしょ、どっこいしょ。」

エイヤ サッサ

?eija sassa

44 やっと かぶは ぬけました。

トーナティ デークニヤ ピカタン

t'o:nat'i de:k'unija p'ik'at'aN.

沖縄県大宜味村大兼久方言の記述

—格助詞・とりたてを中心に—

沖縄県大宜味村大兼久方言の記述

—格助詞・とりたてを中心に—

中本謙（琉球大学）

1. 沖縄県大宜味村大兼久の概要

大宜味村は、東シナ海に面し、北は国頭村、南は名護市に隣接している。また西は、脊梁山地となっており、東村に隣接している。東西に 8 km、南北に 14.4 kmの広さを持つが、村の総面積の 76%は森林となっている。

大兼久は、大宜味村のほぼ中央に位置する。方言の名称ではウフガニク、ハニクと呼ばれている。隣接する大宜味部落から 270 年ほど前に分離した部落であるといわれており、イリミ・ハニクと連称されることもある¹。

2. 沖縄県大宜味村大兼久方言の概要

大宜味村大兼久方言（以下、大兼久方言と称する）は、沖縄本島北部方言に属する。

以下、これまでの調査で得られた資料から、音韻、助詞の主な特徴を示す。

音韻的には、沖縄北部方言に広く見られるように、大兼久方言でも中央語のハ行子音に対応する p 音、カ行子音に対応する h 音がみられる。カ行子音、ハ行子音の対応からその特徴を具体的に示すと次の通りである。

①語頭において中央語のカに対応するものは、/k/→/h/により/ha/となる。

例. [haɡami]（鏡）[ha:mi]（亀）

②語頭において中央語のケに対応するものは、/hi/となる。

例. [çi:]（毛）[çi:buʃi]（煙）

③語頭において中央語のキに対応する/k²i/、クに対応する/k²u/がみられる。

例. [k²iN]（衣）[k²innu:]（昨日）[k²umun]（汲む）

④中央語のコに対応するものの多くは、[hu]となる。

例. [hui]（声）[tahu]（たこ）

⑤中央語のハは、主に[ɸa]に対応する。

例. [ɸa:]（歯）[ɸana]（鼻）[ɸama]（浜）

[pasami]（はさみ）のように[pa]の例も少ないがみられる。

⑥中央語のヒ、フに対応する語において比較的[p²]がみられる傾向がある。[p²i:]（火）[p²igi]（髭）[p²uju:]（冬）

¹津波高志他(1982)による。

⑦中央語のホは、[puʃi]（星）[ɸuni]（骨）のように[pu]と[ɸu]に対応する。

助詞については、主格の格助詞がガ（が）に統一されていく傾向がみられ、連体用法はヌ（の）に統一されていく傾向等がみられる。また、とりたてについても、du（ぞ）の結びはみられるが、ga（が）の結びはみられない等の特徴がある。

なお、本報告の資料は、1928年生の女性（生え抜き）によるものである。調査は2018年11月から12月にかけて臨地調査を行った。

3. 人口構成からみた大兼久方言

2018年3月現在、大兼久の人口は115名である。大まかな年齢による内訳は以下の通りである。

年齢	人数
65歳以上	42名
15歳～64歳	66名
0歳～14歳	7名

現在、伝統的な方言が話せる話者は、老年層のみであるため、その人数の少なさが見てとれる。より古い層の方言を知る80代以上となると、さらにその人数は少なくなる。地域の人々によると、40代以下の世代は方言が話せない状況にあるようである。

4. 共通語教育と方言教育および方言保存活動

大宜味村でも、かつては方言札が使用されており、本報告の話者の女性も子供のころ見たことがあり、罰札としての怖いイメージが強かったようである。

現在、大兼久で方言大会等の方言に関するイベントや活動は特になされていないが、昨年、大宜味幼稚園で、方言劇、「大宜味ゼーク（大工）」が園児たちによって演じられた。地元の演題ということもあり好評を博したとのことである。

2016年4月から大宜味村の小学校は、喜如嘉、大宜味、塩屋、津波の4小学校が統合され新大宜味小学校となっている。統合前の小学校では、いくつか方言の授業実践がなされている。たとえば、喜如嘉小学校では、2015年に単元名「～地域（喜如嘉・謝名城・田嘉里）の方言を集めて「方言コレクションボックス」をいっぱいにして～」という4年生の授業が酒井里美教諭によって実践されている。これは、方言を「お宝」として捉え、コレクションするものである。児童たちは、それぞれ3つの部落のお宝（方言）を地域のお年寄りを訪ねて聞き取り、互いに紹介し合うことで、地域のことばの多様性、豊かさを実感している。授業者は、地域と教室を結ぶことで、地域への愛着に基づいた自己肯定感を育むことにもつながるとみている。

5. 方言資料の作成

大宜味村全体の方言については、名護市史編纂委員会(2006)で地域差も含めて大まかな特徴が示されている。また各部落単位の資料としては、田嘉里方言の音調体系を示したローレン(2004)や津波方言の音韻体系を示した琉球方言クラブ(1992)等がある。

大兼久の方言については、ローレンス(2010)で大宜味村内4地点のアクセントの比較資料の1地点として示されている。また、大宜味村内のいくつかの部落では、私家版の方言集なども作成されているが、大兼久については、作成されていない。村内の中では、比較的方言資料の少ない地域であると言える。

6. 大兼久方言の音韻と音声

これまでの調査により確認された拍の表とその語例を示す。

6.1 拍体系表²

/ʔi/	/ʔe/	/ʔa/	/ʔo/	/ʔu/	/ʔja/				/ʔwa/		
イ	エ	ア	オ	ウ	ツヤ				ツワ		
[ʔi]	[ʔe]	[ʔa]	[ʔo]	[ʔu]	[ʔja]				[ʔwa]		
/ʔi/	/ʔe/			/ʔu/	/ʔja/	/ʔjo/	/ʔju/		/ʔwe/	/ʔwa/	
イイ~イ	イエ~エ			ウウ	ヤ	ヨ	ユ		ウエ	ワ	
[ji]~[i]	[je]~[e]			[wu]	[ja]	[jo]	[ju]		[we]	[wa]	
/hi/	/he/	/ha/	/ho/	/hu/	/hja/			/hwi/	/hwe/	/hwa/	/hwu/
ヒ	ヘ	ハ	ホ	フウ	ヒヤ			フィ	フェ	ファ	フ
[çi]	[he]	[ha]	[ho]	[hu]	[ça]			[phi]	[phe]	[pha]	[phu]
/kʰi/				/kʰu/					/kʰwe/		
ツキ				ツク					ツクエ		
[kʰi]				[kʰu]					[kʰwe]		
/ki/	/ke/	/ka/	/ko/	/ku/		/kjo/				/kwa/	
キ	ケ	カ	コ	ク		キョ				クワ	
[ki]	[ke]	[ka]	[ko]	[ku]		[kjo]				[kwa]	
/gi/	/ge/	/ga/	/go/	/gu/						/gwa/	
ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ						グワ	
[gi]	[ge]	[ga]	[go]	[gu]						[gwa]	
/tʰi/		/tʰa/									
ツティ		ツタ									
[tʰi]		[tʰa]									

² 語頭において母音単独の前では、/ʔ/グロツタルストップ（声門閉鎖音）があらわれるが、便宜的にカタカナ表記では、省略して示す。

/ti/	/te/	/ta/	/to/	/tu/							
ティ [ti]	テ [te]	タ [ta]	ト [to]	トゥ [tu]							
/di/	/de/	/da/	/do/	/du/							
ディ [di]	デ [de]	ダ [da]	ド [do]	ドゥ [du]							
/tʃi/											
ツチ [tʃi]											
/ci/	/ce/	/ca/	/co/	/cu/							
チ [tʃi]	チェ [tʃe]	チャ [tʃa] ~ [tʃa]	チョ [tʃo]	ツ [tsu]							
/si/	/se/	/sa/	/so/	/su/							
シ [ʃi]	セ [se]	サ [sa]	ソ [so]	ス [su]							
/zi/		/za/	/zo/	/zu/							
ジ [dʒi]		ザ [dza]	ゾ [dzo] ~ [dʒo]	ズ [dzu]							
/ri/	/re/	/ra/	/ro/	/ru/							
リ [ri]	レ [re]	ラ [ra]	ロ [ro]	ル [ru]							
/ni/	/ne/	/na/	/no/	/nu/							
ニ [ni]	ネ [ne]	ナ [na]	ノ [no]	ヌ [nu]							
/pʰi/				/pʰu/							
ツピ [pʰi]				ツプ [pʰu]							
/pi/	/pe/	/pa/	/po/	/pu/							
ピ [pi]	ペ [pe]	パ [pa]	ポ [po]	プ [pu]							
/bi/	/be/	/ba/	/bo/	/bu/							
ビ [bi]	ベ [be]	バ [ba]	ボ [bo]	ブ [bu]							
/mi/	/me/	/ma/	/mo/	/mu/							
ミ [mi]	メ [me]	マ [ma]	モ [mo]	ム [mu]							
/N/[n, m, ŋ, N]ㄥ											
/Q/[p, s, t, k]ㄱ											
/i/[i] /e/[e] /a/[a] /o/[o] /u/[u] ー											

6.2 大兼久方言の拍語例

/ʔi/	イ	[ʔi]	イキ[ʔiki] (息) イッカー[ʔikka:] (イカ)
/ʔe/	エ	[ʔe]	エンヤサ[ʔenjasa] (勢いをつけるときのかけ声)
/ʔa/	ア	[ʔa]	アジ[ʔadʒi] (味) アハングワ[ʔakangwa] (赤ん坊) アンマー[ʔamma:] (母)
/ʔo/	オ	[ʔo]	オーエー[ʔo:e:] (喧嘩) オーゲー[ʔo:ge:] (扇げ)
/ʔu/	ウ	[ʔu]	ウタハタ[ʔutahata] (弟) ウツケーメー[ʔukke:me:] (お粥)
/ʔja/	ツヤ	[ʔja]	ツヤー[ʔja:] (お前)
/ʔwa/	ツワ	[ʔwa]	ツワー[ʔwa:] (豚)
/ʔi/	イイ~イ	[ji] ~[i]	イイナグ[jinagu] (女) ガイ[gai] (カニ)
/ʔe/	イエ~エ	[je]~[e]	イエー[je:] (もう) オーエー[ʔo:e:] (喧嘩)
/ʔu/	ウウ	[wu]	ウウトウ[wutu] (夫) ウー[wu:] (芭蕉糸)
/ʔja/	ヤ	[ja]	ヤー[ja:] (家) ヤムン[jamuN] (痛い)
/ʔjo/	ヨ	[jo]	ヨーパー[jo:ba:] (弱い人)
/ʔju/	ユ	[ju]	ユラー[jura:] (枝) ユー[ju:] (お湯)
/ʔwe/	ウェ	[we]	ウエンツ[wentsu] (ねずみ)
/ʔwa/	ワ	[wa]	ワン[waN] (私) シワ[ʃiwa] (心配)
/hi/	ヒ	[çi]	ヒティミティ[çitimiti] (朝) ウウヒガ[wuçi:ga] (男)
/he/	ヘ	[he]	ヘーン[he:N] (帰る)
/ha/	ハ	[ha]	[hagami] (鏡) スクハン[nukuhan] (暖かい)
/ho/	ホ	[ho]	ホートウ[ho:tu] (鳩) ホーン[ho:N] (買う) ホージ[ho:dʒi] (かび)
/hu/	フウ	[hu]	フウイ[hui] (声) フウミ[humi] (米) フー[hu:] (粉)
/hja/	ヒヤ	[ça]	ヒヤク[çaku] (百)
/hwi/	フィ	[fi]	フィラ[fi:ra] (へら) ノーフィン[no:fiN] (もつと)
/hwe/	フェ	[fe]	フェー[fe:] (南) イーフエー[ʔi:fe:] (位牌) フェーハン[fe:han] (早い)
/hwa/	ファ	[fa]	ファー[fa:] (歯) ファゴーハン[fa:go:han] (汚い)
/hwu/	フ	[fu]	フビ[fu:bi] (壁) [funi] (船) サフイ[safui] (咳)
/kʰi/	ツキ	[kʰi]	ツキンヌー[kʰinnu:] (昨日) ツキム[kʰimu] (肝)
/kʰu/	ツク	[kʰu]	ツクムン[kʰumuN] (汲む)
/kʰwe/	ツクエ	[kʰwe]	ツクエーン[kʰwe:N] (肥える) ツクエー[kʰwe:] (鉄)

/ki/	キ	[ki]	サキ[saki] (酒) サバキ[sabaki] (櫛)
/ke/	ケ	[ke]	ウ ッ ケ ー メ ー [ʔukke:me:] (粥) イン ケ ー [ʔiŋke:] (おじさん)
/ka/	カ	[ka]	カツー[katsu:] (鯉) チカハン[tʃikahan] (近い) ムシカ[muʃika] (もしか)
/ko/	コ	[ko]	コーレー[ko:re:] (兄弟) コーセー[ko:se:] (壊せ) アイコー[ʔaiko:] (蟻)
/ku/	ク	[ku]	クサ[kusa] (草) ハクン[hakuN] (書く)
/kjo/	キョ	[kjo]	イキョースン[ʔikjo:suN] (行ける)
/kwa/	クワ	[kwa]	クワーシ[kwa:ʃi] (菓子) ナンクワン[naŋkwaN] (南瓜) クワッキー[kwakki:] (ご馳走)
/gi/	ギ	[gi]	ウサギ[ʔusagi] (ウサギ) フィンギララン[ʃiŋgiraraN] (逃げられない)
/ge/	ゲ	[ge]	ドウゲン[dugeN] (転ぶ) ウタゲーン[ʔutage:N] (疑う)
/ga/	ガ	[ga]	ガイ[gai] (カニ) アガイ[ʔagai] (東)
/go/	ゴ	[go]	インゴーハン[ʔiŋgo:han] (痒い)
/gu/	グ	[gu]	グナハン[gunahan] (細かい) イィナグ[jinagu] (女)
/gwa/	グワ	[gwa]	アハングワー[ʔahangwa:] (赤ん坊)
/tʰa/	ツタ	[tʰa]	ツタイ[tʰai] (二人) ツターチ[tʰa:tʃi] (二つ)
/ti/	ティ	[ti]	ティー[ti:] (手) ウティン[ʔutiN] (落ちる)
/te/	テ	[te]	テーゲー[te:ge:] (大概)
/ta/	タ	[ta]	ター[ta:] (田) イタ[ʔita] (板)
/to/	ト	[to]	トー[to:] (平らな)
/tu/	トゥ	[tu]	トゥイ[tui] (鳥) シグトゥ[ʃigutu] (仕事)
/de/	デ	[de]	デークニ[de:kuni] (大根)
/da/	ダ	[da]	ダキ[daki] (竹) [midari:N] (乱れる)
/do/	ド	[do]	ドーグ[do:gu] (道具)
/du/	ドウ	[du]	ドウゲン[dugeN] (転ぶ)
/cʰi/	ツチ	[tʰi]	ツチー[tʰi:] (来て)
/ci/	チ	[tʃi]	チブル[tʃiburu] (頭) ヌーチ[nu:tʃi] (命) チラ[tʃira] (顔)
/ca/	ツァ~チャ	[tsa]~[tʃa]	チャー[tʃa:] (茶) [ʔatsahan] (熱い)
/co/	チョ	[tʃo]	チョーチョ[tʃo:tʃo] (蝶)

/cu/	ツ	[tsu]	ツクン[tsukuN] (作る) ウフツ[ʔuɸutsu] (大人)
/si/	シ	[ʃi]	シミ[ʃi:ʃi] (肉) アンシ[ʔanʃi] (ととも)
/se/	セ	[se]	ファナセー[ɸanase:] (放せ)
/sa/	サ	[sa]	サバキ[sabaki] (櫛) バサ[basa] (馬車)
/so/	ソ	[so]	ソーキ[so:kibuni] (肋骨) ソー[so:] (竿) ソーガチ[so:gatʃi] (正月)
/su/	ス	[su]	スー[su:] (今日) スス[susu] (煤) ピンスー[pʔinsu:] (貧相)
/zi/	ジ	[dʒi]	ジー[dʒi:] (字) クンジーン[kundʒi:n] (崩れる) ハジ[hadʒi] (風)
/za/	ザ	[dza]	ピザイ[pidzai] (左) ガザミ[gadzami] (蚊)
/zo/	ゾ~ジョ	[dzo]~[dʒo]	ゾー[dzo:] (門) ジョージ[dʒo:dʒi] (上手)
/zu/	ズ	[dzu]	ズー [dzu:] (尾) ガーズー[ga:dzu:] (私の強い者) マンズー[mandzu:] (パパイヤ)
/ri/	リ	[ri]	リカ[rika] (さあ) カリタン[karitan] (枯れた)
/re/	レ	[re]	インレー[ʔinre:] (入れろ)
/ra/	ラ	[ra]	ハラジ[haradʒi] (髪) ティラ[tira] (太陽)
/ro/	ロ	[ro]	インリンロー[ʔinrinro:] (濡れるよ)
/ru/	ル	[ru]	ルー[ru:] (胴) ファル[ɸaru] (畑)
/ni/	ニ	[ni]	ニー[ni:] (根) ハニ[hani] (鐘)
/ne/	ネ	[ne]	ネーグー[ne:gu:] (びっこ)
/na/	ナ	[na]	ナナチ[nanatʃi] (七つ) グナハン[gunahan] (細かい)
/no/	ノ	[no]	ノースン[no:suN] (治す)
/nu/	ヌ	[nu]	ヌヌ[nunu] (布) ヌクハン[nukuhan] (温かい)
/pʔi/	ツピ	[pʔi]	ツピー[pʔi:] (火) ツピーザ[pʔi:dza] (山羊)
/pʔu/	ツプ	[pʔu]	ツプー[pʔu:] (屁) ツプユー[pʔuju:] (冬)
/pi/	ピ	[pi]	ピサ[pisa] (足) ピザイ[pidzai] (左)
/pa/	パ	[pa]	パサミ[pasami] (ハサミ) パシ[paʃi] (雨戸)
/pu/	プ	[pu]	プシ[puʃi] (星) プタ[puta:] (蓋)
/bi/	ビ	[bi]	フビ[ɸubi] (壁) イビガニ[ʔibigani] (指輪)
/be/	ベ	[be]	スベー[sube:] (小便) ハンベー[hambe:] (被れ)
/ba/	バ	[ba]	バーキ[ba:ki] (籠) ナバ[naba] (きのこ)
/bo/	ボ	[bo]	ボーギリ[bo:giri] (棒切れ)
/bu/	ブ	[bu]	ソーキブニ[so:kibuni] (肋骨)

/mi/	ミ	[mi]	ミチャ[mitʃa] (土) [mi:] (目) ハーミ[ha:mi] (亀)
/me/	メ	[me]	メー[me:] (前) メーニチ[me:niʃi] (毎日) メーシ[me:ʃi] (箸)
/ma/	マ	[ma]	マーミーサートゥー[ma:mi:sa:tu:] (カマキリ) ジーマミ[dʒi:mami] (地豆) ナマ[nama] (直ぐ)
/mo/	モ	[mo]	モーセー[mo:se:] (燃やせ)
/mu/	ム	[mu]	ムトゥ[mutu] (全部) カムン[kamuN] (食べる)
/N/	ン	[m,n,ŋ,N]	アンマー [ʔamma:] (母) グナハン[gunahan] (細かい) アハングワー[ʔahangwa:] (赤ん坊) アンラ[ʔanra] (油)
/Q/	ツ	[p,t,k,s]	テッポー[teppo:] (鉄砲) アックン[ʔakkun] (歩く) トゥバハッタン[tubahattan] (飛ばされた) ハッサン[hassan] (軽い)
/i/	ー	[i]	ミー[mi:] (目)
/e/	ー	[e]	メー[me:] (前)
/a/	ー	[a]	サー[sa:] (下)
/o/	ー	[o]	オーゲー[ʔo:ge:] (扇げ)
/u/	ー	[u]	ツュー[ʔju:] (魚)

7. 大兼久方言の助詞

7.1 格助詞

7.1.1 ガ ga 主格

人称代名詞、人名、親族呼称につく。

- (1) wa:ga ʔikundo:. (私が 行くよ。)
- (2) huriga ʔikundo:. (これが 行くよ。)
- (3) ʔariga ʔi:taN. (あれが 言った。)
- (4) taruga hakuga. (誰が 書くのか。)
- (5) hanakoga ku:N. (花子が 来る。)
- (6) pusume:ga mitʃa:kuN. (おじいさんが ごらんになる)

(7) ϕ a:ma:ga wan ?abitakuN. (おばあさんが私を呼んでいる。)

(8) ni:saŋga tsukuri turasanri. (にいさんがつくって くれるよ。)

指示代名詞につく。

(9) huriga nagahaN. (これが長い。)

(10) humaga ŋirahaN. (ここが涼しい。)

(11) dʒiruga takahaiga. (どれが高いか。)

普通名詞につく。

(12) ʧi:ga hari:N. (木が枯れる。)

(13) tuiga tubuN. (鳥が飛ぶ。)

(14) ?umiga ?arahanu. (海が荒れる。)

(15) su:ja ?amiga ϕ undo:. (今日は雨が降るよ。)

7.1.2 ガ ga 目的

(16) sumuʧi ho:iga ?ikundo:. (本を買いに行くよ。)

(17) ?umu ϕ uiga ?ikundo:. (芋を掘りに行くよ。)

(18) ?aʃibi:ga ?ikai:. (遊びに行こうね。)

7.1.3 ヌ nu 主格

(19) ?amanu jamanija ϕ abunu wunro:. (あの山には ハブがいるよ。)

(20) ?amanu jamanija ?iŋkwanu wunro:. (あの山には 犬がいるよ。)

大兼久方言の主格は、「自称・対称の代名詞」「指示代名詞（人、事物）」「人名」「親族呼称」「一般名詞」すべてガで承ける。しかし、上掲のように一般名詞においてヌで承ける語もみられる。これまでの調査によると、ガで承ける場合とヌで承ける場合とでは、次のように意味が異なるとのことが確認された。

ハブの例で示すと、目の前に実際にハブがいる場合は、ガで受け、?amanu jamanija ϕ abunu wunro:. (あの山にはハブがいるよ。) のように生息していることは知っているが、目の前にいない場合には、ヌで承けるとのことである。この区別については、主格助詞がガに統合されていくなかで、新たに発生した弁別機能ということも考えられる。周辺地域

も含めて、今後さらに追求していきたい。

7.1.4 φ（無助詞）対象

共通語の対象（を）に相当する格は、無助詞で表される。

(21) wanja saki numuN. (酒を 飲む。)

(22) mandzui jigutu sa. (一緒に 仕事を しよう。)

(23) nuhuqifi: çi: k[?]ittjaN. (鋸で 木を 切った。)

(24) tja: hataku ?inriro: (お茶を 濃く 入れろよ。)

「水が飲みたい」のようないわゆる対象の「が」は、midzi mumibusaN のように表される。

7.1.5 ネー (ne:) ³

場所

(25) hanako:ja huzu:kara to:kjo:ne: wunro:. (花子は 去年から 東京に いるよ。)

(26) honja humane: ?anro:. (本は そこに あるよ。)

(27) φarune: jasai ?uitaN. (畑に 野菜を 植えた。)

(28) ti:ne: kizi tfikitaN. (手に 傷を つけた。)

対象

(29) hanako:ja wubama:ne: ni:tsuN. (花子は おばさんに 似ている。)

時

(30) hanako:ja φatfigwatsune: herti kunro:. (花子は 8月に 帰って くる。)

原因

(31) ?amine: ?inritaN. (雨に 濡れた。)

受身

(32) ?amma:ne: nure:kurahattaN. (母に 叱られた。)

(33) taru:ja ?anne: φurahattaN. (太郎は あれに 殴られた。)

³ 内間、新垣(2000)では、[nija] (には) の融合したものとの見方が示されているが、大兼久方言では、助詞[ja]は、承ける語と融合しないので、別の可能生も考える必要がある。

使役

(34) haʒine: tubahattaN (風に 飛ばされた。)

4.1.6 ニ ni

ni もあらわれるが、用例は少ない。

場所

(35) to:kjo:ni nama tʃittʃaN. (東京に 今 着いた。)

時間

(36) rokuʒini ʔukitaN (六時に 起きた。)

変化の結果

(37) midziga ko:ri:ni nattan. (水が 氷に なった。)

次のように無助詞であらわされることもある。

(38) ʔagaridzo:nu mitsuvoja ʔisa nattan. (東門の ミツオは 医者に なった。)

7.1.7 チ tʃi

方向

(39) gakkotʃi ʔike:. (学校へ 行け。)

(40) naʔatʃi ʔike: (那覇へ 行け。)

(41) ʔaja ʔamatʃi ʔike:. (君は あっちへ 行け。)

(42) ʔumataʃi ku:ba. (ここへ 来い。)

(43) jama:ʃi nubura:. (山へ 登ろう。)

(44) ʔintuna:ʃi ʔikundo:. (辺土名へ 行くよ。)

(45) ʔantsuja ʔumitʃibe: ʔikunja:. (あの人は 海へばかり 行くね。)

(46) pahunu naha:ʃi ʔinre:. (箱の中へ 入れろ。)

変化の結果

(47) ʔiruga ʔaka:ʃi kawatan. (色が 赤へ 変わった。)

7.1.8 トウ tu

共同動作の相手

(48) k²innu:ja ruʃibitu ʔaʃiran. (昨日 友達と 遊んだ。)

(49) ʔujatu mandzui ʔidzan. (親と 一緒に 行く。)

引用

(50) na:ja taro:tu ʔi:nja:. (名は 太郎と いうよ。)

7.1.9 カラ kara

起点

(51) ʔa:me:ja k²innu:kara jamme:ʃi: nintun. (祖母は 昨日から 病気で 寝ている。)

(52) basuja ʔumakara ʔidziN. (バスは ここから 出る。)

(53) ʔja:kara ʔike:. (君から行け。)

(54) ʔuʔutsukara kwa:mari ʔatsumanriro:. (大人から 子どもまで 集まるってよ。)

手段

(55) ʔanu ʃimatʃija ʃinikara ʔikun. (あの島へは 船で 行く。)

行動場所

(56) ʔotto:ja ʔamakara ʔattʃa:kun. (父は 浜を 歩いている。)

7.1.10 ンティ nti

場所

(57) su:ja ja:nti ʔaʃirakun. (今日は 家で 遊ぶ。)

(58) ha:nti ʔasidan. (川で 遊んだ。)

(59) ha:nti ʔubukutan. (川で 溺れた。)

7.1.11 シーʃi:

道具

(60) taro:ja bo:ʃi: saburo: hurutʃan. (太郎は 棒で 三郎を 殴った。)

(61) ʔuriʃi: hakun. (筆で 書く。)

材料

(62) ʔunu kwaʃija mamifʃi: tsukun. (その 葉子は 豆で 作る。)

原因

(63) haʒiʃi to:ritaN. (風で 倒れた。)

手段

(64) naʔamari dzido:ʃaʃi ʔidzaN. (那覇まで 自動車で 行った。)

ʃi: (で) の承ける体言が、自動車や船等の場合は、自ら運転、操縦する場合である。つまり移動の手段のための道具として捉えているということであろう。

タクシーやフェリー等、自ら運転、操縦しない移動手段の場合は、çinikara(船で)のように kara を用いる。

7.1.13 ヨーカン jo:kaN

比較の対象

(65) hurijo:kaN ʔarigamaʃi je:sa. (これより あれが 良い。)

(66) wanja ʃi:ʃio:kanre: ʔju:ga maʃi. (私は 肉より 魚が 良い。)

7.2 とりたて

大兼久方言のいわゆるとりたての助詞は、ja (は)、n (も)、du (ぞ)、ga (か)、madi (まで)、bika:n (ばかり) be: (ばかり、だけ) bike: (ばかり) atai (ぐらい) na: (ずつ) jetin (でも) nre: (など、なんか) が、これまでの調査で確認された。

7.2.1 ヤ ja (は) ⁴ 題目の提示

(67) ʔja:ja ʔattsan tʃi: turafiro:. (君は 明日も 来て くれるかい。)

(68) p²uju:ja p²i:hanu n:kjo:han. (冬は 寒くて 動けない。)

(69) ʔja:gja hakun. (君がは 書く。)

(70) ʔarigja naran. (彼がは できない。)

(71) maja:gja kamaN (猫がは 食べない。)

(72) sumuʔja ho:ranntan. (本は 買わなかった。)

⁴ 沖縄中南部の方言等では、ja (は) は、承ける語の末尾音と規則的に融合する現象がみられる。例えば、沖縄奥武方言では、「あれは」は アリ ʔari+ヤ ja→アレーʔare:、「雲は」はクム kumu+ヤ ja→クモーkumo:等のようなものである。大兼久方言では、このような ja (は) の融合はみられない。

(73) ?amma:nija ?umikitʃi nure:kurahattan. (母には よく 叱られた。)

(74) wanja to:kjo:tʃija ?ikan. (私は 東京へは 行かない。)

(75) ?otto:tuja na:ɸanti wakaritan. (お父さんとは 那覇で 別れた。)

(76) ?anu ?inukwakaraja ɸingiraran. (あの 犬からは 逃げられない。)

(77) sammafija kwa:haransanni. (サンマでは 釣れない。)

7.2.2 ン n (も) 事情の似通ったものが他にもあることを言外に示しつつ提示

(78) ?arin hurij kurahanja. (あれも これも 美しいね。)

(79) ?amin ɸuifiga hadzin ɸukun. (雨も 降るし 風も 吹く。)

(80) dʒiro:tʃin taro:tu ?inu saba koti turase:
(次郎にも 太郎と 同じ 草履を 買って あげなさい。)

(81) waranka:n wakairu suru. (子どもたちも 分かっている。)

(82) je: tarun ?uranfiga. (もう 誰も いない。)

(83) ti:n pisan jamun. (手も 足も 痛い。)

(84) jamatu:tʃin naɸa:tʃin ?idzanu kutuja ne:n.
(大和へも 那覇へも 行ったことが ない。)

(85) namaja ?amma:tun ?a:tinnen. (今は 母とも 会っていない。)

(86) ?unu ʃigutuja ?ja:n naimi. (この 仕事は 君も できるか。)

(87) ?inukwagan kaman. (犬がも 食べない。)

(88) ?anu sumutʃin ?unu sumutʃin jumun. (あの 本も この 本も 読む。)

(89) ?amma:karan ?otto:karan ɸingiraran. (母からも 父からも 逃げられない。)

7.2.3 ル ru (ぞ) 強調

ru (ぞ) でとりたて、「ru 結び形」と呼応する。強意をそえる。ただし、別の結びもある。

(90) dʒi:ru hakuru. (字ぞ 書く。/字を書くのだ。)

(91) namaru ʔuki:ru. (今ぞ 起きる。/今起きるのだ。)

(92) wa:garu wassairu. (私がぞ 悪い。)

(93) naʔa:ʔiru ʔikibusairu. (那覇にぞ 行きたい。/那覇に本当に行きたいの意。)

7.2.4 ガ ga (か) 自問

沖縄中南部方言等では、広く ga (か) は、[-ra]の形 (ラ結び形) と呼応し、疑問をあらわす用法がみられた。例えば、沖縄奥武方言では、ta:gaga tsu:ra wakaraN. (誰が来るか わからない。) のような例がある。

しかし、大兼久方言では、このような ga (か) の結びは、これまでの調査では確認できず、次のようになる。

(94) tarugaga ku:ga wakaraN. (誰が 来るか わからない。)

7.2.5 マリ mari (まで) 到達点

(95) ʔarumari kʰikanro:. (畑まで 聞こえるよ。)

(96) ʔja:ga hakumari mattsukunro:. (君が 書くまで 待っている。)

(97) nagumarija ru:ʔi ʔikjo:sunro:. (名護までは 1人で 行くことが できる。)

(98) taro:ja ju:ga kʰuimari korataN. (太郎は 日が 暮れるまで 来なかった。)

(99) ʔja:ja ja:mari ʔutti ʔunu ʔaru hoiruʔi:

(君は 家まで 売って その 畑を 買うのか。)

7.2.6 ベー be: (ばかり、だけ) 限定

(100) ʔamibe: ʔuinja:. (雨ばかり 降るね。)

(101) ʔuribe: nukuʔi. (こればかり 残すのか。)

(102) wanja ʔi:ʔibe: kari kari. (私は、肉ばかり 食べている。)

(103) ʔja:be:mi ʔitʃo:NRO: (君だけに 言って いるよ。)

7.2.7 ビケー bike: (ばかり) 限定

(104) ʔattʃi dʒippumbike: je:sa. (歩いて 10分ばかりだよ。)

7.2.8 ンレーnre: (など、なんか) 例示

(105)tabakunre: ϕ utʃija naran. (タバコなど 吸っては いけない。)

(106)hasanre:ja na: ʃimusa. (傘なんかは もう いいよ。)

7.2.9 アタイ atai (ぐらい) 程度

(107)ʔanuataija wanun nairusuru. (あのぐらいは 私も できる。)

7.2.10 ナーna: (ずつ) 等量の数量・割合・分割等

(108)ʔikisa:na: waki:ga. (いくつずつ 分けようか。)

(109)ʔu ϕ ina: haja:se:. (少しずつ 運べ。)

7.2.11 イェーティン jetin (でも) 例示

(110)pʔi:dzajetin kamanri:ban. (山羊でも 食べないってよ。)

7.3 連体助詞

7.3.1 ヌ nu (の) 連体修飾

人称代名詞、人名、親族呼称、一般名詞、連体の用法はほとんどヌ nu で承ける。

(111) ϕ a:me:nu ʃigutu (おばあさんの 仕事。)

(112)ʔamma:nu kʔiN. (お母さんの 着物。)

(113)ʔarinu tuʒi (あれの 妻。)

(114)tarunu munga (誰の ものか。)

(115)puʃinu na:. (星の 名前。)

(116) ϕ i:nu ϕ a:. (木の 葉。)

7.3.2 ガ ga (が) 連体修飾

ガ ga の連体用法例は、かなり少ない。

(117)hurija ʔariga mundo:. (これは あれの ものよ。)

(118)tʔaiga muN (2人の もの。)

次の自称、対称の代名詞は、無助詞で用いられる。

(119)hurija wa: muN. (これは 私の もの。)

(120)hurija ʔja: muN. (これは お前の もの。)

8. 大宜味大兼久方言版「おおきなかぶ」

- (1) まがはぬ で一くに
おおきな かぶ
- (2) ふすめーが で一くにぬ さに まちゃん
おじいさんが、かぶの たねを まきました。
- (3) あまはぬ あまはぬ で一くにに なれーしむしがやー
「あまい あまい かぶに なれ。
- (4) まがはぬ まがはぬ で一くにに なれーしむしがやー
おおきな おおきな かぶに なれ。」
- (5) あまはぬ みじらはぬ
あまい (げんきの よい、) めずらしい
- (6) うみきち まがはぬ で一くにが なっとうん
とてつもなく おおきい かぶが できました。
- (7) ふすめーや で一くに とうんりーばん
おじいさんは、かぶを ぬこうと しました。
- (8) えんやさ こらしよ
「うんどこしよ。どっこいしよ。」
- (9) いえーしが で一くにや とうららんたん
ところが、かぶは ぬけません。
- (10) ふすめーや ふあーめー あびてい ちゃん
おじいさんは、おばあさんを よんで きました。

- (11) ふあーめーが ふすめー ひっばってい
おばあさんが おじいさんを ひっばって、
- (12) ふすめーが でーくに とぅらーりさしが
おじいさんが かぶを ひっばって――。
- (13) えんやさ こらしよ
「うんとこしよ。どっこいしよ。」
- (14) いえーしが でーくにや とぅららんたん
それでも、かぶは ぬけません。
- (15) ふあーめーや まーが あびてい ちゃん
おばあさんは、まごを よんで きました。
- (16) まーがが ふあーめー ひっばってい
まごが おばあさんを ひっばって、
- (17) ふあーめーが ふすめー ひっばってい
おばあさんが おじいさんを ひっばって、
- (18) ふすめーが でーくに とぅらーりさしが
おじいさんが かぶを ひっばって――。
- (19) えんやさ こらしよ
「うんとこしよ。どっこいしよ。」
- (20) なま でーくにや とぅららん
まだまだ、かぶは ぬけません。
- (21) まーがや いぬくわ そーてい ちゃん。
まごは、いぬを よんで (つれて) きました。
- (22) いぬくわが まーが ひっばってい
いぬが まごを ひっばって、
- (23) まーがが ふあーめー ひっばってい
まごが おばあさんを ひっばって、

- (24) ふあーめーが ふすめー ひっばってい
おばあさんが おじいさんを ひっばって、
- (25) ふすめーが でーくに どうらーりさしが
おじいさんが かぶを ひっばって――。
- (26) えんやさ こらしよ
「うんとこしよ。どっこいしよ。」
- (27) いかーしん でーくにや どうららん
まだまだ、まだまだ、ぬけません。
- (28) いぬくわや まやー そーてい ちゃん
いぬは、ねこを よんで (つれて) きました。
- (29) まやーが いぬくわ ひっばってい
ねこが いぬを ひっばって、
- (30) いぬくわが まーが ひっばってい
いぬが まごを ひっばって、
- (31) まーがが ふあーめー ひっばってい
まごが おばあさんを ひっばって、
- (32) ふあーめーが ふすめー ひっばってい
おばあさんが おじいさんを ひっばって、
- (33) ふすめーが でーくに どうらーりさしが
おじいさんが かぶを ひっばって――。
- (34) えんやさ こらしよ
「うんとこしよ。どっこいしよ。」
- (35) いえーしが でーくにや どうららんたん
それでも、かぶは ぬけません。
- (36) まやーや うえんつ そーていちゃん
ねこは、ねずみを よんで (つれて) きました。

- (37) うえんつが まやー ひっばってい
ねずみが ねこを ひっばって、
- (38) まやーが いぬくわ ひっばってい
ねこが いぬを ひっばって、
- (39) いぬくわが まーが ひっばってい
いぬが まごを ひっばって、
- (40) まーがが ふあーめー ひっばってい
まごが おばあさんを ひっばって、
- (41) ふあーめーが ふすめー ひっばってい
おばあさんが おじいさんを ひっばって、
- (42) ふすめーが でーくに とうらーりさしが
おじいさんが かぶを ひっばって――。
- (43) えんやさ こらしよ
「うんとこしよ。どっこいしよ。」
- (44) よーやく でーくにや とうらったん
やっど、かぶは ぬけました。

参考文献

- 内間直仁、新垣公弥子(2000)『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房
- 津波高志他(1982)『沖縄国頭の村落』新星図書出版
- 名護市史編纂委員会(2006)『名護市史本編・10 言語』名護市
- 琉球方言研究クラブ(1992)『琉大方言7号 津波方言の音韻』
- ローレンス・ウェイン (2004)「大宜味村田嘉里方言の音調体系」『琉球の方言』29号
法政大学沖縄文化研究所
- ローレンス・ウェイン(2010)「大宜味村方言の音韻について：附 大宜味村四地点音調資料」
『琉球の方言』35号法政大学沖縄文化研究所

沖縄県伊平屋村島尻方言

沖縄県伊平屋村島尻方言

當山 奈那・目差 尚太

1 沖縄県伊平屋村島尻の概要

伊平屋村は、沖縄島本部半島の北方海上約 40 キロメートルに位置し、伊平屋島・野甫島の二島からなる。南には無人島である具志川島をはさんで伊是名島がある。沖縄県の有人島のなかでは最北に位置し、島は北東から南西方向にのびる細長い形で、長さ 14 キロメートル、最大幅約 3 キロメートル、面積 20,66 平方キロメートルである。

島の骨格をなす山地、丘陵地は島軸に沿って北東から南西方向にならび、5 つほどの山塊にわかれている。このため、島を洋上から望むと、複数の島々が連なる列島のようにみえる。山塊を構成する主要地質は琉球石灰岩ではなく、中生代、古生代のチャートと中生代の砂岩頁岩互層である。山塊間には比較的広い沖積低地が分布し、稲作を支える地形的基盤をなしてきた。

伊平屋島の集落は東海岸に立地し、北から田名、前泊、我喜屋、島尻の 4 つからなる。島尻は伊平屋島のなかで一番南西に位置する集落であり、野甫島と伊平屋島とは 1979 年（昭和 54 年）に架橋された 680 メートルの野甫大橋でつながっている。

平成 29（2017）年 10 月時点での伊平屋村全体の実人口は 1255 人（593 戸）である。

2 伊平屋村島尻方言の概要

島尻方言とは、ここでは、伊平屋村島尻地区で話されている地域言語のことをさす。伊平屋村島尻の方言は、UNESCO の Atlas of the World's language in Danger にあげられた国頭語のなかの一つの下位方言である。国頭語は、UNESCO のリストによると、「危険」と判定されている。

伊平屋方言は、国頭語（沖縄北部沖永良部与論諸方言）の下位言語の山原方言に属する。音韻的には、北山原方言と p 音を保持せず、hw や h に移行している。また、喉頭音化した子音も失いつつある。また、k は h に変化しているが、*e と結合する k は h にはならない。伊是名方言と共通する特徴として、kui（首）のように、語中の b が w に変化し、さらに消失する傾向があげられる。

琉球諸語には、現代日本語のシ中止形、シテ中止形に相当する形式がそれぞれあらわれるが、伊平屋、伊是名方言にはシ中止形にʔaN（有り）が融合したシアリ中止形がある。例えば、june:（読んで）、hue:（降って）など。シアリ中止形は、琉球古典語（オモロ語）と現代首里方言も有している。ただし、古典琉球語と現代首里方言は、シ中止形、シテ中止形、シアリ中止形のみつつの中止形が併存しているのに対して、伊平屋方言は、シ中止形とシアリ中止形は存在するが、シテ中止形が存在していない。さらに、古典琉球語と現

代首里方言のシアリ中止形は、中止的な述語として複文で使用され、先行後続の関係をあらわすが、伊平屋方言や伊是名方言のシアリ中止形は、複文の述語になるだけではなく、シアリ中止形にさらに存在動詞を融合させて、継続相をつくるなど、形つくりの要素になることができ、生産的といえる。例) ?nama ?ami hujo:N. (今 雨が 降っている。)

3 人口構成からみた伊平屋方言

伊平屋島の2015年の年代別人口（総務省国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所）は次の表のとおりである。

75歳以上	198人
70歳～74歳	53人
60歳～69歳	189人
50歳～59歳	216人
21歳～49歳	322人
20歳以下	260人
計	1238人

複数の人の話から、伝統的な伊平屋方言を話すことのできる方は60歳以上の方であると思われる。40代～50代まではある程度の会話が可能だが、それ以下の世代になると、聞き取ることはできるが、話すことはできないだろうとのことであった。この話と上の表をもとに伊平屋方言のだいたいの話者数は60歳以上の440人と予想できる。1949年（昭和24年）に名護高等学校伊平屋分校が伊平屋中等学校敷地に併置されたが、1957年（昭和32年）に廃止された。移行、中学校卒業後は進学のために伊平屋島を出なければならず、子どもの進学を期に家族で沖縄島へ引っ越す例も少なくない。また島に戻ってくる人は少ないとのことである。

4 共通語教育と方言教育

昭和33年生の伊平屋出身の方によると、小学校の頃は方言札が使用されており、児童生徒たちが相互に監視し、方言を話した人に札を渡したとのことである。方言札は木札で、「方言札」と書かれており、首にかけるものだった。所持者に掃除や体罰などの罰は特になかった。校内では共通語を使うようにしたが、家に帰ると家族とは方言で会話をした。また、教師が「です・ます・である」ことばを使うように共通語の指導していたが、このように話す居心地が悪かったため、「お前が言ったであるサヘー」「わかるがダールけどさ」のように伊平屋のことばっぽく話していた時期があり、このような伊平屋方言の影響を受けた共通語を「ダルサヘことば」とよんでいたと述べていた方もいた。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

小中学校には民俗伝統文化を学習する日が月に1時間設けられており、工芸、料理、舞踊、方言、三線のなかからひとつ選んで学習することができる。また、年に1度の「伝統文化学習発表会」にて、小中学生が日ごろの学習の成果を島民に報告する機会がある。ただし、方言に関しては、現在、首里那覇方言のみの学習であり、伝統文化学習発表会では生徒が方言で司会をするが、それも首里方言とのことである。

6 方言資料の作成

一つの言語体系としての伊平屋方言を包括的に記述した研究や資料などはこれまでほとんどなく、琉球列島の広域にわたる諸方言について、音韻（アクセント含む）・語彙・活用についての調査がなされた研究のなかで伊平屋方言がとりあげられることが多かった。このなかでも、名護市史編さん委員会（2006）『名護市史本編・10 言語』では、沖縄北部方言内の差異を踏まえた伊平屋・伊是名方言の特徴が述べられており、その位置づけがなされている。

2016年から当委託事業のプロジェクトが始まり、これまで、平良・備瀬（2017）「沖縄県伊平屋方言の名詞の格体系」、崎山・上門（2017）「伊平屋島田名方言の動詞の活用」、當山奈那（2017）「伊平屋島島尻方言のアスペクト・テンス・モダリティ」を報告している。名護市史編さん委員会（2006）や2節で示したように、当該方言は沖縄北部内でも特徴的な音韻現象や文法現象がみられる。できる限り詳細な記述やより多くの言語記録を行うことが望ましい。

なお、本報告のデータは、全て伊平屋村島尻出身／在住の話者2名、H・N（S33年生、男性）、H・S（S7生、男性）への面接調査によるものである。

7 音素表

調査期間で得られた単語数が少ないため、全ての音素は網羅しきれなかった。語頭・語中などの音環境の制限なども詳しく確認することができなかったが、収集した用例を用いて一度整理しておく。

'あ [ʔa]	[ʔadza]	'あざ	(ほくろ)
	[ʔanra:]	'あんらー	(油)
'い [ʔi]	[ʔi:bi]	'いーび	(指)
	[ʔindʒi:]	'いんじー	(とげ)
い [i~ji]	[inaɡu]	いなぐ	(女)
	[kui]	くい	(首)
'う [ʔu]	[ʔutuge:]	'うとうげー	(あご)

	[ʔuranra:]	うらんらー	(外国人)
う [u~wu]	[u:ɖʒi]	うーじ	(さとうきび)
	[kiui]	きうい	(煙)
'え [ʔe]	(未確認)		
え～いえ [e~je]	[je:go]	いえーご	(英語)
	[ʔa:je]	あーいえ	(いや・感動詞)
'お [ʔo]	(未確認)		
か [ka]	[ka:]	かー	(皮)
	[ʃikara]	ちから	(力)
		(語末の例は未確認)	
き [ki]	[ki:]	きー	(毛)
		(語中の例は未確認)	
	[taki:]	たきー	(背丈)
く [ku]	[kuʃi]	くち	(口)
	[ti:ɖʒukumi]	ていーじゅくみ	(こぶし)
	[tabaku]	たばく	(タバコ)
け [ke]	[kenna]	けんな	(腕)
		(語中・語末の例は未確認)	
こ [ko]	(未確認)		
さ [sa]	[sa:]	さー	(足)
	[sa:gi]	さーぎ	(白髪)
		(語中の例は未確認)	
	[kusa:]	くさー	(草)
し [ʃi]	[ʃitʃa]	しちや	(下)
	[ʃinʃinge:]	ちんしんげー	(ひざ)
	[na:ʃi]	なーし	(朝食)
す [su~ʃu]	[sunui]	すぬい	(もずく)
	[kusui]	くすい	(薬)
	[tembusu]	てんぶす	(へそ)
せ [se~ʃe]	(未確認)		
そ [so~ʃo]	[so:ɖʒi]	そーじ	(掃除)
		(語中・語末の例は未確認)	
た [ta]	[taki:]	たきー	(背丈)
	[hataki]	はたき	(畑)
	[manta]	まんた	(額)
ち [ʃi]	[ʃi:]	ちー	(血)
	[ʔitʃika]	いちか	(いつか・副詞)
	[kuʃi]	くち	(口)
つ [tsu]	(語頭・語中の該当例確認できず)		
	[nimutsu]	にむつ	(荷物)

て[te]	[<u>t</u> embusu]	<u>て</u> んぶす	(へそ)
			(語中・語末の該当例確認できず)
と[to]	[<u>t</u> o:]	<u>と</u> ー	(はい・感動詞)
			(語中の該当例確認できず)
	[dʒo: <u>t</u> o:]	じょー <u>と</u> ー	(一番)
てい[ti]	[<u>t</u> i:]	<u>て</u> いー	(手)
			(語中・語末の該当例確認できず)
とう[tu]			(語頭の該当例確認できず)
	[ʔ <u>t</u> utuge:]	う <u>と</u> うげー	(あご)
	[jam <u>t</u> u:]	やま <u>と</u> うー	(本土)
だ[da]	[<u>d</u> a:]	<u>だ</u> ー	(どこ)
			(語中・語末の該当例確認できず)
でい[di]			(未確認)
どう[du]	[<u>d</u> u:]	<u>ど</u> うー	(体)
			(語中・語末の該当例確認できず)
で[de]			(未確認)
ど[do]			(未確認)
な[na]	[<u>n</u> a:fi]	<u>な</u> ーし	(朝食)
	[in <u>a</u> gu]	い <u>な</u> ぐ	(女)
	[han <u>a</u>]	は <u>な</u>	(鼻)
に[ni]	[nitʃ <u>i</u> n]	<u>に</u> ちん	(二斤)
			(語中の該当例確認できず)
	[sawakiφ <u>u</u> :ni]	さわきふー <u>に</u>	(あばら骨)
ぬ[nu]	[<u>n</u> uʃi]	<u>ぬ</u> ち	(命)
	[ʔinn <u>u</u> mi:]	いん <u>ぬ</u> みー	(おでき)
	[mun <u>u</u>]	む <u>ぬ</u>	(ごはん)
ね[ne]	[<u>n</u> e:]	<u>ね</u> ー	(根)
	[φun <u>e</u> :ra]	ふ <u>ね</u> ーら	(この前)
	[tig <u>a</u> ne]	ていが <u>ね</u>	(手伝い)
の[no]	[<u>n</u> o:dʒi]	<u>の</u> ーじ	(つむじ)
			(語中・語末の該当例確認できず)
は[ha]	[han <u>a</u> dʒi]	は <u>な</u> じ	(頭)
			(語中の該当例確認できず)
	[n <u>a</u> h <u>a</u>]	な <u>は</u>	(中)
ひ[hi]	[Hi <u>d</u> ʒi]	<u>ひ</u> じ	(肘)
	[na:Hi <u>n</u>]	なー <u>ひ</u> ん	(もっと・副詞)
			(語末の例確認できず)
ふ[φu]	[φ <u>u</u> :ni]	<u>ふ</u> ーに	(骨)
	[ju:φ <u>u</u> ru]	ゆー <u>ふ</u> る	(おふろ)
	[to:φ <u>u</u>]	とー <u>ふ</u>	(とうふ)

へ[he]	(未確認)		
ほ[ho]	(未確認)		
ば[ba]	(語頭・語末の該当例未確認)		
	[tabaku]	た <u>ば</u> く	(タバコ)
び[bi]	(語頭・語中の該当例未確認)		
	[ʔi:bi]	'いー <u>び</u>	(指)
ぶ[bu]	[bundʒira]	<u>ぶ</u> んじら	(棒)
	[tembusu]	てん <u>ぶ</u> す	(へそ)
	[kubu]	く <u>ぶ</u>	(こぶ)
べ[be]	(語頭・語中の該当例未確認)		
	[ʃimbe:]	ちん <u>べ</u> ー	(つば)
ぼ[bo]	(未確認)		
ぱ[pa]	(未確認)		
ぴ[pi]	(未確認)		
ぷ[pu]	(未確認)		
ぺ[pe]	(未確認)		
ぽ[po]	[ʔippON]	い <u>っ</u> ぽん	(一本)
'ま [ʔma]	[ʔma:]	' <u>ま</u> ー	(馬)
ま[ma]	[maju]	<u>ま</u> ゆ	(眉)
		(語中の該当例未確認)	
	[ʔamma:]	'あん <u>ま</u> ー	(母)
み[mi]	[mimi]	<u>み</u> み	(耳)
	[namira]	な <u>み</u> ら	(涙)
	[ʃimi]	ち <u>み</u>	(つめ)
む[mu]	[munu]	<u>む</u> ぬ	(ごはん)
	[tamun]	た <u>む</u> ん	(薪)
	[ʃimu]	ち <u>む</u>	(肝)
め[me]	[me:]	<u>め</u> ー	(米)
		(語中の該当例未確認)	
	[jamme:]	やん <u>め</u> ー	(病気)
も[mo]	(未確認)		
ら[ra]	(語頭の該当例未確認)		
	[ʔuranra:]	'う <u>ら</u> んらー	(外国人)
	[ʃira]	ち <u>ら</u>	(顔)
り[ri]	(語頭・語中の例確認できず)		
	[gammari]	が <u>ん</u> まり	(いたずら)
る[ru]	(未確認)		
れ[re]	[jure:]	ゆ <u>れ</u> ー	(よだれ)
ろ[ro]	(未確認)		
が[ga]	[ga:tui]	<u>が</u> ーとうい	(シラサギ)

	[hatʃiqatʃi]	はちが <u>ち</u>	(八月)
	[kega]	け <u>が</u>	(けが)
ぎ [gi]		(未確認)	
ぐ [gu]		(語頭・語末の例未確認)	
	[waraqutʃi]	わら <u>ぐ</u> ち	(ぞうり)
げ [ge]		(語頭の例未確認)	
	[mugen]	む <u>げ</u> ん	(叱る・動詞)
	[ʔutuge:]	うとう <u>げ</u> ー	(あご)
ご [go]		(未確認)	
ざ [ɟa]		(語頭・語末の該当例未確認)	
	[ʔaɟa]	'あ <u>ざ</u>	(ほくろ)
じ [ɟʃi]		(語頭の該当例未確認)	
	[bundʒira]	ぶん <u>じ</u> ら	(棒)
	[ʃiɟʃi:]	ふい <u>じ</u> ー	(髭)
ず [ɟu]		(語頭・語中の該当例未確認)	
	[ʃu:ɟu]	ふー <u>ず</u>	(去年)
ぜ [ɟe]		(未確認)	
ぞ [ɟo]	[ɟo:]	<u>ぞ</u> ー	(家の前の道)
		(語中・語末の該当例未確認)	
'や [ʔja]	[ʔja:]	' <u>や</u> ー	(お前)
'ゆ [ʔju]	[ʔju:]	' <u>ゆ</u> ー	(魚)
'よ [ʔjo]		(未確認)	
や [ja]	[jamme:]	<u>や</u> んめー	(病気)
		(語中の該当例未確認)	
	[haja]	は <u>や</u>	(か <u>や</u>)
ゆ [ju]	[ju:]	<u>ゆ</u> ー	(よく・副詞)
	[jure:]	<u>ゆ</u> れー	(よだれ)
	[majju]	ま <u>ゆ</u>	(眉)
よ [jo]		(語頭・語末の該当例未確認)	
	[gajo:ɟʒa]	が <u>よ</u> ーじゃ	(ガヨウ山)
'わ [ʔwa]	[ʔwa:]	' <u>わ</u> ー	(豚)
'うい [ʔwi]		(未確認)	
'うえ [ʔwe]		(未確認)	
わ [wa]	[wata]	<u>わ</u> た	(腹)
	[sawakiʃu:ni]	さ <u>わ</u> きふーに	(あばら骨)
	[ʃiwa]	し <u>わ</u>	(唇)
うい [wi]		(未確認)	
うえ [we]		(未確認)	
ぎゆ [gju]	[ʔaɡju:rai]	'あ <u>ぎ</u> ゆーらい	(感嘆詞)

	(語頭・語末の例未確認)		
しゆ [ʃu~su]	[ʃu:]	し <u>ゆ</u> ー	(父)
しえ [ʃe]	(未確認)		
しよ [ʃo]	(未確認)		
じゃ [ɟʒa]	(語頭の該当例未確認)		
	[undʒami]	うん <u>じゃ</u> み	(海神祭)
	[hadʒa:]	は <u>じゃ</u> ー	(におい)
じゆ [ɟʒu]	(語頭の該当例未確認)		
	[ti:ɟʒukumi]	ていー <u>じゆ</u> くみ	(こぶし)
	[ki:ɟʒu:]	き <u>じゆ</u> ー	(傷)
じよ [ɟʒo]	[ɟʒo:to:]	<u>じよ</u> ーとー	(一番)
	(語中・語末の例未確認)		
ちゃ [tʃa]	[tʃassa]	<u>ちゃ</u> っさ	(いくつ)
	[tintʃama]	ていん <u>ちゃ</u> ま	(いたずら)
	[ʔaʃa:]	'あ <u>ちゃ</u> ー	(明日)
ちゆ [tʃu]	[tʃu:]	<u>ちゆ</u> ー	(人)
	(語中の該当例未確認)		
	[ja:tʃu:]	やー <u>ちゆ</u> ー	(お灸)
ちよ [tʃo]	[tʃo:re:]	<u>ちよ</u> ーれー	(兄弟)
	(語中の該当例未確認)		
	[gantʃo:]	がん <u>ちよ</u> ー	(めがね)
くわ [kwa]	[kwa:ʃi]	<u>くわ</u> ーし	(菓子)
くい [kwi]	(未確認)		
くえ [kwe]	(未確認)		
ぐわ [gwa]	(未確認)		
ぐい [gwi]	(未確認)		
ぐえ [gwe]	(未確認)		
ふあ [ɸa]	[ɸa:]	<u>ふあ</u> ー	(歯)
	[ni:ɸara:]	にー <u>ふあ</u> らー	(胸)
	(語末の該当例未確認)		
ふい [ɸi]	[ɸi:ɟʒi:]	<u>ふい</u> じー	(髭)
	(語中・語末の該当例未確認)		
ふえ [ɸe]	(未確認)		
'ん [ʔŋ~ʔm]	(未確認)		
ん [n~m~ŋ~N]	(語頭の該当例未確認)		
	[tembusu]	て <u>ん</u> ぶす	(へそ)
	[manta]	ま <u>ん</u> た	(額)
	[tʃinʃiŋge:]	ちんし <u>ん</u> げー	(ひざ)
	[tamun]	た <u>む</u> ん	(薪)
っ [k]	(未確認)		

[p]	[ʔippon]	い <u>っ</u> ぽん	(一本)
[s]	[tʃassa]	ちや <u>っ</u> さ	(いくつ)

別紙に一覧表を掲載する。()内は数が少ないもの。

	a	i	u	e	o	a	u	e	o	a	i	e
ʔ	あ [ʔa] /ʔa/	い [ʔi] /ʔi/	う [ʔu] /ʔu/			や [ʔja] /ʔja/	ゆ [ʔju] /ʔju/			わ [ʔwa] /ʔwa/		
		い [i~ji] /i/	う [u~wu] /u/	え [e~je] /e/		や [ja] /ja/	ゆ [ju] /ju/		よ [jo] /jo/	わ [wa] /wa/		
k	か [ka] /ka/	き [ki] /ki/	く [ku] /ku/	け [ke] /ke/						くわ [kwa] /kwa/		
g	が [ga] /ga/		ぐ [gu] /gu/	げ [ge] /ge/			ぎゆ [giu] /giu/					
s	さ [sa~ʃa] /sa/	し [ʃi] /si/	す [su~ʃu] /su/		そ [so~ʃo] /so/							
z	ざ [dza] /za/	じ [ʃi] /zi/	ず [dzu] /zu/		ぞ [dzo~ʃo] /zo/	じゃ [ʃa] /zja/	じゆ [ʃu] /zju/		じよ [ʃo] /zjo/			
t	た [ta] /ta/	てい [ti] /ti/	とう [tu] /tu/	て [te] /te/	と [to] /to/							
c		ち [ʃi] /ci/	つ [tsu] /cu/			ちや [ʃa] /cja/	ちゆ [ʃu] /cju/		ちよ [ʃo] /cjo/			
d	だ [da] /da/		どう [du] /du/									
n	な [na] /na/	に [ni] /ni/	ぬ [nu] /nu/	ね [ne] /ne/	の [no] /no/							
h	は [ha] /ha/	ひ [Hi] /hi/	ふ [ɸu] /hu/							ふあ [ɸa] /hwa/	ふい [ɸi] /hwi/	
b	ば [ba] /ba/	び [bi] /bi/	ぶ [bu] /bu/	べ [be] /be/								
p					(ぽ) [po] /po/							
m	ま [ma] /ma/	み [mi] /mi/	む [mu] /mu/	め [me] /me/								
ʔm	ま [ʔma] /ʔma/											
r	ら [ra] /ra/	り [ri] /ri/		れ [re] /re/								

	ん [m, n, ŋ, N] /N/	っ [p, k, s] /Q/
--	--------------------------	-----------------------

8 名詞の格＝とりたて

用例は簡易的な音声表記を用いる。問題とする文の部分は下線 で示し、格形式やとりたて助辞は「= (ダブルハイフン)」で示す。格やとりたてについての考え方は鈴木重幸 (1972) による。

8.1 島尻方言の名詞の格形式一覧

格とは、「名詞が文や連語のなかで他の単語に対してとることがら上の関係の違いをあらわす文法的なカテゴリー」である。島尻方言には、ハダカ格、ga 格、nu 格、ke:格、ne:格、he:格、hara 格、mari 格、tu 格、kaN 格の 10 の格形式がある。これらは、形式面からの名付けである。それぞれの格形式をとった名詞の文法的な意味をまとめると次の表のようになる。

表 1 島尻方言の形式と意味

形式	意味	用例
ハダカ格	動作や状態の持ち主	tʃu:ja <u>wan</u> itʃunahan. 今日は <u>おれは</u> 忙しい。
	対象	dʒira:=ga bundʒira=ne <u>sanra:</u> tatatʃan. 次郎=が 棒=で <u>三郎を</u> 叩いた。
	側面	anu <u>taki</u> takahanu, makurunu tʃu:ja da:nu tʃu:ga. あの <u>背が</u> 高くて、真っ黒の 人は どのの 人か。
	所有者	ane, <u>wa:</u> kutsu=ja da:=ne ajo:. あれ、 <u>俺の</u> 靴=は どこ=に あるの？
	属性	<u>watta:</u> tamme:=ja saki=N tabuku=N numan. <u>うちの</u> 爺さん=は 酒=も 煙草=も 飲まない。
	うつりうごく空間	juru <u>mitʃi</u> attsu:nu tutʃi=ja habu=ke ki: tʃikiri=jo:. 夜 <u>道を</u> 歩く 時=は ハブ=に 注意しなさい=よ。
	動作や状態がなりたつ時	amma:=ja <u>atsa:</u> jamatu=ke: taro=ke: itʃaŋga itʃu=ntʃa:. 母さん=は <u>明日</u> 東京=へ 息子=に 会いに 行くって。
	呼びかけ	<u>taro:</u> , attʃiŋga=ru indzuri. <u>太郎</u> 、歩きに 行くのか。
述語の要素	aŋju:rai, tabaku=nu suigara=hara <u>kadʒi</u> natantʃa:. アギューライ 煙草=の 吸殻=から <u>火事に</u> なったそうだ。	
ga 格	動作や状態の持ち主	un, jakuba=ke <u>wan=ga</u> itʃu=sa. うん、役場=へ <u>俺=が</u> 行く=よ。
	対象	wan=ja irabutʃa=:nu <u>safimi=ga</u> kamiʃusan. 俺=は イラブチャー=の <u>刺身=が</u> 食べたい。
	側面	taro:ja <u>mi:=ga</u> su:=tu ju ni:jon. 太郎は <u>目=が</u> お父さん=と よく 似てる。
	所有者	unu kutsu=ja <u>taro:=ga</u> kutsuru jairui:. この 靴=は <u>太郎=の</u> 靴なのか？
nu	所有者	aŋju:rai, <u>kadzuko=nu</u> ja:=hara kiui=ga idʒijon=ro:. アギューライ、 <u>カズコ=の</u> 家=から 煙=が 出てる=よ。

格	属性	anu taki takahanu, <u>makuru=nu</u> tfu:=ja da:=nu tfu:ga. あの 目が 大きくて、 <u>真っ黒=の</u> 人=は どこ=の 人か？
ke: 格	あい手	mitʃi=ne ʃo:gakko:=nu <u>ko:tʃo:sense:=ke</u> itʃatan. 道=で 小学校=の <u>校長先生=に</u> 会った。
	態度の対象	bjoin=ne ware:=ga <u>tʃu:ʃa=ke:</u> uturaha ʃu:tan. 病院=で 子供=が <u>注射=に</u> 怯えて いた。
	関係の相手=対象	hanako=ja tʃira=ga <u>amma:=ke</u> ju: ni:jon. 花子=は 顔=が <u>母さん=に</u> よく 似てる。
	くっつけるところ	tamme:=ga <u>hanadzɪ=ke</u> sa:dʒi matʃon. お爺さんが <u>頭=に</u> タオルを 巻いてる。
	ゆくさき	watta: su:=ja kisa <u>hataki=ke:</u> ndʒan. 私の 父=は もう <u>畑=へ</u> 行った。
	ありか	<u>ko:jen=ke</u> uitan=ro:.. <u>公園=に</u> いた=よ。
	原因	dʒira:ja <u>ami=ke</u> indaje:, ja:=ke ke: tʃan. 次郎は <u>雨=に</u> 濡れて、家=へ 帰って 来た。
述語の要素	senkjo=ne su:=ga <u>kutʃon=ke</u> natan. 選挙=で 父=が <u>区長=に</u> なった。	
ne: 格	とりつけるところ	agju:rai, <u>ja:nu ui=ne:</u> u:ru ʃuʃo:sa:.. アギューライ 家の <u>上=に</u> 布団を 干してるぞ。
	受身の相手=動作の主体	dʒira:ja tintʃama he:, <u>tamme:=ne</u> megeraritan. 次郎は いたずらを して、 <u>爺さん=に</u> 叱られた。
	材料	tamme:ga <u>wara=ne</u> dzo:ri anan. お爺さんが <u>藁=で</u> 草履を 編んだ。
	道具	a:je, kabike <u>empitsu=ne:ru</u> katʃanro:.. いや、紙に <u>鉛筆=で</u> 書いたよ。
	手段	ma:mari <u>nu:=ne</u> tʃa:. itʃantu he: tʃan. ここまで <u>何=で</u> 来たの？ どう やって 来たの？
	ありか	<u>gajo:dʒa=neja</u> inoʃiʃiga untero:.. <u>ガヨウ山=には</u> イノシシが いるそうだよ。
	動作や状態がなりたつ場所	<u>bjoin=ne</u> ware:ga tʃu:ʃake: uturaha ʃu:tan. <u>病院=で</u> 子供が 注射に 怯えていた。
	動作や状態がなりたつ時	<u>atʃigatʃi=ne:</u> ke: tʃuntʃa:.. <u>八月=に</u> 帰って 来るそうだ。
原因	dʒira:ja <u>ami=ne</u> indaje:, ja:ke ke: tʃan. 次郎は <u>雨=に</u> 濡れて、家へ 帰って 来た。	
he: 格	材料	tamme:=ga <u>wara=he:</u> dzo:ri anan. お爺さん=が <u>藁=で</u> 草履を 編んだ。
	道具	unu je: <u>borupen=he:ru</u> katʃi. その 絵 <u>ボールペン=で</u> 書いたの？
	手段	arija ki:sa <u>takuʃi=he:</u> tʃan. あいつは さっき <u>タクシー=で</u> 来たよ。

	形態=量	nimutsuga umbahanu, t'ei=he: mutje ndʒan. 荷物が 重たくて、 <u>二人=で</u> 持って 行った。
	原因	agju:rai, tabakunu hi:=he: kadʒi natantʃa:. アギューライ、 <u>煙草の 火=で</u> 火事に なったそうだ。
hara 格	出所	ko:tʃo:ʃinʃiga basu=hara urije: tʃan. 校長先生が <u>バス=から</u> 降りて きた。
	とりはずすところ	ki:ja anu jama=kara tuje: tʃanro:. 木は あの <u>山=から</u> 取って 来たよ。
	相手	hanʃi:=kara/hara otoʃidama tutan. <u>お婆さん=から</u> お年玉を もらった。
	材料	to:ʃuja ma:mi=karanu tsukunro:. 豆腐は <u>大豆=から</u> 作るよ。
	手段	arija ki:sa takuʃi=kara/hara tʃan. あいつは さっき <u>タクシーで</u> 来た。
	出発場所	ma:ga dzo:=kara/hara ja:nu nahake je:tan. ネコが <u>外=から</u> 家の中へ 入った。
	うつりうごく場所	maʃʃira ga:tuiga tin=hara tuno:sa. 真っ白な 野鳥が <u>空=を</u> 飛んでるぞ。
	動作や状態がはじまる時	su:ja atʃa:=kara kutʃo:nu ʃigutu ʃun. 父は <u>明日=から</u> 区長の 仕事を する。
	原因	agju:rai, tabakunu hi:=hararu kadʒi natantʃa:. アギューライ、 <u>煙草の 火=から</u> 火事に なったって。
mari 格	到達場所	iheja=marija ʃunikararu tʃi:. <u>伊平屋=までは</u> 船で 来たのか？
	動作や状態がおわる時	dʒikaŋga aitu, godʒi=mari terebi ma:ni. 時間が あるから、 <u>5時=まで</u> テレビを 見ないか。
tu 格	相手	dʒira:ja sanra:=tu o:tan. 次郎は <u>三郎=と</u> 喧嘩した。
	仲間	kudʒimari tara:=tu ko:miŋkanne uitan. 9時まで <u>太郎=と</u> 公民館に いたよ。
kan 格	比較の対象	tʃu:ja kinnu=kan hadʒi tʃu:han. 今日は <u>昨日=より</u> 風が つよい。

8.1.1 ハダカ格

ハダカ格は、格助辞のくっついていない単語の文法的な形である。島尻方言において、ハダカ格の名詞は、主語、補語、連体修飾語、状況語、独立語として働きながら、それぞれの機能に合わせて、〈動作や状態の持ち主〉、〈対象〉、〈側面〉、〈所有者〉、〈属性〉、〈うつりうごく空間〉、〈動作や状態がなりたつ時〉、〈よびかけ〉といった文法的な意味を表す。

8.1.1.1 〈動作や状態の持ち主〉

ハダカ格の人代名詞、身体名詞、現象名詞が主語として働き、〈動作や状態の持ち主〉を表す。

- (1) nuri ha:tʃe, midʒi ɸusan.
喉 乾いて 水が 欲しい。
- (2) ammajo:rai, ami ɸuje; attʃiguruhanu=ja.
あ、 雨 降って。歩きづらい=ね。
- (3) amma ummi.
お母さん いる？
- (4) tʃu:ja wan itʃunahan.
今日は おれ 忙しい。
- (5) tʃu:=ja kinnu=kan hadʒi tʃu:han=ja:.
今日=は 昨日=より 風 強い=ね。

8. 1. 1. 2 〈対象〉

ハダカ格の物名詞、人名詞が補語として働き、述語になる動詞によってさしだされる動作、活動の〈対象〉を表す。

〈ふれあいの対象〉

- (6) dʒira:=ga bundʒira=ne sanra: tatatʃan.
次郎=が 棒=で 三郎を 叩いた (殴った)。
- (7) amma:=kara sa:dʒi tuje:, du: ɸutʃan.
お母さん=から タオルを とって、 体を 拭いた。

〈とりはずしの対象〉

- (8) sa:ru=ga mikan=nu ki:=hara mi: tuitan.
サルが みかん=の 木=から 実を 取った。
- (9) tamme:=ja ʃikama=kara jama=ke tamun tunʒa indʒan.
爺さん=は 朝=から 山=へ 薪を 取りに 行った。

〈うつつかえの対象〉

- (10) uradza=kara kusui tui ɸun.
裏座=から 薬を 取って 来る。

〈とりつけの対象〉

- (11) tamme:=ga hanadʒi=ke sa:dʒi matʃon.
お爺さん=が 頭=に タオルを 巻いている。
- (12) marune:, haja=ke tʃiburu utʃan.
転んで、柱=に 頭を 打った。
- (13) agju:rai, ja:=nu ui=ne: u:ru ɸuʃo:sa:.
おい、家=の 上=に 布団を 干しているぞ。

〈言語活動の対象〉

- (14) wan=ja kinnu:=ja ʃimbun jumantan.
俺=は 昨日=は 新聞を 読まなかった。

〈やりもらいの対象〉

- (15) ?wa:=nu niku nitʃiN ko:je tʃe: turuhenri.
豚=の 肉を 二斤 買って 来て くないか。
- (16) tara:=ja uttu:=ke kwa:ʃi wakkije: turutʃan.
太郎=は 弟=に お菓子を 分けて あげた。
- (17) hanʃi:=kara otofidama tutan.
お婆さん=から おとしだまを もらった。

〈知覚の対象〉

- (18) hanʃi:=ja nibandza:=ne terebe intʃe: attsun.
婆さん=は 二番座=で テレビを 見て いる。
- (19) hariro:, u:mi intʃiga indʒumi.
晴れたら、海を 見に 行こうか。

〈結果物〉

- (20) dʒira:=ja kabi=ne tsuru tsukutan.
次郎=は 紙=で 鶴を 作った。
- (21) tamme:=ga wara=ne dzo:ri anan.
お爺さん=が 藁=で 草履を 編んだ。

〈欲求の対象〉

- (22) nuri ha:tʃe, midʒi ʃusan.
喉 乾いて、水が 欲しい。

〈能力の対象〉

ハダカ格の物名詞が〈対象〉を表す場合は、他にも、述語動詞にさしだされる能力としての動作・表現活動の対象、言語活動、思考活動の対象など、〈能力の対象〉を表す。

- (23) tara:=ja je:go=nu ʃun jumiʃun.
太郎=は 英語=の 本が 読める。
- (24) hanako=ja iŋkaʃi=kara sanʃin hitʃiʃun.
花子=は 昔=から 三線が 弾ける。

8.1.1.3 側面

ハダカ格の名詞が主語にあらわされる人の部分などの〈側面〉を表す。

- (25) anu taki takahanu, makurunu tʃu:ja da:nu tʃu:ga.
あの 背が 高くて、真っ黒の 人は どの 人か。

8.1.1.4 所有者

ハダカ格の人代名詞が連体修飾語として働き、あとに続く名詞の〈所有者〉を表す。

- (26) ane, wa: kutsuja da:ne ajo:.
あれ、俺の 靴は どこに あるの？
- (27) A : ?ja: bo:ʃi:ja durugahe:.
お前の 帽子は どれだ？

B : uriru janro:.

それだよ。

- (28) unu kasa:ja: wa: munru janro:ja.
その 傘は 俺の 物だよ。

8.1.1.5 属性

ハダカ格の人代名詞が連体修飾語として働き、あとに続く名詞の〈属性〉を表す。

- (29) watta: tamme:ja sakin tabukun numan.
うちの 爺さんは 酒も 煙草も 飲まない。

8.1.1.6 うつりうごく空間

ハダカ格の空間名詞が状況語として働き、述語の移動動詞の動作がおこなわれる〈うつりうごく空間〉を表す。連体的つきそい文、時間的なつきそい文の中では、ハダカ格であらわれている。今後、その調査の必要がある。

- (30) juru mitfi attsu:nu tutfija habuke ki: tfikirijo:.
夜 道を 歩く 時は ハブに 注意しなさいよ。

〈経由〉

- (31) warabiga burokku tunuta.
子供が ブロック塀を 飛んだ (越えた)。

8.1.1.7 動作や状態がなりたつ時

ハダカ格の時間名詞が状況語として働き、〈動作や状態がなりたつ時〉を表す。

- (32) amma:ja atsa: jamatuke: taroke: itfanga itfuntfa:.
母さんは 明日 東京へ 息子に 会いに 行くって。
- (33) watta: ware:ja φu:dzu tfu:gakku:nu jinjinke natan.
俺達の 子供は 去年 中学校の 先生に なった。
- (34) φu:dzu amma:ke natan.
去年 お母さんに なった。
- (35) taruja itfi jamatuhara ke:tfi tfuntega.
太郎は いつ 本土から 帰って 来るって？

8.1.1.8 呼びかけ

ハダカ格の人名詞（固有名詞）が独立語として働き、聞き手への〈呼びかけ〉を表す。

- (36) taro:, attfingaruru indzuri.
太郎、歩きに 行くのか

8.1.1.9 述語の要素

ハダカ格の名詞と natan(なった)などの単語が組み合わせあって、連語述語の要素となる。

- (37) A : nu:hara kadzi natakaja.
何から 火事に なったかなあ。
- B : agju:rai, tabakunu suigarahara kadzi natantfa:.
アギューライ 煙草の 吸殻から 火事に なったそうだ。

8.1.2. ga 格

島尻方言の ga 格の名詞は、主語、補語、連体修飾語、状況語として働き、〈動作や状態の持ち主〉、〈対象〉、〈側面〉、〈所有者〉を表す。

8.1.2.1 動作や状態の持ち主

ga 格の名詞が主語として働く場合は、〈動作や状態の持ち主〉を表す。主語になれる名詞は、人名詞や物名詞や現象名詞など様々である。

- (38) un, jakubake wan=ga itfusa.
うん、役場へは 俺=が 行く。
- (39) džira:=ga bundžirane sanra: tatatfan.
次郎=が 棒で 三郎を 叩いた (殴った)。
- (40) ifa=ga indžetfa:nu kusui nuno:, no:njo:.
医者=が くれた 薬を 飲めば、 治るよ。
- (41) mašfira qa:tui=ga tinhara tuno:sa.
真っ白な シラサギ=が 空を 飛んでるぞ。
- (42) nimutsu=ga umbahanu, t'eihe: mutfe ndžan.
荷物=が 重たくて、二人で 持って 行った。
- (43) ane, ami=ga φu:je tfan.
あ、雨=が 降って きた。
- (44) tfu:ja kinnukan hadži=ga tfu:han.
今日は 昨日よりも 風=が 強い。
- (45) džikaŋ=ga aitu, godžimari terebi ma:ni.
時間=が あるから、5時まで テレビを 見ようね。

8.1.2.2 対象

ga 格の物名詞などが補語として働き、述語になる態度動詞、欲求動詞、評価形容詞の〈対象〉を表す。

〈心が向かっていく対象〉

- (46) taro:ja sunui=ga šitfusa.
太郎は モズク=が 好きだ。
- (47) wanja irabutfa:nu sašimi=ga kamiφusan.
俺は イラブチャーの 刺身=が 食べたい。

〈評価の対象〉

- (48) ?ja:ja sunui=qaru maširi:.. sašimi=qaru maširi.
お前は モズク=が いい? 刺身=が いい?

8.1.2.3 側面

ga 格の名詞は、述語にさしだされる特性を持つ主語の〈側面〉を表す。

- (49) taro:ja mi:=ga su:tu ju ni:jon.
太郎は 目=が お父さんと よく 似てる。
- (50) hanakoja tšira=ga amma:ke ju: ni:jon.
花子は 顔=が 母さんに よく 似てる。

8.1.2.4 所有者

ga 格の名詞は、連体修飾語として働き、あとに続く名詞の〈所有者〉を表す。

- (51) unu kutsuja taro:=ga kutsuru jairui:.
この 靴は 太郎=の 靴なのか？

8.1.3. nu 格

島尻方言の nu 格の名詞は、連体修飾語として働き、〈所有者〉、〈属性〉を表す。

8.1.3.1 所有者

nu 格の名詞は、連体修飾語として働き、あとに続く名詞の〈所有者〉を表す。

- (52) agju:rai, kadzuko=nu ja:hara kiuiga idzjonro:.
アギューライ、カズコ=の 家から 煙が 出てるよ。

8.1.3.2 属性

nu 格の名詞は、連体修飾語として働き、あとに続く名詞の〈特性〉〈材料〉〈所属〉〈内容の指定〉などの〈属性〉を表す。

〈特性〉

- (53) A : anu taki takahanu, makuru=nu tfu:ja da:nu tfu:ga.
あの 目が 大きくて、真っ黒=の 人は どのの 人か？

B : anu tfu:ja wagan wakaranu tfu:.
あの 人は 私も 分からない 人

- (54) urija inaguuttu=nu tfo:re:nu mun jasa.
それは 女=の 兄弟の ものだぞ。

〈所属〉

- (55) jamatu:nu do:butsujenne dzo:ja kirin uje:, midzurahattassa.
本土の 動物園に ゾウや キリン 居て、珍しかったなあ。

- (56) watta: ware:ja φu:dzu tfu:gakku:=nu jinjinke natan.
うちの 子供は 去年 中学校=の 先生に なった。

〈内容の指定〉

- (57) ho:nensai=nu tutfine:ja hanfi:mari mo:tan.
八月踊り=の 時には 婆さんまで 踊った。

- (58) itfantuga. haku=nu nahane: mandzu:ga tfassa ante omojo:.
どうだ、箱=の 中に 饅頭が いくつ あると 思うか？

- (59) je: mitfi=nu mannahaja abunahatu, mitfinu juwakara attfe: ike:.
おい、道=の 真ん中は 危ないから、道の 端から 歩いて 行け。

8.1.4. ke:格

島尻方言の ke:格の名詞は、直接対象、間接対象の補語、状況語として働き、〈相手〉、〈態度の対象〉、〈関係の相手=対象〉、〈くっつけるところ〉、〈ゆくさき〉、〈ありか〉、〈原因〉を表す。

8.1.4.1 相手

ke:格の人名詞が直接対象、間接対象の補語として働き、動作の〈相手〉を表す。
〈直接対象〉

(60) mitʃine jo:gakko:nu ko:tʃo:sense:=ke itʃatan.
道で 小学校の 校長先生=に 会った。

(61) uttu:ga amma:=ke: amaje attsu:tan.
妹が お母さん=に 甘えて いた。

〈間接対象〉

(62) kadzukotu junu kutsu hanako=ken koje: turuʃumi.
カズコのと 同じ 靴を 花子=にも 買って やろうか。

(63) tara:ja uttu:=ke kwa:ʃi wakkije: turuʃan.
太郎は 弟=に お菓子を 分けて あげた。

8.1.4.2 態度の対象

ke:格の生き物名詞、物名詞が直接対象の補語として働き、心理的な態度を表す動詞と組み合わさり、〈対象〉を表す。

(64) juru mitʃi attsu:nu tutʃija habu=ke ki: tʃikiri:jo:.
夜 道を 歩く 時は ハブ=に 気を つけるよ。

(65) bjoinne ware:ga tʃu:ʃa=ke: uturaha ʃu:tan.
病院で 子供が 注射=に 怯えていた。

8.1.4.3 関係の相手=対象

ke:格の人名詞、場所名詞が補語として働き、主語にさしだされる人や場所に対する〈関係の相手=対象〉を表す。

(66) hanakoja tʃiraga amma:=ke ju: ni:jon.
花子は 顔が 母さん=に よく 似てる。

(67) ma:ja u:mi:=ke: tʃikaha:tu, ju:ga ma:han.
ここは 海=に 近いから、魚が うまい。

8.1.4.4 くっつけるところ

ke:格の物名詞が間接対象の補語として働き、くっつけ動詞と組み合わさり、〈くっつけるところ〉を表す。

(68) tamme:ga hanadʒi=ke sa:ʒi matʃon.
お爺さんが 頭=に タオルを 巻いてる。

(69) a:je, kabi=ke empitsune:ru katʃanro:.
アーイー 紙=に 鉛筆で 書いたよ。

8.1.4.5 ゆくさき

ke:格の空間名詞が直接対象の補語として働き、移動動作の〈ゆくさき〉を表す。

(70) ma:gataga surije u:mi=ke uri:je indzunro:.
孫たちが 揃って 海=へ 下りて いくよ。

(71) ma:ga dzo:kara ja:nu naha=ke je:tan.
猫が 外から 家の 中=へ 入った。

(72) watta: su:ja kisa hataki=ke: ndʒan.
私の 父は もう 畑=へ 行った。

(73) A : uttuja ma:=ke ndʒaga.
妹は どこ=へ 行ったのか？

B : ko:jenne uitanro:.
公園に いたよ。

8.1.4.6 ありか

ke:格の場所名詞が状況語として働き、存在、滞在の〈ありか〉を表す。

(74) A : uttuja ma:=ke ndʒaga.
妹は どこ=へ 行ったのか？

B : ko:jen=ke uitanro:.
公園=に いたよ。

(75) A : ?ja:ja itʃikara naitʃi=ke: tʃo:ga.
お前は いつから 本土=に 来てるのか？

B : nidʒu:nemme:kara tʃo:nro:.
二十年前から 来てるよ。

8.1.4.7 原因

ke:格の現象名詞が状況語として働き、動作や状態を引き起こした〈原因〉を表す。

(76) dʒira:ja ami=ke indaje:, ja:ke ke: tʃan.
次郎は 雨=に 濡れて、家へ 帰って 来た。

8.1.4.8 述語の要素

ke:格の名詞が nain (なる) と組み合わさって、連語述語の要素となる例も確認できた。

(77) watta: ware:ja ʃu:dzu tʃu:gakku:nu ʃinʃin=ke natan.
うちの 子供は 去年 中学校の 先生=に なった。

(78) seŋkjone su:ga kutʃon=ke natan.
選挙で 父が 区長=に なった。

8.1.5. ne:格

島尻方言の ne:格の名詞は、間接対象の補語、連用修飾語、状況語として働き、〈とりつけるところ〉、〈受身の相手=動作の主体〉、〈材料〉、〈道具〉、〈手段〉、〈ありか〉、〈動作や状態がなりたつ場所〉、〈動作や状態がなりたつ時〉、〈原因〉を表す。

8.1.5.1 とりつけるところ

ne:格の空間名詞、物名詞が間接対象の補語として働き、とりつけ動作の〈くっつけるところ〉を表す。

(79) agju:rai, ja:nu ui=ne: u:ru ʃufo:sa:.
アギューライ 家の 上=に 布団を 干してるぞ。

(80) matsurinu posuta:ja ko:minʃkan=ne hajotanro:.
祭の ポスターは 公民館=に 貼ってたよ。

8.1.5.2 受身の相手＝動作の主体

ne:格の人名詞が間接対象の補語として働き、〈受身の相手＝動作の主体〉を表す。

- (81) dʒira:ja tintʃama he:, tamme:=ne megeraritan.
次郎は いたずらを して、爺さん=に 叱られた。

8.1.5.3 材料

ne:格の物名詞が間接対象の補語として働き、生産活動の〈材料〉を表す。それなしでは、生産活動の結果物が生まれえないという点で、なくてはならない文の部分である。

- (82) tamme:ga wara=ne dzo:ri anan.
お爺さんが 藁=で 草履を 編んだ。
- (83) dʒira:ja kabi=ne tsuru tsukutan.
次郎は 紙=で 鶴を 作った。※「=hara,=he:」は不可。

8.1.5.4 道具

ne:格の物名詞が間接対象の補語として働き、動作に用いる〈道具〉を表す。ne:格の物名詞が〈道具〉を表す場合では、「書く」「言う」ことを支えるためになくなくてはならないものから、「叩く」のように、動詞そのものが実現するにあたって、それがなくても十分なものである。

- (84) unu je: borupen=ne:ru katʃi.
その 絵 ボールペン=で 書いたの？
- (85) a:je, kabike empitsu=ne:ru katʃanro:.
いや、紙に 鉛筆=で 書いたよ。

8.1.5.5 手段

ne:格の物名詞が間接対象の補語として働き、移動のための〈手段〉を表す。

- (86) ma:mari nu:=ne tʃa:. itʃantu he: tʃan.
ここまで 何=で 来たの？ どう やって 来たの？
- ma:marija basu=ne:ru tʃanro:.
ここまでは バス=で 来たよ。

8.1.5.6 ありか

ne:格の場所名詞が間接対象の補語としてはたらき、人、生き物、物の〈ありか〉を表す。

- (87) A : uttuja ma:ke ndʒaga.
妹は どこへ 行ったのか？
- B : ko:jen=ne uitanro:.
公園=に 居たよ。
- (88) kuʒimari tara:tu ko:miŋkan=ne uitan.
9時まで 太郎と 公民館=に 居たよ。
- (89) gajo:dʒa=neja inoʃiʃiga untero:.
ガヨウ山=には イノシシが いるそうだよ。
- (90) itʃantuga.hakunu naha=ne: mandʒu:ga tʃassa ante omojo:.
どうだ。箱の 中=に 饅頭が いくつ あると 思うか？
- (91) ane, wa: kutsuja da:=ne ajo:.

おい、俺の 靴は どこ=に ある？

8.1.5.7 動作や状態がなりたつ場所

ne:格の場所名詞が状況語として働き、〈動作や状態がなりたつ場所〉を表す。

(92) bjoin=ne ware:ga tʃu:ʃake: uturaha φu:tan.

病院=で 子供が 注射に 怯えていた。

(93) hanʃi:ja nibandza:=ne terebi intʃe: attsun.

婆さんは 二番座=で テレビを 見て いる。

(94) amakiŋge:.. ja:nu naha=ne aʃibaŋke:.. dzo:ke ndʒe:, aʃibe:..

アマキングー、家の 中=で 遊ぶな。 表へ 行って、遊べ。

8.1.5.8 動作や状態がなりたつ時

ne:格の時間名詞、出来事名詞が状況語として働き、〈動作や状態がなりたつ時〉を表す。

(95) hatʃiqatʃi=ne: ke: tʃuntʃa:.

八月=に 帰って 来るそうだ。

(96) ho:nensainu tutʃi=ne:ja hanʃi:mari mo:tan.

八月踊りの 時=には 婆さんまで 踊った。

(97) senkjo=ne su:ga kutʃoŋke natan.

選挙で 父が 区長に なった

(98) ʃi:dza:ja undo:kai=ne itʃibaŋke natan.

兄は 運動会=で 一番に なった。

8.2.5.9 原因

ne:格の現象名詞が状況語として働き、動作や状態を引き起こした〈原因〉を表す。

(99) A : mijaginu tamme: gandzu:i:.

宮城の お爺さん 元気か？

B : φune:ra bjo:ki=ne: ma:tʃan.

この間 病気=で 亡くなった。

(100) dʒira:ja ami=ne indaje:, ja:ke ke: tʃan.

次郎は 雨=に 濡れて、家へ 帰って 来た。

8.1.6. he:格

島尻方言の he:格の名詞は、間接対象の補語、連用修飾語、状況語として働き、〈材料〉、〈道具〉、〈手段〉、〈形態=量〉、〈原因〉を表す。

8.1.6.1 材料

he:格の物名詞が間接対象の補語として働き、生産活動の〈材料〉を表す。

(101) tamme:=ga wara=he: dzo:ri anan.

お爺さん=が 藁=で 草履を 編んだ。

8.1.6.2 道具

he:格の物名詞が間接対象の補語として働き、動作に用いる〈道具〉を表す。he:格の物名詞が〈道具〉を表す場合でも、ne:格と同じように、「書く」ことを支えるためになくても

ならないものから、「叩く」のように、動詞そのものが実現するにあたって、それがなくても十分なものまである。

(102) unu je: borupen=he:ru katʃi.
その 絵 ボールペン=で 書いたの？

(103) dʒira:ga bundʒira=he sanra: tatatʃan.
次郎が 棒=で 三郎を 叩いた (殴った)。

8.1.6.3 手段

he:格の物名詞、抽象名詞、数量名詞が間接対象の補語として働き、移動動作、活動のための〈手段〉を表す。

(104) arija ki:sa takuʃi=he: tʃan.
あいつは さっき タクシー=で 来たよ

(105) uriya ho:qen=he: nu:te jo:.
これは 方言=で 何と 言うの？

8.1.6.4 形態=量

he:格の数量名詞が連用修飾語として働き、〈形態=量〉を表す。

(106) nimutsuga umbahanu, t'ei=he: mutʃe ndʒan.
荷物が 重たくて、二人=で 持って 行った。

8.1.6.5 原因

he:格の現象名詞が状況語として働き、動作や状態を引き起こした〈原因〉を表す。

(107) A : nu:hara kaʒi nattakaja.
何から 火事に なったのかな。

B : agju:rai, tabakunu hi:=he: kaʒi natantʃa:.
アギューライ、煙草の 火=で 火事に なったそうだ。

8.1.7. hara 格

島尻方言の hara 格(kara 格)の名詞は、直接対象、間接対象の補語、状況語として働き、〈出所〉、〈とりはずすところ〉、〈相手〉、〈材料〉、〈手段〉〈出発場所〉、〈うつりうごく場所〉、〈動作や状態がはじまる時〉、〈原因〉を表す。音声的に kara~hara で揺れている。

8.1.7.1 出所

hara 格の場所名詞、物名詞(空間性を持った)が補語として働き、述語にさしだされる出現現象の持主、離れる移動動作の持主の〈出所〉を表す。

(108) agju:rai, kadzokonu ja:=hara kiuiqa idʒijonro:.
アギューライ、カズコの 家=から 煙が 出てるよ。

(109) ko:tʃo:ʃinʃiga basu=hara urije: tʃan.
校長先生が バス=から 降りて きた。

8.1.7.2 とりはずすところ

hara 格の空間・場所名詞、物名詞が間接対象の補語として働き、とりはずし動作の〈とりはずすところ〉を表す。

- (110) ki:ja anu jama=kara tuje: tʃanro:.
木は あの 山=から 取って 来たよ。
- (111) uradza=kara kusui tui φun.
裏座=から 葉を 取って 来る。
- (112) sa:ruga mikannu ki=:hara/kara mi: tuitan.
サルが みかんの 木=から 実を 取った。

8.1.7.3 相手

hara 格の人名詞が間接対象の補語として働き、やりもらい動作の〈与え手〉、〈受身動作の相手=動作の主体〉などの〈相手〉を表す。

〈与え手〉

- (113) hanʃi=:kara/hara otoʃidama tutan.
お婆さん=から お年玉を もらった。
- (114) amna=:kara sa:dʒi tuje:, du: φutʃan.
お母さん=から タオルを もらって、体を 拭いた。

〈受身動作の相手=動作の主体〉

- (115) dʒira:ja tamme=:kara jaɣamahanu. iʃigwa damare:te mugeraritan.
次郎は 爺さん=から 「やかましい。少し 黙れ」と 怒鳴られた。

8.1.7.4 材料

hara 格の物名詞が間接対象の補語として働き、生産活動の〈材料〉を表す。

- (116) teruʃimaja i:nuka:nu midʒi=kara/hara tsurarin.
照島は イヌカーの 水=から 作られる。
- (117) to:φuja ma:mi=kararu tsukunro:.
豆腐は 大豆=から 作るよ。

8.1.7.5 手段

hara 格の物名詞が間接対象の補語として働き、移動動作のための〈手段〉を表す。

- (118) arija ki:sa takuʃi=kara/hara tʃan.
あいつは さっき タクシーで 来た。
- (119) matʃike takuʃiŋkanja basu=hara ike:.
町へ タクシーよりは バスで 行け。

8.1.7.6 出発場所

hara 格の空間・場所名詞が状況語として働き、移動動作の〈出発場所〉を表す。

- (120) ma:ga dzo=:kara/hara ja:nu nahake je:tan.
ネコが 外=から 家の 中へ 入った。
- (121) amanu burokku=kara tune:, sa: uije: ne:N.
あそこの ブロック=から 飛んで(飛び降りて)、足を 折って しまった。

8.1.7.7 うつりうごく場所

hara 格の空間・場所名詞が状況語として働き、移動動作の〈うつりうごく場所〉を表す。

- (122) maffira ga:tuiga tin=hara tuno:sa.
 真っ白な 野鳥が 空=を 飛んでるぞ。
- (123) je: mitfinu mannahaja abunahatu, mitfinu fuwa=kara attfe: ike:.
 おい、道の 真ん中は 危ないから、道の 傍=を 歩いて 行け。

〈うつりうごく場所〉と〈出発場所〉の2つの側面を持った派生的な意味として〈経由場所〉を認めることが出来る。〈経由場所〉は、動作主体が、うつりうごいて通り、離れていく場所を意味している。

- (124) jakubaharaja unu mitfikara tfikahatu, unu mitfi=hara ike:.
 役場からは その 道から 近いから、その 道=を 行け。

8.1.7.8 動作や状態が始まる時

hara 格の時間名詞が状況語として働き、〈動作や状態が始まる時〉を表す。

- (125) su:ja atfa:=kara kutfo:nu figutu φun.
 父は 明日=から 区長の 仕事を する。
- (126) taruja φudzu:=kara jamatunke: ndzo:sa.
 太郎は 去年=から 本土へ 行っている。
- (127) A : ?ja:ja itfikara naitfike: tfo:ga.
 お前は いつから 本土に 来てるのか？
 B : nidzu:nemme:=kara/hara tfo:nro:.
20年前=から 来てるよ。

8.1.7.9 原因

hara 格の現象名詞が状況語として働き、動作や状態を引き起こした〈原因〉を表す。

- (128) A : nu:hara kađzi natakaja.
 何から 火事に なったのかな。
 B : agju:rai, tabakunu hi:=hararu kađzi natantfa:.
 アギューライ、煙草の 火=から 火事に なったって。

8.1.8. mari 格

島尻方言の mari 格の場所名詞や時間名詞は、間接対象の補語、状況語として働き、〈到達場所〉、〈動作や状態がおわる時〉を表す。

8.1.8.1 到達場所

mari 格の場所名詞は間接対象の補語として働き、移動動作の〈到達場所〉を表す。

- (129) A:iheja=marija φunikararu tfi:.
伊平屋=までは 船で 来たのか？
 B : [冗談で返す]
 a:i, je:dze: tfaN.
 アイ、泳いで 来た。
- (130) ma:=mari basune:ru tfi:.
ここ=まで バスで 来たのか？
- (131) A : ma:=mari nu:ne tfa: itfantu he: tfaN.

ここ=まで 何で 来たの? どう やって 来たの?

B : ma:=marija basune:ru tʃanro:.

ここ=までは バスで 来たよ。

8.1.8.2 動作や状態がおわる時

mari 格の時間名詞は状況語として働き、〈動作や状態がおわる時〉を表す。

(132) kudʒi=mari tara:tu ko:miŋkanne uitan.

9時=まで 太郎と 公民館に いたよ。

(133) dʒikanga aitu, godʒi=mari terebi ma:ni.

時間が あるから、 5時=まで テレビを 見ないか。

8.1.9. tu 格

島尻方言の tu 格の名詞は、直接対象、間接対象の補語、主語として働き、〈相手〉、〈仲間〉を表す。

8.1.9.1 相手

tu 格の人名詞は相互的な活動を表す動詞と組み合わせると、文の部分として直接対象の補語として働き、〈相互動作の相手〉を表す。

(134) dʒira:ja sanra:=tu o:tan.

次郎は 三郎=と 喧嘩した。

(135) tʃu:ja itʃinahatu, ?ja:=tu hanafi naran.

今日は 忙しいから、 お前=と 話 できない。

他にも、tu 格の人名詞、生き物名詞は間接対象の補語として働き、述語にさしだされる特性=関係の持主の〈関係の相手〉を表す。

(136) taro:ja mi:ga su:=tu ju ni:jon.

太郎は 目が お父さん=と よく 似てる。

(137) kadzuko=tu hanakoja dufigwa.

カズコ=と 花子は 友達だ。

8.1.9.2 仲間

tu 格の人名詞は主語として働き、動作や状態を共に行った〈仲間〉を表す。

(138) kudʒimari tara:=tu ko:miŋkanne uitan.

9時まで 太郎=と 公民館に いたよ。

8.1.10. kan 格

島尻方言の kan 格の名詞は、間接対象の補語として働き、〈比較の対象〉を表す。

8.1.10.1 比較の対象

kan 格の物名詞は、補語として働き、主語にさしだされる主体に対する〈比較する対象=比較の対象〉を表す。

(139) tʃu:ja kinnu=kan hadʒi tʃu:han.

今日は 昨日=より 風が つよい。

(140) sunui=kanja saʃimi:ja ma:hanro:.
 モズク=よりは 刺身は おいしいよ。

8.2 とりたての形式

〈とりたて〉とは、現実世界の出来事、話し合いの参加者の想定（知識）の中にある出来事と、文の対象的な内容を関係づける〈陳述的なかわり〉を表す文法的なカテゴリーである。〈とりたて〉は、文の本質的な特徴としての陳述性の構成要素であり、〈陳述的な意味〉の一つである。とりたてる対象は、文の部分（主語、補語、状況語）、つきそい文（つづけ文）全体である。標準語を島尻方言に訳していただく面接調査にて用例を得たため、なかには、とりたて助辞以外の形式がとりたてを表現する例もみられた。そのため、とりたて助辞を中心に、ここではひろく「とりたての形式」としている。島尻方言において、現在までに確認できた〈とりたて〉を表現する形は、=ja、=gaja、=N、=gan、=ru、=garu、=bike、=mari、=tanten、uppi、jatinがある。標準語のとりたて助辞との対応と意味を次の表にまとめる。

表2 島尻方言のとりたての形式と意味

島尻方言	標準語	意味
=ja	-は	対比、提題
=gaja	-は	対比
=N	-も	累加、極限、ぼかし
=gan	-も	累加
=ru	-が、こそ	特立
=garu	-こそ	排他強調
=bike	-だけ	限定
=mari	-まで	極限
=tanten	-でも	極限、例示
uppi	-ぐらい、だけ	極限、限定
jatin	-でも	極限

8.2.1 =ja

jaの形をとる単語は、〈対比〉、〈提題〉を表す。

8.2.1.2 〈対比〉

jaの形をとる単語は、同類のものごとを比べていることを前提にして、とりたてていること＝〈対比〉を表現する。平叙文、命令文に現れる。

●平叙文

(141) unu ʃimbun=ja kinnu:=nu mun. ku:=nu mun=ja uri jasa.
 その 新聞=は 昨日=の 物だ。 今日=の 物=は これだ。

(142) sunui=kanja safimi:=ja ma:hanro:.
モズク=よりは 刺身=は おいしいよ。

(143) tʃu:=ja kinnu=kan haɕʒi tʃu:han=ja:.
今日=は 昨日=より 風 強い=ね。

(144) A : unu ɸun miʃenri.
その 本 見せて。

B : naran.

できない。

A : nu:nubike:ruʃiga. tui=ja han=ro:.

見るだけだけど。取り=は しない=よ。

●命令文

(145) unu midʒi:=ja numanʒke. numundero:, uri nume.
その 水=は 飲むな。 飲むなら、 こっちを 飲め。

(146) A : itʃante mugejo: ʃimuga=ja.
どう 叱ったら いいかね？

B : mi: intʃe:ru mugen=ro:.. ti:=ja dzettai indʒohe: naran=ro:.

目を見て 叱るんだ=よ。手=は 絶対 出して いけない=よ。

8.2.1.2 〈提題〉

ja の形の単語は、現実世界の出来事と比べることなく、とりたてていること = 〈提題〉を表現する。平叙文、希求文、質問文に現れる。

●平叙文

(147) tara:=ja je:go=nu ɸun jumiɸun.
太郎=は 英語=の 本が 読める。

(148) hanako=ja iŋkaʃi=kara sanʃin hitʃiɸun.
花子=は 昔=から 三線が 弾ける。

(149) A : anu taki takahanu, makurunu tʃu:=ja da:=nu tʃu:ga.
あの 背が 高くて、 真っ黒の 人=は どこ=の 人か。

B : anu tʃu:=ja wagan wakaranu tʃu:.
あの 人=は 俺も 分からない 人だ。

●希求文

(150) wan=ja irabutʃa:=nu safimi=ga kamiɸusan.
俺=は イラブチャー=の 刺身=が 食べたい。

●質問文

(151) taro:=ja je:go=nu ɸun ju:niɸu:mi:.
太郎=は 英語=の 本 読める？

(152) ja:=ja unu ju wakaimmi.
お前=は この 魚 分かるか。

8.2.2 =g aja

名詞に=gaja を後接させて主語をとりたてる例が 1 例のみみられた。この形をとる単語は、とりたてられた単語とほかの同類のものごとと比べていることを前提にして、とりた

てていること＝〈対比〉を表現する。平叙文に現れている。ふつうの ja との違いについては、今後の課題である。

(153) watta: ja:=nu ma:ga=gaja kundunu undzamine: udui mo:tan.
 うちの 家=の 孫=がは 今度の 海神祭で 踊りを 踊った。

8.2.3 =N

N の形をとる単語は、〈累加〉、〈極限〉、〈ぼかし〉を表現する。

8.2.3.1 〈累加〉

N の形をとる単語は、とりたてられた単語のほかに、同類のものごとがあることを前提にしてとりたてていること＝〈累加〉を表現する。平叙文、命令文、質問文に現れる。

●平叙文

(154) A : ari=bike ϕumirarijo:N.
 あいつばかり ほめられてるよ。

B : ?ja:=N itfika ϕumirarin=jo:.
お前=も いつか ほめられるよ。

(155) A : inaguwarabi=ja kadzi no:ti.
 娘さん=は 風邪 治った？

B : no:tafiga=jo:, tudz=N kadzi hitfan.
 治ったけどね、妻=も 風邪 ひいた。

(156) watta: tamme:=ja saki=N tabuku=N numan.
 うちの 爺さん=は 酒=も 煙草=も 飲まない。

●命令文

(157) A : ne: akkangutu, ?ja:=N iϕigwa tigane he:
 見て いないで、お前=も 少し 手伝いを して。

●質問文

(158) A : oto:=ja ku:=N saki nuno:ti.
 お父さん=は 今日=も 酒 飲んできた？

B : ippai=bike nunutan.
 一杯=だけ 飲んできた。

8.2.3.2 〈極限〉

N の形をとる単語は、とりたてられた単語のほかに、同類のものごとがあり、想定された基準に合わせて、極端なものごとであることを前提にとりたてていること＝〈極限〉を表現する。平叙文、命令文、質問文に現れる。

●平叙文

(159) [自分の子どもの成長について話していて]

A : kisa dzi=ja katfijumi.

もう 文字=は 書ける？

B : warabi:=ja nama urahanu, du:=nu namae=N katfihan=ro:.

子供は まだ 幼くて、自分=の 名前=も 書けない=よ。

narahe: turahana=he:

教えて あげて=ね。

(160) kadzuko=tu junu kutsu hanako=ken koje: turuφun.

カズコ=と 同じ 靴を 花子に=も 買って やる。

(161) [いつも元気なのに、落ち込んでいるので]

A : nu:ga. geŋki nainfi:ga.

なんで? 元気 ないけど。

B : gammari he:=jo, tʃu:=ja amma=karan mugeraritan.

いたずら して=ね、今日=は、母さん=からも 叱られたんだ。

(162) A : uttu:=nu saburo:=ken usararitan.

弟=の 三郎=にも 馬鹿にされたよ。

B : na:hin ʃikkari he:.

もっと しっかり して。

(163) A : hanʃi:, ʃimbun junumbai:.

おばあちゃん、新聞 読むの?

B : gantʃo:=ga are:, gumahanu dʒi=N ju: min=ro:.

メガネ=が あれば、小さい 字=も よく 見えるんだよ。

(164) [料理のし方が分からない若者にむかって]

A : abara:i, uri=N wakaramba:i.

アバライ、これ=も 分からないの?

B : wakaran=sa:.

分からない=なあ。

A : uppigwa: watta: warabi=tanten waran=ro:.

これぐらい、うちの 子供=でも 分かる=ぞ。

(165) A : aʃibiŋga iŋgani.

遊びに 行こう!

B : hassajona:, agijo:rai, da:je, attsun kutu=N naran.

ハッサヨナー、アギョーライ、疲れて、歩く こと=も できない。

数量名詞が-Nの形をとった場合も、〈極限〉の一種を表現していると言える。

(166) A : ma:=ja hatake=ja daidʒo:buri.

そっち=は 畑=は 大丈夫?

B : jattu=jo: kisa tu:ka=N ami φu:ram=ba:jo.

そうなんだよ。もう 10日=も 雨 降ってないよ。

(167) A : tʃu:=ja tʃassa kwa:tʃa.

今日=は いくつ 釣れた?

B : tʃu:=ja t'i:tʃi=N ku:rantan.

今日は 1匹=も 釣れなかった。

不定代名詞が-Nの形をとった場合も、〈極限〉の一種を表現している。

(168) A : tʃu:=ja tʃassa kwa:tʃa.
今日=は いくつ 釣れた？

B : tʃu:=ja nu=N ku:rantan.
今日=は 何=も 釣れなかった。

(169) [忙しそうにしているので]

A : mun=ja tʃantu kano:mi.
ごはん=は ちゃんと 食べてる？

B : ai, a:riro:, ʃikama=kara nu=N kane: ne:n=sa.
アイ、そういえば、朝=から 何=も 食べて ないなあ。

A : tʃantu mun kami=ro: unu utʃi sugu to:rin=ro:.
ちゃんと ごはんを 食べる=よ。その うち 倒れる=よ。

(170) warabi=ga uro:, nu:=N ʃimun.
子供=が いれば、何=も いらぬ。

しかし、いくらか意味が異なっていると考えられるものもある。不定代名詞、疑問詞にとりたて助辞=Nが後接する場合、副詞化が進んでいて、陳述副詞、時間副詞の体系の中で分析する必要があるだろう。

(171) A : nu:=N mafijafi turahahe:.
何でも 好きなものを 選んで。

B : anfe:, uri ko:je ʃimuni.
じゃ、これ 買って いい？

(172) A : dʒira:ja itʃi=N gammaribike he: attsunro:.
次郎は いつも いたずらばかり して いるよ。

B : mugeraŋko: naransaja.
叱らないと いけないなあ。

8.2.3.3 〈ぼかし〉

Nの形をとる単語は、とりたてられた単語のほかに、現実世界のものごとが漠然とあるのを前提にして、とりたてていること＝〈ぼかし〉を表現する。

(173) untunu kutu ʔje:, ʔja:=N dikiran=saja:.
こんな こと 言って、お前=も 意地悪だ=なあ。

8.2.4. =g an

ganの形をとる単語は、とりたてられた単語のほかに、同類のものごとがあることを前提にしてとりたてていること＝〈累加〉を表現する。平叙文に現れる。

(174) A : anu taki takahanu, makurunu tʃu:=ja da:nu tʃu:ga.
あの 背が 高く、 真っ黒の 人=は どの 人か。

B : anu tʃu:=ja wa=gan wakaranu tʃu:.
あの 人=は 俺=がも 分からない 人だ。

8.2.5. =ru

ruの形をとる単語は、ほかの同類のものごとがあるとせず、あるいは、同類のものごとを排他せずに、特に目立たせてとりたてていること＝〈特立〉を表現する。平叙文、質問文（肯否たずね文）に現れている。疑問詞たずねの文には現れなかった。また、とりたてる文の部分は、主語でも補語でも述語でもよい。

●平叙文

(175) A : ʔja:=ja sunuigaru mafiri:. safimigaru mafiri.
お前=は モズクが いい？ 刺身が いい？

B : safimi=ga=ru mafisa.
刺身=が いいぞ。

(176) unu je: borupen=ne:=ru katfi.
その 絵 ボールペン=で 書いたのか。
a:je, kabi=ke empitsu=ne:=ru katfan=ro:.
いや、紙=に 鉛筆=で 書いた=よ。

(177) ma:=mari nu:=ne tja:. itfantu he: tfan.
ここ=まで 何=で 来たの？ どう やって 来たの？
ma:=marija basu=ne:=ru tfan=ro:.
ここ=までは バス=で 来たよ。

(178) to:φu=ja ma:mi=kara=ru tsukun=ro:.
豆腐=は 大豆=から 作る=よ。

(179) A : nu:=hara kadzi natakaja.
何=から 火事に なったのかな。
B : agju:rai, tabaku=nu hi:=hara=ru kadzi natan=tja:.
アギューライ、煙草=の 火=から 火事に なった=って。

(180) A : ja: bo:fi:=ja duruga=he:.
お前の 帽子=は どれだ。
B : uri=ru jan=ro:.
それだ=よ。

(181) unu kasa:=ja: wa: mun=ru jan=ro:ja.
その 傘=は 俺の 物だよね。

(182) A : ari=ja jakuba:ruri:.
あれ=は 役場か？
B : anan. ari=ja gakko:=ru jan=ro:.
ちがう。あれ=は 学校だ。
to:, gakko:=nu fiwa:=ne aifi:=ru jakuba=ro:.
トー、学校=の 傍=に あるのが 役場だ=よ。

(183) A : itfante mugejo: fimuga=ja.
どう 叱ったら いいかね？
B : mi: intfe:=ru mugen=ro:.. ti:=bike:ja dzettai indzohe: naran=ro:.
目を 見て 叱るんだ=よ。手=だけは 絶対 出しては いけない=よ。

●質問文（肯否たずね）

(184) A : ja:=ja sunui=ga=ru mafiri:. safimi=ga=ru mafiri.
お前=は モズク=が いい? 刺身=が いい?

B : safimi=garu mafisa.
刺身が いいぞ。

(185) unu je: borupen=ne:=ru katfi.
その 絵 ボールペン=で 書いたのか。

a:je, kabi=ke empitsu=ne:ru katfan=ro:.
アイエー、紙=に 鉛筆=で 書いた=よ。

(186) A:ihejamarija φunikara=ru tji:.
伊平屋までは 船で 来たのか?

B : [冗談で返す]
a:i, je:dze: tfan.
アイ、泳いで 来た。

(187) taro:., attfinga=ru indzuri.
太郎 歩きに 行くのか

(188) unu φurofiki=ja ja: mun=ru jairui.
この 風呂敷=は お前の 物か。

(189) unu kutsu=ja taro:=ga kutsu=ru jairui:.
この 靴=は 太郎=の 靴なのか。

8.2.6 =g aru

garu の形をとる単語は、とりたてられた単語のほか同類のものごとがあり、その同類のものごとを排他して特に目立たせていることを前提にして、とりたてていること＝〈特立〉を表現する。質問文(同意要求文)に現れている。

(190) anu inagwa:=garu φunto:nu tfuraka:gi jan=ja:.
あの 娘=こそ 本当の 美人だ=ね。

8.2.7 =bike

bike(bika)の形をとる単語は、同類のものごとがある中で、ひとつのものごとについて限定していることを前提にしてとりたてていること＝〈限定〉を表現する。平叙文、質問文に現れている。音声的なヴァリエーションとして bika の形があらわれる。

●平叙文

(191) A : ari=bike φumirarijo:n.
あいつ=だけ ほめられて いるよ。

B : ?ja:=N itfika φumirarin=jo:.
お前=も いつか ほめられるよ。

(192) [生きていく上で必要なものは何か聞かれたとき]

saki=bike aro:., nu:=N jimun.
酒=さえ あれば、 何=も いらぬ。

- (193) kadzuko=ja budo:=nu sani=bike sititan.
カズコ=は ぶどう=の 種=だけ 捨てた。
- (194) jasai kamaŋgutu, niku=bike kane attʃi:, kuje:n=ro:.
野菜を 食べないで、肉=だけ 食べて いると、太る=ぞ。
- (195) [宝くじがあたったことを内緒にしたいので]
A : kunu hanafʃi=ja ta:ŋ=ke jan=ro:.
この 話=は、 誰にも 言うな=よ。
B : ʃi:dza:=bike:ke je:N ʃimuni.
兄ちゃん=だけに 話しても いい？
A : ai, jaguna=keN jan=ro:.
いや、家族=にも 言うな=よ。
- (196) A : asasa: ma:=ne ujo:.
セミは どこ=に いる？
B : anu ki=bikene tumajonu gutu aiʃiga. nuga=ja.
あの 木=だけに とまって いるけど。 何でかね？
- (197) A : je: ne:nri. u:mi=nu i:=bike ami=ga φu:joN.
わ！ 見て！ 海=の 上=だけ 雨が 降っている。
B : ma:=mari tsu:ga=ja.
こっち=まで 来るか=な？
A : φu:hani. hadʒi=ga tʃigaiʃiga.
来ないよね。風=が ちがうんだけど(風向きがちがう)。
- (198) A : oto:=ja ku:=N saki nuno:ti.
お父さん=は 今日=も 酒 飲んだ？
B : ippai=bike nunutan.
一杯=だけ 飲んだ。

●質問文

- (199) A : nu:ga taro=baka: ro:ka=ke: tatʃo:ru.
何で 太郎=だけ 廊下=に 立っているの？
B : tʃikoku he:, takaha:rije:ru=ro:.
遅刻を して、 立たされてるんだ=よ。

8.2.8 =mari

mari の形をとる単語は、とりたてられた単語のほかに、同類のものごとがあり、想定された基準に合わせて、極端なものごとであることを前提にとりたてていること＝〈極限〉を表現する。平叙文に現れる。

- (200) ho:nensai=nu tutʃi=ne:ja hanʃi:=mari mo:tan.
八月踊り=の 時=には 婆さん=まで 踊った。
- (201) A : ami=nu φujo:tabassaja:.
雨=が 降ってたんだなあ。
B : a:sajo:, ami=ne pantsu=mari indaje ne:N.

- アーサヨー、雨=で パンツ=まで 濡れて しまった。
 (202) dʒiro:=ja hamaje:, fatʃo:=mari natan.
 次郎=は 頑張って、社長=まで なった。

8.2.9 =tanten

tanten の形をとる単語は、〈極限〉、〈例示〉を表す

8.2.9.1 〈極限〉

tanten の形をとる単語は、とりたてられた単語のほかに、同類のものごとがあり、想定された基準に合わせて、極端なものごとであることを前提にとりたてていること＝〈極限〉を表現する。平叙文、命令文に現れる。

●平叙文

- (203) [料理のし方が分からない若者にむかって]

A : abara:i, uri=N wakaram=ba:i.
 アバラーイ、これ=も 分からないの？

B : wakaran=sa:.
 分からない=なあ。

A : untunu kutu watta: warabi=tanten waran=ro:.
 こんな こと、うちの 子供=でも 分かる=ぞ。

- (204) untunu mun, in=tanten kaman=ro:.
 こんな もの、犬=でも 食べない=よ。

- (205) kuruma=ga are:, ma:=ke=tanten ingarinʃigaja.
 車=が あれば、どこ=にでも 行けるのになあ。

- (206) A : taro:=ja ʃogatʃi ke: tʃummi.
 太郎=は 正月 帰って くるって？

B : taro:=ja ʃigutu=ga itsunahanu, ʃo:qatʃi=tanten ke:ʃuraran ʃu:dʒi jassa.
 太郎=は 仕事=が 忙しくて、正月=でも 帰れない みたいなんだよ。

●命令文

- (207) tʃikarariʃi=ja nu:=tanten tʃikare:.
 使えるの=は、何=でも 使え。

tanten の形は、さらに進んで、〈ゆずり〉条件的なつきそい文の述語の形にまでなっていると考えられる。

- (208) A : ja: uje:=tanten, daigaku=ke ikanʃun=ro:.
家を 売って=でも、大学=に 行かせる=よ。

8.2.9.2 〈例示〉

tanten の形をとる単語は、とりたてられた単語が、同類のものごとと同じく、選択肢、可能性の一つであることを前提にとりたてていること＝〈例示〉を表現する。平叙文、質問文に現れる。

●平叙文

(209) saki=ja u:ɕi=kara=tantEN tsukurarinro:.
 お酒=は サトウキビ=からでも 作れるよ。

●質問文

(210) A : tu:sagara tfo:nu munu. tʃa:=tantEN numanahe:.
 遠くから 来たのに。 お茶=でも 飲まない？

B : nipe:de:biru.
 ありがとうございます。

8.2.10 uppi

uppi の形をとる単語は、とりたてられた単語のほかに、同類のものごとがあり、想定された基準に合わせて、極端なものごとであることを前提にとりたてていること＝〈極限〉を表現する。平叙文に現れている。uppi 形の単語をもつ文は、話し手の態度として、〈皮肉〉〈なじり〉のような《意味合い》を持っている。

(211) [料理のし方が分からない若者にむかって]

A : abara:i, uri=N wakaram=ba:i.
 アバラーイ、これも 分からない=の？

B : wakaran=sa:.
 分からない=なあ。

A : uppiqwa: watta: warabi=tantEN waran=ro:.
これぐらい、うちの 子供=でも 分かる=よ。

〈限定〉を表していると考えられる用例も、確認できた。

(212) kane: nuinu uppijara:, inmaja:=tu junu munru=ro:.
食べて 寝る だけなら、 犬猫=と 同じ ものだ=よ。

8.2.11 jatin

jatin の形をとる単語は、とりたてられた単語のほかに、同類のものごとがあり、想定された基準に合わせて、極端なものごとであることを前提にとりたてていること＝〈極限〉を表現する。平叙文に現れる。

(213) matsuri=nu hi:=ja juru jatin hanajatfo:N.
 祭=の 日=は 夜でも 賑やかだ。

9. 「おおきなかぶ」伊平屋島島尻方言版

本節では、童話「おおきなかぶ」を伊平屋島島尻方言に訳したものを報告する。グロスの略号は巻末を参照されたい。

- (1) まぎへーぬ かぶ
 “magihe:-nu kabu”
 大きい-ADN カブ
 「おおきなかぶ」
- (2) たんめー=が かぶ ’ういーたん。
 tanme:=ga kabu ?wi:-ta-n.
 おじいさん=NOM カブ.ACC 植える-PST-IND
 おじいさんがかぶを植えた。
- (3) ’あまはぬ ’あまはぬ かぶ=け なれー。
 ?amaha-nu ?amaha-nu kabu=ke nar-e:.
 甘い-ADN 甘い-ADN カブ=ALL なる-IMP
 「あまいあまいかぶになれ。」
- (4) まぎへーぬ まぎへーぬ かぶ=け なれー。
 magihe:-nu magihe:-nu kabu=ke nar-e:.
 甘い-ADN 甘い-ADN カブ=ALL なる-IMP
 おおきなおおきなかぶになれ。」
- (5) ’あまはぬ げんき まんのーぬ
 ?amaha-nu genki mann-o:-nu
 甘い-ADN 元気 たくさん-PROG-ADN
 あまいげんきのよい
- (6) でいてーん まぎはぬ かぶ=が んじ ちゃん。
 dite:n magiha-nu kabu=ga nz-i cj-a-n.
 とても 大きい-ADN カブ=NOM 出る-SEQ 来る-PST-IND
 とてつもなくおおきいかぶがでてきた。
- (7) たんめー=や かぶ ぬずんて ひちゃん。
 tanme:=ja kabu nuz-u-nte hi-cja-n.
 おじいさん=TOP かぶ.ACC 抜く-NPST-QUOT する-PST-IND
 おじいさんはかぶをぬこうとした。

- (8) 'うりひゃー！ はっ！ 'あねひゃー！
 ?urihja: ! haQ ! ?anehja: !
 INTJ INTJ INTJ
 「うんとこしょ！どっこいしょ！」
- (9) 'あんしが、 かぶ=や ぬぎらん。
 ?ansiga, kabu=ja nugir-an.
 だけど カブ=TOP 抜く-NEG
 だけど、かぶはぬけない。
- (10) たんめー=や はんしー ゆね ちゃん。
 tanme:=ja hansi: 'jun-e cj-a-n.
 おじいさん=TOP おばあさん.ACC 呼ぶ-SEQ 来る-PST-IND
 おじいさんはおばあさんをよんできた。
- (11) はんしー=が たんめー ひっぱえー、
 hans:=ga tanme: hippa-e:,
 おばあさん=NOM おじいさん.ACC ひっぱる-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、
- (12) たんめー=が かぶ ひっぱえー、
 tanme:=ga kabu hippa-e:,
 おじいさん=NOM カブ.ACC ひっぱる-SEQ
 おじいさんがかぶをひっぱって、
- (13) 'ありひゃー！ 'うーねーひゃー！
 ?arihja: ! ?u:ne:hja: !
 INTJ INTJ
 「うんとこしょ！どっこいしょ！」
- (14) やしが、 かぶ=や ぬぎらん。
 'jasiga, kabu=ja nugir-an.
 けれど カブ=TOP 抜く-NEG
 けれども、かぶはぬけない。
- (15) はんしー=が 'まーがー ゆね ちゃん。
 hans:=ga ?ma:ga: 'jun-e cj-a-n.
 おばあさん=NOM 孫.ACC 呼ぶ-SEQ 来る-PST-IND
 おばあさんが孫をよんできた。

- (16) 'まーがー=が はんしー ひっぱえー、
 ?ma:ga:=ga hansi: hippa-e:,
 孫=NOM おばあさん.ACC ひっぱる-SEQ
 孫がおばあさんをひっぱって、
- (17) はんしー=が たんめー ひっぱえー、
 hansi:=ga tanme: hippa-e:,
 おばあさん=NOM おじいさん.ACC ひっぱる-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、
- (18) たんめー=が かぶ ひっぱえー、
 tanme:=ga kabu hippa-e:,
 おじいさん=NOM カブ.ACC ひっぱる-SEQ
 おじいさんがかぶをひっぱって、
- (19) 'ありひゃー！ 'うねーひゃー！
 ?arihja: ! ?une:hja: !
 INTJ INTJ
 「うんとこしょ！どっこいしょ！」
- (20) やたんてん、 かぶ=や ぬぎらん。
 'jatanten, kabu=ja nugir-an.
 それでも カブ=TOP 抜く-SEG
 それでも、かぶはぬけない。
- (21) くんどー=や 'まーがー=が 'いぬ ゆね ちゃん。
 kundu:=ja ?ma:ga:=ga ?inu 'jun-e cj-a-n.
 今度=TOP 孫=NOM 犬.ACC 呼ぶ-SEQ 来る-PST-IND
 今度は孫が犬をよんできた。
- (22) 'いぬ=が 'まーがー ひちえー、
 ?inu=ga ?ma:ga: hicj-e:,
 犬=NOM 孫.ACC ひく-SEQ
 犬が孫をひいて、
- (23) 'まーがー=が はんしー ひちえー、
 ?ma:ga:=ga hansi: hicj-e:,
 孫=NOM おばあさん.ACC ひく-SEQ
 孫がおばあさんをひいて、

(24) はんしー=が たんめー ひっぱえー・・・
 hansi:=ga tanme: hippa-e:…
 おばあさん=NOM おじいさん.ACC ひっぱる-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって・・・

(25) 'あんすしが、 なまなまなま、 なま！ ぬぎらん。
 ?ansusiga, namanamanama, nama! nugir-an.
 けれど まだまだまだ まだ 抜く-NEG
 だけれども、まだまだまだ、まだぬけない。

(26) 'いぬ=が まい ゆね ちえー、
 ?inu=ga mai 'jun-e cj-e:,
 犬=NOM ねこ.ACC 呼ぶ-SEQ 来る-SEQ
 犬がねこをよんできて、

(27) まい=が 'いぬ ひっぱえー、
 mai=ga ?inu hippa-e:,
 ねこ=NOM 犬.ACC ひっぱる-SEQ
 ねこが犬をひっぱって、

(28) 'いぬ=が 'まーがー ひっぱえー、
 ?inu=ga ?ma:ga: hippa-e:,
 犬=NOM 孫.ACC ひっぱる-SEQ
 犬が孫をひっぱって、

(29) 'まーがー=が はんしー ひっぱえー、
 ?ma:ga:=ga hansi: hippa-e:,
 孫=NOM おばあさん.ACC ひっぱる-SEQ
 孫がおばあさんをひいて、

(30) はんしー=が たんめー ひっぱえー・・・
 hansi:=ga tanme: hippa-e:…
 おばあさん=NOM おじいさん.ACC ひっぱる-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって・・・

(31) 'あちゃんてん、 かぶ=が ぬぎらん。
 ?acjanten, kabu=ga nugir-an.
 けれども カブ=NOM 抜く-NEG
 なかなか、かぶがぬけない。

- (32) ねこ=が ’えんちゅー ゆね ちゃん。
 mai=ga ?encju: ’jun-e cj-a-n.
 ねこ=NOM ねずみ.ACC 呼ぶ-SEQ 来る-PST-IND
 ねこがねずみをよんできた。
- (33) ’いぬ=が ’まーがー ひっぱえー、
 ?inu=ga ?ma:ga: hippa-e:,
 犬=NOM 孫.ACC ひっぱる-SEQ
 犬が孫をひっぱって、
- (34) ’まーがー=が はんしー ひっぱえー、
 ?ma:ga:=ga hansi: hippa-e:,
 孫=NOM おばあさん.ACC ひっぱる-SEQ
 孫がおばあさんをひいて、
- (35) はんしー=が たんめー ひっぱえー・・・
 hansi:=ga tanme: hippa-e:…
 おばあさん=NOM おじいさん.ACC ひっぱる-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって・・・
- (36) ’うりひゃー！ ’うねひゃー！
 ?urihja: ! ?unehja: !
 INTJ INTJ
 「うんどこしょ！どっこいしょ！」
- (37) やっとう、 かぶ=が ぬぎたん。
 ’jattu, kabu=ga nugi-ta-n.
 やっと カブ=NOM 抜く-PST-IND
 ようやく、かぶがぬけた。

グロス略号一覧

ACC	Accusative	対格	AND	adnominal	連体
ALL	Allative	方向格	IMP	imperative	命令
IND	Indicative	直説法	INTJ	interjection	感動詞
NEG	Negative	否定	NOM	nominative	主格
NPST	non-past	非過去	PROG	progressive	進行
PST	Past	過去	QUOT	quotative	引用
SEQ	sequential	継起	TOP	topic	主題

参考文献

- 言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論』むぎ書房
- 国立国語研究所（1983）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- かりまたしげひさ（2016）「『あたらしい につぼんご』テキストとその解説—第6章くつつき（1）、7章くつつき（2）—」『教育国語4・14』むぎ書房
- かりまたしげひさ（2017）「琉球方言の du のとりたて性—琉球諸語に係り結びはあるか—」
- 崎山拓真・上門梨緒（2017）「伊平屋島田名方言の動詞の活用」『文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 平良尚人・備瀬百合音（2017）「沖縄県伊平屋方言の名詞の格体系」『文化庁委託事業報告書危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』琉球大学国際沖縄研究所
- 當山奈那（2015）「琉球語平安座方言の名詞の格」『国際琉球沖縄論集』第4号,琉球大学国際沖縄研究所
- 當山奈那（2017）「伊平屋島島尻方言のアスペクト・テンス・モダリティ」『国際琉球沖縄論集』第6号,琉球大学国際沖縄研究所
- 名護市史編さん委員会（2006）『名護市史本編・10 言語』名護市役所
- 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語の文法5 第9部とりたて第10部主題』くろしお出版
- 沼田善子・野田尚史（2003）『日本語のとりたて—現代語と歴史的変化・地理的変異』1 くろしお出版
- 沼田善子（2000）「第3章 とりたて」『時・否定ととりたて』岩波書店
- 沼田善子・徐建敏（1995）「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 野田尚史「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 琉球方言研究クラブ（1988）「伊平屋の中止形：田名方言を中心に」『琉大方言』3
- 琉球方言研究クラブ（1989）「伊平屋方言の第三中止形」『琉大方言』4
- 琉球方言研究クラブ（2016）『うるま市与那城屋慶名の名詞の格ととりたて』
- 諸見清吉編・伊平屋村史発行委員会（1981）『伊平屋村史』伊平屋村伊平屋村 HP (<http://www.vill.ihaya.okinawa.jp>)

注記

ⁱ [鈴木重幸（1972）pp.205]

沖縄県座間味村阿嘉島方言

沖縄県座間味村阿嘉島方言

横山晶子（日本学術振興会／国立国語研究所）

1. 言語の概要

1-1. 地理・系統・文化

阿嘉島は、沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉に属する。平成22年9月時点において、世帯数は166戸、人口は279名である¹。農業、漁業のほか、ダイビングを中心とした観光業が島の主要産業となっており、1年に8万人近くの観光客が訪れる。

阿嘉方言は、琉球諸語－北琉球－沖縄－南沖縄方言に属する（琉球方言研究クラブ編1990）。

1-2. 話者と危機度の度合い

今年度聞き取った情報によると、阿嘉方言を話せる世代は80代以上である。60代、70代は、那覇方言等の沖縄本島の方言を知っているものの、阿嘉方言特有の方言特徴を失っている。島民は就学や就業のために沖縄本島移住することが多い。また、島には観光業を中心とした移住者も多いため、共同体を中心とした伝統文化・言語の継承は困難に見える。今回調査を行った80代以上の話者2名も、普段は方言を使わないとっており、言語の状態は非常に危機的といえる。

1-3. 主要な先行研究

公開されているものとしては、琉球方言研究クラブ編（1990）『阿嘉方言の音韻体系』、座間味村史編纂委員会（1989）『座間味村史』の中に方言の収録がある。管見の限り、映像や音声の記録はない。

2. 音韻論

2-1. 音素

琉球方言研究クラブ編（1990）等によって、既に音素目録が提案されているが、報告者の分析では、先行研究よりコンパクトな音素目録になる見込みである。

¹ 座間味村インフォメーション <http://www2.vill.zamami.okinawa.jp/info/zamami.php>

音素を認定するために、(a) ミニマル・ペア (minimal pair) と、(b) 準ミニマル・ペア (Quasi-minimal pairs) を用いる。ミニマル・ペアをなす2語が存在する時、それらの語において異なっている言語音は、語の意味を区別する働きがある、すなわち「弁別的」であるとみなすことができる。このような場合、問題の2つの言語音は別音素に属すると考えることができる。

一方で、問題とする言語音によってのみ対立するミニマル・ペアがない時には、それぞれの言語音の分布環境を考察することによって音素を認定する。以降、2つの言語音が同一環境に現れる言語対を「準ミニマル・ペア」と呼ぶ。ここで「同一環境」とは、語のペアにおいて、少なくとも、問題となる言語音に隣接する音環境が全く同一である環境を指す。準ミニマル・ペアが存在する場合には、両者を別音素として立てる。反対に、2つの言語音の分布が重ならない（相補分布している）場合には、両者が同一音素である可能性を考察する。その際、相補分布した2つの言語音が音声的にも類似していれば「同一音素」とする。

なお、以下に提示するミニマル・ペアの一部の例は、アクセント型も互いに異なる可能性がある。ただし、それらも「準ミニマル・ペア」の資格は備えているため、2つの言語音の弁別性を主張する根拠になる。

2-1-1. 母音

2-1-1-1. 短母音

(1)(2)(3)のミニマル・ペア、および、(4)の準ミニマル・ペアが発見された。このため、5つの母音 [a], [i], [u], [e], [o] は弁別的であると考えられる。これらの音素を、それぞれ /a//i//u//e//o/ と表す。

(1) [a] vs. [i] vs. [u]

[mma] 「馬」, [mmi] 「梅」, [mmu] 「芋」

(2) [e] vs. [u]

wenteu 「ねずみ」, wunteu 「使用人」(琉球方言クラブ 1991)

(3) [e] vs. [i]

kabe 「壁」, kabi 「紙」

(4) [o] vs. [a] vs. [i] vs. [u] vs. [e] (準ミニマルペア, n_#)

tjuno 「角」(琉球方言研究クラブ 1991), tsuna 「綱」(琉球方言研究クラブ 1991), nagani 「背中」, jane 「屋根」(琉球方言研究クラブ 1991), nunu 「布」(琉球方言研究クラブ 1991)

2-1-1-2. 長母音

(5)(6)(7)(8)(9)のミニマル・ペア、及び準ミニマル・ペアが存在することから、それぞれの母音において「短母音」と「長母音」は弁別的であると言える。ただし、長母音と短母音は音質が変わらないため、経済性の観点から、短母音と長母音に別音素を立てるのでは

なく、長母音音素を「短母音音素の連続」と解釈する。すなわち、[a] と [a:] の対立は、/a/ と /aa/ の対立として扱う²。

- (5) [i] vs. [i:]
[ʔi: bi] 「指」, [ʔibi] 「えび」 (琉球方言研究クラブ 1991)
- (6) [u] vs. [u:] (準ミニマルペア, k_b)
[kuba] 「くば」, [ku:ba:] 「蜘蛛」
- (7) [a] vs. [a:] (準ミニマルペア, b_#)
[kuba] 「くば」, [ku:ba:] 「蜘蛛」
- (8) [e] vs. [e:] (準ミニマルペア, g_#)
[juge] 「ゆげ」 (琉球方言研究クラブ 1991), [utuge:] 「顎」
- (9) [o] vs. [o:] (準ミニマルペア, m_#)
[himo] 「ひも」 (琉球方言研究クラブ 1991), [umimo:] 「藻」

2-1-2. 半母音

半母音には [j] と [w] の2つがある。(10) のミニマルペアが存在するため、2つの半母音 [j] と [w] は弁別的である。これらの音素を、それぞれ /j/, /w/ とする。

- (10) [j] vs. [w]
[ʔja:] 「お前」 vs. [ʔwa:] 「豚」
[ju:] 「湯」 vs. [wu:] 「芭蕉」 (琉球方言研究クラブ 1991)

2-1-3. 子音

2-1-3-1. 子音音素

データが不足しており、完全に音素を確定するに至っていないが、子音音素として、/p/[p], /b/[b], /t/[t], /d/[d], /n/[n], /k/[k], /g/[g], /ʔ/[ʔ], /m/[m], /M/[m²], /N/[m~n~ŋ~N], /r/[r], /s/[s~ɕ], /z/[z], /c/[tɕ], /ts/[ts], /h/[h~ç~f] が認められると考えている。以下は、現時点で得られたミニマル・ペアである。

- (11) [tɕ] vs. [n] vs. [m]
[tɕi:] 「血」, [ni:] 「根」, [mi:] 「実」
- (12) [m] vs. [k] vs. [t] vs. [h]
[me:] 「目」, [ke:] 「毛」, [te:] 「手」, [he:] 「尻」

² 音韻的に、長母音が短母音の2つ分であることは、今後アクセントの調査等によって裏付ける必要がある。

- (13) [k] vs. [w] vs. [m]
 [kata] 「肩」, [wata] 「腹」, [mata] 「股」
- (14) [s] vs. [f]
 [sumi] 「脛」, [funi] 「骨」
- (15) [m] vs. [d] vs. [t]
 [maki] 「旋毛」, [daki] 「竹」, [taki] 「背丈」
- (16) [b] vs. [tɕ] vs. [ɕ] vs. [m]
 [kubi] 「首」, [kutɕi] 「口」, [kuei] 「腰」, [kumi] 「米」
- (17) [t] vs. [j] vs. [ɕ]
 [kata] 「肩」, [kara] 「靱」, [kaja] 「萱」
- (18) [n] vs. [k] vs. [w]
 [nara] 「涙」, [kara] 「靱」, [wara] 「藁」
- (19) [ç] vs. [k]
 [çidzi] 「肘」 [kidzi] 「傷」
- (20) [g] vs. [dz]
 [çigi] 「髭」, [çidzi] 「肘」
- (21) [ɕ] vs. [g]
 [muei] 「虫」, [mugi] 「麦」
- (22) [g] vs. [s]
 [gani] 「カニ」, [sani] 「種」

2-1-3-2. /N/ の条件異音

単独でモーラを担う鼻音を音素/N/として立てる。/N/は、後続する子音に調音点が同化する。後続する子音が両唇音 (p, b, m) の時は[m], 後続する子音が歯茎音 (n, s, z, t, d, c) の時は[n], 後続する子音が軟口蓋音 (g, k) の時は[ŋ], 語末では[N]で現れる。これらの鼻音 ([m, n, ŋ, N]) はしたがって相補分布しており、同一の音素に属する条件異音であるとみなすことができる。条件異音の生起は(23)の音韻規則の形で表現することができる。

- (23) /N/ → [m] / _{p, b, m}
 [n] / _{n, s, z, t, d, c}
 [ŋ] / _{g, k}
 [N] / _#

2-1-3-3. /h/ の条件異音

[h] は分布に偏りがあり、_a, _e, _o の環境で現れる。類似の言語音[ç]は_iで現れ、[φ]は_uで現れる。このため、これらの摩擦音（[h, ç, φ]）は相補分布しており、同一の音素に属する条件異音であるとみなすことができる。音素を/h/とし、以下の音韻規則を設定する。

$$(24) \quad /h/ \rightarrow [h] /_{\{a, e, o\}} \\ [ç] /_{\{i\}} \\ [φ] /_{\{u\}}$$

2-1-3-4. /s/ の条件異音

[s] は分布に偏りがあり、[i]の前では現れない(*_i)。一方、類似の言語音[ç]は_iで現れる。このため、これらの摩擦音（[s, ç]）は相補分布しており、同一の音素に属する条件異音であるとみなすことができる。音素を/s/とし、以下の音韻規則を設定する。

$$(25) \quad /s/ \rightarrow [s] /_{\{a, u, e, o\}} \\ [ç] /_{\{i\}}$$

2-2. 音節構造

阿嘉方言の特徴は、母音の他に、鼻子音が音節主音（核）になることである。阿嘉方言の音節構造は(26) のように表すことが出来る。C₁ の位置にはすべての子音音素が、C₂ の位置には、半母音音素（j, w）が入る。C₃ の位置には/N/が入り、C₄ の位置には、/N/または次の音節の C₁ と同じ子音音素が入る。

$$(26) (C_1) (C_2) \{V_1/C_3\} (V_2) (C_4)$$

2-2-1. 頭子音の構造

頭子音（onset）の位置で許される子音連結の組み合わせは、(27) の通りである。C₁ を声門閉鎖音 /ʔ/ が埋めるときには、C₂ を半母音 /j/ または /w/ が埋める³。C₂ を /j/ が埋める時には、C₁ を /k/, /s/, /z/, /n/, /h/ が埋める。C₂ を /w/ が埋める時には、C₁ を /k/ が埋める⁴。

(27) 子音連結

C ₁	C ₂
ʔ	半母音（j, w）
k, s, z, n, h	j
k	w

³ 琉球方言クラブ編（1990）収録の語彙データには、他に声門閉鎖音と鼻音の連続も確認される（[ʔm̄mi:] 「姉」など）。筆者はまだ確認していないが、今後確認する必要がある。

⁴ 琉球方言クラブ編（1990）収録の語彙データには、C₁ を[h]が埋める例も確認される（[gahwara] 「ふけ」）。筆者はまだ確認していないが、今後確認する必要がある。

/ʔ/ が語頭に現れる語と、/kw/の連続を持つ語を以下に挙げる。

(28) /ʔ/が語頭に現れる語

/ʔwaa/ 「豚」

/ʔjaa/ 「お前」

(29) /kw/の連続

/kwee/ 「声」

2-2-2. 音節核の構造

音節核は母音音素または鼻子音音素が担う。核となる母音には (a) 短母音、(b) 長母音 (短母音の連続として捉える)、(c) 二重母音がある。このうち、(c) 二重母音には、前半部と後半部の組み合わせに制限がある。現時点で見つかっている、可能な組み合わせは(30)の通りである。

(30) 二重母音

/ai/ /ai/ 「蟻」、/jurai/ 「涎」、/siibai/ 「尿」、/nai/ 「苗」など

/ui/ /keui/ 「胡瓜」、/mingui/ 「きくらげ」、/kusui/ 「薬」など

母音の他に鼻子音が音節核を担う。(31) の語は全て語頭の鼻子音が核となり、単独で音節を形成している。

(31) 鼻子音が核を担う例

/Nnii/ 「胸」「稻」

/Nna/ 「貝」

/Nnagi/ 「うなぎ」

/Nma/ 「馬」

/Nmi/ 「梅」

/Nmu/ 「芋」

2-2-3. 尾子音の構造

尾子音の位置には、(a) /N/または、(b) 次の音節の頭子音と同じ阻害音である。現時点で見つかっている、(b) 次の音節の頭子音と同じ阻害音として尾子音を埋めることが出来るのは、(32) の子音である。

(32) p, k, t

【引用文献】

琉球方言研究クラブ編 (1990) 『阿嘉方言の音韻体系』 琉球方言研究クラブ.

座間味村史編纂委員会 (1989) 『座間味村史』 座間味村村役場.

沖縄県宮古語大神方言

沖縄県宮古語大神方言

金田 章宏

1 沖縄県宮古島市大神島の概要

以下、2017年1月に出版された『ウプシ 大神島生活誌』をもとに概要をのべる。

大神島は、宮古島の北4キロほどの距離に位置する。最高点は74.4m（宮古島の最高点は約115m）、面積は0.24平方キロ（東京ドーム約5個分）、池間島の約十二分の一ほどの大きさである。かつてはサバニで数時間かけて宮古島に渡っていたが、現在は大神港から島尻漁港まで定期船で15分ほどで着く。2015年1月の伊良部大橋の完成により、宮古島周辺の離島で唯一橋の架かっていない島となった。

大神島は世帯数19戸、男性17人、女性13人の計30人（2015年）が住む。人口のピークは1960年頃で245人が住んでいた。人口の増加にともない、1962年に宮古島中東部の高野集落に18戸が移住した。その後は緩やかに人口が減少している。なお、2018年1月現在の人口は24人で平均年齢は約80歳である。

2 宮古語大神方言の概要

大神方言の話者数は、大神島に住む全員と高野集落に移住したなかの高齢者10人程度（高野地区在住者より）とみられる。大神島については小中学校が2011年に廃校となったこともあって高齢化がさらに進んでいる。

大神方言に関する調査資料や研究論文は、この方言に特徴的な音声・音韻を中心にごくかぎられていて、使用可能な教材等はないにひとしい。また、方言人口も上に述べた状況であり、消滅の危機という点ではもっとも深刻である。

3 人口構成からみた大神方言

小中学校廃校の影響もあって、中年以下の世代が島を離れている。その結果、平均年齢が約80歳という極端な高齢化がおこっている。

4 共通語教育と方言教育

文字資料はみつけることができなかったが、方言話者よりうかがった話をまとめておく。方言札は敗戦後から昭和40年ごろまでおこなわれ、何人かのグループごとに1枚の札が割り当てられたという。学校で方言を使った生徒は方言札を首からかけられ、札をかけられた生徒は他の生徒に無理に方言を使わせて自分の方言札をかけさせた。現在の50代後半ぐらいから80歳ぐらいまでの人たちが経験している。これより下の世代では札の使用

はなく、口頭による指導がおこなわれた。

5 地域コミュニティにおける方言保存活動

方言人口自体の絶対的な少なさと年齢層の極端な偏りとで、方言保存活動はほとんどおこなわれてこなかった。唯一、内部からの方言保存活動的なものとしてあげられるのは、島の住人とその協力者が中心となって出版した『ウプシ 大神島生活誌』(2017)のなかで大神方言をとりあげたことである。(この小冊子は、これまでベールに包まれていた島の祭祀に関わる詳細な記述をおこなったことで、むしろ高く評価されるだろう。)

6 方言資料の作成

大神方言に関する記述には『琉球の方言 宮古大神島』(1977)など、あるていどまとまったものもみられるが、一般向けに公刊されたものはほとんどみられない。そのなかで『ウプシ 大神島生活誌』は島の人たちが読むことを前提に公刊されていて、大神方言語彙のごく入門的なものとしてあげることができる。ただ、読みやすさに重きをおいた結果、表記をかなり単純化することになったのは残念である。

7 音声と音韻

本稿における方言例の表記と音声との関係は以下のとおりである。

○ ϵ は、長母音 ϵ : では基本的にひろいが、短母音はそれよりもややせまくて e に近く、相補分布をなす。ともに ϵ でしめす。

○ 中舌母音は γ 、その無声音は便宜的に S でしめす。

例：pSkak γ 日にち、ik γ musu 動物、 γ ara 鎌、ikS いつ、ffakSsa 鍬は、mkS=nu 道の

○ 母音と組み合わせる音素 k に対して、無声の摩擦音 f をともなう k が存在するが、その表記は kf ではなく kF とする。単独に発音される音素 f と区別するためである。

例：kFfati(くファティ)作ろう。ffati(フ。ファティ)閉めよう。

○ 母音の無声化は「。」で示す。例：び。サス。キ pSsaski ひっばって

○ 促音はすべて、 q や Q ではなく具体的な音素で表記する。また、撥音は音韻的に区別する意味がないと判断される場合のみ、音声は n 以外のばあいでも N を使用する。

例：新聞は siN**bu**na (siN**bu**N=ja から。siN**bu**N=na ではない。)、新聞も siN**bu**N=mai [ʃimbummai]

○ 音調における上昇を [で、下降を] でしめす。(アクセントをしめすものではない。)

○ 方言の対訳はできるだけ逐語訳にしてあるので、共通語として不自然なところもある。また、琉球諸語の強調辞 du に対応する tu の訳には機械的に z をあてている。

以下にトマ・ペラール(2011)「消えてゆく小さな島のことば」(NINJAL フォーラムシリーズ 日本の方言の多様性を守るために)の説明を引用する。

大神方言は宮古の中でもかなり独特で、発音の特徴が目立ちます。その特徴は日本語だけではなく世界の諸言語から見ても非常に珍しいものです。狩俣先生のお話にもありましたが、子音が/p・t・k・m・n・r・v・f・s/の9個しかありません。日本語の共通語や他の宮古方言はだいたい15個くらいはあるのですが、この方言には9個しかなく、おそらく日本列島の中で最も少ないと思います。それに「パ・タ・カ」と「バ・ダ・ガ」の区別がありません。濁音がこの方言にはなく、「開ける」も「上げる」も、両方とも「アキル」と言って、区別がありません。また珍しいのは子音の連続です。日本語にはなかなか子音の連続がありませんが、この方言にはたくさんあります。たとえば「土」のことを「mta」、「人」は「pstu」、「おでこ」は「ftai」、「二日」は「fkska」、「引っ張る」は「sapsks」と言います。

もっとも珍しいのは次の特徴です。普通の言語では「ア・イ・ウ・エ・オ」などのような母音を中心に単語が構成されるのですが、大神方言はその原理に反します。母音がまったくない、または声帯を振動させて発音される音も一切ない単語があります。たとえば「おっぱい」のことは「kss」、「櫛」は「ff」、「作る」は「kff」と言います。これは非常に珍しい特徴で、私の知っている限りでは世界の中でこのような言語は他に2例しかなく、アジアでは他にありません。言語の一般理論にとっても非常に重要なことばなのです。

(「2例」とは、「モロッコのベルベル・Tashlhiyt 語とカナダの Nuxalk (Bella Coola) 語と Heiltsuk-Oowekyala 語」Nuxalk の a に'。(トマ・ペラール「日本列島の言語の多様性」田窪行則(編)2013『琉球列島の言語と文化——その記録と継承——』東京：くろしお出版, pp.81-92))

このように、基本的には「子音が/p・t・k・m・n・r・v・f・s/の9個」である。母音については6個の短母音/i・ε・a・o・u・ɣ/とそれぞれの長母音、それに二重母音 au の計13個であるが、すべての組み合わせがあるわけではない。また、実際の発話や文献には v・f の対立もふくめて、いくつか清濁の例がみられる。共通語からの借用が少なくないが、方言語彙とみられる例も存在する。用例のかぎられる音節は () に入れた。

音節表

i イ	ε /je エ	a ア		u ウ	ɣ い			
	he ヘ							
ki キ	ke ケ	ka カ	ko コ	ku ク	kɣ き	kS き。	kF く	
(gi)	ge ゲ	(ga)		(gu)				(gau)
si シ	se セ	sa サ	(so)	su ス	sɣ し			sau サウ
ri リ	re レ	ra ラ	(ro)	ru ル				
ti ティ	te テ	ta タ	to ト	tu トウ				tau タウ
	(de)	(da)		(du)				
ni ニ	ne ネ	na ナ	no ノ	nu ヌ				nau ナウ
ci チ				cu ツ				cau ツァウ

fi フイ	fɛ フェ	fa ファ		fu フ				
vi ヴイ	vɛ ヴェ	va ヴァ						
pi ピ	pɛ ペ	pa パ	po ポ	pu プ	pɭ ぴ	pS ぴ。		pau パウ
bi ビ	bɛ ベ	ba バ	(bo)	(bu)				
mi ミ	mɛ メ	ma マ	(mo)	mu ム				mau マウ
		ja ヤ	jo ヨ	ju ユ				
		(kja)	(kjo)					
		(gja)						
	sje シェ	sja シャ	(sjo)	(sju)				
				(rju)				
		(nja)						
		cja チャ	cjo チョ	cju チュ				
				(zju)				
		(bja)	(bja)					
	s	n	f	v	m	N ン		

単語の例

『ウブシ 大神島生活誌』からえられた語彙には [] を付した。母音には長短の対立があるが、以下ではまとめてあげておく。

i itaNtu どこにゾ ikS いつ ~ka ira:~かなあ。

(j)ɛ jɛki 駅

a ara:私は ami 雨 ata あした a:ra そと

u unu この uma ここ uta:ɿいた。(動詞いる過去形)

ɿ ɿara 鎌 ɿwu 魚 ɿriru 入れろ。 numtaɿ?(なにを)飲んだ? aɿata 歌わないで

hɛ hɛku 百

ki ma:taki 一緒に kisa さっき iki 行け。 kitati 違う。別だ。 ki:ja きょうは

ke samarata uɿke 冷めないうちに ke:riN 消えない。 fauke:食べるまで sakiNkSke: 酒よりも

ka ikaN 行かない。 karimai あの人も karakaripa 辛いから pi:maka:少ない・少し

ko tapoko たばこ imikoppuka:小さいコップ [ko:nuimmuri 旧暦 3 月以降に潮が大きく引く時期]

ku uriNkuija これ以上は skusku なかなか(~ない) ifku 何歳 ku:来い。

kɿ kɿnu きのうち kunusakɿ このまえ taukɿ じょうずだ。 pakɿ:足を skɿ:切る。

kF kFfaN 作らない。 kFfi fi:ru 作ってくれ。 kF:作る(人) kF:mta:作るのが

kS ikS いつ kSsi 来て ffakSsa 鋏は mkS 道 kakSna かくな。 kS:来る。

gi k.icigi きれいな agi あ!

gɛ gɛNno:玄翁

ga gakkō:学校 tu:atiga:/ti:atiga:それなら
 gu kanagurubo:si 帽子の一種 mukigurubo:si 麦藁帽子 [ju:guaki 竜宮開き:祭祀のひとつ]
 [gau anija:gau アニヤーガウ:屋号のひとつ]
 si naupasinu どんな mi:kSsi 畑3箇所 kamata:si ここまで aNsi:そう・そのように
 se kSsase:ri 作ってくれ。 mi:ssē:N 見ながら asse:N しながら asse:(なにを)する!
 sa saki 酒 sara 皿 asati あさって akSkassa:(これは)熱いよ。
 [so so:mεN そうめん]
 su sunasi.殺した。 sumiru(体を)洗え。 sutiru(鶏の卵が)かえる。 ma:su:塩を
 sɿ sɿnikara 死んでから sɿta:skam 涼しい。 panasɿ 話 masɿ いい。
 sau saukɿ 掃除 saumiN そうめん
 ri pukarikaripa 疲れたから urikatu これが karimai あれも pari:畑を
 re pu:re 同年生 karē:あれは apire:ssuka 呼んだけど skɿre:ramati 切ってください。
 ra pera 帰ろう。 karikara あいつから murai もらった。 ara:私は
 [ro musuroN 虫送り:祭祀のひとつ ro:ろうそく]
 ru marukam 短い。 Nkiru 帰れ。 tarumai だれも pi:ru:ビールを
 ci k.icigi きれいな uci うち・あいだ hacigacu 8月
 cu cuzuki 続けろ。 cuke:つぎは acuke:ɿ 預けてある。 cu:kutu つよく・とても
 cau caukaɿ いい。 cau pStu いい人だ。
 ti tiN お金 tati 立て。 amati.編む。(意志) jakati やがて ti:じゃあ
 te akate:N 私だけが ikate:N 行かない。 asate:あさっては nivte:寝て!(願望)
 ta taru だれ aNta 私たち tinata マガキ貝 manata まな板 katam 蚊
 to imo:to 年下(の女性)だ。 cjo:to:N ちゃんと [to:つの] [nitokami 二斗甕]
 tu tuɿ 鳥 jatujum けんか mitum 女 numitu 飲んだ。 tu:さあ!
 tau taukaɿ いい。 良い。 taupuN 良い。 だいじょうぶ。 [tau 門]
 [de idefuku イデフク:屋号のひとつ]
 da dami だめだ。 おいしくない。 dari iɿ 疲れている。
 [du i:sadu イーサドゥ:7月におこなわれる祭祀のひとつ]
 ni nivvipa 寝れば nē:Nnipa ないから ani 年上(の女性)だ。 ni:ru 炒める。
 nē nē:N ない。 pjaNnē:すわりませんか。 anē:munu:しょうがない! joneNse:4年生
 na sana 笠 ja:nna 家には damina おいしくない m:naka まんなか muna:ものは
 no tanomati 頼む。(意志) gēNno:玄翁 [kinopuja:キノプヤー:屋号のひとつ]
 nu numitu 飲んだ。 kanu あの kɿnu:きのうは ma:nu:そんなに・それほど
 nau nauju なにを
 fi ffi 降れ! ffi 閉めろ。 kFfi 作った。 kai fi:ti 買ってやろう。
 fe kFfē:ri 作ってくれ。 ffē:閉めては(だめ)
 fa ffakSsa 鰻は ivffa 重くは fa:こども fa:N 食べない。
 fu fukuɿ シャコ貝のワタ fukemasukatam うるさかった。 ffuɿ 薬 ffunata カエル
 vi nivvi 寝ろ。 vvi 売った。 kavvitu(帽子を)かぶった。 javvi 壊れた。
 ve nivvē:寝ては(だめ) nivvē:ri.寝てくれ。

va vva あなた・おまえ nivvaN 寝ない。 vvatatam 売らなかった。 va:ta 追わずに
 pi jupi ゆうべ jusarapi ゆうがた mmepi もっと pi:maka:すこし pi:ru ビール
 pe peri 行け。 peꜛ 行く。 pe:pe:はやく perati=pe:m.帰ろうかな。
 pa naupasinu どんな paNtakam いそがしい。 ivkaripa 重いから saki:pa:酒をは
 po tapoko たばこ (～tapako)
 pu upukam 広い。 upuupunu 大きな faupuskam 食べたい。 upu:sa たくさん
 pꜛ pꜛri 座れ。 pSsapꜛja 足の甲 kapꜛ 紙 appꜛtaꜛ 遊んだ。 pꜛ:座る。
 pau pausi 棒で
 pS pStukSsi 畑1箇所 ujakipStu 金持ち pSsui ひろえ。 pS:ma ひよこ
 bi biraf かご
 be tarube:タルベ (某男性の愛称)
 ba gaba:大きな [kꜛ:ba 頭髪に刺す装身具のひとつ]
 bo kanagurubo:si 帽子の一種 mukꜛgurubo:si 麦藁帽子
 [bu kubusꜛmi コブシメ]
 mi numitu 飲んだ。 ami 雨 mikꜛ 水 mi:N いない。
 me meramati めしあがれ。 mme もう umes 箸 kakume:ꜛ つかまえてある。
 ma numati 飲もう。(意志) mmakam おいしい。 ma:taki いっしょに
 mo imo:to 年下だ。(女性について)
 mu kaꜛmunu 買い物 stumuti 朝 murai もらった。 m:mu イモを
 mau mauki ひろった。もうけた。
 ja jaiN やせない。 kꜛja 字は takataiꜛaripa 高いから ja:mmaka 家の孫・内孫
 jo jokoN 横に joisjo よいしょ。 jo:よ。(終助辞) jo:Nna:ゆっくり
 ju jum 読む。 jatujum けんか ti:ju 手を mujukSna 動くな。 ju:kꜛ 4歳
 kja Nkꜛjapu (ニギヤブ・個人名:シマナー、ヤーナー)
 kjo beNkjo:勉強
 [gja upugjaN タカキビ:作物のひとつ]
 sje sjeNsje:先生 nasje:ꜛ 産んである。(結果相) kSsje:ꜛ 来てある。(結果相)
 numatissje:(なにを)飲むの?
 sja imsja 漁師 pa:isja 歯医者 aNsinusjakunna それでも aNsja:そのようには
 sjo joisjo よいしょ。
 [sju sju:お菜 pasjumizjuki 地名のひとつ]
 [rju rju:guaki 竜宮開き:祭祀のひとつ]
 [nja parafunja アイゴ類の魚の一種]
 cja cjapaN 茶碗 maccja 店 mi:cjaki 見苦しい cja:nu 茶が
 cju kacju:カツオ mucju:N 夢中に cju:gakko:中学校
 cjo cjo:to:N ちゃんと・じょうとうに soNcjo:村長 sacjo:社長 [cjo:cjo:チョウチョ]
 [zju pasjumizjuki 地名のひとつ maNzju:パイヤ]
 [bja tubjaN 追い込み漁で使用する網の一種 babja イスズミ科の魚の一種]
 s stumuti 朝 nas pakꜛ 生むはずだ。 ukumtu s 埋める。 tauri s 倒れる。
 n nnama いま ntika どれが in イヌ sun kumata 死ぬ。 suntε:死んで!

f ffaN 降らない。 biraf かご tauf 元気に icuf いとこ f: kata 降りそうだ。
 v vva あなた vvate:N 売らない。 niv kata 寝そうだ。 ivkam 重い。 javvi 壊れた。
 m mma 母親 mmiN 熟さない。 ike:mnu むかしの pikitum 男 m:na みんな
 katam:蚊に
 N ftuN 布団 siNbuN 新聞 ja:Nkai 家へ gεNno:玄翁

8 名詞の格形式

大神方言の名詞の格形式には、ハダカ格(φ格)、ka格、nu格、ju格、N格、Nkai格、Nki格、si格、N(:)si格、sui格、tu格、kara格、kami格、ta:si格がある。子音おわり名詞(蚊:katam)のおもな語形をあげる。

katam=nu=tu] sasi. 蚊がゾ刺した。 katammu=tu] kurusi. 蚊をゾ殺した。(< katam=ju=tu)、katam:=tu] ffai. 蚊にゾ食われた。(< katam=N=tu) (参考: katam]ma [mi:N. 蚊はいない。 < katam=ja)

順に意味用法と例をあげる。

8. 1 ハダカ格(φ格)

名詞のハダカ格は文の部分として、主語、補語(対象語、目的語)、修飾語、状況語、独立語として使用される。また主題をあらわしたり、並立の要素になったりもする。

8. 1. 1 主語

○ひと主語

mma] ata=Nkai to:kjo:=N[kai fa:=u] mi:=[ka] ikS kumata. かあさん(は)あしたに東京へ子どもを見にいく予定だ。

vva] ki:=ja saki:=pa nu[ma]ti? あなた(は)きょうは酒をは飲む?

vva] ju[pe:] i[ta=N=tu utal:]? あなた(は)ゆうべはどこにゾいた?

一人称単数では、ハダカ格: anu、ka格: aka、jaとりたて形: ara:のようにすべて語形がことなるが、二人称単数では、ハダカ格とjaとりたて形がともにvvaとなるようで、音声的にはその区別が困難である。

○もの主語

u[ma: im]=nu maika:=jari[pa juwu mmaka]m. ここは海が近いので、魚(が)うまい。

[unu jara taro:=ka [mu]nu? この鎌、太郎のもの?

8. 1. 2 補語

補語はことからの成立に参加する主語以外のメンバー(広義のモノ)である。このうちハダカ格があらわせるのは直接補語の用法であるが、直接補語自体は基本的にはハダカ格ではなく対格によってあらわされる。

ffu] numata[ka:] nauraN. 薬(を)飲まないと治らない。

ffu] =wu] numi. 薬を飲め。

vva cja:] nu[ma]lti? あなた、お茶飲む?

cja:=u=tu] numi. お茶をゾ飲んだ。

s.ikeN na:]sis. iti:=tu u[ti. 試験(を)やってゾ落ちた。

8. 1. 3 修飾語

量や程度をあらわす。ようすの用例はみられなかった。

m[:na] p[ri i]ri. みんなすわっている。

8. 1. 4 状況語

できことが成立する<とき>をあらわす。

ki:] assu. きょうやれ。

k[nu] m[pe:]tatam. きのう(は)我慢できなかった。

nama u[kite:]N. いま(は)起きない。(意志)

kunusa[k] ite uta:] pStu=nu=tu [zjo:]to:]=jata:]]. このまえ会った人がゾよかった。

ame:] ikS] ffati=ka [i]ra:]. 雨はいつ降るかなあ。

8. 1. 5 独立語 (呼びかけ)

代名詞二人称単数の例 (勧誘) のみで、固有名詞では未確認。

kju:]=ja v[va ma:]taki] saki:] numati. きょうはあなた、いっしょに酒を飲もう。

vva pi:]ru:] numa]ti. [saki:] numa]ti. あなた、ビールを飲もうか。酒を飲もうか。

8. 1. 6 主題

この例は、文の成分としては対格相当の補語であるが、文頭におかれて主題になっている。一般人称なので主語はないが、主題と述語動詞は隣接していない。

unu ffu] munu fau atu=N=tu num]?) この薬、もの食べるあと (食後) にゾ飲むの?

8. 1. 7 ならべ

taro:] ziro:] anu vva 太郎、次郎、私、あなた

8. 1. 8 述語

格の用法ではないが、名詞は述語に使用されるとき、過去形ではコピュラ jata:] (だった) をともなうが、非過去ではハダカ形であられるのが基本である。

cu[ke:]] anu. つぎは私だ。ツは無声化しない。

kama]=nu=[tu] jakuba. あそこがゾ役場だ。bは破裂が弱く p に近い。

v[vata=ka] munu. あなたたちのものだ。

imi=pS]tu=ka:]. 小さい人だよ。

u[pu]=in. 大きな犬だ。

さいごの2例は、語構成的には1単語 (形容詞語幹+名詞) とみるべきだろうが、かざりに対して程度の修飾 (masari) が可能である点で、2単語的でもあるといえる。

kare:] masari upu=pStu. あの人はずっと大きい人だ。

疑問詞の有無にかかわらず、たずねる文の述語になる。

[unu ɾara taro:=ka ɾ[a]ra? この鎌は太郎の鎌か？

ki:=ja naupasi=nu pSka]kɿ? きょうはどういう日？

[ta:ta=ka munu]? だれたちのもの？

8. 1. 9 くみあわせ動詞の要素

- ・～をする (si、asi、nasi)

ka[N]po: [si]=tu uɿ. 風邪(を)ひいてゾいる。風邪してゾいる。(感冒)

aNta=ka] ɾa: go[zju:nɛN]=mai=ta:[sje:] [isja a]si=tu uta:ɿ. うちのおとうさんは 50 年前までは医者(を)してゾいた。

s. ikeN na:]si=s. iti:=tu u[ti] nɛ:N. 試験(を)やってゾ落ちてしまった。

- ・～になる

mmɛ] jusara[pi] nari uri[pa] ika[ti]=pe:m. もう夕方(に)なったから帰ろうかな。

saNzi] naruti=[ka:] peri. 3時(に)なってから帰れ。

assu] muna: [nɛ:N ftu] nari. することはないこと(に)なった。

mmɛ ku:N ftu] nari uɿ. もう来ないこと(に)なっている。もう来なくなっている。

8. 2 ka 格 主格=連体格 1

共通語のガ格、ノ格に対応する。基本的には ka であられるが、ときに ga でもあらわれる。文の部分としては主語、規定語（連体修飾語）になる。人称代名詞、ひと固有名詞、指示代名詞、疑問詞が主語や規定語になるときはこの形をとる。tu とりたて形になっても ka はたもたれる。

8. 2. 1 主語

○人称代名詞

- ・一人称

a[ga vva]=pa [ɾa]ti. 私があなたをしかるよ。

<状況語節の主語>

aka] aɾata uɿ[kɛ:] vva=ka aɾi. 私が言わないうちにあなたが言え。

- ・二人称

v[va=ka taf]kɛ:=si assu. おまえが一人でやれ。

- ・三人称

ka[ri=ka=tu] urusi. あの人がゾ下ろした。

<状況語節の主語>

u[ri=ka] fau[kɛ]=ta:[sje:] fau]na. この人が食べるまでは食べるな。

○ひと固有名詞

ziro:]ka=[tu] taro:=ju sa:ri peri. 次郎がゾ太郎を連れていった。

<状況語節の主語>

taro:=ka] ku:=tauɿ[kɛ] ku:. 太郎が来ないうちに来い。

○指示代名詞

・ ku 系

kuri=ka=tu mmakaŋ. これがゾおいしい。

・ u 系

u[ri]=ka=tu m[makam]=pakŋ [ira]:. これがゾおいしそうだねえ。

・ ka 系

kari=ka=[tu] jakuba. あれがゾ役場だ。b は破裂が弱く p に近い。

○疑問詞

nti=ka=tu m[ma]kaŋ=ka [i]ra:. どれがゾおいしいかなあ。

ja:=nna nti=ka=tu aŋ=ka [i]ra:. 家にはどれがゾあるかなあ。

8. 2. 2 規定語

ひとをあらわす代名詞や固有名詞が基本で、質規定ドンナに対する関係規定ドノの用法にかぎられる。

○人称代名詞

・ 一人称

a[ka] munu=[mai] uri=[tu] junu=sui. 私のものもこれとおなじだ。

aNta=ka u[pu]a: [saki:=mai] numaN. [tapoko:=mai] fkaN. うち(私たち)のじいさんは酒ものまない。たばこものまない。

・ 二人称

n[ti]=ka=[tu] vva=ka sa]na? どれがゾおまえの筈?

v[vata=ka] munu. あなたたちのものだ。

・ 三人称

karita=ka fta:ŋ=[ga] mme jakati [mi:tu=N] naŋ kumata. 彼らの二人がもうやがて夫婦になるよ。

・ 疑問称

[ta:=ka munu]? だれのもの?

[ta:ta=ka munu]? だれたちのもの?

・ ひと固有名詞

[unu ŋara taro:=ka ŋ[a]ra? この鎌、太郎の鎌?

・ ときの状況語

ki:=ka ma:su=[N] assu. きょうのうちにやれ。

(kinug ° a ju: (昨晚) kinu nu ju:ともいう。(『琉球の方言』1977 p.63))

8. 3 nu 格 主格=連体格 2

共通語のガ格、ノ格に対応する。基本的には nu であるが、これの tu とりたて形では N であられることもある。人称代名詞、ひと固有名詞、指示代名詞、疑問詞以外の名詞がこの格になる。

8. 3. 1 主語

○ひと名詞

kutu=tu icuf=nu cju:gakko:=nu siNsi:] =N [nari. 去年ゾいところが中学校の先生になった。

・ nu 格の tu とりたて形

ka[ma=nnal] fa:=nu=tu [ap]pi u₁. あそこでは子どもが遊んでいる。

<規定語節の主語>

isja=nu] turas[ta₁] / fi:[ta₁] ffu₁[u] numti[ka:] na[u]₁=tu su. 医者がくれた薬を飲めば、なおろずする。

○その他の名詞

jupi=tu ami=nu] ffε:ɿ. ゆうべゾ雨が降ったようだ。降ってある。(結果相)

hana[ko:] mma=Nsi=[tu] mipana=nu [ni]ti i₁. 花子はかあさんにゾ顔が似ている。

・ nu 格の tu とりたて形

imi=a] mi=ka:=nu=[tu] ffi i₁. 小雨がゾ降っている。

ti:=nu=[tu] jamkata₁. 手がゾ痛かった。

nti=nu] ka:su=N=tu mmaka₁=ka [i]ra:. どのお菓子がゾおいしいかな。

unu] pSkak₁=nu=[tu] zjo:to:. この目にちがゾいい。カレンダーを見て。

kari=ka kSta₁] pa:=nu=[tu] zjo:to:. あの人が来た時がゾいい。

<従属節の主語>

k₁nu:] ka[ti=nu] usi iri=[tu] funε: [ku:]tata₁. きのうは風が吹いていたからゾ、船は来なかった。

unu ni:=nu ivkaripa futa:ɿ=si muti kS[ta₁. この荷物が重かったので、二人で持ってきた。

ka[nama₁=nu] jamkaripa=tu ju[kui] uta:ɿ. 頭が痛いからゾ、休んだよ。

・ nu 格の te:N とりたて形

saki=nu=[te:N] a₁]ti[ka: na]u=[mai] iraN. 酒がだけあれば、なにもいらない。

<規定語節の主語>

ami=nu] f: pa:=n[na] u[pu]m[ma:] terebi:=te:N=[tu] mi: u₁. 雨の降るときには、ばあさんはテレビをだけゾ見ている。

kanu mi:] =nu u[puupu=nu ssu pikitum[ma ta]ru? あの目の大きい、(色の)白い男はだれ?

im=[nu] mai[ka₁] t. ukuma=nu=[tu tau]ka₁. 海の近いところがゾいい。

<受動文の主語>

iskak₁=nu=[tu] kumai u₁. 石垣がゾ組まれている。

8. 3. 2 規定語

○関係規定

ziro:=ja ututu=nu saburo:=sui=[tu] jatujum[mu] asi. 次郎は弟の三郎とゾけんかをした。

mkS=nu] m:nakao [a₁]kS[na. 道のまんなかを歩くな。

kama=[nu] pari=ta:[si] a₁]ka:. あその畑まで歩こう。

nnama=nu] k₁pun[na] a[me:] ffaN. いまの時期は雨は降らない。

ki:=nu] terebe: umussuffa ne:Nni[pa] mi:]te:N. きょうのテレビはおもしろくはないから見ない。

○質規定

ɣwu]=ju:=[mai] ikɣmusu=nu miu=nu=tu mmakam. 魚よりも動物の肉がゾおいしい。
 (魚に対する肉の方言はない。ikɣmusu は動物。miu は肉全般。)
 ara: taku=nu] namassu=tu [fau]puskam. おれはタコの刺身をゾ食べたい。
 ja:u=nu] pa:=n[na] upumma=mai=tu [pu]turi. お祝いのときにはばあさんもゾおどった。

8. 4 ju 格 対格

共通語のヲ格に対応する。名詞末の音によって語形が変わるので、1. 形態、2. 意味用法の順にのべる。

8. 4. 1 語形のタイプ (膠着か融合か)

長母音と二重母音おわりの名詞には ju~u が膠着する。ɣ 以外の短母音おわりの名詞では ju との融合がおこる。また子音おわりの名詞では子音が重複して母音 u でおわる。

○長母音 ~V:+ju > ~V:=ju

・ ~i:+ju

u[nu] ni:=[ju ja:]ta:[si] katami i[ki] fi:ru. この荷物を家までかついで行ってくれ。
 ti:=ju] sumiru. 手を洗え。

・ ~a:+ju

cia:=ju=[uɣ] saki=nu=tu masɣ. 茶をより酒がいい。

mma] ata=Nkai to:kjo:=N[kai fa:=u] mi:=[ka] ikS kumata. かあさん(は)あしたに東京に子どもを見にいく (予定だ)。

・ ~o:+ju

ka[N]po:=ju [si]=tu uɣ. 風邪をひいてゾいる。感冒をしてゾいる。

ta[ro:=ju sa:]ri ku:. 太郎を連れてこい。

・ ~ɣ:+ju

kɣ:=ju=[tu] kaki iɣ. 字をゾ書いている。

kɣ:=u] kakati. 字を書く。書こう。意志

○二重母音 ~V₁V₂+ju

[vva nau=ju numati]? あなた、なにを飲む?

nau]=ju=[tu kaki iɣ? なにをゾ書いている?

動名詞(格語形になる)~名動詞(格支配をする)の例をあげておく。

pa[ri:] sau=[u] jukui. 畑をするのを休め。スルヲ

mu[nu:] fau=ju [na]mari. ものを食べるのをやめろ。スルヲ

mu[nu:] fau=ju=[pa: na]mari. ものを食べるのをはやめろ。スルヲバ

このように、さきだつ名詞に対しては対格で格支配して動詞的にふるまいながら、つづく動詞に対しては対格となって名詞的にふるまう。入れ子構造か。

以下は、形式名詞による名詞化の例である。

ka[kɣ] munu: [na]mari. 書くのをやめろ。

fau] munu:=[pa: na]mari. 食べるのをはやめろ。

○短母音 ~CV+ju > いろいろ

・ ~i+ju > ~i: (i=i ではない)

pa[ri:] sau=u=[pa: juku]i. 畑をするのを休め。

sa[ki:] numi. 酒を飲め。

u[ri:]=pa: [ka:]ti. これをは買う。意志

u[nu] uwagi:=du uk₁na:=N nisjeNεN=si kau[ta₁]. この上着をゾ沖縄で二千円で買った。

・ ~a+ju > ~au (a=u ではない)

kazuko=[tu] junu=Nsi=[nu] astau hanako=N=mai [kai] fi:ti. 和子とおなじ下駄を花子にもかつてやろう。

minakau sauk₁ assu. 庭を掃除しろ。

uma=nu] sakau [nu]uri. ここの坂をのぼれ。

astau] humi] mi:ru. 下駄をはいてみる。

・ ~u+ju > ~u: (u=u ではない)

pa[ri:] sau munu: namari. 畑をするのをやめろ。

pak₁:=tu] jamasi=tu ju[kui] uta:ɣ. 足をゾ病んでゾ休んでいた。病ませゾ?

pi:ru:] numa[ti]=pe:m. [saki:] numa[ti]=pe:m. ビールを飲もうかな。酒を飲もうかな。

cuke: taru: sa:ri ika]ti? つぎはだれを連れていこうか?

・ ~ɣ+ju > ~ɣ=wu、~ɣ=ju、~ɣ:

kap₁=wu] pSsui. 紙をひろえ。

ɣ[wu]kSsuma:ɣ=ju=[tu] asi iɣ. 魚釣り仕事をゾしている。

pu[kari]kare: mi[k₁]] numa. 疲れたから水を飲もう。

○子音 ~C+ju > ~CCu

・ ~f+ju > ~ffu

biraffu=[tu] kFfi. かごをゾ作った。

・ ~m+ju > ~mmu (m=mu ではない)

ziro:=ja ututu=nu saburo:=sui=[tu] jatujum[mu]] asi. 次郎は弟の三郎とゾけんかをした。

動名詞～名動詞

sa[ki:] nummu=[pa: na]mari. 酒を飲むのをはやめろ。スルヲバ

・ ~N+ju > ~nnu (n=nu や N=nu ではない)

icuf=nu=tu] ja:=nu wa:pu=N ftunnu [pu]sje:ɣ. いとこがゾ家の屋根に布団を干してある。

unu] hunnu jumi. この本を読め。

・ ~s+ju > ~ssu (s=su ではない)

ara: taku=nu] namassu=tu [fau]puskam. おれはタコの刺身をゾ食べたい。

u[nu] mkSsu=ka[ra] a₁ki. この道をから歩け。

動名詞～名動詞

pa[ri:] assu=[pa:] namari. 畑をする(の)をはやめろ。スルヲバ

k₁] kakSsu [na]mari. 字を書く(の)をはやめろ。スルヲ

○ ~jupa:

ヲバに対応する。とりたてのか。pa:があると、より強める感じになる。

・ ~(j)u=pa:

aNta=ka] mma[k₁] maNzju:=ju=[pa: ka:]]=u=te:N=tu [fau. うちの孫はまんじゅうを皮をだけゾ食べる。

vva] unu ɣwu=nu na:=u=pa: s. isi=[tu uɣ]? おまえはこの魚の名まえをは知ってづいるか。

・ ~V:=pa:

u[nu] mikɣ:=pa:] numna. その水をは飲むな。

uri:pa:] stiNna. これをは捨てるな。

・ ~nnu=pa:

a[ra:] kɣnu: siNbunnu=[pa:] [ju]matatam. おれはきのうは新聞をは読まなかった。

・ ~mmu=pa:

ara:] m:]mu=[pa:] [fa:N. おれはさつまいもをは食べないぞ。

・ ~ssu=pa:

u[nu] panassu=[pa:] tukɣ=N=tɛ:N=[tu] ssasi. その話をは妻にだけづ聞かせた。

○ ~pa:

以下の2例目以降はユ対格形の長音をききもらしていることもかんがえられるが、少なくともはじめの例は pa:のまえが無声化しているので、対格形とみるよりはハダカ形のこの形とみるのが妥当だろう。

i[cuf[fa] ɛ:go=no [si]mkS=pa:] [ju]m=tu [su. いここは英語の本をは読みづする。

fau] munu=pa:] [m:na]=tu [fai. 食べるものをはぜんぶづ食べた。

aN[sinu] munu=[pa] taru=[mai] k. akaN. そんなものをはだれも書かない。

u[ri=pa:] fa:tɛ:N. ku[ri=pa:] fa:ti. これをは食べない。 これをは食べる。私は。

8. 4. 2 意味用法

直接補語になる。

○動作の直接的な対象をあらわす

・はたらきかけをうける対象

u[nu] ni:=ju ja:] =ta:[si] katami i[ki] fi:ru. この荷物を家までかついで行ってくれ。

ti:=ju] sumi ku:. 手を洗ってこい。

sata=N] ma:[su: su]liru. 砂糖に塩を混ぜろ。

icuf=nu=tu] ja:=nu pana=N/wa:pu=N] ftunnu [pu]sje:ɣ. いここがづ家の屋根に布団を干してある。

astau] humi] mi:ru. 下駄をはいてみる。

・つくりだす対象

kɣ:] =ju=[tu] kaki iɣ. 字をづ書いている。

biraffu=[tu] kFfi. かごをづ作った。

tukɣ=N] ju:ɣu=[pa:] kFfasi. 妻に夕飯をは作らせる。

・やりとりする対象

u[nu] uwagi:=du] ukɣna:=N nisje:NɛN=si kau[taɣ. この上着をづ沖縄で二千元で買った。

kazuko=[tu] junu=Nsi=[nu] astau hanako=N=mai [kai] fi:ti. 和子とおなじ下駄を花子にも買ってやろう。

uri=[pa:] taro:=ka=tu [fi:. これをは太郎がづくれたよ/やったよ。

・知覚・認識活動の対象

mma] ata=Nkai to:kjo:=N[kai fa:=u] mi:=[ka] ikS kumata. かあさん(は)あしたに東京へ

子どもを見にいく (予定だ)。

ami=nu] f: pa:=n[na] u[pu]=m[ma:] tɛrɛbi:=tɛ:N=[tu] mi: uɿ. 雨が降るときには、ばあさんはテレビをだけズ見ている。

uri=[pa:] ju[kɛ:] nɛ:N. これをはあまり好きじゃない。人もものも。否定のみか。

vva] unu ɿwu=nu na:=u=pa: s. isi=[tu uɿ? おまえ(は)この魚の名まえをは知ってズいるか？

・言語・思考活動の対象

unu] hunnu jumi. この本を読め。

a[ra:] kɿnu: siNbunnu=[pa: [ju]matatam. おれはきのうは新聞をは読まなかった。

u[nu] panassu=[pa:] tukɿ=N=tɛ:N=[tu] ssasi. その話をは妻にだけズ聞かせた。

[uNnu] pS:su passiNna. その時の日を忘れるな。

・再帰的 ～を病む (病ます?)

pakɿ:=tu jamasi=tu ju[kui] uta:ɿ. 足をズ病んでズ休んでいた。

ti:=ju=[tu] jamasi ju[kui] uta:ɿ. 手をズ病んで休んでいた。

○動作のかかわる場所

・とおりゆく場所

uma=nu] sakau [nuuri] mi:ru. ここの坂をのぼってみな。

mkS=nu] m:nakao [aɿ]kɿ[na. 道のまんなかを歩くな。

○形式的な意味をあらわす動詞とくみあわさって実質的な内容になう

・具体名詞 (動作名詞)

ziro:=ja ututu=nu saburo:=sui=[tu] jatujum[mu] asi. 次郎は弟の三郎とズけんかをした。

skamau] assu. 仕事をしろ。

ka[N]po:=ju [si]=tu uɿ. 風邪をひいてズいる。感冒をしてズいる。

・動名詞(格語形になる)? ~名動詞(格支配をする)?

kɿ:] kakSsu [na]mari. 字を書く(の)をやめろ。スルヲ

pa[ri:] sauu=[pa: juku]i. 畑をする(の)をは休め。スルヲバ

sa[ki:] nummu=[pa: na]mari. 酒を飲む(の)をはやめろ。スルヲバ

8. 5 N 格 与格

ni を出自とするとみられるが、~ni であられることはない。~N おわりの名詞もそれに N がついて、N : となる。

ure: ikS=tɛ:] nɛ:[ta:] itiN. [kɿpu]N:=[tu] iti iɿ. これ(お化け)はいつとはなしには出ない。(決まった)時間帯 (時分)にズ出ている。いつでも出るわけではない。

pari:] asuN:=[tu zjo:]to: 畑をやる(の)にズいい。

この方言では、共通語のデ格があらわす意味を N 格や si 格がになっているが、このうち道具や手段、動作のおこなわれる場所などの意味を N 格がになっている。道具や手段の意味では si 格と連続し、動作のおこなわれる場所の意味では移動の有無で Nki 格とすみわけ。共通語のデ格にちよくせつ対応する格形式はない。

8. 5. 1 間接補語

○やりとりのあいて

u[ri:=pa:] taro:=N [fi:]ru. これをは太郎にや^て。あげて。依頼

kazuko=[tu] junu=Nsi=[nu] astau hanako=Nmai [kai] fi:ti. 和子とおなじ下駄を花子にも買ってやろう。

○道具、手段

u[nu] sara=N fai. この皿で食べろ。(これをシ格=具格にすると、器の意味ではなく、まさに皿ですくうという道具になる)

u[nu] maka=N fai. このお椀で食べろ。

u[ma]=N u[ri]=N u[ri:] fai. ここで(場所)これで(道具=器)これを食べろ。

○受動や使役の対象=動作の主体

・受動文の動作の主体

saburo:=ja ziro:=N=[tu] pau=si tatakai. 三郎は次郎にゾ棒でなぐられた。

ziro:=ja] upuqa=N=[tu] tatakai/γai. 次郎はじいさんにゾたたかれた/しかられた。

m[ma=N=tu] γai. お母さんにゾしかられた。×ンカイ

・使役文の動作の主体

tuk=N] ju:γu=[pa:] kFfasi. 妻に夕飯を作らせる。

kari=N] asumiru. あの人にやらせろ。×ンカイ

・使役やりもらい文の動作の主体

hanaku:] m[ma=N]=[tu] munu: [fi:]sumirari[ta]γ. 花子はかあさんにゾごはんを食べさせてもらった。(食べさせられた)

kγnu:] uri=N=tu munu: [fi:]sumiraritaγ. きのうあの人にゾものを食べさせてもらった。

○能力のもちぬし

v[va=naa ure:] fa:i=[tu] su? あなたにはこれは食べられゾする?

a[nu=naa mme nu]maiN. 私にはもう飲めない。

ja[rapi=naa ka]kaiN. 子どもには書けない。

○ありか

・ある

ja:=naa nti=ka=tu] aγ=ka [i]ra:. 家にはどれがゾあるかなあ。

ka[ma=N=mai=tu] pari=nu aγ. あそこにもゾ畑があるよ。

・ない

aNsinu] muna: [ja:=naa ne:N]=pakγ. こういうものは家にはないと思う。

u[ma=naa] ne:N. ここにはないよ。

・いる

saNzi]=ta:si [uma=N] uri. 3時までここにいろ。

・いない

kare:] ja:=naa [mi:N? あいつは家にいない?

・設置場所=ありか

icuf=nu=tu] ja:=nu pana=N/wa:pu=N ftunnu [pu]sje:γ. いとこがゾ家の屋根のうえに布団を干してある。

○くつつくところ

ti:=N=tu naukara:=nu=[tu ta]pari iη. 手にゾなにかがゾついている。

sata=N ma:[su: su]iru. 砂糖に塩を混ぜろ。

○移動先

・ひとの移動先

u[ma=N k. isi ap]pi. ここに来て遊べ。

ata=[mai] uma=N [k. isi] numi. あしたもここに来て飲め。

uma=N k. isi iri. ここに来ている。

uma]=N puri. ここにしゃがめ／すわれ。

ン格が移動先の意味に使用されるのは、くみあわさる動詞が述語になる用法ではなく、状況=修飾的な用法のみのようである。上の3例目は動詞が述語として使用されているが、アスペクト形式なので移動動作というより存在的ということか。ンカイ格のほうはそのどちらにも使用される。

uma=N[kai] [ku: . ここに来い。×uma=N ku: .

kama=N[kai] peri/iki. あそこに行け。×kama=N peri/iki.

・ものの移動先

u[ma=N] uski. ここに置け。

u[ma=nnn] uskɪna. [kama]=N/[kama]=N[kai] uski. ここには置くな。あそこに置け。

○出現する場所

ka[ma=nnn] makɪmunu=tu [iti]η. あそこにはお化けがゾ出る。

○結果やようす

siNgo:=ja] au=N=tu nari. 信号は青にゾなった。○Nkai

jo[ko=N] nara]pi]ru. 横に並べろ。ものを。Nkai 格のほうがよりいい。

u[ri:] saNka[ku=N] skuri. これを三角に切れ。×Nkai

ka[ri=sui] mi:tu=N [na]puskam. あの人と夫婦になりたい。×Nkai

sa[cjo:=N=tu] nari. 社長にゾなった。×Nkai

○Nkai 格の基準とは違いがあるようにみえる。

ja]=N=[tu] niti iη. おとうさんにゾ似ている。Nkai は変。

u[re:] pari: as pa:=nnn [da]mi. これは畑をやるときにはダメだ。使えない。

○動名詞／名動詞が評価的な意味をあらわす形容詞とくみあわさって実質的な内容をになう。

pari:] asuN:=[tu zjo:]to: . 畑をやるのにゾいい。

8. 5. 2 状況語

○動作のおこなわれる場所

移動の有無にかかわらず、うえにのべたように移動動詞とは共起しない。

nakata]=N fa: . 台所で食べよう。台所にいて。移動なし。

pari=N mati ilri. 畑で待っている。畑にいて。移動なし。

pari=N assu. 畑でやれ。ここは家。移動あり。

jozi=kami] je]ki=N mati] iri. 4時まで駅でまっている。移動あり。

ka[ma=anna] jarapi=nu=tu [ap]pi u₁. あそこでは子どもがゾ遊んでいる。

n[ta=N] fa:ti=ka [i]ra:. どこで食べようか。

u[ma]=N fai. ここで食べる。

○動作のおこなわれるとき（後述する Nkai 格とはことなり、テンスには無関係）

共通語とおなじように、日や時刻など、時間のレベルによって、ある程度ハダカ格との住み分けがある。

ja:u=nu] pa:=n[na] upumma=mai=tu [pu]turi. お祝いのときにはばあさんもゾおどった。

ki:]=ja [naNzi=N]=[tu] ja:=Nkai? きょうは何時にゾ家に(帰ろうか)?

urε: ikS=te:] ne:[ta:] itiN. [k₁pu]N:=[tu] iti i₁. これはいつとはなしには出ない。(お化けは) 決まった時間帯にゾ出ている。(k₁puN=N=tu 時分にゾ)

8. 6 Nkai 格 方向格 <動詞ムカイ？

つぎの例の im=[kai は、m のあとで Nkai の撥音が脱落したようにもみえる。

ara:] im=[kai] ikati. 私は海に行く。

ふつうの発話ではンが聞こえにくいのが、ゆっくりていねいに話すと、ンがあらわれるので、意識としてはあきらかに発話している。自然な発話では、ンは 0~0.5 程度。つぎの例でも、NN>N:は 2 拍分はなく、1.5 拍程度である。

s. ikeN=Nkai=tu tu:]ri. 試験にゾとおった。受かった。

Nkai 格は、ことなる意味で複数箇所にあられうる。(とき、行き先、目的)

ka:cjan[na] maccja=Nkai=[tu ka]munu=N[kai ikS]ta₁. かあさんは市場へゾ買物に行った。

mma] ata=Nkai to:kjo:=N[kai fa:=u] mi:=[ka] ikS kumata. かあさんはあしたに 東京に子どもを見にいく(予定だ)。

N 格にはみられない連体形がある。

[o:saka=kara to:kjo:=Nkai=nu uNcunna nau=nu pu]sa? 大阪から東京への運賃はいくら(だろう)か?

この格の使用には基本的にはなんらかの方向性が必要なようである。存在的な「車に乗っている」では Nkai 格が不自然で、方向性のある「車に乗れ」ではぎゃくに N 格が不自然になる。

kuruma=N] nuuri iri. 車に乗っている。方向性ナシ~弱い。

kuruma=Nkai] nuuri. 車に乗れ。方向性アリ。

8. 6. 1 間接補語

○くつつくところ

ti:=Nkai=tu] naukara:=nu [ta]pari i₁. 手にゾなにかがついている。

sata=Nkai] ma:[su: su]iru. 砂糖に塩を混ぜろ。

○移動の到着点

・ひとの移動

mma] ata=Nkai to:kjo:=N[kai fa:=u] mi:=[ka] ikS kumata. かあさんはあしたに東京へ

子どもを見にいく（予定だ）。

a[ta: p. isa]ra=N[kai ika]ti. あしたは平良に行く。意志。

nakata=N[kai] iki. 台所に行け。

v[va] a:ra=Nkai]i iki. あなたは外に行け。

<行く>の方向だけでなく、<来る>の方向にも使用される。

u[ma=Nkai=ja] kS:na. ここには来るな。

a[ra:] mme uma=Nkai=ja [ku:]te:N. 私はもうここには来ない。

単純に行き先のみで意志や勧誘のばあい、述語動詞が省略される。ややぶっきらぼうな表現になる。

a[ta: i]m=kai. あしたは海に（行く）。意志

a[ta: p. isa]ra=N[kai]. あしたは平良に（行く）。意志

tu: m]mε ja:=N[kai]i. さあ、もう家に（帰ろう）。勧誘

・ものの移動

u[ma=Nkai] uski. ここに置け。

u[ma=Nkai=ja] uskuna. ここには置くな。

u[nu] fkuru=Nkai]riru. この袋に入れろ。×N 格

○移動動作の目的

ka:cjan[na] maccja=Nkai=[tu ka]munu=N[kai ikS]ta]. かあさんは市場へゾ買物に行った。

skama=Nkai=tu] peri. 仕事にゾ行った。おとうさんは？と聞かれて。×N 格

○心のむかう対象

u[nu] fa:=[ja ge:mu=Nkai=[tu] mucju:=N nari i]. この子どもはゲームにゾ夢中になっている。N 格でも通じるが少し変。

v[va=Nkai=tu] saNsei. あなたにゾ賛成だ。セはやや口蓋化。×N 格

○成就の対象

taikaku=Nkai=[tu tu]:ri. 大学にゾ受かった。とおった。×N 格

s. ikeN=Nkai=tu tu]:ri. 試験にゾとおった。

tiN=mau]ki=Nkai=[tu sippai] a[si. 金儲けにゾ失敗した。×N 格

○結果やようす

siNgo:=ja] au=Nkai=tu] nari. 信号は青にゾなった。

jo[ko=Nkai] nara]pi]ru. 横に並べろ。ものを。

m:na=si] jo[ko=Nkai] nara]pi. みんなで横に並ぼう。

○基準　ン格の基準とは違いがありそうだ。

im=N[kai] maika] t. ukuma=nu=[tu tau]ka]. 海に近いところがゾいい。

u[re:] skama=Nkai=[tu] zjo:to:. これは仕事にゾいい。役に立つ。×N 格

8. 6. 2 状況語

○動作のおこなわれるとき（伊良部方言にみられるような、予定変更的な意味はない。）

未来のときをあらわす。

a[ta=Nkai] muti ikati. あしたに持っていく。

ata:] ikaiN. a[sati=Nka]i ikati. あしたは行けない。あさってに行く。

a[tu=Nkai] muti ikati. あとで持っていくよ。

おなじ未来でも、ata (あした)、asati (あさって)、jusrapi (ゆうがた)、pSsma (昼)、atu (あとで) など、明確にはなれた未来では Nkai の使用が可能だが、その時間のなかにふくまれる ki: (きょう) や直後の nnama (いま)、それに 5 時などの時刻には使用できない。朝することをおなじ朝にいうことはできない。このようなばあいは N 格が使用される。

ki:]=ja [naNzi=N=[tu] ja:=Nkai? きょうは何時にゾ家に (帰ろうか) ?

gozi=N] ukiru. 5 時に起きろ。

stumuti] muti ku:ti. a[ka. 朝持っていくよ。私が。(あなたの家に。電話で)

8. 7 Nki 格 <動詞イキからか?

動作のおこなわれる場所をあらわす。ただし、その場所はココからはなれた場所である。

kama]=Nki fai. むこうで食べろ。ここにいる人に。

kama=Nke:] fauna. むこうでは食べるな。ここにいる人に。

pari=Nki=tu] assu. 畑でゾしろ。ここにいる人に。

n[ta=Nki] fa:ti=ka [i]ra:. どこで食べようかな。意志

nakata]=Nki fa:. 台所で食べよう。勧誘。

ti:] gakko:=N[ki appa. さあ、学校で遊ぼう。勧誘。

8. 8 si 格 具格 <動詞シからか?

材料や原料、道具や手段の意味で使用される。おなじ道具でも、食事のときの器の「皿で食べる」と「箸で食べる」とは区別され、前者には N 格が、後者には si 格が使用される。より詳細な分析が必要である。

○材料、原料

saki:=pa: [ma]]=si=tu [kFfi:] . 酒をは米でゾ作る。(作っている)

u[nu ki:=si] kFfi. この木で作れ。

u[ri=si] kFfi. これで作れ。材料または道具

○道具

saburo:=ja ziro:=N=[tu] pau=si tatakai. 三郎は次郎にゾ棒でなぐられた。

u[nu] umes=si fai. この箸で食べろ。

ti:]=si fai. 手で食べろ。

u[ri=si] assu. これでやれ。道具を渡して

i[kε:mna] uri=si=tu [ap]pɪtaɪ. むかしはこれでゾ遊んだよ。

○手段、方法、ようす

u[nu] uwagi:=[du] ukɪna:=N nisjεNεN=si kau[taɪ]. この上着をゾ沖縄で二千元で買った。

v[va=ka taf]ke:=si assu. おまえが一人でやれ。

unu ni:=nu ivkariiri / ivkaripa futa:ɷ=si muti kS[taɪ]. この荷物が重かったので、二人で持ってきた。

u[ri:=pa:] m:na=[si] jo[ko=Nkai] nara[pi. これをはみんなで横に並べよう。ものを。

○時間 境界点

これまでにとりあげた用法は古典語「し」にもあるが、この時間の境界点の用法は古典語にはみられない（鈴木泰氏より）。

kʎnu=[si]=tu [mi:kS=N nari. きのうでゾ三つになった。年齢

8. 9 N(:)si 格（類似）（格形式のなかに位置づけていいか要検討）

u[re:] makʎmunu=N:si=[tu] mi:rai uʎ. これはお化けにゾ見える。見えている。

jarapi=nu] kui=N:si=[tu] kS:kai uʎ. 子どもの声にゾ聞こえている。聞こえる。

hana[ko:] mma=N:si=[tu] mipana=nu [ni]ti iʎ. 花子はかあさんにゾ顔がよく似ている。

以下はこれの連体形の例とみていい。

kazuko=[tu] junu=N:si=[nu] astau hanako=N=mai [kai] fi:ti. 和子とおなじ下駄を花子にも買ってやろう。

u[ri=Nsi]=nu pStu こういう人、そういう人

ka[ri=Nsi=nu] pStua da[mi. ああいう人はダメだ。さっきあった人

8. 10 sui 格 共格 1 <動詞ソエからか？ 関係のあいてには不可

○いっしょにするなかま

unu] fa:=[sui] appi. この子どもと遊べ。

kare:] ki:=[ja taukara:=sui]i=[tu] saki: nu[mi] uʎ. あいつはきょうはだれかとゾ酒を飲んでいる。

ara:] a[ta=N]kai vva=[sui saki: nu]ma[ti]=pe:m. 私はあしたにあなたと酒を飲むんだったかな。

○相互動作のあいて

ziro:=ja ututu=nu saburo:=sui]=[tu] jatujum[mu] asi. 次郎は弟の三郎とゾけんかをした。

ka[ri=sui] mi:tu=N [naʎ]puskam. あの人と夫婦になりたい。

kʎnu=tu] taro:=sui ite:i. きのうゾ太郎と会った。×ンカイ格、×ン格

mkʎ=N=[tu] gakko:=nu] sjeNsjε:=[sui] i[te] u[ta]ʎ. 道でゾ学校の先生と会った。

8. 11 tu 格 共格 2

○いっしょにするなかま

]taro:=tu appiʎaʎ. 太郎と遊んだ。

taro:]=[tu] ma:taki saki: nu]ma[ti. 太郎といっしょに酒を飲もう。意志

unu] fa:=tu]=[tu] appi. この子どもとゾ遊べ。

○相互動作のあいて

mkʎ=N=[tu] gakko:=nu] sjeNsjε:]=[tu] i[te] u[ta]ʎ. 道でゾ学校の先生と会った。

kʎnu=tu] taro:]=[tu] ite:i. きのうゾ太郎と会った。

○関係のあいて

a[ka] munu=[mai] uri=[tu] junu=sui. 私のものもこれとおなじだ。

aN[mai] i[kɛ:mna vva]=tu ju[nu]=sui=tu jata:ɲ. 私もむかしはあなたとおなじだった。

a[ka] munu[a] uri=tu [kita]ti. 私のものはこれと違う。

8. 12 kara 格 奪格

○やりとりのあいて

uri=[pa:] taro:=kara=tu mu[ra]i. これをは太郎からゾもらったよ。

[ure: taru=kara=tu mura]i? それはだれからゾもらった?

○移動の手段

kuruma=kara] iki. 車で行け。

○時間 開始点

aNta=ka] upuɲ[a: stumuti=kara] im=kai=[tu ɲwu] tuɲ=[ka ikS]taɲ. うちのじいさんは朝から海へゾ魚(を)とりにいった。

hanaku:] kɲu=kara=[tu] jami [niv]vi uɲ. 花子はきのうからゾ病気で寝ている。病んで。

mmaka:] kutu=kara [to:kjo:=N]=tu [uɲ. 孫が去年から東京にゾいる。

○時間 以降 (←→マデニ)

saNzi=kara] ku:. 3時以降に来い。

[saNzi=kara: ku: 3時以降に (は) 来い。

saNzi=kara:] peri. 3時以降に (は) 行け。

○空間 移動の出発点

[mmaka: ikS=tu to:kjo:=kara kS: kuma]ta? 孫はいつゾ東京から帰るか? 来る予定か。

pa]ri=ka[ra] turi ku:. 畑から取ってこい。

○空間 範囲の開始点

この用法は、対応するマデ相当の<範囲の終了点>の用法(後述)とともに、対格や与格の意味に範囲の意味がかぶさったものなので、純粹に格としての用法とはいいがたい。

このあとでとりあげるカラの順序の用法とともに、とりたてとの関係が問題になるだろう。

u[ma=kara] kama=ta:si [ka]ti. ここからここまで耕そう。(対格+範囲)

uma]=[kara] kama=ta:si ipiru. ここからあそこまで植えろ。(与格+範囲)

以上のカラ格の時空の用法は、このあとにとりあげるマデ・マデニに相当するこの方言の格の用法と対になっている。時間の開始点と以降の用法は、終了点(マデ相当)と限界点(マデニ相当)に、空間の出発点と開始点は、到着点と終了点に、それぞれ対応している。

以下は、マデ・マデニに相当するこの方言の格の用法とは対応関係のない用法である。

○空間 移動の経由点

uma=nu] mkS=kara [i]ki. この道から行け。

○基準

u[ma=kara:] im[ma mai]kaɲ. ここからは海は近い。

u[ma=kara:] imma u[te:. ここからは海は遠い。

○順序

共通語にもみられる順序の用法は、さまざまな格の格的な意味に、まずはじめに、という(とりたて的な)順序の意味がかぶさったものである。共通語では対格や与格の用法で、～ヲカラ、～ニカラのように格表示されることはないが、大神方言では主格をのぞいて、対格や具格など多くの格で、格を明示しながらカラが順序の意味を付加する。この点でカラのこの用法は格の用法とはいえず、共通語のモヤマデと同様、とりたての用法とみるべきである。

mitum=kara] paɾi. 女(が)カラ入れ。主格相当(ハダカ格の動作主体の用法)

ja:ra] munu:=kara fai. やわらかいものをカラ食べる。対格(つねに格を明示)

u[ma=kara] pari. ここ(に)カラ貼れ。(ポスターを貼る場所の順序について)与格相当(ハダカ格の動作対象の用法)

u[ma=N=kara] pari. ここにカラ貼れ。与格

ɿ[wu]ja:=Nkai=ka[ra] ikati. 魚屋にカラ行く。Nkai格(つねに格を明示)

unu] pau=si=ka[ra] tataki. この棒でカラたたけ。具格(つねに格を明示)

taro:] =sui=kara=[tu] numi. 太郎とカラゾ飲んだ。共格1(つねに格を明示)

u[nu] fa:=tu=ka[ra] appi. この子とカラ遊べ。共格2(つねに格を明示)

u[ri=kara=kara] turi. この人からカラ取れ。奪格(つねに格を明示)

u[ma=kara=kara] turi. ここからカラ取れ。奪格(つねに格を明示)

8. 13 kami 格 限界格1

つぎのターシ格とともに、「まで」に対応する終了点と「までに」に対応する限界点の両方に使用される。文脈によって区別されるようである。

○時間 終了点

jozi=kami] jeki=N mati] iri. 4時まで駅で待っている。

a[sati]=kami あさってまで

likS=kami いつまで

つぎは終了点の動詞の例。

taro:=ka] kS:[kɛ]=ka[mi] u[ma=N] uri. 太郎が来るまでここにいろ。やや不自然か。

○時間 限界点

a[sati]=ka[mi] itas kumata. あさってまでに出すべきだ。出さなければならない。予定などを。

gozi=kami [Nki]taka: (naraN). 5時までに帰らなくては(ならない)。

pSsuma]=ka[mi] assu. 昼までにやれ。

○空間 移動の到着点

uma=ka]mi [ku:. ここまで来い。

○空間 範囲の終了点

u[ma]=ka[mi] katiru. ここまで耕せ。(対格+範囲)

u[ma]=ka[mi] ipiru. ここまで植えろ。(与格+範囲)

8. 14 ta:si 格 限界格 2

○時間 終了点

jozi]=ta:[si jɛki=N mati] iri. 4時まで 駅で待っている。

a[sati]=ta:[si] u[ma=N] uri. あさってまで ここにいる。

aNta=ka] ɾa: go[zju:nɛN]=mai=ta:[sjɛ:] [isja a]si=tu uta:ɾ. うちのおとうさんは 50年前 までは医者をしてづいた。

つぎは終了点の動詞の例。

kari=ka] kS:=ta:si ma[ti i]ri. あいつが来るまで待っている。

u[ri=ka] fau[kɛ]=ta:[sjɛ: fau]na. この人が食べるまでは食べるな。

a[ka] aɾke=ta:sjɛ: aɾna. 私が言うまでは、言うな。

○時間 限界点

ata]=ta:[si] itasi. あしたまでに出せ。書類などを。

a[sati]=ta:[si] itas kumata. あさってまでに出さなければならない。

gozi]=ta:si [Nki]taka: (naraN). 5時までに帰らなくては(ならない)。

pSsuma]=ta:[si] assu. 昼までにやれ。

ju[sa]ra[pi]=ta:[si] assu. 夕方までにやれ。

○空間 移動の到着点

u[nu] ni:=[ju ja:]=ta:[si] katami i[ki] fi:ru. この荷物を家までかついで行ってくれ。

kama=[nu] pari=ta:[si] aɾka:. あそこの畑まで歩こう。

○空間 範囲の終了点

u[ma=kara] kama=ta:si [ka]ti. ここからここまで耕そう。(対格+範囲)

kama]=ka[ra] uma=ta:si ipiru. あそこからここまで植えろ。(与格+範囲)

9 文献

上村幸雄 (1991) 「琉球列島の言語、総論」『言語学大辞典』4

大野眞男 (1999) 「南琉球大神島方言の音対応と音変化」『岩手大学教育学部研究年報』59-2 (岩手大学)

かりまたしげひさ (1993) 「大神島方言のフォネームをめぐって」『沖縄文化』66 (沖縄文化協会)

平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』(明治書院)

法政大学沖縄文化研究所編 (1977) 『琉球の方言・大神島』(法政大学沖縄文化研究所)

琉球大学沖縄文化研究所編 (1968) 『宮古諸島学術調査研究報告 (言語・文学編)』(琉球大学沖縄文化研究所編)

10 「おおきなかぶ」大神方言版

本節では、童話「おおきなかぶ」を大神方言に訳したものを報告する。日本語ではていねい体になっているが、大神方言には文法的なていねい体がない。また、カナ表記の中でひらがなを使用している部分は中舌音である。カナ表記では母音の無声化を区別しない。

- (1) ウプウプヌ カブ
 upu·upu=nu kapu
 おおきな かぶ
- (2) ウプいアカトゥ カプー イピ
 upuɿa=ka=tu kapu: ipi.
 おじいさんがゾ かぶを うえました。
- (3) アキマアキマヌ カプン ナリ
 akɿma·akɿma=nu kapu=N nari
 「あまいあまい かぶに なれ。
- (4) ウプーウプヌ カプン ナリ
 upu:·upu=nu kapu=N nari
 おおきなおおきな かぶに なれ」
- (5) アキマヌ イキアリヌ
 akɿma=nu ikɿari=nu
 あまい げんきのよい
- (6) マータヌ ガバー
 ma:ta=nu gaba:
 ほんとうの 大きな
- (7) カプントゥ ナリ
 kapu=N=tu nari
 かぶにゾ なりました。
- (8) ウプいアー
 upuɿa:
 おじいさんは
- (9) カプートゥ ンーカティー アシ
 kapu:=tu N:kati: asi

かぶをゾ ぬこうと しました。

(10)ヨイシヨ ヨイシヨ
joisjo joisjo
よいしよ よいしよ

(11)アッスカトゥ カプー ンーカイン
assuka=tu kapu: N:kaiN
ところがゾ かぶは ぬけません。

(12)ウプいアー ウプンマウ アピリ キ。シ
upuja: upummau apiri k. isi
おじいさんは おばあさんを よんできました。

(13)ウプンマー ウプいアウ ぴ。サスキ
upumma: upuja pSsaski
おばあさんは おじいさんを ひっぱって、

(14)ウプいアカ カプー ぴ。サス。キ
upuja=ka kapu: pSsaski
おじいさんが かぶを ひっぱってー

(15) ヨイシヨ ヨイシヨ
joisjo joisjo
よいしよ よいしよ

(16)アンシヌシャクンナ カプー ンーカイン
aNsinusjakuNna kapu: N:kaiN
それでも かぶは ぬけません。

(17)ウプンマー ンマカウ アピリ キ。シ
upumma: mmakau apiri k. isi
おばあさんは まごを よんできました。

(18)ンマカヌ ウプンマウ ぴ。サス。キ
mmaka=nu upummau pSsaski
まごが おばあさんを ひっぱって、

(19)ウプンマー ウプいアウ ぴ。サス。キ
upumma: upuja pSsaski

おばあさんは おじいさんを ひっぱって、

(20) ウプいアカ カプー ぴ。サス。キ
 upuɲa=ka kapu: pSsaski
 おじいさんが かぶを ひっぱってー

(21) ヨイシヨ ヨイシヨ
 joisjo joisjo
 よいしょ よいしょ

(22) アンシカミマイ カプー ンーカイン
 aNsi=kami=mai kapu: N:kaiN
 それでも かぶは ぬけません。

(23) アンシ イリパトゥ ンマカー インヌ サーリ キ。シ
 aNsi iripa=tu mmaka: innu sa:ri k. isi
 そこでゾ 孫は イヌを つれてきました。

(24) インヌ ンマカウ ぴ。キ ンマカヌ ウプンマウ ぴ。キ
 in=nu mmakau pSki mmaka=nu upummau pSki
 イヌが 孫を 引き 孫が おばあさんを 引き、

(25) ウプンマカ ウプいアウ ぴ。キ
 upumma=ka upuɲau pSki
 おばあさんが おじいさんを 引きー

(26) ンミタ ンミタ ンーカイン
 mmita mmita N:kaiN
 まだ まだ ぬけません。

(27) インナ マユー アピリ キ。シ
 inna maju: apiri k. isi
 イヌは ネコを よんできました。

(28) マユヌ インヌ ぴ。キ インヌ ンマカウ ぴ。キ
 maju=nu innu pSki in=nu mmakau pSki
 ネコが イヌを 引き、 イヌが 孫を 引き、

(29) ンマカー ウプンマウ ぴ。キ
 mmaka: upummau pSki

孫は おばあさんを 引き、

(30) ウブンマカ ウプいアウ ぴ。キ
 upumma=ka upuɽau pSki
 おばあさんが おじいさんを 引きーー

(31) アンシカミマイ カプー ンーカイン
 aNsi=kami=mai kapu: N:kaiN
 それでも かぶは ぬけません。

(32) マユー ヤムヌー サーリ キ。シ
 maju: jamunu: sa:ri k. isi
 ネコは ネズミを つれてきました。

(33) ヤムヌヌ マユー ぴ。キ マユヌ インヌ ぴ。キ
 jamunu=nu maju: pSki maju=nu innu pSki
 ネズミが ネコを 引き、 ネコが イヌを 引き、

(34) インヌ ンマカウ ぴ。キ ンマカヌ ウブンマウ ぴ。キ
 in=nu mmakau pSki mmaka=nu upummau pSki
 イヌが 孫を 引き、 孫が おばあさんを 引き、

(35) ウブンマカ ウプいアウ ぴ。キ
 upumma=ka upuɽau pSki
 おばあさんが おじいさんを 引きーー

(36) ヨイシヨ ヨイシヨ
 joisjo joisjo
 よいしょ よいしょ

(37) ヤットウカーン カプー ンーカイ
 jattuka:N kapu: N:kai
 やっと かぶは ぬけました。

本稿は白馬日本語研究会合宿(2016/08/23~25)、平成28年度共同研究プロジェクト研究発表会「格と取りたて」(2016/09/20)、沖縄言語研究センター定例研究会(2017/01/21)で発表したものをもとに、「平成29年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」で調査した結果をまとめたものである。

おもな話者は大神島在住の狩俣英吉氏(1925(T.14)年9月25日生)である。

沖縄県竹富町小浜島・八重山語くもーむに小浜言葉

沖縄県竹富町小浜島・八重山語くもーむに小浜言葉

クリストファー デイビス
Christopher Davis (琉球大学)

7 はじめに

本報告では、沖縄県竹富町小浜島の言葉「クモームニ」の研究成果をまとめたものである。内容は大きく次の3つに分ける：(1) 音素・音声の特徴を紹介し、音素・音声・カナ表記法をまとめる。(2) これまでの調査で確認した格助詞及びとりたて助詞の記述をまとめる。(3) 童話「大きなかぶ」のクモームニ版の書き起こしを紹介する。これらの課題に入る前に、小浜言葉についての背景的な情報も簡単にまとめる。

なお、本報告のデータは、全て小浜島出身／在住で、小浜言葉の話者である大嵩善立氏(S2生、男性)への面接調査によるものである。大嵩善立氏以外にも、大嵩スエ氏・花城正美氏・大久英助氏・半嶺まどか氏にたくさんのご協力を頂いた。シカットウカラミーハイユー。

7.1 沖縄県竹富町小浜島の概要

八重山語小浜言葉(以下では「小浜言葉」とは、小浜島で話されている言語である。小浜島は、八重山諸島の島の一つである。西表島の東、石垣島の南西に位置する島であり、八重山諸島の一番大きな2つの島である西表島と石垣島の間に位置する。このように与那国島を除く八重山諸島のちょうど真ん中に位置し、島のうふだきと呼ばれる小山からは、八重山の各島々が展望できる。小浜言葉では、小浜島のことを *kumo:ma* 「クモーマ」と呼ぶ。伝統的な集落は、島のほぼ真ん中に位置し、さらに北と南にわけられる。これまでの調査では、これら北と南の間の方言差は確認されていない。この集落の他に、島の西側に細崎という集落もあり、この集落はもともと沖縄本島からの移住者によって作られたそうである。近年は、県外からの移住者が増えてきているようである。また、島の東側に大きなリゾートホテルもできて、マリンレジャー等を目的として島に来る観光客の数も増えてきているようである。NHKの連続テレビ小説「ちゅらさん」の撮影場所として県内県外を問わず有名な島でもある。

歴史的には、小浜島は石垣市字宮良との関係が深く、1771年に起こった明和の大津波の後、小浜島から多くの人々が宮良に移住させられたようである。その移住で、伝統行事などの文化もつながるようになって、今でも交流があるようである。この関係があるため、小浜島と宮良をそれぞれ *ujazima* 「ウヤズィマ」(親島)と *ɸa:zima* 「ファーズィマ」(子島)と呼ばれることもある。

7.2 八重山語小浜言葉の概要

小浜島の言葉は、UNESCOのAtlas of the World's Languages in Dangerにあげられた琉球

諸語の中の八重山語の中の一つの言葉である。小浜では、自らの言葉を kumo:muni「クモームニ」と言う。八重山語は、UNESCO のリストによると、「重大な危険」と判定されている。その中の小浜言葉も、大変危機的な状況にあることを本研究で実感した。小浜言葉が話せる世代の人は、若い世代（子供や孫の世代）にほとんど島の言葉で話すことはないようである。しかしながら、伝統行事などの場面等、小浜言葉の使用が要求される場面もあるようである。これらの場面にての言葉の伝承がどれぐらいされているかは、著者にはわからない。

以上で述べたように、小浜島は石垣島の宮良との歴史的な関係が深いものの、言語的には宮良は石垣の言葉に近いようで、小浜言葉との差が割りと大きいようである。小浜言葉の目立つ特徴の一つとして、以下で述べる語頭の無声化がある。小浜島の人が日本語共通語で話すときにも、しばしばこの特徴を観察することができる。

7.3 人口構成からみた小浜言葉

竹富町地区別人口動態票（平成30年1月末）によれば、小浜島の人口は717人である。以上で述べたように、この人口の中に、移住者等、小浜島以外の場所にルーツを持っている人もたくさん含まれる。また、平成22年の国勢調査のデータによれば、当時の65歳以上の人口は108人であったようである。小浜言葉を流暢に話せる世代とは、主に70代以上だと思われる。したがって、小浜言葉の母語話者の数は100人未満となっていることが推測できる。しかし、比較的若い世代でも、個人差はあるものの、自信がなくても小浜言葉で話せる人がいることも確実である。話せる・話せないの境目を簡単には設定することはできない。特に言葉の伝承を考えた場合には、「受動的話者」等の知識を拒否すべきでないと思われる。

7.4 言葉資料の作成

2010年に、小浜中学校創立六十周年記念誌として「ふるさとの味・しまくとうば」という本が出版された。この本では、小浜言葉の挨拶・行事における言葉・日常会話・語彙等がカナ表記で書いてあり、CDも付いている。これ以外の学習向けの資料は、著者が把握している限り存在しないようである。この他に、1984年に出版された「竹富島・小浜島の昔話」という本には、現場調査によって収集された話がカナ表記でまとめられている。著者が聞いた話では、この本を編集した段階にはこれらの話の録音はあったものの、現在それが残っているかは不明である。これ以外にも、島の伝統文化や風習等が記述されている資料はあるものの、言葉そのものの継承に向けた資料は、今のところこれ以上確認できていない。

8 音素と音声

8.1 音素表

小浜言葉の音韻構成に関しては、仲原（2004:260）では以下のものを設定している：

- 母音音素： i, ī, e, a, o, u （6個）
 半母音音素： j, w （2個）
 子音音素： h, ʻ, k, g, t, d, n, c, s, z, r, p, b, m （14個）
 拍音素： N, Q, R （3個）

本研究では、仲原とほとんど同じ音韻を設定するが、子音音素「ʻ」を設定する必要性はないと判断した。仲原の論文では、母音で始まる音節を設定しないため、母音で始まると思われる音節の頭にこの「ʻ」が音韻として使用されているようである。例えば、「イツィ」（魚）の音韻表記が /'ici/ となっているが、本研究ではこれらの例を /ici/ と考える。音声的には、仲原の論文でも、上の例は [itsi] と [ʻitsi] とも発音されているが、声門閉鎖音の有無による音韻的な対立は小浜言葉を含め八重山語諸方言にはないようである。

拍のカナ表記・音声表記・音韻表記は、次頁に一覧表を掲載する（表1参照）。この拍表は、仲原（2004:261-262）に近いのだが、本研究で確認した音声の特徴等による違いもあるため、仲原の論文も参照されたい。

拍音素に関しては、Nはその環境に応じて様々な鼻音子音として現れ、カナ表記では「ん」と書く。Qは、その次にくる子音と同じ子音として現れ、カナ表記では小さい「っ」と書く。そして、Rは長母音を区別するためのものであり、カナ表記では「ー」と表記する。本研究の音韻表記では、N・Q・Rを用いない（独立した音素として設定しない）。その代わりに、Nをnとして記し、Qはその次の子音と同じ子音（重子音）を書くことで表す。また、Rはその前の母音をもう一度書くことで表す。つまり、長母音は音素表記では母音を二回書くことで表す。なお、これまでの調査では、短母音と長母音の区別が曖昧なケースが多く、判断が難しい場合もあった。本論文では、著者の判断に基づいて短母音と長母音で区別しているが、あくまで著者の判断であることを了承されたい。未確認なものは、*で記されている。

仲原では未確認となっていた拍「へ」は、以下のような例で確認できた（なお、このセクションの用例は4行構成で、カナ表記・訳・音声表記・音素表記で記す）：

- (1) ばかはーる むぬんきぬ くるま のーへーる。
 若い 人たちが 車を 直した。
 bakaha:ru munun̄kinu kuruma no:he:ru
 baka-haa-ru munu-nki=nu kuruma nooh-ee-ru

【表 1：拍の一覧表】

あ	い	う	え	お	*	や	ゆ	よ	わ
[(?)a]	[(?)i]	[(?)u]	[(?)e]	[(?)o]		[ja]	[ju]	[jo]	[wa]
/a/	/i/	/u/	/e/	/o/		/ya/	/yu/	/yo/	/wa/
は	ひ	ふ	へ	ほ	*				
[ha]	[çi]	[φu]	[he]	[ho,(φo)]					
/ha/	/hi/	/hu/	/he/	/ho/					
ふあ	ふい	ふ	*ふえ	ふお	*				
[φa]	[φi]	[φu]		[φo]					
/fa/	/fi/	/fu/		/fo/					
か	き	く	け	こ	くい	きや	きゆ	きよ	くわ
[ka]	[ki]	[ku]	[ke]	[ko]	[ki,k ^s i,ks]	[kja]	[kju]	[kjo]	[kwa]
/ka/	/ki/	/ku/	/ke/	/ko/	/ki/	/kya/	/kyu/	/kyo/	/kwa/
が	ぎ	ぐ	げ	ご	*	*	*	*	*
[ga]	[gi]	[gu]	[ge]	[go]					
/ga/	/gi/	/gu/	/ge/	/go/					
た	てい	とう	て	と					
[ta]	[ti]	[tu]	[te]	[to]					
/ta/	/ti/	/tu/	/te/	/to/					
だ	でい	どう	で	ど					
[da]	[di]	[du]	[de]	[do]					
/da/	/di/	/du/	/de/	/do/					
な	に	ぬ	ね	の					
[na]	[ni]	[nu]	[ne]	[no]					
/na/	/ni/	/nu/	/ne/	/no/					
ら	り	る	れ	ろ	るい				
[ra]	[ri]	[ru]	[re]	[ro]	[ri]				
/ra/	/ri/	/ru/	/re/	/ro/	/ri/				
つあ	ち	つ	つえ	つお	つい	ちや	ちゆ	ちよ	
[tsa]	[tçi]	[tsu]	[tse,tçe]	[tso]	[tsi]	[tça]	[tçu]	[tço]	
/ca/	/ci/	/cu/	/ce/	/co/	/ci/	/cya/	/cyu/	/cyo/	
ざ	じ	ず	*ぜ	ぞ	ずい	じゃ	じゆ	じよ	
[dza]	[dçi]	[dzu]		[dzo]	[dzi]	[dça]	[dçu]	[dço]	
/za/	/zi/	/zu/		/zo/	/zo/	/zya/	/zyu/	/zyo/	
さ	し	す	せ	そ	すい	しゃ	しゆ	しよ	
[sa]	[çi]	[su]	[se,çe]	[so]	[si]	[ça]	[çu]	[ço]	
/sa/	/si/	/su/	/se/	/so/	/si/	/sya/	/syu/	/syo/	

また、仲原の論文では、[ɸa]「ふぁ」は、音素的に /hwa/ と分析している。要するに、音声的に[ɸ]として現れる子音を、独立した音素として分析せず、音素 /h/ と /w/ との組み合わせと分析している。/w/ の後ろにくることが可能な母音は、/a/ だけなのである。要するに、/wa/があるのに対して、/wi/や/wo/等は存在しないようである。そのため、仲原の分析では、/hwi/・/hwe/・/hwo/・/hwu/ がないと予測できるだろう。しかし、本研究では、[ɸa] の他に、以下の例文で示すように[ɸo]と[ɸi]も確認している。これらは、それぞれ[ho]と[hi]と対立しているようであるので、母音/o/と/i/の前でも[ɸ]と[h]が対立し、それぞれを別の音素と考えることにした。[ɸ]の音素表記を/f/とする。なお、/hu/は音声的に常に[ɸu]となるため、/u/の前では/h/と/f/の対立は見えない。また、仲原の論文では、/ho/が音声的に[ho]とも[ɸo]とも記述されているが、おそらく/h/は音声的に[ho]とも[ɸo]とも発音されるのに対し、/fo/は常に[ɸo]として現れると思われる。

- (2) うぬ でんぷんわとう ばかい ふおーたるゆー。
 その でんぷんを 炊いて 食べました。
 unu denpunwatu bakai ɸo:taruju:
 unu denpun=wa=tu baka-i foo-ta-ru=yuu.

- (3) じん からすいとーんどう むんどーい ふいーた。
 お金を 貸したけど 戻して くれた。
 dʒiŋ kaʃasito:ndu mundo:i ɸi:ta
 zin karasitoondu mundoo-i fii-ta

8.2 母音の無声化

以上の音素・音声・カナ表記では、母音の無声・有声の対立はされていない。小浜言葉では、母音の無声化が多いが、それがいつ起こるのかについて、これまでの研究では予測できる一般化はできていない。仲原（2004:262）がこれについて次のように述べている：

「小浜方言の母音の特徴として、母音の無声化が挙げられる。東日本方言や九州方言、北琉球方言の諸方言などで無声の子音に挟まれた狭母音が無声化するのに対し、当該方言には広母音 [a]の無声化がみられる。これは南琉球方言の諸方言に広くみられる現象であるが、小浜方言では、波照間方言や西表古見方言などのように、続く有声子音[m, n, r] まで無声化する。ただし、インフォーマントや語彙によって、無声化しないものもみられる。」

仲原の論文では、無声母音は無声化によるものだと分析し、音素として無声母音を設定していない。しかし、どの環境において母音が無声化するかが、明確ではない。八重山語白保言葉に関しては、中川・ラウ・田窪（2015）が似たような現象を分析し、無声母音が音素的な対立を示していない（無声母音が有声母音の異音である）と主張しているが、小浜言葉に関しては、母音が無声化する環境を予測できるかは不明である。特に目立つ無声化

の状況として、語頭の無声子音の後ろの母音 a・i・u である。これらの母音が無声化する
 かないかは、以下の表でまとめたような分布を示すようである。

無声化する例			無声化しない例		
pəŋa	鼻	無声子音	bata	お腹	有声子音
təɕu	誰	短母音	ta:	誰	長母音
kəkutʃi	顎	短子音	hakkire:ja	はっきりは	重子音
həŋasi	話	非拍鼻音	kaŋga:	あっち	拍鼻音
pəŋi ku:	急いで来い	母音・子音	paiʃa ku:	はやく来い	母音・母音

以上のデータからは、次のような一般化が言えよう：

一般化：語頭音節が無声子音で始まる場合、その核となる母音の無声化が生じる。しかし、語頭音節が長母音・二重母音・重子音・拍鼻音のいずれかを含む場合は、無声化が生じない。

しかし、以上の無声化の一般化では無声化するはずの語彙の中に、無声化しないものが存在することも確認されている。例えば、以下の例では、どれもが一般化から予測すれば無声化するはずであるが、無声化するものとしめないものが対立しているようである：

無声化する例		無声化しない例	
kɯtsɨnami	背中	kumo:muni	小浜言葉
kɯpo:hi	こぼし	kuruma	車

以上のような、一般化では説明できない無声化の対立があれば、無声母音と有声母音を音素的な対立として考える必要がある可能性がある。この点は、今後の大きな課題の一つである。

以上の母音の無声化が生じると、母音の後の子音も無声化するようである：

/turi/ → [tɯɕi] (鳥)
 /taru/ → [təɕu] (誰)
 /tana/ → [təŋa] (棚)
 /tama/ → [təŋa] (弾)

この現象もあって、以下のような例の音素表記をどう考えるべきかは問題となる：

[kɯpo:ɕi] (こぼし)
 [tʃɨpi] (尻)
 [təpo:ri] (ください)
 [tsɨpuru] (頭)

これらの語彙の二番目の音節は無声子音 [p] に聞こえる子音で始まっている。しかし、八重山語の他方言を見ると、これらの単語の p に相当するものは b となっている。以上の子音の無声化から考えると、これらの単語の音素表記を、例えば「頭」を例にとると /ciɸuru/ にして、音声的に無声化を受けて [tsiɸuru] となるように考えることもできるだろう。また、これらの無声子音 [p] は、著者の感覚では、他の [p] とは少し音声的に違うように聞こえるが、これについての細かい調査は今後の課題の一つである。

8.3 中舌母音の摩擦音化

小浜言葉の音素には、いわゆる中舌母音 i が存在する。この音素は、無声破裂音 p と k の後ろでは、以上で説明した無声化が生じて、更に摩擦音化とでも呼ぶべき現象も見られる。例えば、「昨日」を意味する単語の音素表記は /kiɸu/ 「クィヌ」とするが、発音上では以上の無声化を受けて [kiɸu] になるだけではなく、無声化した中舌母音が s のように聞こえる摩擦音を伴い、音声的には [kʰiɸu] や [ksɸu] のように聞こえる。また、「引く」を意味する動詞の音素表記を /piku/ として捉えるが、これも音声的には [pʰiku] や [psku] のように発音される。また、この動詞が連用形 /piki/ となる場合、一種の母音調和が起こり、中舌母音が [i] のような母音となり、無声化の結果として [piki] のようになるが、更に摩擦音化して [pʰki] のように発音されるようである。これらの例を、音素的に母音である /i/ の無声化と摩擦音化による異音として扱うが、これらの子音として考えることもできるかもしれない。

9 名詞の格・とりたて

このセクションでは、格助詞ととりたて助詞の記述をまとめる。このセクションの用例は音声表記を省き音韻表記を用いる。問題とする文の部分は下線 で示し、格形式やとりたて助詞は「= (ハイフン)」で示す。なお、以下の格・とりたて助詞は、これまでの調査で確かめたものだけであり、今後の調査で更に確認する必要がある。

【表 2：格助詞・とりたて助詞の一覧】

Φ	対格／主格／属格	ACC／NOM／GEN	accusative／nominative／genitive
=nu	主格／属格	NOM／GEN	nominative／genitive
=nge	与格／方向格	DAT／ALL	dative／allative
=nga	場所格	LOC	locative
=kara	奪格	ABL	ablative
=kati	具格	INS	instrumental
=tu	共格	COM	comitative

=tu	焦点	FOC	focus
=ndu	主格＋焦点	NOM.FOC	nominative+focus
=wa	目的語＋焦点	OBJ.FOC	object focus
=n	「も」	*	also
=ya	トピック（主題）	TOP	topic

9.1 格助詞

=nu ヌ

主語が =nu でマークされることが多い。この =nu を主格として考える。

- (4) ふねーぬ ふあー やらびる。
お母さんが 子供を 呼んでいる。
bunee=nu faa yarabi(ru)

- (5) ふにぬ なーりる。
船が 流れている。
funi=nu naariru

また、名詞が名詞を修飾するときにも、=nu が使われる。この =nu を属格として考える。

- (6) ふねーんどう ふあーぬ ていー ばなすいたる。
お母さんが 子供の 手を 離した。
bunee=ndu faa=nu tii panasitaru

ハダカ格

ハダカ格とは、表面的には何も格助詞が使われないことを指す。目的語はハダカ格で現れることが多い。

- (7) ばーまんどう みんつい ぴんげ なーらすいたる。
おばあさんが 水を 溝に 流した。
baama=ndu minci pin=ge naarasitaru.

- (8) ばかーる むぬんきんどう くるま のーすいたる。
若い 人たちが 車を 直した。
bakaaru munu-nki=ndu kuruma noositaru

例は少ないが、主語もハダカ格でマークされることもあるようである：

- (9) あーふあー ずいまんがとう わーりるかー？
 おばあさんは どこに いらっしやる（いる）か？
aafaa zīma=nga=tu waariru=kaa

また、=nu を使わないで、属格のようなハダカ格の用法がある：

- (10) わー やーんが たーとう いついばん ぐまはるかー？
 あなたの 家で 誰が 一番 小さいか？
waa yaa=nga taa=tu icipan gumaharu=kaa

どの場合に属格 =nu を使うか、ハダカ格を使うかは、今後の調査が必要である。

=yu ユ

使われる頻度は少ないようであるが、目的語を =yu でマークすることもある。この =yu を対格として考える。

- (11) あーふあーや まーゆ やらびきー。
 おばあさんは 孫を 呼んできた。
 aafaa=yu maa=yu yarabi kii

=nge ング

=nge は、様々な場面で使われる。まずは、主語が移動する場所を表す例から見る：

- (12) ずいまんげとう わーるかー？
 どこに いらっしやる（行く）か？
zīma=nge=tu waaru=kaa

このような用法は、方向格として考えることができる。これと似たような用法では、目的語を移動させる場所や置く場所を表す用法もある：

- (13) ふあーぬ ちゃわん たなんげ しんちみたる。
 子供が 茶碗を 棚に 片付けた。
 faa=nu cyawan tana=nge sincimitaru
- (14) あーらすいとろ うぬ みんつあー ずいまんげとう なーらすいたらー？
 洗った その 水は どこに 流したの？
 aarasītoro unu mincaa zīma=nge=tu naarasītarāa

また、=nge には、いわゆる間接目的語をマークする用法がある：

- (15) とうなるいぬ ふいとうんげ からすいたる。
 隣の 人に 貸した。
 tunari=nu pitu=nge karasitaru

また、受身文の能動者もマークする：

- (16) しんしーんげ たーとう したきらりたるかー？
 先生に 誰が 叩かれたか？
sinsii=nge taa=tu sitakiraritaru=kaa

このような用法では、=nge を与格として考えられる。

=nge が付く名詞が ~n「ン」で終わる場合は、=ge となる：

- (17) ばーまんどう みんつい びんげ なーらすいたる。
 おばあさんが 水を 溝に 流した。
 baama=ndu minci pin=ge naarasitaru.

=nga ンガ

=nga は、存在する場所をマークする用法がある。この用法を、場所格として捉えることができる。

- (18) あーふあー ずいまんがとう わーりるかー？
 おばあさんは どこに いらっしゃる (いる) か？
 aafaa zūma=nga=tu waariru=kaa

- (19) やーまんがとう わーりる。
 台所 (ヤーマ) に いらっしゃる (いる)。
yaama=nga=tu waariru

以上の例文はいずれも、「〇〇にいる」という意味になるようで、「〇〇に行く」の意味を表すには、=nga の代わりに方向格 =nge を使い、さらに動詞を waaru にしなければならないようである。この対比からすると、=nga は「存在する場所」のような意味を表すのに対し、=nge が「方向先の場所」のような意味を表すように思われる。

=nga には、次のような用法もある (〇〇の中で、のような用法)：

- (20) わー やーんが たーとう いついばん ぐまはるかー？
 あなたの 家で 誰が 一番 小さいか？
 waa yaa=nga taa=tu icipan gumaharu=kaa

=kara カラ

=kara は移動の出発点を表す。この用法から属格として捉える。

- (21) がっこーから かいりした？
 学校から 帰ったの？
gakkoo=kara kairi-sita?

=kati カティ

=kati は、日本語の「で」に近い様々なが用法がある。次の例文は、具格の用法を示す：

- (22) ...していつかていとう はいたるゆー。
 ...ソテツで (食事を) していました。
siticu=kati=tu haitaru=yuu

「団体で・集合で」の意味も表す：

- (23) むーるかてい かいり はりした。
 みんなで 帰って 行った。
muuru=kati kairi hari-sita

「健康で」のような、状態をマークする用法もある：

- (24) きんこーかてい わーりたぼーり。
 健康で いてください。
kinkoo=kati waari-tapoori

=tu トウ

=tu は、以下の例文で示すように、行動を取る相手をマークする。この用法を共格として捉える。

- (25) みなまー うわさーとう はなすいわ はいる。
 今は あなた(たち)と 話を している。
 minamaa (u)wasaa=tu hanasi=wa hairu

9.2 とりたて助詞

=tu トウ

=tu は、焦点を表すとりたて助詞であり、八重山語の他言葉の =du に相当するものである。八重山語で広く見られる傾向として、この焦点助辞が多くの文で使われ、文法的かつ

意味的な役割が大きいようである。次の例では、=tu がハダカの目的語に付く：

- (26) のーとう みりるかー？
 何を 見ているか？
noo=tu miriru=kaa

- (27) いぬとう みりるゆー。
 犬を 見えています。
inu=tu miriru=yuu

これらの例のように、=tu が疑問文の疑問詞に付くことが多く、また返答文の疑問詞の返答となる句に付くことが多い。疑問詞 taa が主語となるときにも、=tu が付く形で現れるようである：

- (28) たーとう なきるかー？
 誰が ないているか？
taa=tu nakiru=kaa

しかし、これ以外の主語は、=tu ではなく、以下で紹介する =ndu でマークされるようである。

=tu はこれ以外に、様々な句に付くことがある。次の例では、副詞的な疑問詞に付く：

- (29) うわー ぬーんでいとう こつつあすいたるかー？
 あなた なんて 壊したか？
 (u)waa nuundi=tu koccasitaru=kaa

=ndu ンドウ

=ndu が主語に付き、主格 =nu と焦点の =tu が表す意味を同時に表すようである。

- (30) しんしーんどう ふあーわ かんちみねーぬ。
 先生が 子供を 隠してしまった。
sinsii=ndu faa=wa kancimi-neenu

- (31) ふにんどう なーりる。
 船が 流れている。
funi=ndu naariru

=wa フ

=wa は、これまでの調査では以下のように目的語に付く例を確認している：

- (32) しんしーんどう ふあーわ かんちみねーぬ。
先生が 子供を 隠してしまった。
sinsii=ndu faa=wa kancimi-neenu

- (33) あうちんどう ぼーわ ぶりたる。
おじいさんが 棒を 折った。
auci=ndu boo=wa buritaru

=wa は、八重山語の他言葉で見られる =ba に相当するものだと思われるが、宮良言葉では、この =ba が一種の主語にも付くことが確認されている。目的語に付く以外の用法は今のところ小浜言葉では確認されていない。また、=wa が付くことによってどんな意味を表すかも不明である。今後の課題の一つである。

=wa の後ろに焦点を表す =tu が付く例もある：

- (34) ぼーしわとう ぬき はりした。
帽子を 抜いて 行った。
boosi=wa=tu nuki hari-sita

=n ン

=n は、日本語の「も」と似た用法を示す：

- (35) ばぬん いついばんでいらなー。
私も 頑張ろうね。
banu=n icipandira=naa

=ya ヤ

=ya は、日本語の「は」に相当する用法が多く見られ、トピック・マーカースとして捉えられる。

- (36) まーや いぬわ やらびきー。
孫は 犬を 呼んできた。
maa=ya inu=wa yarabi kii

否定述語と一緒に現れる=ya もよく現れる：

- (37) あきらーや あらぬ。 うとうとうんどう なきる。
アキラでは ない 弟が泣いている。
akiraa=ya aranu ututu=ndu nakiru

上の例では、主語「アキラ」の最後の母音が長母音となっている。このような長母音化は、琉球諸語の先行研究では普通は =ya との融合によるものだとされてきた。しかし小浜言葉では、

この「長母音形」の後ろに、=ya が更に付くことがしばしば観察される。「犬」は小浜言葉でも inu であるが、その「長母音形」が inoo である。以下の例が示すように、この長母音形の後ろに=ya が更に付くことがある：

- (38) いのーや まーわ びっけひー
 犬は 孫を ひっばって
inoo=ya maa=wa pikkehii

長母音形の inoo が inu=ya からの融合によるものであれば、その後ろに=ya が更に付くはずがない。また、長母音形と思われるものに、焦点を表す=ndu が付くこともあるようである。「おじいさん」を意味する単語は auci であるが、これの長母音形が aucee である。以下の例では、この長母音形に=ndu が付いている：

- (39) あうちえーんどう だいくにぬ たにわ まき。
 おじいさんが 大根の たねを まいた。
aucee=ndu daikuni=nu tani=wa maki

長母音形とトピック=ya の関係の詳細は、今後の研究の一つの課題である。

10 「おおきなかぶ」クモームニ版

本節では、童話「おおきなかぶ」をクモームニに訳したものを報告する。以下でまとめた訳は、大嵩善立氏の協力によるものである。以下でまとめた言い方以外に他の訳し方もあったが、今回はそれを省く。書き起こしは三行にわけて、カナ表記・訳・音声表記となっている。三行目の表記では、録音した音に近い細かい音声表記を記す。同じ単語でも、いくつかの違う発音があった場合は、音声表記でその発音の通りに表記するようにした。特に注意すべき点には、動詞「引く」に相当する「ぷいくい」や「ぷいき」・「びき」がある。カナ表記でも三通りの表記になっているが、音声表記ではさらにその発音の多様性に従ったため、さらに多数の表記となっている。以上で説明した無声化と中舌母音の摩擦音化の最終的な分析はまだできていないため、発音に近い音声表記を選んだ。

1. あうちえーんどう だいくにぬ たにわ まき。
おじいさんが 大根の たねを まいた。
autʃe:=ndu daikuni=nu t̃ãni=wa mak-i
2. あまは一 かばは一 だいくに なり、
美味しい 香りがいい 大根に なれ、
ama-ha: k̃apa-ha: daikuni: nar-i
3. まいは一 めーみん まいは一 だいくに なり たぼーり。
大きい もっと 大きな 大根に なって ください。
mai-ha: me:mim mai-ha: daikuni nari t̃apo:r-i
4. あまは一 がんじょーは一る よーめい ぬーんくわん ねーぬついくん¹
美味しくて 元気な ?? 何もかも なく
ama-ha: gandʒo:-ha:-ru jo:mei nu:nkwan ne:nu-ts̃ĩkun
5. まいは一 だいくに まらしみ たぼーり。
大きな 大根を 産んで ください。
mai-ha: daikuni mar-aʃ̃mi t̃apo:r-i
6. あうちえーや だいくに ぷいくいぬくんでい
おじいさんは 大根 引き抜こうと
autʃe:=ja daikuni p̃ĩki-nuku=ndi
7. はすいとーんどう だいくねー ぷいかららぬ。

¹ 「よーめい ぬーんくわん ねーぬついくん」は、原文にある「とてつもなく」の訳であるが、この表現の細かい分析は今のところ不明である。

- だけど 大根は 抜けない。
 hasi̥to:ndu daikune: p^si̥kararanu
8. あうちえーや あーふあーわ やらびきー。
 おじいさんは おばあさんを 呼んできた。
 autʃe:=ja a:ɸa:=wa jarabi ki:
9. あーふあーや あうちわ ぴけーひー、
 おばあさんは おじいさんを ひっばって、
 a:ɸa:=ja: autʃi=wa pʃi̥ke:hi:
10. あうちえーんどう だいくに ぴけーひー、
 おじいさんが 大根を ひっばって
 autʃe:=ndu daikuni: pʃi̥ke:hi:
11. はしていん だいくねー ぷいかららなーた。
 それでも 大根は 抜けなかった。
 haʃi̥tiN daikune: p^si̥kararanaa:ta
12. あーふあーや まーゆ やらびきー。
 おばあさんは 孫を 呼んできた。
 a:ɸa:=ja ma:=ju jarabi ki:
13. まーんどう あーふあーわ ぴけーひー、
 孫が おばあさんを ひっばって、
 ma:=ndu a:ɸa:=wa pʃi̥ke:hi:
14. あーふあーや あうちわ ぴっけーひー、
 おばあさんは おじいさんを ひっばって、
 a:ɸa:=ja autʃi=wa pʃi̥kke:hi:
15. あうちえーや だいくにわ ぴきぬくんでい
 おじいさんは だいこんを 引き抜こうと
 autʃe:=ja daikuni=wa pʃi̥ki-nuku=ndi
16. はしていん めーんだ めーんだ だいくねー ぷいかららぬ。
 それでも まだ まだ 大根は ぬけない。
 haʃi̥tiN me:nda me:nda daikune: p^si̥kararanu
17. まーや いぬわ やらびきー。

- 孫は 犬を 呼んできた。
 ma:=ja inu=wa jarabi ki:
18. いのーや まーわ ぴっけひー、
 犬は 孫を ひっばって、
 ino:=ja ma:=wa p̄j̄kkehi:
19. まーんどう あーふあーわ ぴっけひー、
 孫が おばあさんを ひっばって、
 ma:=ndu a:φa:=wa p̄j̄kkehi:
20. あーふあーや あうちわ ぴっけーひー、
 おばあさんは おじいさんを ひっばって、
 a:φa:=ja aut̄j̄=wa p̄j̄kke:hi:
21. あうちえーや だいくにわ ふいきぬくんでい
 おじいさんは 大根を 引き抜こうと
 aut̄je:=ja: daikuni=wa p̄s̄iki-nuku=ndi
22. はしていん めーんだ めーんだ ふいきぬかららぬ。
 それでも まだ まだ 引き抜けない。
 haf̄j̄tin me:nda me:nda p̄j̄ki-nukararanu
23. いのーや まやわ やらびきー。
 犬は 猫を 呼んできた。
 ino:=ja: maja=wa jarabi ki:
24. まやーんどう いぬわ ぴっけーひー、
 猫は 犬を ひっばって、
 maja:=ndu inu=wa p̄j̄kkehi
25. いぬんどう まーわ ぴっけーひー、
 犬が 孫を ひっばって、
 inu=ndu ma:=wa p̄j̄kke:hi
26. まーや あーふあーわ ぴっけーひー、
 孫は おばあさんを ひっばって、
 ma:=ja a:φa:=wa p̄j̄kke:hi
27. あーふあーや あうちわ ぴっけーい、

- おばあさんは おじいさんを ひっばって、
a:ɸa:=ja autʃi=wa pi̯kke:i
28. あうちえーや だいくにわ ぷいきぬくんでい
おじいさんは 大根を 引き抜こうと
autʃe:=ja daikuni=wa p̄i̯ki-nuku=ndi
29. はしていん だいくねー ぷいかららな一た。
それでも 大根は 抜けなかった。
haʃi̯tiN daikune: p̄i̯kararana:ta
30. まやー〈わ〉² うやんちゅわ やらびきー。
猫は ねずみを 呼んできた。
maja:<=wa> ujantʃu=wa jarabiki:
31. うやんちゅや まやゆ びっけーひー、
ねずみは 猫を ひっばって、
ujantʃu=ja: maja=ju pi̯kke: hi:
32. まやんどう いぬわ びっけーひー、
猫が 犬を ひっばって、
maja=ndu inu=wa pi̯kke:hi:
33. いぬんどう まーわ びっけーひー、
犬が 猫を ひっばって、
inu=ndu ma:=wa pi̯kke:hi:
34. まーんどう あーふあーわ びっけーひー、
孫が おばあさんを ひっばって、
ma:=ndu a:ɸa:=wa pi̯kke:hi:
35. あーふあーや あうちわ びっけーひー、
おばあさんは おじいさんを ひっばって、
a:ɸa:=ja autʃi=wa pi̯kke:hi:
36. あうちえーや だいくに びっけーひー、

² この〈わ〉、日本語共通語の「は」だと思われ、小浜言葉では「ヤ」になると思われる。

おじいさんは 大根を ひっぱって、
 autʃe:=ja daikuni pʃ̥ʲkke:hi:

37. やっとうかっとう だいくねー ぶいきぬかりた。
 やっと 大根は 引き抜けた。
 jattukattu daikune: pʃ̥ʲkinukarita

参考文献

- 記念誌編集委員会（編）（2010）『小浜中学校創立六十周年記念誌・ふるさとの味・しまくとうば』、小浜中学校創立六十周年事業期成会。
 福田晃（編）（1984）『竹富島・小浜島の昔話：沖縄県八重山郡竹富町』、南東昔話叢書第9号、同朋舎出版。
 仲原穰（2004）「八重山小浜方言の音韻」『沖縄芸術の科学』、第16号、pp.259～287、沖縄県立芸術大学附属研究紀要。
 中川奈津子・タイラーラウ・田窪行則（2015）「琉球八重山語白保方言の音韻」『琉球諸語記述文法 I』（狩俣繁久 (Ed.))、pp.1-21。

沖縄県西表船浮方言

沖縄県西表船浮方言

荻野千砂子（福岡教育大学）

1 沖縄県八重山郡竹富町西表島の船浮（ふなうき）集落の概要

1. 1 地理的特徴・人口

八重山諸島の一つである西表島は 289.62 km²の広さがあり、沖縄県では本島に次いで二番目に大きな島である¹。山がちな地形で島全体が原始的な亜熱帯林に覆われている。西表島の文化圏は東部と西部に大きく分かれていて、船浮は西部に属する。現在、船浮に行くためには、石垣から上原港まで高速船で行き（1日に7便、片道45分）、上原港からは送迎バスで白浜港まで行き、さらに白浜港から船浮へ定期船で渡る（1日に4,5便、片道10分）。西表の西部で最も大きな集落は祖納（そない）であり、船浮まで距離は離れているが、マルブンサンという民謡の歌詞には竹富町字西表の小字として「アダチ（阿立）、ウフダチ（大立）、ウカリ（宇嘉利）、ソンバレ（下原）（以上の四つの小字は現在の祖納周辺にある）、マヤマ（真山）、ウキンチ（浮道）（以上の二つの小字は祖納と白浜の間にある）、ナリヤ（成屋：ウチパナレの対岸の地域）、フナウキ（船浮）」と、八つの集落の名が入っているという。これにより、祖納から船浮までが一つの文化圏「字西表」として認識されていたことが分かる。

昔は、船浮から石垣まで行くのが大変で、白浜港近くのハイザカ（ナリヤの海岸端のところ）の前が浅瀬であったため、干潮時は底の浅いサバニ船でも通れなかったという。そのため潮の加減によっては白浜まで行けず、乗員みんなでサバニを担いで運んだこともあったそうだ。当時、船が接岸できる港は白浜港だけであった。そのため、石垣に行くには、船浮から白浜港まで行かなければならない。満潮時を利用するため、朝早く白浜まで行き数時間石垣行きの船を待つこともあったという。そうやって白浜港から出発しても、いったん祖納沖に停泊するため（祖納にも接岸できる港がなかった。そのため、祖納からの人や荷物をサバニ船で運び入れていた）さらに時間がかかり、石垣に行くのに1日がかかりだったという話である。現在は、ハイザカの浅瀬を掘削して船の航路を作っているため、潮に関係なく定期船が通ることができる。

西表島での人口の推移を見る。大正14（1925）年の9,043名、昭和30（1955）年の9,266名と比較すると人口が減っており²、現在（平成30（2018）年1月）の西表島の人口は、2,424名である。だが、平成16（2004）年には2,134名であったことを考えると、近年は若干の増加傾向にあるとも言える³。その中で現在の舟浮集落の人口は43名である⁴。

¹ 国土地理院 HP 平成29年全国都道府県市区町村別面積調（平成29年10月1日時点）付3島面積による。

² 『町制施行50周年記念 竹富町』平成10年度版竹富町勢要覧

³ 竹富町 HP の竹富町地区人口動態票による。

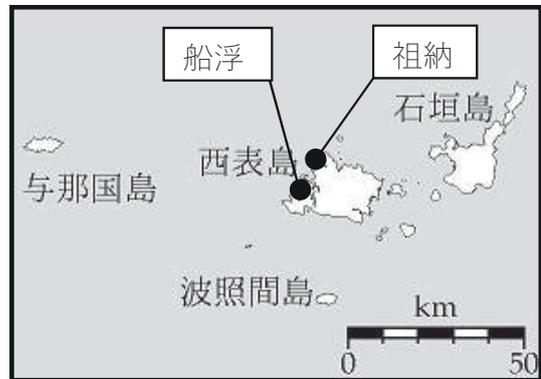
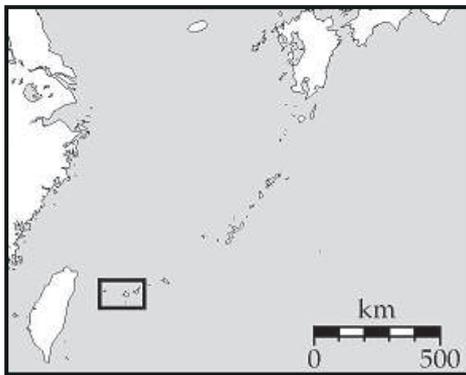
⁴ 役場の表記は「舟浮」とあるが、話者によると、元来「船浮」が正しいと言う。話者の見解を尊重するため、今後「船浮」と表記することにする。

1. 2 産業・生活

本報告での調査協力者は、清水光江氏（昭和3年生まれ的女性）と戸眞伊擴氏（昭和15年生まれ男性）のお二人である。お二人とも、現在、石垣市に在住している（清水氏は70歳まで船浮在住、戸眞伊氏は15歳まで船浮在住）。

昔の船浮での主な産業は農業であり、米が主たる現金収入であった。田は船浮集落の近くだけではなく、クイラ、ヒドリ（舟浮湾の奥のクイラ川下流）や、木炭（船浮の対岸の地域）、ユナラ（ユナラ川下流）や、ピシダやクマダラやサバ崎といった海岸沿いで山からの水が流れてくるところなどに点在していた。シコヤと呼ばれる田小屋を作り、そこで生活しながら米作りをしていたという。また、舟浮湾は豊かな漁場であり、8月9月は、ツノマタ（寒天の材料）とモズクが取れ、それを西表漁業組合（昭和47年に八重山漁業組合として合併）が買い上げていたので、それも現金収入となったそうである。戸眞伊氏は小学生の頃、一度イルカ漁を経験したそうだ。清水氏によると、集落総出のイルカ漁はそのときの一度だけだったという話である。学校も休みになり、子供たちは船に石や砂を積んで乗り込み、湾から出ようとするイルカを止めるため、湾の入り口で船を石でたたいて大きな音を出したり、砂を海中に撒いて、網のように見立ててイルカを湾の奥に追い戻したり、石を投げたりする仕事をしたという（イルカに当たり血が出るとフカがやってくるため、イルカは湾外には出ない）。そうやって、湾の奥にイルカを追い込み、銃やツバクロ（銃の一種でヤジリだけがイルカにささる）で仕留めたという話である。

（図）西表島船浮の位置⁵



2 先行研究

西表島方言に関しては祖納方言の報告がある。久野眞（1988）による音韻体系の分析があり⁶、金田章宏（2009）⁷（2010）⁸（2011）⁹では、格助詞や動詞の活用等の分析がなされ

⁵ 国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図に加筆をしている。

⁶ 久野眞（1988）「西表島祖納方言の音韻体系」『琉球の方言』13

⁷ 金田章宏（2009）「沖縄西表島（祖納）方言の格ととりたての意味用法」『琉球の方言』33

⁸ 金田章宏（2010）「沖縄西表島祖納方言ーアスペクト・テンス・ムード体系の素描」『日本語形態の諸問題ー鈴木泰教授東京大学退職記念論文集』ひつじ書房

⁹ 金田章宏（2011）「八重山西表島（祖納）方言動詞の活用タイプ」『琉球の方言』35

ている。船浮方言に関しては、町博光（1984）がある¹⁰。金田章宏（2009）で述べられている祖納方言の格助詞・とりたて助詞を参考にしながら、荻野千砂子（2017a）では、助詞に関して意味用法の記述を深めることを試みた¹¹。その結果、格助詞やとりたて助詞の形態は祖納方言とよく似ていることや、形態は同じでも異なる用法があることが明らかとなった。また、占部由子（2018）があり、今後のさらなる研究が期待される¹²。

3 音素に関して

久野（1988）では祖納方言の音素を次のように分析している。

母音音素：/a, i, u, e, o, ã/

半母音要素：/j, w/

子音要素：/ʔ, h, g, k, d, t, z, c¹³, s, r, n, b, p, m/

拍音素：/N, Q, R/

荻野（2017b）では船浮方言の音素を次のように考えた¹⁴。

母音：/a, i, u, e, o, ã, ą, ɸ, (i)/

半母音：/j, w/

子音：/k, s, t, ts, tɕ, φ, h, m, n, r, kʷ, gʷ, z, p, b, g, d/

拍音素として、撥音 N，促音 Q，長音 R が加わる。祖納方言との相違として、無声化した母音を音素として立てることをあげる。ただし、[i]に関しては音声的に揺れることがあり、保留とする。また、二重子音の ss の音声もある。

4 音節一覧と語彙

以下に音節の一覧と語彙を載せる。表記は簡易的な音声記号とした。[tɕ]は c，[φ]は f で表す。/hja/ は [ça] であり，/fja/ は [φja] である。接辞境界は-，接語境界は=で表す。成節母音は N で表す。また，無声母音の例は有声母音の例と別に挙げることにした。表の空欄の音節は，今回の調査では見つからなかったが，今後，見つかる可能性あることを考えて空欄のまま載せることにした。アクセントに関しては，いくつかの語彙のみ付した。[は上昇，] は下降を表す。パターンとして一つ目は，高く始まり最後まで高く，二つ目は最後の音節が上昇し，三つ目は，マイナス 2 モーラで下がるという 3 パターンが見られる。しかし，三型アクセントとして A 系，B 系，C 系に該当するか否かは不明であり，今後の課題である。

¹⁰町博光（1984）「西表島舟浮集落の方言敬語法」『広島女子大学文学部紀要』19

¹¹荻野千砂子（2017a）「西表島船浮方言の格助詞ととりたて助詞」『福岡教育大学国語科研究論集』58

¹²占部由子（2018）「南琉球八重山西表島船浮方言の文法概説」 修士論文，九州大学

¹³久野真（1988）の p73 の表より，音声は [ts] である。

¹⁴荻野千砂子（2017b）「沖縄県西表船浮方言」『平成 28 年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」報告書』

(表1) 音節一覧と語彙用例

音節	例 1		例 2		例 3	
a	aba	油	aarucan	とんぼ	aci mai	甘い
i	ai	けんか	iirou/iiro	具がない汁	ujabi	上
u	ura	あなた	usi	臼	usi	牛
e	eNpitsu	鉛筆	ujabe=tti	上=へ	keera	みんな
o	ooni	うなぎ	oiza	ネズミ	oNgi	扇
ã	ucitã	弟	fã	食べない	fã	子供
ĩ	fudaci mi	ヤモリ				
ka	kai	粥	kaaza	におい	kaara	瓦
kã	kãmadera	かまど	kãsa	傘	kãnapai	鍬
ki	kiizaN	かたつむり	inaci ki	杵	kii pai	木の鍬
kĩ	kĩsiri	煙管	kĩnu	着物	kĩmusittsa	可哀想
ku	muuku	婿	kukunutsu	9つ	kuNganja	シークワ ーサー
kũ	kũri	これ	kũsinee	腰	kũmori	水たまり
ke	keNso	崖	keera	みなさん		
ko	koozi	麴	koomi	とさか	cikoho	ふくろう
sa	saba	草履	usanzakja	おまえたち	sagaru	下がる
sã	sãta	砂糖	sãki	酒	sãnisai	嬉しい
si	si	巢	sikorai	塩辛い	paasi	箸
sĩ	sĩma	相撲	sĩkattu	とても	sĩci	節祭
su	suuna	海	mussu	ゴザ	sunupa	海藻
sũ	sũne	祖内	sũnuri	もずく		
se	seeroo	蒸し器				
so	soo	釣り竿	ssosi	白い	soogja	ふるい
ta	abuta	もっこ	taara	俵	taNgu	炭俵
tã	tãnju	天ぷらの油	tãna	棚	tãmunu	薪
ti	pitici	一つ	ti	手	tiN	天
tu	situNta	朝	itu	糸	tuci	妻
tũ	tũmari	戸眞伊屋号				
te	kãteci	ウニ				
to	tobira	ゴキブリ	toomai bukuro	糶入れ袋		
na	ana	穴	miina	庭	nassu	苗代田
ni	nisi	~ように	niisai	似ている		
nu	nu/nuu	何	nubasi	延ばせ(命令)	nuuN	蚤
ne	aNne	姉	kusi ne	腰		
no	noohiri	のこぎり	siino	粉ふるい	inoo	珊瑚礁

ha	nooha	ぬか	mahari	お椀	habiru/pabiru	蝶々
hi	hirabaci	大きな皿	moohi	昔		
he						
ho	hoi	～ぐらい	hoNma	長女	ci _o koho	ふくろう
fa	fai munu	食べ物				
fu	fuuN	あげない	furuja	便所	fuNda	床
f _u	f _u ni	船	f _u ci	口	f _u sa	草
fe	fee/fai	食べろ(命令)	fe fe fe...	あらあら...		
fo	foo	食べる				
ma	maasu	塩	maa	孫	amaama	三女
mi	miina	庭	miisu	味噌	miNci	目
mu	mus _i	虫	mu]ci	餅	muNtara	腿
me	gaNzume	三つ又くわ				
mo	taamo	桃	moo[hi	昔	mooja	モーヤー
ja	jaadu	戸	uja	親	jaa[fu	權
ju	jukaru pitu	士族	juda	枝	jus _i [ki	すすき
jo	joo[bi	いくら	joo]ci	かんざし	joi	祝い
ra	too[ra	台所	jurasi	粃殻分ふるい		
ri	izari	漁り	uri	それ, あれ		
ru	juuru	夜	za(a)ru	どれ	puuru joi	豊年祭
re						
ro	roosoku	ろうそく	tsubakuro	銚(両鉤)		
wa	uwaN	ご飯	uu[wa	豚		
ga	garasi	カラス	gaba	垢	jaN[gara]si	山刀
gi	koNgi	桑の木	oNgi	扇	kjoNgiN	狂言
gu	gusi	神に飾った酒	guu[sa]N	杖	ii[gu]N	銚
ge	igesi	ツノマタ(海藻)				
go	saa[go]	咳				
za	zabura	頭	za(a)ru	どれ	pi[za]	山羊
zi	[zii	字	[uzii	年配の男性	azi	味
zu	p _i sasi zuusi	固い雑炊				
ze	kazera	背中				
zo	zoori	濡れている	zoro zoro zuusi	軟らかい雑炊	zo]o	門
da	[daigu	大工	naada	涙	baa[da]/bada	腹
di	hu]di	筆	di	～と	madi	～まで
du	tuzubudu	夫婦	miiduN	女	du]si	友達

de	Nde	なぜ	fuNde	甘えること		
do	fuu]doo	ふとももの木	fudori	震える		
ba	baa[ki	かご	banu	私	ba]i	芽
bi	na(a)[bi	鍋	kabi	紙	bii]duN	男
bu	buu]si	節	[buunu	斧	kibu]si	煙
be	beenu	我が家の	baa bee]ha	うちの夫	[beru	舌
bo	boo[na]ci	とかげ	boo	棒	boori	疲れ
pa	pai	灰	paa	葉	pa]zi/pəci	蜂
pə	pəka	墓	pətee	畑	pəku	箱
pi	pii]du]u	いるか	piini	浅瀬(珊瑚礁)	piida	波打ち際
pᵢ	pᵢrosai	広い	pᵢru	にんにく	pᵢsaN	昼
pu	cᵢpusi	ひざ	puuru joi	豊年祭		
pᵤ	pᵤsi	拾え(命令)	pᵤsu	へそ	pᵤsi	星
pe	peera]ku	瓢箪の匙				
po	poo[za]	包丁	poo]ki	ほうき	poo	穂
kja	usa kjaa	あんた達	kjaN]gi	いぬまきの木		
kju	kjuu]ra	木の陰	kjuu	今日		
kjo	kjoNgiN	狂言				
sja	koo[sja]N	菓子	misjakai	しゃもじ		
sju						
sjo						
tsa	kittsa	サトウキビ	asi[tsa]i	暑い	aitsa si	口げんか
tsu	tsuu[sai]	強い	tatsu	立つ	matsu	待つ
tse						
tso						
ca	ca	お茶	aarucaN	とんぼ	baraN caN	藁のしん
ci	mici	水	icifu	いどこ		
cᵢ	fudacᵢmi	ヤモリ	cᵢna	綱	cᵢru	籠
cu	cukka	急須	kacu/katsu iju	カツオ	jaa[cu	お灸
ce	cee Ngo	さあ行こう	cee cee	さあさあ		
co	cokki	おやつ				
nja	buu]nja	妻の女親	juu]nja]	夕方		
nju						
njo						
hja	hjaku	百	gaahja	鎌		
hju						
hjo						

fja	fja/fui	塞げ (命令)	fja	食べる (命令)	fjaN?	食べた?
fju						
fjo						
mja	mjaN	無い	mja	～よ		
mju						
mjo						
rja	iirjaa	うるこ	aarjaN	アリ	naarjaN	実
rju						
rjo						
gja	soogja	粃殻糟の上に 飛ばす籠				
gju						
gjo						
zja	buuzja	自分のおじ	uuzjaN	ウジ		
zju	zjuuniN	10 人				
zjo	zjoo]ci	上手	tiNzjoo	天井		
dja	dja	～だの(並立)				
dju						
djo						
kwa	dakkwaru	くつつく	kwā	ここ		
gwa	guugwaN	小鳥	uugwai	怖い		
m	mma	馬	mmu	芋		

5 人称代名詞

琉球語の一人称代名詞では通常、包括形（聞き手を含む）と除外形（聞き手を含まない）の区別があるが、船浮方言は、一人称複数形の包括形が「人数による違い」により、さらに二つに分かれる。清水氏は一人称複数除外形の場合、人数に関わらず **paNkja** であるが、戸眞伊氏は人数が 5 名以上であれば **bahadaN** を使ってもよいのではないかと首をかしげる。ここでは、清水氏の意見をもとに（表 2）にまとめる。また、二人称複数形も「人数の違い」により三種類ある。また、二人称複数形では相手を罵倒する「お前ら」に相当する **usa+Nza+kja** がある。この言葉は子供に対して怒る場合に使用するという。

（表 2） 一人称と二人称の代名詞

一人称単数	一人称複数除外形		一人称複数包括形	
	2, 3 名	5 名以上	2, 3 名	5 名以上
banu	paNkja		baha	bahadaN
二人称単数	二人称複数			
ura	usa (2,3 名), usa+kja (4,5 名), usa+daN (7,8 名)			

- (1) baha {misutaaru/futaru} =si Ngir-u.
私達 {3人/2人} =INST 行く -NPST
私達 {3人/2人} で行く。(その場には3人, または2人だけがいる)
- (2) baha+daN goniN=si Ngir-u.
私達 5人= INST 行く -NPST
私達5人で行くよ。
- (3) paNkja misutaaru=si Ng-o.
私達 3人=INST 行く -INT
私達3人で行こう。(その場に10人いる。残りの7名は行かない)
- (4) {usa+kja/usa} kaNta=tti piNgir-ja.
お前達 あそこ=ALL 逃げる -IMP
お前達(2人), 向こうへ逃げろ。
- (5) usa+daN zaN=tti Ngir-ja.
お前達 どこ=ALL 行く -REA
お前達(7,8名), どこに行くのか。

6 格助詞

船浮方言の格助詞ととりたて助詞に関しては、荻野(2017a)に分析があるが、今回の調査で新たに分かったことがある。格助詞の用法を以下にまとめる。

- ① 主格を表す nu は主文では用いることがほとんど無く、専らとりたて助詞 du を用いる。節の主語の場合に nu を使用してもよいとされるが du の方が言いやすい。
- ② 受身文で、もとの文の動作主を表す格助詞として ra と na があつたが、新たに tti も使用可能だと分かった。また、戸眞伊氏は na が使用できるが、清水氏は na は使用できないという判断であった。
- ③ 使役文で「私は弟を海で遊ばせた」のような放任を表す場合、非使役者の「弟」を表す格助詞は ϕ か ba である。「私は弟に買い物に行かせた」のような強制を表す場合に格助詞 tti を用いる。
- ④ 具格の si は、「30分=si 歩く」のような「時間を表す用法」があつたが、「30分蒸す」のようなときには使用できないことが分かった。動作主が行動している時間を表す用法と訂正する。

格助詞の一覧を金田(2009)の祖納方言と比較して、(表3)にまとめる。

(表3) 船浮方言の格助詞一覧

共通語	船浮	祖納	格	グロス	共通語訳用例
φ/が	φ/nu	φ/nu	主格	NOM	花子が <u>言</u> ったことは本当か？
を	φ	φ	対格	ACC	お前は私 <u>を</u> 知っているか？
を	ba	ba	対格	ACC	石 <u>を</u> あの木に投げろ。
の	φ/nu	φ/nu	属格	GEN	私が蜂 <u>の</u> 巣を取った。
へ	titi	titi	方向	ALL	お前達、どこ <u>へ</u> 行くのか。
に	titi	titi	方向到着	ALL	あの絵は私 <u>に</u> ください。
に	titi	titi	隣接	ALL	空港 <u>に</u> 近い家はうるさい。
に	titi	titi	目的	ALL	孫の所 <u>に</u> 遊びに行く。
に	titi	titi	結果	ALL	太郎と次郎は医者 <u>に</u> なったって。
に	titi	titi	非使役者	ALL	私は弟 <u>に</u> 買い物しに行かせた。
に	titi	?	受身動作主	ALL	私はお婆さん <u>に</u> 叱られた。
に	na	na	存在場所	LOC	爺さんは山 <u>に</u> いらっしゃるよ。
で	na	na/nari	動作場所	LOC	山 <u>で</u> 薪を拾っていらっしゃるよ。
に	na	na	生じる場所	LOC	この綱をあそこの木 <u>に</u> 縛れ。
に	na	na	時間	DAT	明日8時 <u>に</u> 行こう。
に/から	?na/ra	ra	受身動作主	ABL	私はお婆さん <u>に</u> 叱られた。
から	ra	ra	奪格	ABL	二度と(今 <u>から</u>)しない。
で/から	si	si	具格	INST	酒は米 <u>で</u> 作るよ。
φ/で	si	?	行動時間	INST	山へ(向かい)30分 <u>で</u> 走った。
と	tu	ttu	共格	COM	太郎 <u>と</u> 次郎は医者になったって。
と	tu	ttu	対象	COM	あれもこれも芋 <u>と</u> 交換しよう。
より	kka/jokka	kka/juNka	比較格	COMP	今年は去年 <u>より</u> 暑くない。
まで	made	madi/madi na/madisi	限界格	まで	夜 <u>まで</u> かかった。
と	di	?	引用	QUOT	私は二度としない <u>と</u> 言った。

6. 1 φ格・nu格(主格)

(6) hanako={du/nu} ja-ada kutu fuNtoo?
 花子={FOC/NOM} 言う-PFV1 こと 本当
 花子が言ったことは本当か？

6. 2 φ格・ba格(対格)

banu(私を)のときは、対格baを言わないことが多い。banu=baとなると「私だけを」という「とりたて」の意味が出てくる。

- (7) **ura** **banu** **si-iN?**
 あなた 私 知る-PROG
 お前は私を知っているか?

- (8) **isi=ba** **unu** **ki=tti** **naNgir-ja.**
 石=ACC あの 木=ALL 投げる-IMP
 石をあの木に投げろ。

6. 3 nu 格 (属格)

通常は属格を **nu** で表すが、人称代名詞の場合は **nu** が不要である。「私の味噌」は **banu misu**, 「あなたの味噌」は **ura misu** となる。

- (9) **baN=du** **paçi=nu** **si** **tur-ada.**
 私=FOC 蜂=GEN 巣 取る-PFV1
 私が蜂の巣を取った。

- (10) **ura** **misu=tu** **baa** **misu=tu** **azi+s-ii** **mir-uN=na?**
 お前の 味噌=COM 私の 味噌=COM 味する-SEQ1 見る-NPST=QES
 お前の味噌と私の味噌を味比べしようか。

6. 4 tti 格 (向格)

6. 4. 1 方向

- (11) **usa+daN** **zaN=tti** **Ngir-ja.**
 お前達 どこ=ALL 行く-REA
 お前達, どこへ行くのか。

6. 4. 2 方向到着

- (12) **unu** **ii=mee** **banu=tti** **hiir-i.**
 あの 絵=TOP 私=ALL くれる-IMP
 あの絵は私にください。

6. 4. 3 隣接

- (13) **kuukoo=tti** **iNcika-ru** **jaa=mee** **kaşamassa-i.**
 空港=ALL 近い-ADN1 家=TOP うるさい-NPST
 空港に近い家はうるさい。

6. 4. 4 目的地

「あの木に投げろ」「孫のところに行く」のように最終目的地の「に」格には **tti** を使うが、動作の目的を表す「遊びに行く」「見に行く」などの「に」格に相当する助詞はなく、

動詞の連用形を用いる。

- (14) maa=nu ka=tti asip-i Ngir-u.
 孫=GEN 所=ALL 遊ぶ-SEQ1 行く-NPST
 孫の所に遊びに行く。

6. 4. 5 結果

- (15) ura uja=tti niis-adaru=ra.
 お前 親=ALL 似る-PFV1=SFP
 お前は親に似ているね。

- (16) taroo=tu ziroo=mee isja=tti nar-ar-ida=di.
 太郎=COM 次郎=TOP 医者=ALL なる-POT-PFV1=REP
 太郎と次郎は医者になったって。

6. 4. 6 使役文の非使役者

- (17) banu=mee ucitā(=ba) suunaa=na asip-as-i s-ita.
 私=TOP 弟(=ACC) 海=DAT 遊ぶ-CAUS-SEQ1 する-PST
 私は弟を海で遊ばせた。

- (18) banu=mee ucitā=tti kaimunu s-i Ng-as-ita.
 私=TOP 弟=ALL 買い物 する-SEQ1 行く-CAUS-PST
 私は弟に買い物しに行かせた。

6. 4. 7 受身文の動作の主体

- (19) banu=mee appaa={ra/tti/?na} ja-ar-ida.
 私=TOP 婆さん={ABL/ALL/?DAT} 叱る-PASS-PFV1
 私はお婆さんに叱られた。

6. 5 na 格 (場所格)

6. 5. 1 存在場所

- (20) uzii=mee jama=na=du oor-iru=dura.
 爺さん=TOP 山=LOC=FOC いらっしゃる-PROG=SFP
 お爺さんは山にいらっしゃるよ。

6. 5. 2 動作場所

- (21) jamanaa=na t̄amuN pus-i oor-iru.
 山=DAT 薪 拾う-SEQ1 いらっしゃる-PROG
 山で薪を拾っていらっしゃるよ。

6. 5. 3 動作が生じる場所

- (2 2) unu cɨna kaNta=nu kii=na fuur-ja.
 この 綱 あそこ=GEN 木=DAT 縛る -IMP
 この綱をあそこの木に縛れ。

6. 5. 4 時間

- (2 3) attsa hacizi=na Ng-o.
 明日 8時=DAT 行く -INT
 明日8時に行こう。

6. 6 ra 格 (奪格)

6. 6. 1 受け身文の動作の主体

- (2 4) banu=mee appaa={ra/tti/?na} ja-ar-ida.
 私=TOP 婆さん= {ABL/ALL/?DAT} 叱る -PASS-PFV1
 私はお婆さんに叱られた。

6. 6. 2 奪格

- (2 5) banu=mee mina=ra s-aN=di ja-ada.
 私=TOP 今=ABL する -NEG=QUOT 言う -PFV1
 私は二度と (今から) しないと云った。

6. 7 si 格 (具格)

6. 7. 1 具格

- (2 6) saki=mee mai=si=du cikur-u=dara.
 酒=TOP 米=INST=FOC 作る -NPST=SFP
 酒は米で作るよ。

6. 7. 2 行動時間

- (2 7) jamana=tti sanzippuN=si p̄ar-i s-ita.
 山=ALL 30分=INST 走る -SEQ1 する -PST
 山へ (向かい) 30分_走った。

6. 8 tu 格 (共格)

6. 8. 1 共格

- (2 8) taroo=tu ziroo=mee isja=tti nar-ar-ida=di.
 太郎=COM 次郎=TOP 医者=ALL なる -POT-PFV1=REP
 太郎と次郎は医者になったって。

6. 8. 2 対象

- (29) uri=N kyri=N mmu=tu kookaN s-aa.
 あれ=ADD これ=ADD 芋=COM 交換 する-INT
 あれもこれも芋と交換しよう。

6. 9 kka (jukka) 格 (比較)

- (30) kutusi=mee kuuzuu= {jukka/kka} asitsa mjaN.
 今年=TOP 去年=COMP 暑い-INF ない
 今年は去年より暑くない。

6. 10 made 格 (範囲)

- (31) juru=made kakar-i s-ita.
 夜=まで かかる-SEQ1 する-PST
 夜までかかった。

6. 11 di 格 (引用)

- (32) banu=mee mina=ra s-aN=di ja-ada.
 私=TOP 今=ABL する-NEG=QUOT 言う-PFV1
 私は二度としないと行った。

7 とりたて助詞

荻野 (2017a) と比較して、今回の調査で新たに分かったことを、以下にまとめる。

- ① NdaN は「最低限の例示を表す」としていたが、今回は、最高程度を表す名詞を取ることでもできた。そのため、多くの選択肢から望ましい一つを取り出す用法があるのではないかと考え「選択例示」とした。
- ② na は「強調」を表すとしていたが、名詞に直接下接できなかつた。格助詞の具格 si に下接するときには使用ができた。接続の範囲は、今後の課題である。
- ③ sage の用法の一つとして「何もないときに、これだけは欲しい」という場合に使用されるため、「必要最低限のものを表す」とした。
- ④ hoi は中程度を表すとしていたが、一般的な出来事であれば、高い程度を表すときにも使用できる。だが、直接聞き手に言う場合に、ura=hoi (あなたぐらい) と言うと失礼になる。子供にだったら言える。基本的な程度性としては、中程度より低そうだ。
- ⑤ siko は最高の程度を表すことができるというのは確かだが、本人が経験不可能な立場にいると判断される場合には使えず、「様態」を表す nisi (ように) を用いる。
- ⑥ kja/daN を「私なんか」のように卑下するときのとりたて助詞としていたが、あくまで複数のときにしか使用できないことが分かった。よって「複数もどき」の用法はない。kja も daN も複数を表す接辞として使用されるため、本当にとりたて性があるのか、さ

らに調査をする必要がある。今後の課題である。
とりたて助詞の一覧を、金田（2009）の祖納方言と比較して（表4）にまとめる。

（表4）船浮方言のとりたて助詞

共通語	船浮	祖納	意味	グロス	共通語訳用例
ぞ	du	du	焦点	FOC	太郎の仕事を私 <u>が</u> した。
は	mee	mee	主題	TOP	お前の家は <u>は</u> 遠いから
も	N/miN	N/miN	累加	ADD	あれ <u>も</u> これ <u>も</u> 芋と交換しよう。
も	N/miN	?	添加	さえ	一回戦 <u>さえ</u> 負けた。
さえ	NdaN	NdaN	極端な例	さえ	一円 <u>さえ</u> 落ちていない。
でも	NdaN	?	選択例示	でも	お前 <u>でも</u> できなかつたら誰もできない。
ずつ	na	na	まとまり	ずつ	3人 <u>ずつ</u> 並べ。
こそ	na	?	強調	EMP	米 <u>だけで</u> 炊け。
だけ	gana/ gaanaa	gana/?	限定	だけ	ここに水 <u>だけ</u> ある。
さえ	sage	sage	程度（低）	さえ	太郎 <u>さえ</u> できるのに、お前はできないのか。
さえ	sage	?	必要最低限	さえ	薬 <u>さえ</u> あればよくなるのに。
ぐらい	hoi	hwee	程度（高）	ほど	今年 <u>ほど</u> 暑いときはなかったね。
ぐらい	hoi	hwee	程度（中）	ぐらい	お前が欲しい <u>ぐらい</u> 持って行け。
ほど	siko	siko/suko	程度（高）	ほど	白鵬 <u>ほど</u> 強くなれ。
ように	nisi	nisi	様態	ように	お前 <u>のように</u> 遅い人はいない。
ばかり	baaree baree	baree	おおよそ	ぐらい	白鵬 <u>ぐらい</u> 強いと面白いな。
ほど	fudu	fudu	程度	ほど	走れば走る <u>ほど</u> 疲れる。
だけ	dake	?	限定	だけ	行く <u>だけ</u> 行ってみよう。
なんか	kja/daN	kja/?	例示	なんか	私達 <u>なんか</u> 役に立たないよ。
まで	made	madi	添加	まで	お前 <u>まで</u> 言うのか。
か	kka	?	不定	INDF	どこ <u>か</u> に行けたらいいね。

7. 1 du によるとりたて

強調を表す。主文でも複文でも、特に動作主を表す位置で多く使用される。

- (33) taroo=nu sigutu baN=du s-ita.
 太郎=GEN 仕事 私=FOC する-PST
 太郎の仕事を私がした。

7. 2 mee によるとりたて

「は」に相当する助詞は、mee である。

- (34) ura jaa=mee tuusa-ri-kii,
 お前の家=TOP 遠い-SEQ1-CSL
 お前の家は遠いから、

7. 3 N/miN によるとりたて

7. 3. 1 累加

- (35) uri=N kyri=N mmu=tu kookaN s-aa.
 あれ=ADD これ=ADD 芋=COM 交換 する-INT
 あれもこれも芋と交換しよう。

7. 3. 2 架空の出来事まで添加する

勝ち進むと思っていたチームが、一回戦敗退だった場面である。共通語で「*強いと思っていたのに、一回戦も負けた」とは言えない。共通語では「さえ」に相当する。N/miN は共通語の「も」と「さえ」の両方の性質を持つと言える。荻野 (2017a) では、仮説として N/miN は「一回戦で負けるということは、他の試合でも負けたことである」という複数の「架空の負け」が想定でき、「一回戦での負け」を複数の負けの一つとして捉えている可能性があるのではないかと考えた。

- (36) ikkaiseN=miN mah-i s-ita.
 一回戦=さえ 負ける-SEQ1 する-PST
 一回戦さえ負けた。

7. 4 NdaN によるとりたて

金田 (2009) では、NdaN は「ダニ系のとりたて助辞と見られる」との指摘がある。用法としては、①数が少ないこと「ひと月にしか〈NdaN〉ならない」、②未満（1つか2つか持っていないと驚いて）「3つしか〈NdaN〉持っていないのか」、③全否定「一回も〈NdaN〉驚いたことはない」、④極端な例「一円も〈NdaN〉大切にした」、⑤例示「茶でも〈NdaN〉飲もうか」の5つが示されている。船浮で音声として、前接の名詞が N で終わると、(37) のように daN になる。

7. 4. 1 極端な例

- (37) icieN=daN ut-i bur-aN.
 一円=さえ 落ちる-SEQ1 いる-NEG
 一円さえ落ちていない。

- (38) unu inu=mee mici=NdaN num-i nar-aN.
 この 犬=TOP 水=さえ 飲む-SEQ1 なる-NEG
 この犬は水さえ飲めない。

7. 4. 2 選択肢の中から一つを取り出す

大人の前を無言で通り過ぎる子供に対して、荻野（2017a）では「挨拶ぐらいしなさい」と注意する場面で NdaN が使える例があった。「*挨拶さえしなさい」と共通語では言えないので、極端な例の「さえ」とは異なる用法を持つと考えられる。最低限のマナーとして「挨拶」があるので、「最低限の例示を表す用法」と考えたが、今回（40）のような例も出てきた。「あなたでもできなかつたら、誰もできないよ」というのは、他の人と比較して「あなた」を高く評価している場面である。最低限の例示ではない。NdaN は多くの選択肢から、望ましい一つを取り出す用法があるのではないかと考える。

しかし、「お茶でも召し上がりませんか」と目上の人に尋ねる表現で「茶=NdaN」というとき、話者は「捨て言葉」だと説明する。「茶ぐらい飲んでいけ」のように解釈されるようだ。この場合、jarabaN を使う方が望ましいという。よって、例示の程度性としては甚だしいものを表すのが NdaN ではないかと考える。

(39) aisatsu=NdaN s-ja.

挨拶=でも する-IMP

挨拶ぐらいしなさい。

(40) ura=NdaN nar-anaa-kara taa=N nar-aN.

あなた=でも なる-NEG-COND 誰=ADD なる-NEG

あなたでもできなかつたら誰もできない。

(41) nuuNkaN mjaa naar-abaN mici=NdaN a-kkara ikir-ari=su.

何もかも なく なる-CNC 水=でも ある-COND 生きる-POT-NMLZ

何も無くなったとしても水さえあれば生きられるよ。

(42) koosjaN=jarabaN muc-i Ngir-ja.

お菓子=でも 持つ-SEQ1 行く-IMP

お菓子でも持って行きなさい。

7. 5 na によるとりたて

7. 5. 1 まとまり

共通語では、「～ずつ」に該当する。

(43) misutaari=na narab-i.

3人=ずつ 並ぶ-IMP

3人ずつ並べ。

7. 5. 2 限定性を強める

現在のところ、名詞に直接下接することはできず、具格の si にのみ na を下接することができる。しかし、すべての格助詞で調べたわけではないので、今後の課題である。

- (44) mai=si=na bass-ja.
 米=INST=EMP 炊く -IMP
 米だけで_炊け。

7.6 gana によるとりたて

gana は限定を表す。船浮では長音化した gaanaa と gaana も頻繁に使われる。「～しか～ない」という構文が、「名詞+gana=du+動詞の肯定形」で作られる。「飛行機は一日に一回しかない」を、話者は「飛行機は一日に一回 gaanaa=du aru」と言う。

- (45) uma=na mici=gaanaa=du ar-u.
 ここ=LOC 水=だけ=FOC ある-ADN1
 ここに水だけある。

7.7 sage によるとりたて

7.7.1 最低程度の例え

金田 (2009) によると, sage は極端な例を表すとされる。船浮でも同様の例もある。

- (46) taroo=sage nar-u=nuba ura=mee nar-aN=na.
 太郎=さえ なる-ADN1=AC お前=TOP なる-NEG=SFP
 太郎さえできるのに, お前はできないのか。

7.7.2 必要最低限のもの

自分にとって必要最低限のものを表す用法もある。荻野 (2017a) では「不可欠な最低条件」としたが、「何もないときに, これだけは欲しい」という場合に使用される。そのため, 今回「必要最低限のものを表す」と訂正した。

- (47) fʉsiri=sage a-kkara misaN nar-u=nuba.
 薬=さえ ある-COND 良い なる-ADN1=AR
 薬さえあればよくなるのに。

- (48) isja=sage oor-ukkara siba mjaN=joo.
 医者=さえ いらっしゃる-COND 心配 ない=SFP
 医者さえいらっしゃるから大丈夫よ (他に誰もいない)。

7.8 hoi によるとりたて

7.8.1 程度 (高)

「今年」が最高の暑さであるとき, hoi も siko も使用ができる。

- (49) kutusi= {hoi/siko/nisi} asitsa-ru basjo mjaN=dara.
 今年=ほど 暑い-ADN1 とき ない=SFP
 今年ほど暑いときはなかったね。

7. 8. 2 程度（中～低）

食事が余ったとき、「欲しいだけ持って行け」の「だけ」として **hoi** を使うと、(50) のように「みんなの分を考えて、一人分を持って行け（たくさんは持って行くな）」という意味が出てくる。荻野（2017a）では「まあまあの程度」を表すとして「太郎ぐらいできれば上出来だ」という例文を出したが、むしろ程度としてはかなり低いものを想定しているようである。(51) は子供に対してなら言える。大人に対しては失礼になるという。**hoi** は低めの程度を表すため、聞き手に対して使用すると聞き手を見下げた言い方になるようだ。

(50) **ura** **pusaaru=hoi** **muc-i** **Ngir-i.**
お前 欲しい=ぐらい 持つ-SEQ1 行く-IMP
お前が欲しいぐらい持って行け。

(51) **ura=hoi** **nibisa-ru** **pitu** **bur-aN.**
お前=ぐらい 遅い-ADN1 人 いる-NEG
お前みたいに遅い人はいない（親が子供を叱る）。

7. 9 **siko** によるとりたて

siko は最高の程度を表すことができる。(52) の場合、**siko** が使用できるのは関取を目指している人のみで、一般の人には例示として使うことができない。本人が経験できる立場にいるかどうかも考慮するようである。(49) の「今年ほど暑い年はなかった」では **hoi** が使用できたので、本人が経験できることであれば最高程度を表すことができる。

(52) **hakuho={nisi/siko}** **tsuusa** **nar-i.**
白鵬=ほど 強い-INF なる-IMP
白鵬ほど強くなれ。

7. 10 **nisi** によるとりたて

共通語の「くらい、ように」に該当する。様態を表す。

(53) **ura={nisi/siko/*hoi}** **nibisa-ru** **pitu** **bur-aN.**
お前=のように 遅い-ADN1 人 いる-NEG
お前のように遅い人はいない（大人には **hoi** が使えない）。

7. 11 **baree** によるとりたて

船浮では **baree** だけでなく、長音化した **baaree** もある。祖納に **baaree** と長音化する用法があるか否かは記述が無いので不明である。おおよその量を表す。

(54) **hakuho={hoi/baaree}** **tsuusa-kkara** **umussa-i=ra.**
白鵬=ぐらい 強い-COND 面白い-NPST=SFP
白鵬ぐらい強いと面白いな。

7. 1 2 fudu によるとりたて

「～すればするほど」のときに, fudu が出てくる。

- (55) p̄ar-ukkara p̄ar-u=fudu boori s-u.
 走る-COND 走る-ADN1=ほど 疲れ する-NPST
 走れば走るほど疲れる。

7. 1 3 dake によるとりたて

「～するだけ～しよう」のときに dake が出てくる。

- (56) ifu=dake ih-i mir-a.
 行く=だけ 行く-SEQ1 見る-INT
 行くだけ行ってみよう。

7. 1 4 kja/daN によるとりたて

荻野 (2017a) では, 祖納と同様に「複数形もどき」の用法もあるとしていたが, (57) のような「私なんか」という場合, 「なんか」には複数の意味が含まれており単数では使用できないことが分かった。単数の場合は (58) のようになる。kja も daN も複数を表す接辞としての用法もあるため, 本当に「私達なんか」のような卑下の場合に使うのか現時点では不明であり, 今後の課題とする。

- (57) paNkja jaku tat-aN=jo.
 私達 役 立つ-NEG=SFP
 私(達)なんか役に立たないよ。

- (58) banu=nisi=nu munu=mee nuu=N nar-aN.
 私=ような=GEN 者=TOP 何=ADD なる-NEG
 私なんかできないよ。

7. 1 5 made によるとりたて

- (59) ura=made=N i-i=su.
 お前=まで=ADD 言う-INF=NMLZ
 お前まで言うのか。

7. 1 6 kka によるとりたて

疑問詞に下接する。荻野 (2017a) では「誰か」の例で ta=kka と kka の例をあげたが, 前の名詞が N で終わると ka でも出てくる。

- (60) zaN=ka=tti Ngir-ar-ikkara misaN=ra.
 どこ=INDF=ALL 行く-POT-COND いい=SFP
 どこかに行けたらいいね。

8 「おおきなかぶ」船浮方言版

船浮方言での「おおきなかぶ」の談話を以下に示す。グロスに関しては、まだ不明な部分もあるため、暫定的に考えられるものを付した。一行目は平仮名で表記しているが、その際、母音の無声化が生じている音節には平仮名の右上に*印を付した。

まいさーぬかぶ	でい	ば*なしば	みなら
maisa=nu kabu=di	pānasi=ba		mina=ra
大きい=GEN	かぶ=REP	話=ACC	今=ABL
大きなかぶって話を			今から

いいきー	しきとーりよ。	えい。	うじーどう
i-i-kii	sik-i toor-i=joo.	ei	uzii=du
言う-SEQ1-CSL	聞く-SEQ1	下さる-IMP=SFP	はい おじいさん=FOC
言うから	聞いてくださいね。		はい。おじいさんが

だいぐにぬ	た*にば	まはだでい。	あち*まー	あち*ましる
daiguni nu	tāni=ba	mah-ada=di.	aci-maa+	aci-ma-siru
大根=GEN	種=ACC	まく-PFV1=REP	甘い+甘い-ADN1	
大根の種をまいたって。			甘い甘い	

だいくにになりよー	でい	いいってい	あって	また	まいさー	まいさしぬ
daiguni=ni	nar-i=joo=di	i-itti	atte	mata	maisaa+	maisai-sinu
大根=DAT	なる-IMP=SFP=QUOT	言う-SEQ2	そして	また	大きい+大きい-ADN2	
大根になれよってと	言	って	そして	また	大きい大きい	

だいぐにに	なりよー	でい	いいってい	まはだでい。	あち*まーし
daiguni=ni	nar-i=joo=di	i-itti	mah-ada=di.		aci-maa-si
大根=DAT	なる-IMP=QUOT	言う-SEQ2	まく-PFV1=REP		甘い-SEQ1
大根になれよって	言	って	まいたって。		甘くて

がんにゅーさる	き*みっさい	し*かつとう	まいさい
gaNzjuu-saru	kimissa-i	şikattu	maisai-i
元気-ADN3	すばらしい-NPST	とても	大きい-NPST
立派な	すばらしい	とても	大きい

だいぐにどう でいきだでい。 うじーめ だいぐにば ぬふんदै
 daiguni=du dik-ida=di. uzii=mee daikuni=ba nuf-uN=di
 大根=FOC できる-PFV1=REP おじいさん=TOP 大根=ACC ぬく-NPST=QUOT
 大根が できたって。 おじいさんは 大根をぬこうと

しーだ すぬ ひやこらさ दै いいてい
 s-iida=su=nu hijakorasa=di i-itti
 する-PFV1=NMLZ=AC よっこらしよ=QUOT 言う-SEQ2
 したけど よっこらしよって言って

ぬはだ すぬ あっすぬ だいぐに めー ぬはるんだでい。
 nuh-ada=su=nu assunu daiguni=mee nuh-ar-uN-da=di.
 ぬく-PFV1=NMLZ=AC だけど 大根=TOP ぬく-POT-NEG-PFV1=REP
 ぬいたけど だけど 大根はぬけなかつたって。

うじーめ あっばーば ゆらび きたでいそー。
 uzii=me appaa=ba jurab-i k-ita=di=soo.
 おじいさん=TOP おばあさん=ACC 呼ぶ-SEQ1 くる-PST=REP=SFP
 おじいさんはおばあさんと呼んで 来たって。

あって あっばーどう うじーば ぴ*きってい うじーどう
 atte appaa=du uzii=ba pik-itti uzii=du
 そして おばあさん=FOC おじいさん=ACC 引く-SEQ2 おじいさん=FOC
 そして おばあさんが おじいさんを引いて おじいさんが

だいぐにば ぴ*き
 daiguni=ba p*ik-i
 大根=ACC 引く-SEQ1
 大根を引いて

ひやさーこらさーदै いいてい ひかだ すぬ うり しん
 hijasaa korasaa=di i-itti hik-ada=su=nu uri s-iN
 うんとこしよ どっこいしよ=QUOT 言う-SEQ2 引く-PFV1=NMLZ=AC それ する-CNC
 うんとこしよどっこいしよって引いたけど、 それでも

だいぐにめー ぬはるんだ。

daiguni=mee nuh-ar-uN-da.

大根=TOP ぬく-POT-NEG-PFV1

大根はぬけなかった。

あつばーめー まーば ゆらびきー

appaa=mee maa=ba jurab-i ki-i

おばあさん=TOP 孫=ACC 呼ぶ-SEQ1 来る-SEQ1

おばあさんは孫を呼んできて

まーどう あつばーば ぴ*き

maa=du appaa=ba p̥ik-i

孫=FOC おばあさん=ACC 引く-SEQ1

孫がおばあさんを引いて

あつばーどう うじーば ぴ*き

appaa=du uzii=ba p̥ik-i

おばあさん=FOC おじいさん=ACC 引く-SEQ1

おばあさんがおじいさんを引いて

うじーどう だいぐにば

uzii=du daiguni=ba

おじいさん=FOC 大根=ACC

おじいさんが大根を

ぴ*かだでい。

p̥ik-ada=di.

引く-PFV1=REP

引いたって。

ひやさーこらさーでい

hijasaa korasaa=di

うんとこしょ どっこいしょ=QUOT

うんとこしょどっこいしょって

いいってい

i-itti

言う-SEQ2

言って

あつすぬ めーだ めーだ だいぐにめー ぬはるん。

assunu meeda meeda daiguni=mee nuh-ar-uN.

だけど まだ まだ 大根=TOP ぬく-POT-NEG

だけど まだまだ大根はぬけない。

まーめー いんば ゆらびきってい

maa=mee iN=ba jurab-i ki-itti

孫=TOP 犬=ACC 呼ぶ-SEQ1 来る-SEQ2

孫は犬を呼んできて

いんどう まーば ぴ*き

iN=du maa=ba p̥ik-i

犬=FOC 孫=ACC 引く-SEQ1

犬が孫を引き

まーどう あつばーば ぴ*き

maa=du appaa=ba p̥ik-i

孫=TOP おばあさん=ACC 引く-SEQ1

孫がおばあさんを引き

あっぱーどう うじーば び*きってい

appaa=du uzii=ba p̥ik-itti

おばあさん=FOC おじいさん=ACC 引く-SEQ2

おばあさんがおじいさんを引いて

うじーどう だいぐに び*き

uzii=du daiguni p̥ik-i

おじいさん=FOC 大根 引く-SEQ1

おじいさんが大根を引き

ひやさーこらさーでい いいってい

hijasaa korasaa=di i-itti

うんとこしょ どっこいしょ=QUOT 言う-SEQ2

うんとこしょどっこいしょって

び*かだ すぬ

p̥ik-ada=su=nu

引く-PFV1=NMLZ=AC

引いたけど

うりやらばん めーだ めーだ ぬはるん。

uri=jar-abaN meeda meeda nuh-ar-uN.

それ=COP-CNC まだ まだ ぬく-POT-NEG

それでもまだまだぬけない。

いんめー まやーば ゆらびきー

iN=mee majaa=ba jurab-i ki-i

犬=FOC 猫=ACC 呼ぶ-SEQ1 来る-SEQ1

犬は猫を呼んできて

まやーどう いんば び*き

majaa=du iN=ba p̥ik-i

猫=FOC 犬=ACC 引く-SEQ1

猫が犬を引き

いんどう まーば び*き

iN=du maa=ba p̥ik-i

犬=FOC 孫=ACC 引く-SEQ1

犬が孫を引き

まーどう あっぱーば び*きってい

maa=du appaa=ba p̥ik-itti

孫=FOC おばあさん=ACC 引く-SEQ2

孫がおばあさんを引いて

あっぱーどう うじーば び*き

appaa=du uzii=ba p̥ik-i

おばあさん=FOC おじいさん=ACC 引く-SEQ1

おばあさんがおじいさんを引き

うじーどう だいぐに び*き

uzii=du daiguni p̥ik-i

おじいさん=FOC 大根 引く-SEQ1

おじいさんが大根を引き

ひやさーこらさーでい び*かだ すぬ

hijasaa korasaa=di p̥ik-ada=su=nu

うんとこしょ どっこいしょ=QUOT 引く-PFV1=NMLZ=AC

うんとこしょどっこいしょって引いたけど

うりやらばん かぶめー... (言い間違い) だいぐにめー
 uri=jar-abaN kabu=mee ... daiguni=mee
 それ=COP-CNC かぶ=TOP... 大根=TOP
 それでもかぶは... 大根は

ぬはるんだ。 まやーめー おいぎーば ゆらびきー
 nuh-ar-uN-da. maja=mee oizaa=ba jurab-i ki-i
 ぬく-POT-NEG-PFV1 猫=TOP ねずみ=ACC 呼ぶ-SEQ1 来る-SEQ1
 ぬけなかった。 猫はねずみを呼んできて

おいぎーどう まやーば び*き まやーどう いんば び*き
 oizaa=du majaa=ba pij-k-i majaa=du iN=ba pij-k-i
 ねずみ=FOC 猫=ACC 引く-SEQ1 猫=FOC 犬=ACC 引く-SEQ1
 ねずみが 猫を引き 猫が犬を引き

いんどう まーば び*き まーどう あっぱーば び*きってい
 iN=du maa=ba pij-k-i maa=du appaa=ba pij-k-itti
 犬=FOC 孫 =ACC 引く-SEQ1 孫=FOC おばあさん=ACC 引く-SEQ2
 犬が孫を引き 孫がおばあさんを引いて

あっぱーどう うじーば び*きってい うじーどう
 appaa=du uzii=ba pij-k-itti uzii=du
 おばあさん=FOC おじいさん=ACC 引く-SEQ2 おじいさん=FOC
 おばあさんがおじいさんを引いて おじいさんが

だいぐに び*かだでい。
 daiguni pij-k-ada=di.
 大根 引く-PFV1=REP
 大根を引いたって。

ひやさーこらさーでい いいってい びかだ すぬ... (言い間違い)
 hijasaa korasaa=di i-itti pij-k-ada=su=nu...
 うんとこしょ どっこいしょ=QUOT 言う-SEQ2 引く-PFV1=NMLZ=AC...
 うんとこしょどっこいしょって引いたけど

こらさーでい いいってい ぴ*き

korasa=di i-itti pj̄k-i

どっこいしょ=QUOT 言う-SEQ2 引く-SEQ1

どっこいしょって言って引き

やっとかつと しー

jatto katto s-ii

やっとかさ する-SEQ1

やっとかさ

だいぐにめー ぬはりしたでい そー。

daiguni=mee nuh-ari s-ita=di=soo.

大根=TOP ぬく-POT する-PST=REP=SFP

大根はぬけたってさ。

【グロス一覧】

ABL	ablative	奪格
AC	adversative conjunction	逆接
ACC	accusative	対格
ADD	additive	添加
ALL	allative	向格
ADN 1-3	adnominal	連体
AR	anti realvirtual	反実仮想
CAUS	causative	使役
CSL	causal	理由
CNC	concession	譲歩
COM	comitative	共格
COMP	comparative	比較
COND	conditional	条件
COP	copula	コピュラ
DAT	dative	与格
EMP	emphasize	強調
FOC	focus	焦点
GEN	genitive	属格
IMP	imperative	命令
INDF	indefinit	不定
INF	infinitive	連用
INST	instrumental	具格

INT	intentional	意志
LOC	locative	場所格
NEG	negative	否定
NMLZ	nominalizer	名詞化
NOM	nominative	主格
NPST	non-past	非過去
PAL	parallel	並列
PASS	passive	受身
PFV 1-2	perfective	完了
POT	potential	可能
PST	past	過去
PROG	progressive	進行
QES	question particle	疑問助詞
QUOT	quotative	引用
REA	realis form	已然
REP	reportative	伝聞
SEQ 1-2	sequential	継起 (テ形)
SFP	sentence final particle	終助詞
TOP	topic	主題
+		複合境界
-		接辞境界
=		接語境界

【参考文献】

- 占部由子（2018）「南琉球八重山西表島船浮方言の文法概説」 修士論文, 九州大学
- 荻野千砂子（2017a）「西表島船浮方言の格助詞ととりたて助詞」『福岡教育大学国語科学研究論集』58
- 荻野千砂子（2017b）「沖縄県西表船浮方言」『平成28年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」報告書』
- 久野眞（1988）「西表島租納方言の音韻体系」『琉球の方言』13
- 金田章宏（2009）「沖縄西表島（租納）方言の格ととりたての意味用法」『琉球の方言』33
- 金田章宏（2010）「沖縄西表島租納方言ーアスペクト・テンス・ムード体系の素描」『日本語形態の諸問題ー鈴木泰教授東京大学退職記念論文集』ひつじ書房
- 金田章宏（2011）「八重山西表島（租納）方言動詞の活用タイプ」『琉球の方言』35
- 町博光（1984）「西表島舟浮集落の方言敬語法」『広島女子大学文学部紀要』19

第2部

保存調査研究

— しまことば劇の効果 —

諸鈍シバヤ

諸鈍シバヤ

前田達朗

はじめに

奄美・加計呂麻島の諸鈍集落の「諸鈍シバヤ」（以下シバヤ）を「演劇」とすることについては反論も予想される。後述するが集落の人々にとっては「神事」であり、日本へ帰属を求められた近世以降は「祭り」ともされる。またごく近似のものが対岸の奄美大島側の油井（ゆい）集落にも見られる²⁸が、そこでは「踊り」とされ、祭りの中での位置もことなる。またこれらを分けて考える意味は目的によって変わるであろう。

本稿でこれを「伝統的な演劇」とする理由はこうしたたとえば民俗学的な研究の視点ではなく、集落の人々が「演じる」ための努力を続けてきたからである。そこに現れる物語だけではなく伝える手段としての言語がシバヤを介在して伝承されている。踊り、振りを含めた音楽劇的な展開であるがために歌とその歌詞がその重要な手段であり、そしてこれをつないできた集落の人々にとってはこれらを体得することが義務であり、演ずることが許されることは名誉でもあり、そのためにモラルやレベルが維持されてきた。琉球列島全域に見られる「豊年祭」と同じに扱おうとする向き²⁹もあるが、諸鈍集落では別に豊年祭を行っている。この解釈が誤りであることを説明することでシバヤの「演劇」としての性格がよりわかりやすくなると思われる。

シバヤの概要

口承によると、源平の戦いに敗れた平資盛は、源氏の追討から逃れるために奄美大島に渡ってきたという。資盛は加計呂麻島の諸鈍に移城を築き、薄幸な一生を送った。彼が交流を深めるためにこの土地の人々に教えた演舞が、諸鈍シバヤの始まりといわれている。かつては20種余りあったという演目も今では半減し、11演目が諸鈍シバヤ保存会によって伝承されている。現在は主に旧暦9月9日の集落行事の日に、資盛を祀る大屯神社の境内で踊られている。（瀬戸内町立郷土館・図書館ホームページ http://www.setouchi-lib.jp/assets_j5.html 斜字部筆者）

加計呂麻島もまた落人伝説がそこそこに見られる島であるが、このストーリーは実は明治以降に鹿児島から派遣された教員によって書かれたもの（かもしれない、的なもの）³⁰から始まったものである。近世以降日本、ヤマトとのつながりを常に探し求めて来た奄美の人々にとっては飛びつきたくなる言説だったはずだ。従って正確な起源はわからない。近代になって最初の記録とも言えるのは、「大奄美史」であって昇曙夢が1937年に見たシバヤのことが詳述されている。「沿革」と題してその当時の集落民からの聞き書きが続くが、演目や進行などは現在とほぼ同じであり少なくともこの時代にはいまの形ができあがってい

²⁸旧暦8月15日に「油井の豊年踊り」が開催される。演目・形態などは似ているが、メインイベントである相撲やそのほかの行事の中に組み込まれ、時間も短い。

²⁹小野重郎1994。おそらくは小野は諸鈍集落での調査確認をしていない。「奉納相撲の余興」という油井集落でのものとの混同も見られる。

³⁰出典は執筆時現在不明であるが、記録が瀬戸内町立図書館に存在している

たことがわかる³¹。最大 20 前後あったとされる演目のうち、現在も上演される 11 の演目と上演順はかわっていない。³² そしてシバヤが豊年祭の演しものではなく、独立した演劇であるというもう一つの理由が、メンバーの合意のもと随時上演されるものであるということである。旧暦 9 月 9 日には必ず行われることからシバヤ保存会のメンバーの中にも「神事」と捉えている人がいるのだが、その舞台となる大屯（おおちゃん）神社とのつながりはそもそものもの³³ではなく、またシバヤは 19 世紀後半には興業化し、奄美群島の様々な場所で上演されていた。しかし明治 10 年頃、徳之島での興業で大損失を出し、存続の危機に陥った。それを島内の篤志家が資金援助することで 1920 年頃に再興したという。その後も著名人の来島や軍隊の駐留の際などに上演された記録がある。³⁴ 娯楽として芸能として成立し、単一の集落の行事ではなくなったのであった。

諸鈍シバヤの内容、演目の詳細については本稿の目的ではなく数多くの資料があるのでここでは立ち入らないが、ヤマトや中国、王朝時代の琉球とのつながり、汎太平洋的な仮面劇の影響などもいわれ、当時のはやりのものが入り入れられていき、時代を経ていろいろな変化があったこともうかがわれる。その意味での大きな転換点は 2011 もしくは 2010 年³⁵に取り入れられた、各演目の前にその内容や由来を説明する「口上」の日本語化である。少なくとも 20 年³⁶前からは、最初の演目である「サンバト」（三番叟と思われる）の前にだけ、挨拶となぜその日にシバヤを上演するのかについての説明、そして「サンバト」についてが、シマグチで語られ開演してきた。しかし諸鈍シバヤを目指しての観光客が増えたこと、地元住民にもシマグチを解する者が少数になったことなどを理由に「口上」がかつて語られていたものを翻訳して全ての演目について「説明」されることになった。形式としては以前に戻ったが、使われる言語が変わったということになる。ストーリー性があり娯楽として成立した経緯、さらには特定の日だけに上演されない³⁷、などの理由で琉球列島の他の民俗芸能とは一線を画すものであるといえよう。

シバヤ保存会

1976 年に国指定重要無形民族文化財に指定されたことから「保存会」が立ち上げられた。

³⁸ 現在の構成員は正メンバーである「青壮年団」が 18 名、中学生も含む『若手』が 9 名で、彼らがパフォーマーとしての中核となる。保存会とそれをめぐる集落の状況を聞き取

³¹ 町健次郎 2007

³² <http://www.syodon-spirit.com/> 国や行政のものよりも地元諸鈍小学校のサイトがシバヤについてわかりやすい

³³ この神社が資盛を祀ることも言説を「裏付けて」しまったが、戦前までは「ミヤー」と呼ばれる広場で上演されていた記録がある。

³⁴ 昇がみたシバヤも豊年祭を見に来た昇を歓迎するために上演されたものであり、この記述が「豊年祭の際の演しもの」という誤解につながった可能性がある。

³⁵ 関係者の証言が現在の時点で食い違っているため。

³⁶ 同上の事情による。書かれた記録がないため関係者の記憶による。

³⁷ たとえば 2017 年には「関西奄美会 100 周年記念式典」で上演された。

³⁸ 文化庁のサイトでは「保存芝居保存会」とされているが、シバヤと言う呼称が芝居の転訛であるかどうかはわかっておらず、現地ではシバヤとしか呼ばれない

りしたが情報源は記さない。諸鈍に限らないが集落の人間関係は強くかつ複雑であり、一つの発言が予想しない結果を招くことがある。匿名を条件に保存会の主要メンバーの一人に話を聞いた。

2017年は保存会にとってある意味大きな転換点であった。長年にわたり続いていた旧暦9月9日の公演が台風のため中止になったのだ。この日の公演が中止になった記録も記憶も集落にはなく決定までにはかなりの議論があった。もう一つはその公演の前に、30年以上「唄者」とよばれる劇の後ろで演奏される音楽のいわばリード・ボーカルをつとめてきた男性が急死したことである。彼は集落にとどまらず諸鈍シバヤの象徴でもあった。シマウタの名手でもあり即興の掛けあいでは敗れたことがなく、地域語シマグチの話者でもあった。それゆえにというべきか、彼の氏は長年にわたり誰もが危惧していた問題を現実のものとした、後継者の育成問題である。存在の大きさにそのことを誰も切り出せず、また同時に個人に依存していたともいえる。その後新体制が生まれ公演に向けての準備はひとまずされたが中止は本意では無かったが、救われたと感じたことも事実だという。彼抜きでの公演がうまくいくかどうかという不安はあったという。

週に一度、夜に集まっての練習は途絶えることなく続いている。次回の公演は行われるだろうが、全体も含めた伝承の問題、芸としての後継者問題は解決してないと考えられ、常に不安を保存会のメンバーは抱えている。

子どもシバヤ

諸鈍は加計呂麻島ではいまでも人口において最大の集落ではあるが、もちろん急激な少子高齢化を免れているわけではない。諸鈍には小中学校があるが、児童生徒の数はこの10年で半減、2017年には小学生12名、中学生2名である。これは周辺の集落から通学する生徒を含んでいる。諸鈍シバヤでは中学生や小学校の高学年の「男子」は特に10月の公演ではメインの出演者の一部である。かつては子どもたちの間ではいわば「レギュラー争い」があり、踊りやシマグチがうまいかどうか競われた。2000年代の初頭まではそういう状況だが、ここ数年は競うだけの数がない。また中学校を卒業すると諸鈍集落以外の子どもはシバヤに出演できなくなる。「諸鈍」の「男」が演じるもの、という掟がいまも生きている。

小学校や中学校で何度かシバヤを題材にしたものが練習され演じられてきたが、外で演じられることはなく学校の中にとどまっていた。子どもたちにはシバヤのことが伝えられ「伝統」や「格式」が強調されるが、その中には当然「諸鈍の男」以外は演じられないということも含まれることになる。何世紀も続いてきた諸鈍と他の集落の「格差」も感じられるはずである。

シバヤの近年の大きな変化の中で、演目の間に「余興」として演じられるようになったのが、諸鈍へき地保育所の園児による「子どもシバヤ」³⁹は確かに見ていてほほえましいものであるが、そういう大人たちの「事情」に遠いところにあることがもう一つの理由かも

³⁹ <https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20171014-00010003-nankainn-146> 2018/01/21
現在もとの南海日日新聞のサイトが

しれない。屈託無く楽しんでいる女の子や諸鈍集落以外の子どもたちは今のままだと将来「排除」されるのである。

諸鈍シバヤの言語伝承と今後

800年という由来や縁起については既述の通りだが、シバヤが文化財であることは間違いが無い。その中に「保存」(preserve)されることばやストーリーは貴重なものであるが、それゆえに変えられないことが数多くある。そしてそのことが今シバヤの在り方や今後の「縛り」になっていることは間違いない。後継者の問題は最大の課題であろう。また町を通じて支給される保存会への予算は年間7万円にすぎない。衣装や楽器の補修や保管、毎週の練習の経費などに明らかにたりないという。足りないということは保存会の会員の持ち出しが前提とされているということになる。こうした負担は高齢化もすすむ会員には大きい。唄者についても触れたが個人の努力や犠牲に依存していることは将来に不安をこのす。

「伝統」と諸鈍集落のプライド、それらのものがあいまって「諸鈍シバヤ」について諸鈍の人々の思いは複雑で、よそ者が簡単に評するようなものではないことは理解しつつも文化財としてのある種の「神格化」が行き過ぎることは今後の良い展開を期待できない。かつてあったようなシマの人々の娯楽としての在り方も忌避せず、そして変化を退化ととらえないことも必要だろう。

与論島『もうひとつの按司根津栄伝説』

与論島『もうひとつの按司根津栄伝説』

前田達朗

はじめに

与論島で文化庁の支援を受けた事業として2017年11月25日の公演を目指して、8月から準備・稽古が本格化した。スーパーエキセントリックシアター(SET)から脚本家と演出家を招き、島民をキャストに、与論島に伝わる「アジニッチェ」の伝説を下敷きに坂田鉄平によって書き下ろされたのが『もうひとつの按司根津栄伝説』である。この初めての試みが地域社会でどのように受け止められたかについては時間をおく必要もあるかと思うが、公演当日を挟んで現地で調査を行ったものの報告である。

「方言劇」の概要

4月から島内で始まった公募に応募した与論島住民が出演し、与論島在住のミュージシャン川畑アキラが音楽を担当した⁴⁰。9月から稽古が本格化した。それ以前から住民による準備は始まっていた。キャストがなかなか確定しなかったのが準備段階での一番の課題であった。⁴¹2017年11月24日に「与論町文化祭」のメインイベントとして上演された。劇は2幕10場、上演時間約60分であった。戯曲のモチーフになったのは13世紀北山王朝に与論が侵略された際、琉球北山軍の上陸を阻んだ英雄「アジニッチェ」の伝説である。いまも彼を祀る「神社」が存在し、彼の「遺骨」とされるものも伝承されており、与論島の住民・出身者（以下島民とする）にとってはなじみのある物語である。その時代に現代の与論島の高校生と教師がタイムスリップし、島民たちと交流し生活を共にし、アジニッチェの琉球軍との戦いに参加、琉球軍が攻め込み与論島民が殲滅されようとするその時、アジニッチェは戦死し若者たちはそのタイミングで現代に戻るというストーリーである。SEなどのエンジニアやプロの役者も沖縄から参加、SETのメンバーが不在の間は彼らが指導にあたっていた。

「方言」の役割

劇中では現代の若者は東京語の若者言葉、800年前の与論島民は与論語（ゆんぬふうとうば）、琉球人は時代がかったスタイルの日本語に設定されていた。ここでは演者を含む島民の呼称にならって「方言」と呼ぶことにする。脚本家坂田鉄平へのインタビューによると、若者には現行の方言を話させるアイデアもあったが、昔の島民の話すことばとの対比を鮮やかにするため「共通語」を使った。また琉球軍や北山王に日本語を話させることの問題にももちろん気づいていたが、琉球語を話させるのは難しく演出効果を優先させた。従って現代の日本語、昔の与論語という対比は配役や脚本の中で大きな柱となる。島民の言葉がわからない若者は「ひいおじいちゃんがしゃべってた言葉に似ている」という。自分たちが現代にいないことを理解させる大きな手がかりが言葉である。中年の教師は時間を経て彼らの言葉を理解するようになり若者との通訳の役割を果たすようになる。そうし

⁴⁰ 川畑の個人ブログに経緯は詳しい。<https://ameblo.jp/akiramanspring/entry-12306618899.html>

⁴¹ 制作側、地元住民側双方がこの点については共有していた。

て若者たちは島民のことばを理解するようになり非対称バイリンガルになっていく。これらの事象は与論島民にとっては受け容れやすいものなのであろう。

台詞の中での棲み分けは、配役と当日の観衆の反応にも投影された。すなわちかつての島民役はほぼ40代以上の島民が演じ、若者役は当然ながら20代以下の若者が演じるのだが、「方言」の台詞に笑うのも中年層以上の観衆であった。調査としては十分でなく詳細は別稿に譲るが、琉球語域の中でも与論は話者の年齢が比較的若く、しかも日常的に使われていると見えた。それゆえ「わかる」「わからない」の違いも鮮やかであった。また移住者の割合も高いと島民は考えており、「若者」「中年以上」「移住者」をわけるとメルクマールに与論語はなり得るとも考えられているようだ。成人したアジニッチェを演じた人は与論語話者ではないが、台詞としてあたえられるうちに「わかるようになった」とのコメントがあった。

制作側へのインタビュー

演出家の白土直子氏はこれまでも同様の経験、プロの役者ではない人々に演技指導をして劇を作り上げるというもの、を何度か経てきた。従って与論でのこともそれほど特別ではなかったとのことである。時間の感覚の違い、キャストの集まり、練習が始まってからの個々人の気持ちの入り方の違いなどがあげられたが、受け入れられてからはスムーズにいき、彼女の話す「標準語」でもコミュニケーションに齟齬はなかったと感じていた。

脚本家の坂田鉄平氏の劇中での言語の設定については既述したが、地元の人々と話し合っただけで脚本を練り上げたと考えている。特に翻訳の作業が入るため通常の作業より多くの労力を要した。「方言劇」という設定のため予想はしていたが、ことばの「距離」は想像以上であったという。事情が許せば継続して取り組みたいという。

短い時間であったこと、本番の前後であったことなどを考え合わせると、彼らのコメントの中に課題を見つけることは難しいため、今後も継続的な調査が必要であらう。

演者へのインタビュー

既述のようにキャストは一名の沖縄からのプロの役者をのぞき全て与論島在住者であった。これは文化庁事業の当初の目的のひとつでもあったのだが、「演劇」そのものに未経験の人々（学芸会に出た、のようなものはもちろん除いて）が劇を作り上げるというかなり非日常的な経験に興奮があったことをまず断っておかなければならない。今回の劇の「でき」は本稿の目的ではないが、素人目には相当の完成度であったと考えている。前節でのべたように本番直後のインタビューであるために総括や批判的な分析は難しいと考えるからだ。従って話題は劇そのものよりも自身のあるいは同世代の、与論全体を見通した言語状況の話に及ぶことが多かった。インタビューは構造化することはなく2名⁴²での調査であったが展開はそれぞれがその場ですすめた。「今回の劇が『方言』の状況にどのように影響するか?」「自身の今後の言語生活にどのような影響があるか?」「若い世代の言語継承について」は全員に聞くことだけを設定した。およそ30名に及んだ出演者のうち6名に話を聞くことができた。以下それらの抄訳である。

⁴² 「演劇」の調査は石原昌英氏と前田が担当した。

- ① 準主役女性 1965 年生まれ;高校卒業後内地で就職。名古屋圏、東京圏で主に生活し、2014 年頃に帰郷。自分の年代では「方言」は個人差はあれ普通に通じるという認識がある。長く島を離れていたが「方言」使用に不自由はない。今回の劇での配役も小柄で若く見えるということ(娘役)とことばができるということだと考えられる。帰島後、幼稚園・保育園で勤務したが、島の言葉を使わせることに現場では積極的だった。だが個人や施設により差はあると感じている。演技をする経験は初めてだが自分は楽しめた。自身の子ども(20代)を含め、特に島を離れた若い世代は「方言」の能力は「低い」と感じている。与論は40代でも方言を使うがそれ以下の世代との差が激しい。
- ② 若者役男性 1991 年生まれ;高校卒業後関東地方の大学に進学、大学院で民俗学を専門とする。帰島語は家業に従事。3世代同居のため、祖母や父母からしまことばは日常的に習得した。しかし父親が「しなければならぬ」方針だったため反発も感じていた。今でも「しまことば」を父親の前で話すのが抵抗ある。「間違え」と訂正されるから窮屈に感じるからだ。父親だけでなく上の世代の前で話すことには抵抗が劇では日本語だけを話す役だったので正直ほっとした。島で仕事をしている若者、特に男性には与論語が必要だと考えている。
- ③ 高校生役高校生(男女二人) 高校2年生。中学時代からの友人。男子の方は演劇部で、募集の時に女子を誘った。「方言劇」という募集は他の人には敷居が高かったと思う。男子は移住者の子ども。父母とも関東出身だが父親は島の言葉を使える。現業系の仕事には不可欠だと思う。与論は好きだが大学に進学したいため島を離れることを考えている。女子は島の「窮屈さ」を感じている。しまのことばは、中年以上の男性が使うものだと考えているが、少しだけ興味が出た。ただ今のところできるようになるとは思えない。この劇の効果もわからない。
- ④ 教師役教師 1965 年生まれ;薩摩地方出身。2年前に赴任。与論の文化と国語教師として「方言」にも興味がある。島民ではないが今回「方言」を話す役まわりだったことに「少し」考えたがやってよかったと思う。任期は残り少しだと思うができるだけ「勉強」したいと考えている。少し「方言」がわかるよになって島の人たちとよりわかりあえるようになったと感じている。
- ⑤ 与論語指導・翻訳・長老役 「ゆんぬふうとうば」継承・普及に長年関わってきた人物。今回の劇の制作にも最初期から関わった。この企画の効果と継続に期待をしている。ただ劇のための練習となってしまうと「目的」から外れると考えている。

演者の共通の感想としては「劇は成功でありよい経験をした」ということであつたが、このことをのぞくと、世代間の言語能力の差があるという言説が共有されていることであると言えよう。配役の部分でも触れたが普及・継承を目的とするのであれば「話させる」というアプローチも考えられたはずだが作り込む中で長い台詞は非母語話者には難しいという議論もあつたそうである。限られた時間、「素人」に演技をさせるという難しさなどを考えると理解できるのだが、劇としての完成度が優先された感はある。

この世代間の「分断」の原因を探るにはあまりにも不十分なため推測もさけるが、ヒントとなるものは「男性は話せるようになる・必要である」というコメントであろう。脚本の設定からして当然であるが、こうした与論の言語状況を今回については「追認」ということしかできなかったというのが調査を通じて得た印象である。またこれは与論に限

定されたことではない「年上のひとのまえでは話しにくい」という若い世代の感覚が現れたことも制作過程で影響があったかも知れない。今後の調査で確認したい。

さらにインタビューという形ではなかったが演者の中から「長時間・長期間の稽古の負担」を訴える声が複数あった。なかなかキャストが集まらない・決まらない中で特定の人間関係を伝に「断れない」人がいたことも間違いはない。どのように参加者を募っていくか、モチベーションをどこにおくかが問題になろう。特定の個人の負担への依存がここにも見られたのである。

結語 演劇と言語継承

伝統芸能としての諸鈍シバヤと初めての与論での現代演劇の試みを並べ論ずることに意義を見いだすとすれば、それは継続する可能性を考えることであろう。与論の「方言劇」を続けるとすれば、ということになるだけでなく、伝承の困難さが増したと言われている諸鈍シバヤが続くための課題と共通するところがあると考えからだ。まずシバヤで見て取れた個人の犠牲や個人へ依存する体質、体制が与論でも早くも見えた。具体的には「できる人」がより負担が集中する状況である。島のコミュニティの濃密さが素地にあるのは間違いなく、どのような行事にも共通することではあるが、推進力であると同時にその個人に何かあったときのバックアップが考えにくい。またこの年長者や実力者を上位とするある種の階層性はその下位に置かれるもの、とくに若年者の参加をためらわせるものになっていることも見て取れる。このバランスをどこで取るかは外部のものからはコミットしにくい部分であるが、たとえば与論でも「よそ者」の存在や役割が大きかったことも一つの示唆であろう。また与論の場合は沖縄と近いことが様々な面で利点となっていたように思う。また演劇「だけ」では言語継承に効果がないことは諸鈍シバヤが地域のシマグチ教室と連動しなくなったこと、イベントのための練習になってしまったことからわかる。⁴³

また時間を経た諸鈍シバヤと新しい試みの大きな違いは「現地化」できていることだろう。諸鈍が頑なに諸鈍のものとして守ってきたシバヤを後継者不足の面では足かせであるかのようにも書いたが、一方で保存会を中心としたメンバーだけで上演ができる体制がある。今回のような試みは与論島住民だけでは続けることは現状では難しいと思われる。しかし「方言」に関わるものは古いもの、というイメージを覆すためには「新作」が必要である。「伝統」だけを追い求めて行くことは言語そのものの活力を奪うことになる。そういう意味では与論の試みは一過性のものに終わらなければ言語伝承の機会となり得ると考える。

その際になにが必要か、ということをごとこで論じるのは難しいが、たとえば今回の劇の設定にもあったような「『方言』はふるいもの、年寄りのもの」といった前提を若者に「方言」を使わせるような役どころを積極的に配置していく必要があると思われる。伝承の機会となる可能性がある一方で「分断」を加速させることもあり得ると考える。

言語継承は言語だけの継承では維持できないことは間違いはない。自分たちの文化やアイデンティティの継承であることも間違いはない。その「場」としての演劇の可能性は三つの事例に見て取れたと考える。またいずれの事例も今後の推移を見守る必要がある。

⁴³ 石原の沖縄 Hands-On の項に詳しい

ユヌフトゥバ劇に関するアンケート調査結果の分析

ユンヌフトゥバ劇に関するアンケート調査結果の分析

石原昌英

1. はじめに

2017年11月24日に鹿児島県与論町の総合体育館砂美地来館（さびちらかん）において、ユンヌフトゥバ（与論方言）劇『もうひとつの按司根津栄伝説』（坂田哲平作）が上演された。按司根津栄（アジニッチェ）は与論町民の殆どが知っている伝説上の人物である。劇では、現代の若者達が按司根津栄が生きていた時代にタイムスリップして物語が進行し、現代の若者達は日本語を話し、按司根津栄を含め昔の与論島の人びとはユンヌフトゥバを話す。

プロの劇団の指導を受け、与論町民が演者とした参加したユンヌフトゥバ劇について、観客がどう評価したのかを知る目的でアンケート調査を実施した¹。アンケートでは下記の質問をした。

1. 貴方は与論町の出身ですか。
2. 貴方の年齢は何歳代ですか。
3. 貴方はユンヌフトゥバをどの程度話せますか。
4. 貴方はユンヌフトゥバを聞いてどの程度理解できますか。
5. 貴方はどの程度ユンヌフトゥバを使用していますか。
6. 貴方は与論島の子ども達にユンヌフトゥバを使えるようになってほしいと思いますか。
7. 貴方は今日のユンヌフトゥバ劇の内容をどの程度理解できましたか。
8. 貴方は今回のような住民が参加するユンヌフトゥバ劇の上演はユンヌフトゥバの保存継承に効果があると思いますか。
9. 質問8の回答の理由は何ですか。

以下にアンケートの質問に対する回答とその分析を述べる。

2. アンケート結果とその分析

まず、アンケートの回答者は102名で、そのうち与論町出身者が69名、与論町外出身者が32名であった（無回答者が1名いた）。次に、回答者の年代は表1の通りである。なお、年代については、1は7歳～12歳（小学生）、2は13歳～15歳（中学生）、3は16歳～18歳（高校生）、4は19歳～29歳、5は30歳～39歳、6は40歳～49歳、7は50歳～59歳、8は60歳～69歳、9は70歳～79歳、10は80歳以上と区分した。1～3の区分は、学校レベル（小中高）に合わせた。

年代	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
人数	2	1	1	11	16	17	20	23	7	4

表1 アンケート回答者の年齢

表からわかるように小中高の児童生徒の観劇者は少なかった。また、19歳～29歳の観劇者も少なかった。ユンヌフトゥバの保存継承の担い手となる世代の観劇者が少ないということであるが、この世代がユンヌフトゥバに接する機会をどのようにつくっていくかは一つの課題であろう。

¹ 演者の評価については、前田執筆の「もう一つの『安司根津栄伝説』」を参照のこと。

質問 3（あなたはユンヌフトゥバ（与論のことば）をどのくらい話せますか？）に対する回答の割合を図 1 に示した。なお、選択肢は 1（十分に話せる）、2（ある程度話せる）3（少し話せる）4（ほとんど話せない）5（まったく話せない）の 5 つであった。

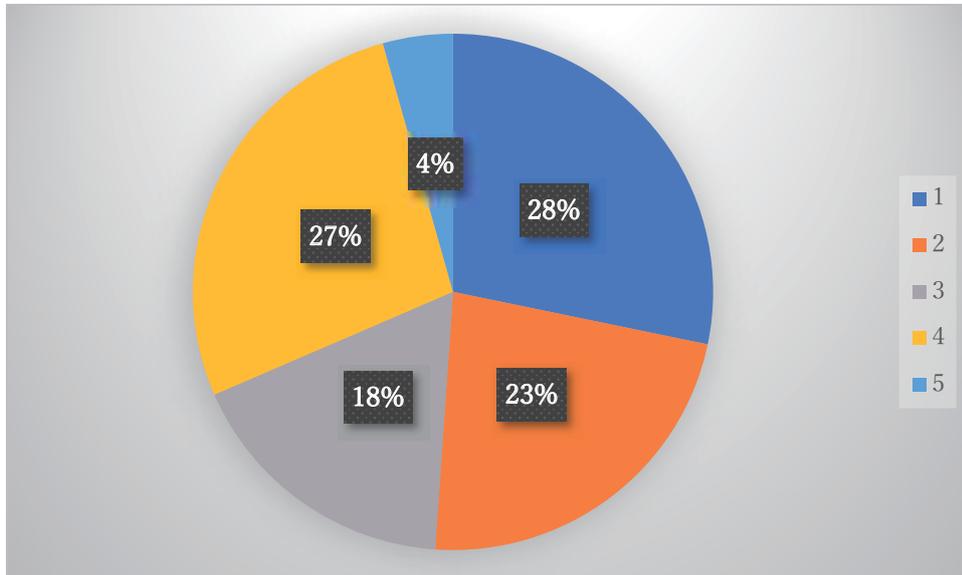


図 1 ユンヌフトゥバを話す能力

「十分に話せる」「ある程度話せる」「少し話せる」と回答した者の割合は合わせて 69% であった。回答者を与論町出身者 69 人に絞ると、59 人（86%）が「十分に話せる」「ある程度話せる」「少し話せる」と回答している。「ほとんど話せない」または「まったく話せない」と回答した者は 10 人でそのうち 30 歳代以下が 8 人であった。ここから、データとしては少ないが、与論町在住の与論町出身者でユンヌフトゥバが話せない者は 30 歳代以下の世代であると推測できる。言い換えると、40 歳代以上の人は「ある程度話せる」以上の能力を有していると推測できる。

質問 4（あなたはユンヌフトゥバを聞いてどのていどわかりますか？）に対する回答の割合を図 2 に示した（無回答者 1 人を除く）。なお、選択肢は 1（十分に理解できる）、2（ある程度理解できる）、3（少しだけ理解できる）、4（ほとんど理解できない）5（まったくわからない）の 5 つであった。

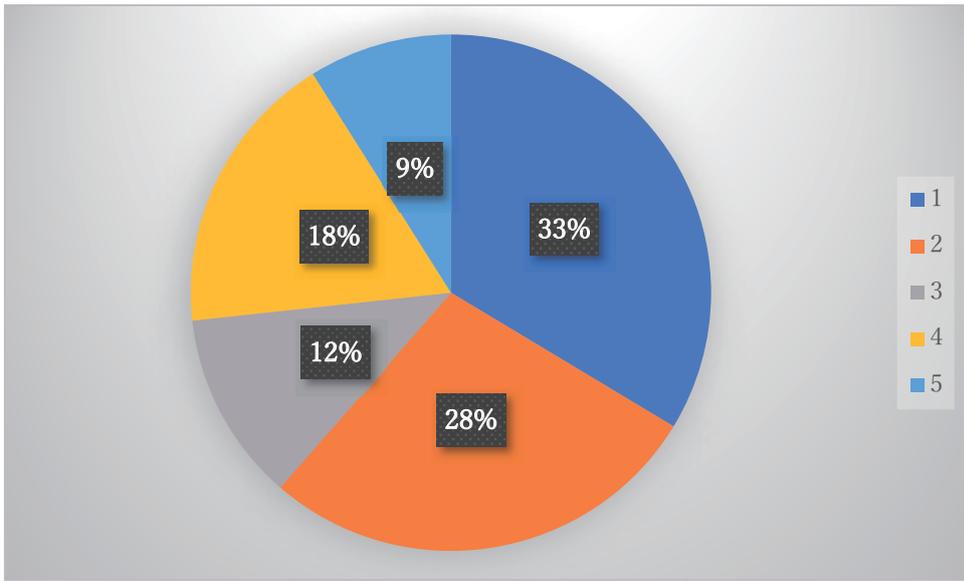


図2 ユンヌフトゥバを聞いて理解できる能力

「十分に理解できる」「ある程度理解できる」「少しだけ理解できる」と回答した者の割合は73%であった。回答者を与論町出身者だけに絞ると、64人(93%)が「十分に理解できる」「ある程度理解できる」「少しだけ理解できる」と回答している²。「ほとんど理解できない」「まったくわからない」と回答した者の年代は13歳～15歳が1人、19歳～29歳が1人、30歳代が2名であった。この結果から、与論町在住の与論町出身者は若い世代でもユンヌフトゥバを聞く機会があり、程度の差はあるが、聞いて理解できる能力を有していることが推測できる。質問3と質問4に対する回答を合わせて分析すると、聞けるけど話せない者(いわゆる「受動的母語話者」)が存在することがわかる。

質問5(あなたはユンヌフトゥバを使っていますか?)に対する回答の割合を図3に示した。選択肢は、1(毎日使っている)、2(時々使っている)、3(使ったことがある)、4(使う機会が無い)、5(使ったことはない)の5つであった。なお、無回答者が12人(12%)いたが、その割合も選択肢6として図に含めてある。

² 80歳代に1人无回答者がいる。その人は質問3に「十分に話せる」と回答しているので、ユンヌフトゥバを聞いて十分に理解できる能力をもっていると推測できる。

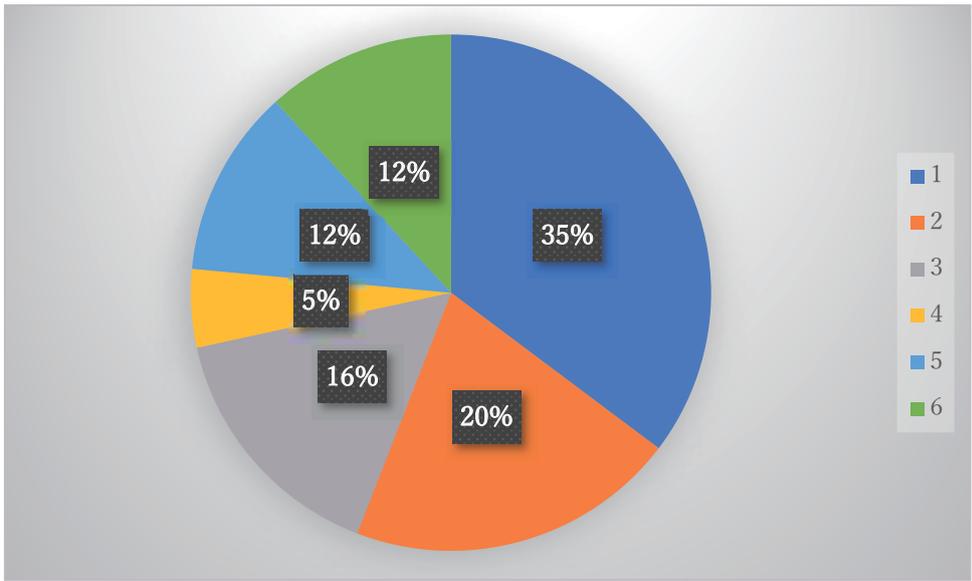


図3 ユンヌフトゥバの使用頻度

「毎日使っている」「時々使っている」「使ったことがある」と回答した者の割合は71%であった。17%が「使う機会が無い」「使ったことはない」と回答している。回答者を与論出身者69名に絞ると、55人(80%)が「毎日使っている」「時々使っている」「使ったことがある」と回答している。無回答者10人について質問3・質問4の回答を見ると、2人を除くとある程度以上の言語能力(「話せる」「聞いて理解できる」)を有していることがわかる。この8名は日常生活でユンヌフトゥバを使っていると推測はできるが、質問に無回答なので断定はできない。なお、与論町外の出身者で「毎日使っている」「時々使っている」「使ったことがある」12人で、そのうち「使ったことがある」と回答した者は11人であった。ここから、町外出身者がユンヌフトゥバを使う機会が少ないことが推測される。

質問6(与論島の子ども達にユンヌフトゥバを使えるようになってほしいと思いますか?)に対する回答の割合を図4に示した。選択肢は、1(強くそう思う)、2(まあそう思う)3(使うかどうか個人が選ぶべきだ)、4(あまり思わない)、5(まったく思わない)の5つであった。なお、図4には無回答の割合13%(13人)を含んでいる。また、「まったく思わない」と答えた者はいなかったため図4から除いた。したがって、図4では、項目5は無回答者の割合である。

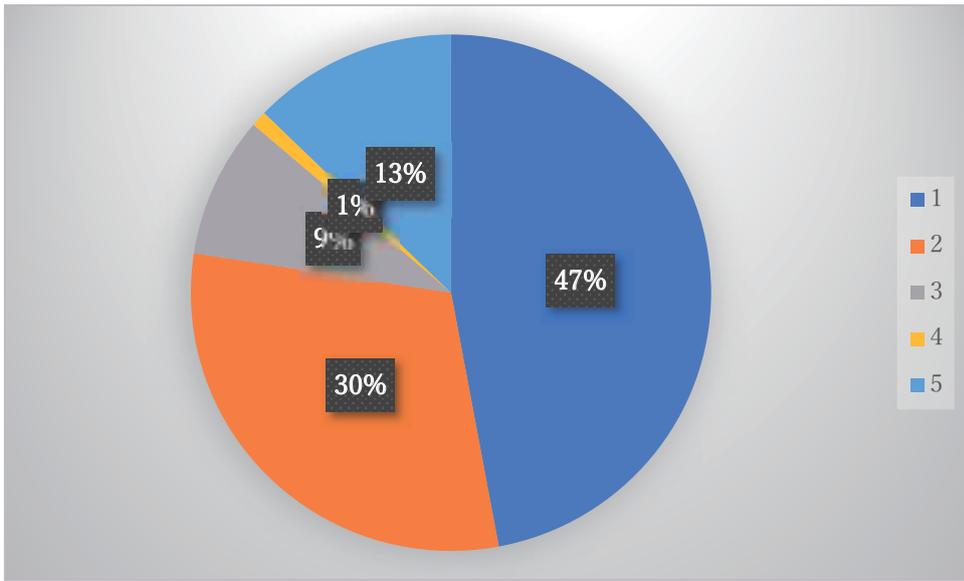


図4 与論島の子ども達がユンヌフトゥバを使えるようになってほしいか？

「強くそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合は77%であった。9%が「使うかどうか個人が選ぶべきだ」と回答している。回答者を与論町出身者69人（11人が無回答）に絞ると、「強くそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合は77%であった。なお、無回答者11人を除くと、回答者58人にしめるこの二つの選択肢のいずれかで回答した者の割合は91%であった（なお、4名が「使うかどうか個人が選ぶべきだ」と回答しているが、そのうち3名は70歳以上の世代に属するものである。）。質問6に対する回答から、与論町在住者の多くが、子ども達がユンヌフトゥバを継承することを望んでいることが推察される。もちろん、データが極小規模であることと、観劇者はもともとユンヌフトゥバに関心があったことが推測されることを差し引いて考察する必要はある。

質問7（あなたは今日のユンヌフトゥバ劇の内容をどの程度理解できましたか？）に対する回答の割合を図5に示した。選択肢は、1（十分に理解できた）、2（ある程度理解できた）、3（わかることばもあった）、4（ほとんど理解できなかった）、5（まったくわからなかった）の5つであった。なお、無解答者が25人と全回答者の25%を占めるが、図5に加えた。

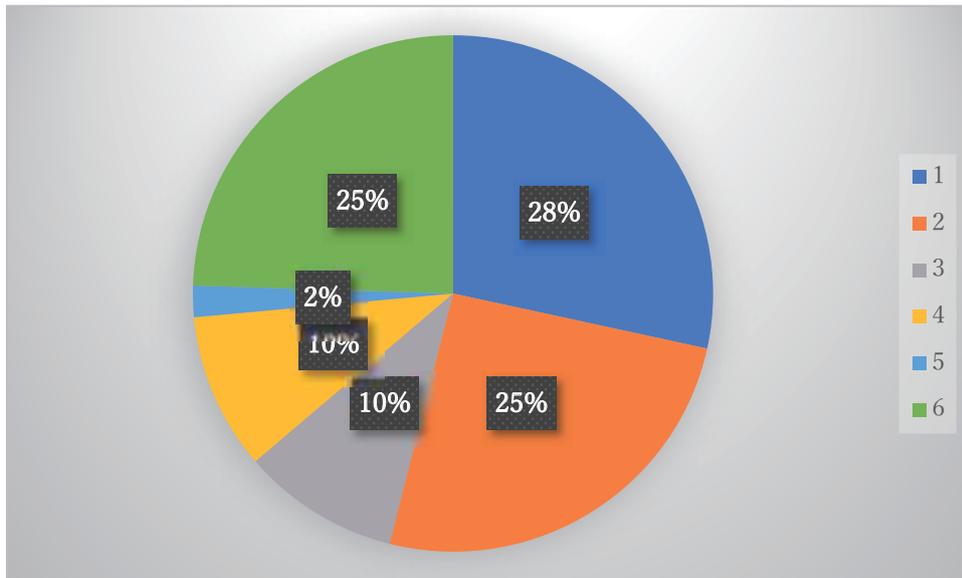


図5 ユンヌフトゥバ劇の理解度

「十分に理解できた」「ある程度理解できた」「わかることばもあった」と回答した者の割合は63%であった。与論町出身者69人のうち無回答者が23人であった。それを除く46人のうち45人が「十分に理解できた」「ある程度理解できた」「わかることばもあった」と回答している。そのうち1人だけが「わかることばもあった」と答えている。また、無回答者23人のうち18人が質問4に対して「十分に理解できる」「またはある程度理解できる」と回答しているため、この18人もユンヌフトゥバ劇がある程度以上理解できたことが推測できる。与論出身者69人のうち62人(90%)が劇の内容をある程度以上理解できたと分析できる。与論町出身者で劇の内容が「ほとんど理解できなかった」「まったくわからなかった」と回答した者またはそのように推測できる者7人のうち4人が30歳代以下の世代に属していて、3人は70歳代以上の世代に属している。

質問8(今回のようなユンヌフトゥバ劇の上演はユンヌフトゥバの保存や継承に効果があると思いますか?)に対する回答の割合を図6に示した。選択肢は、1(強くそう思う)、2(まあそう思う)、3(あるかもしれない)、4(ほとんどそう思わない)、5(まったくそう思わない)の5つであった。なお選択肢4または5で回答した者はいなかったため、図6はこの二つの項目は含んでいない。項目4は無回答者の割合である。

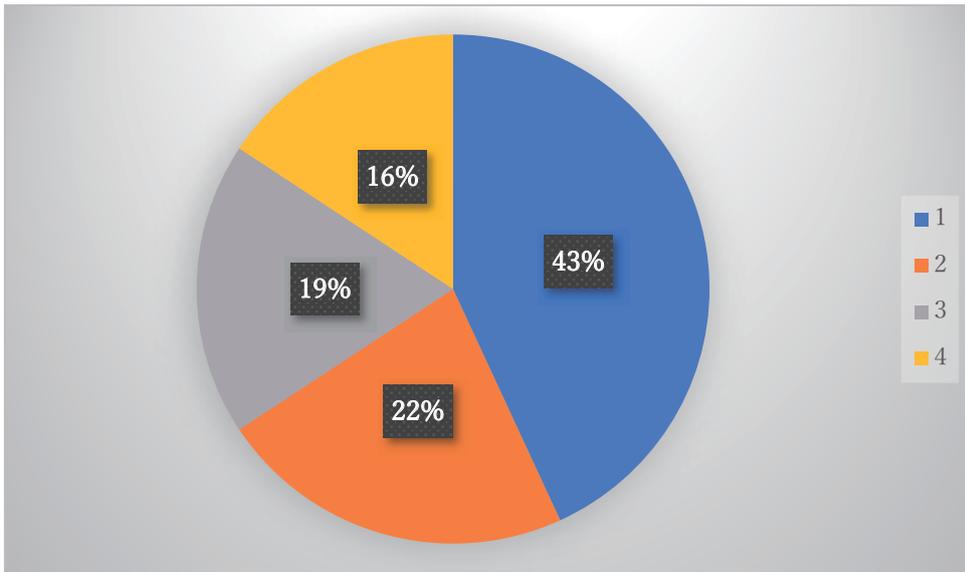


図6 ユンヌフトゥバ劇はユンヌフトゥバの保存継承に効果があるか。

「強くそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合は65%で、19%が「(効果が)あるかもしれない」と答えている。回答者を与論町出身者69人(無回答者12人を含む)にしぼると、強くそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合は67%(46人)であった。図6で「(効果が)あるかもしれない」と答えた19%の回答者のうち11人が与論町出身者であった。

表1に質問8に対して「強くそう思う」「まあそう思う」という二つの回答の理由(自由記述)を列挙した。「効果がある」と回答した理由としては、「残りやすい形式だから」「楽しみながら方言を習ったり、きいたりできるので出演者やみる方も方言を覚えたいと思うのではないか」「耳にする、口にする事で、言葉は生き続けると思います。」「方言を劇で伝える事で分かりやすいものになったと思う。」「方言に親しむきっかけとしてとてもいいと思います。」「若い世代が話すことで、同世代の人も興味がでてくると思います。」「ユンヌフトゥバを使える場があることは保存・継承に大きく関係があると考えから。」「使う場の一つとして、会話の形になっている、演劇は使ってみるきっかけ作りとして有効であるから。」「格好よく見える仕掛けとなることもよい。」などがあげられている。一方、「伝説の保存継承には効果大だと思うが、与論の方言そのものの保存・継承につながるかどうかは疑問である。」という記述もあった。また、観客としては台詞がユンヌフトゥバと日本語の「二言語」になっていることで劇の内容が理解しやすかったという記述が複数あった。劇の効果ではないが、「今伝承していかないと消滅する」「島独特の文化であり守り伝えていく義務があると思う。」という記述など、文化継承のために言語を継承することが重要であることが述べられていた。

1	すごい完成度で感動しました。
2	ユンヌフトゥバを将来も伝承してほしいから。
3	残りやすい形式だから。
4	私達の小中のころ学校でヨロン言葉を使ったらバツ当番させられ、今世界も英語へと進んでいます。世界も複雑になりヨロン言葉が役にたつのではないかと思います。
5	子供も興味を持てる内容で与論に伝わる伝説も方言と同時に伝えることができよかったです。

6	①少し会話が早い。・・・理解する前に大きな言葉で会場の方に発音がハッキリ聞けるようにしたら理解できるかな！！②島出身である以上方言は理解し取組が全員が欲しい！！③島内の史跡めぐり含めて！！
7	とてもよかったです。ありがとうございました。
8	今伝承していかないと消滅する。島独特の文化であり守り伝えていく義務があると思う。島の人達だけで話しができるって素敵じゃない。
9	マイクが聞きづらかったが、内容は以前から聞いていたので理解は出来た。方言は家庭の中で必ず使う習慣づけることによって自然に覚え、話す事ができると思う。
10	子育て世代の親たちが方言を知らない、話せないから、ムリかもと思った。親世代に方言を覚えてほしいと思う。
11	音楽が1体となってとてもよかったです。みいしく とうとうがなし！
12	感激感激でした。世界観に吸い込まれそうで、のめり込んで見入ってしまいました。音楽、照明、演者の方々の演技がとてもすばらしかったです。脚本もとてもすばらしかったです。改めてヨロンはすてきな所だと思いました。それを代表するユンヌフトゥバがこれからもずっとずっと続いていくことが大切な文化を守ることだと思いました。ユンヌフトゥバは聞くとても美しい響きでうるわしくすてきだと思います。私は嫁に来た身ですが、本日の劇を通してあらためてステキな言葉たちだと思いました。感動しました。ミッシークトートゥガナシ
13	方言ばかりでなく標準語での説明もあり、説明のしかたもとても自然でとてもよかったですし分かりやすかったですと思います。素晴らしい劇をありがとうございました。
14	楽しみながら方言を習ったり、きいたりできるので出演者やみる方も方言を覚えたいと思うのではないかと思います。またあれば見にいきます。
15	今日の劇に大変感銘を受けたので。ありがとうございました。感動しました。
16	皆人にわかりやすくヨロンの人に親しみある題材でユンヌフトゥバの継承に大いに役に立つと思う。
17	これを機に子供達にもっと方言に興味をもってほしいと思いました。私も子供に方言を使わせなきゃなー！！
18	子供の頃あれば使っていた方言が永年使わないことで、忘れてしまいがちです。耳にする、口にすることで、言葉は生き続けると思います。自ら使い子供に伝えることを考えていきたいです。今回のような劇として、見て聞くことで興味も湧き、使うようになると思います。楽しい劇でした。とーとうがなし。
19	本格的な劇で言葉を理解しようとしている自分がいました。とってもとっても素晴らしかったです。毎年やって欲しいです。感動です。
20	すばらしい伝統は残さないと思う作品だったから。
21	方言を劇で伝える事で分かりやすいものになったと思う。
22	方言のあとに共通語の訳が入るような構成で分かりやすくよかった。意味も分かり興味を示した子も多いと思う。島外出身の方も上手に話していてよかったと思う。
23	伝説の保存継承には効果大だと思うが、与論の方言そのものの保存・継承につながるかどうかは疑問である。劇は大変すばらしかったし楽しいものでした。有り難うございました。劇冒頭からの生演奏も効果大で大いに盛り上げてくれました。

24	竹富島で暮らしていたコトがあり、竹富島の祭種取祭に島民全員が役者として参加するお父さん、お母さん、兄弟の姿を見て子供たちは自然と種取ごっこをするうちに方言を覚えていたので。遊びの中で覚えることが一番近道だと思います。
25	方言に親しむきっかけとしてとてもいいと思います。劇は今回だけでなく毎年上演してほしいと思います。
26	若い世代が話すことで、同世代の人も興味がでてくると思います。皆さんの頑張っている姿はすばらしかったです。
27	子供たちが与論の歴史に興味や関心を持つきっかけとなり、島民が島への愛着、誇りをもって、これからも与論の発展のためにがんばっていく力になると思います。
28	多くの方々に見に来ていただいたり、また演じたりすることを通して、文化が継承していくと思うから。すばらしい劇だった。ミッシークトトウガナシ！！
29	現代語でみるより心に響くような気がしました。言葉がわからなくても、劇の中でなんとかわかることができ、興味をもつきっかけになるとおもったからです。感動しました。
30	ふるさとの文化を大切にしてほしい。
31	わからなかった言葉を知りたい気持ちが強まるので。とてもすてきな劇でした。1時間あつという間でした。按司根津伝説の中身は知らなかったので、分かりやすくてよかったです。
32	地元の方々が一生けん命方言を使いながら演じてくださっていてその気持ちが楽しい劇となり見ている方々の心を動かしたと思います。きっと方言っていいなと思ったと思います。
33	劇を通すことで関心をもって親しむことができる。
35	(心温まる言葉であると思う) ユンヌフトゥバは使うことが難しい(年上の方に使う言葉など相手によって使い分ける言葉)なので、耳にすることで少しでも親しむことから入れるとよいと思う。
36	BGMもあってすごく興味がわく内容だった
37	使う場の一つとして、会話の形になっている、演劇は使ってみるきっかけ作りとして有効であるから。格好よく見える仕掛けとなることもよい。
38	今回の様な伝説風の劇を文化祭のときやってほしいと思います。今回分かり易く楽しかったです。方言の劇すばらしかったです。
39	言葉は用いる機会が無いと失われると思うため。
40	方言を見直すきっかけになると思う。方言は与論にかぎらず大事に守り伝えていくべきものと思います。また観光資源としても大事にしてもらいたい。
41	ユンヌフトゥバを使える場があることは保存・継承に大きく関係があると考えるから。

表1 質問8に対する回答の理由

3. おわりに

アンケート結果からわかることは、回答者の多くがユンヌフトゥバ劇の公演を肯定的に見ている。劇を観に来るといふことじたいが、ことばに関心があることを示しているが、このような関心が持続され、より多くの町民が関心を持つようになるためにはユンヌフトゥバ劇の上演を続けることが望まれる。質問9の回答には「劇をつづけてほしい」という記述もあった。劇は演者にとっては、ユンヌフトゥバを聞いて・話す場であり、観客にとっては聞く場である。このような場が、ことばを見直す契機となり、それがことばと文化の継承を意識することにつながるのである。

しまことば劇の効果について
沖縄県内でのインタビュー調査から

しまことば劇の効果について
 沖縄県内でのインタビュー調査から

石原昌英

1. はじめに

2017年9月に開設されたしまくとうば普及センターの初代センター長である波照間永吉氏は、演劇を通じた地域のことばの継承の可能性について、「個人的には、子どもたちが地域の民話を地域のことばで演じる演劇が継承に有効だと思う。継承の最後のチャンスと捉え、地域と連携したい」（『沖縄タイムス』2017.9.13）と語っている。地域のことば（方言）と演劇に関して、『朝日新聞』（2009年11月30日）によると、2008年に改定され、2011年に全面実施された現行の小学校学習指導要領をうけて、小学生に演劇や川柳を通して共通語と方言の違いを学び、方言の価値を理解する機会を与える取組が日本各地で実施されてようである¹。このような取組は、教育現場で、子ども達が方言劇を通して方言を学ぶことに効果があると判断されていることを示唆している。

演劇を通して外国語を学ぶことの効果については井村(2004)、米田(2008)、丹羽(2012)、西崎(2012)、安藤(2014)、川村・小林・北岡(2014)、畷(2016)などの先行研究がある。これらによると、児童生徒及び学生は、演劇に演者として参加することにより、発音・イントネーションがよくなり、人前で話すことに自信が持てるようになったと自覚している。また、参加者は、自分の台詞を覚えるだけでなく、他の演者の台詞も覚え、「会話」をしないといけないので、コミュニケーション力がついたと感じている。言い換えると、演劇は外国語能力の向上に効果があることが示されている。

外国語ではない日本国内各地のことば（方言）を演劇を通して学ぶことの効果については、「方言劇」「方言劇の効果」「沖縄芝居」「しまことば劇」などをキーワードとして

¹ 2011年施行の『小学校学習指導要領』では、「共通語と方言の違いを理解し」という文言は「第5学年及び第6学年」の「2内容 A 話すこと・聞くこと」に含まれているが、平成33年4月から施行される小学校学習指導要領では「第5学年及び第6学年」の「2内容 [知識及び技能]」に含まれる。

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ウ 語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言との違いを理解すること。(後略)

『小学校学習指導要領』 文部科学省(2017:21)

また、平成33年4月から施行される中学校学習指導要領では、第1学年で「共通語と方言の果たす役割」について学ぶことになっている。

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ウ 共通語と方言の果たす役割について理解すること。

『中学校学習指導要領』 文部科学省(2017:15)

Google で検索をしたが、上記の演劇を通して外国語を学ぶことの効果に関する先行研究に類する先行研究は見つからなかった。

奄美・琉球諸島の地域言語（以下「しまことば」とする）を演劇を通して学ぶことと英語などの外国語を演劇を通して学ぶことには大きな違いがある。すなわち、しまくとうばは、長い間「話してはいけない言語」「継承する必要のない言語」と認識され、地域の若者の殆どが話せなくなり、その結果として、消滅の危機に瀕しているという一方で、後者（特に英語）は「国際語」「地球語」として、その習得が奨励されてきたことである。

演劇を通してしまくとうばの習得・継承に努めることは、単なる「ことばの習得」を越えるものがある。消滅の危機に瀕している言語の保存・継承の意義に関わっているからである。2017年に沖縄県で活動する演劇集団「創造」による『椎の川』（大城貞俊作・1996年）の上演があった。演出をした幸喜良秀は次のよう語っている。

観客に、しまくとうばを「いい言葉」として味わってもらうのも本公演の目的の一つだ。沖縄の言葉がなくなるという切迫感の中、私はこの演劇の「料理人」として、しまくとうばの素晴らしさを現代の人に知らせたい。／かつて沖縄の復帰運動の中で、しまくとうばが顧みられなかった時代もある。沖縄の言葉を大切にすることは、沖縄のアイデンティティを大事にすることでもある。／私たちには沖縄の言葉を教えてこなかった責任がある。だからこそ文化として回復させたい。」（『沖縄タイムス』2017.8.28）

また、『琉球新報』（2017.8.30）によると、与那原町で小学生によるしまことば創作劇の上演を指導している屋比久澄子は「消えつつあるしまくとうばを子どもたちに受け継ぎたい」と語り、劇にドラえもんが登場することについて「うちなーぐちに興味のない子どもを引きつけるためには、ちょっとでも面白くしないと」と語っている。同記事によると演者として参加した小学生（10歳）は「私が方言を話しているのを聞いて、興味を持つ友達もでてくるかも知れない。」と語っている。

本稿では、沖縄県においてしまくとうば劇に演者として参加した若者を対象としたインタビューの内容を分析し、その効果について考察する。

2. 演者として参加するしまことば劇の効果：インタビュー内容の分析

2. 1. 沖縄ハンズオン NPO の若者

沖縄ハンズオン NPO は年に複数回「しまくとうばオンステージ」の一環としてオリジナルのしまくとうば劇を上演している。また、沖縄島中部のデイケアセンターや老人ホームを訪問し、しまくとうばを母語または第2言語とする高齢者との交流を行っている。さらに、浦添市にある児童センターを委託運営し、子ども達が参加する催しも実施している。



図1 第6回しまくとうば On Stage のポスター

インタビューは図1に示した創作郷土劇「きたたんぬ座盛上人（じゃーはねーきやー）」の上演後の2017年8月17日に実施した。一人ずつではなく、集団インタビューで、できるだけ指名しないで、自由に発言できるようにした。インタビュー参加者は下記の通りである。

高校生：比嘉七星、比嘉花衣音、玉城臣之輔、久志海都

大学生・社会人：岸本 新、赤嶺龍風、神村采音、崎山倫、根間広人、新田みき、島袋里咲

同 NPO 理事長の安慶名達也と職員の石嶺美晴はインタビューに同席したが、若者の自発的な発言を促すためかインタビューの質問に対する答えとしての発言はしなかった。インタビューではしまくとうば劇に演者として参加するようになり、その練習・事前学習で学んだこと、しまくとうば劇に参加したことの効果等について質問した。下記にインタビューでの発言を記すが、発言者の氏名は明示していない。まず、沖縄の歴史・文化・言語に関する理解（知識）が深まるという効果である。

- (1) しまくとうば劇の背景的な知識として琉球・沖縄の歴史や言語状況についても学んだが、初めて知ることが多かった。

沖縄のことばはじーちゃん・ばーちゃんのことばだ、昔のことばだと思っていた。

自分は使えないのに、じーちゃん・ばーちゃんはなぜ使えるのか疑問に思っていた。

ここで学び始めて、自分たちのこととばなんだと思うようになった。

ここで学び始めるまでは、沖縄のことばが嫌いであったが、今は沖縄のことばをもっと学びたいと思うようになっている。

沖縄のことばがなくなることで、沖縄のこころもなくなっていくんだ、と考えるようになった。

- (2) 劇の衣装、メイク、台詞に込められている意味（思い）を知るようになり、それを自分たちが次に伝えないといけないんだ、という責任感が芽生えてきた。しまくとうばは昔のことばではなくて、自分たちのことばとして感じるようになった。それを、劇を通して伝えたいと思っている。
- (3) 劇に参加することでしまくとうばを学んだことで、民謡の歌詞の意味が理解できるようになった。意味が理解できたら、参加していたエイサーで叩いていた太鼓が歌詞の意味とあわないと思うようになり、ファッション化したエイサーに違和感をもつようになった。
- (4) しまくとうば劇の地謡として参加しているが、民謡の歌詞の意味を理解しないで歌っていたことに気がついた。前は、意味も分からずに民謡を歌っていたが、意味がわかるようになって感情の入れ方や表情が変わった。沖縄のことばは使われてこそことばであって、使わないとなくなってしまうんだ、ということを感じるようになった。
- (5) 親戚の行事（お盆など）により積極的に参加するようになった。劇から学んだ沖縄の文化が自分の周りに実際にあることに気がついた。

(1)～(4)の発言から分かることはいくつかある。まず、参加者たちは上演の事前学習として学ぶ前は沖縄の歴史や言語状況・衰退の原因について知らなかった。小学校から高校までの学校教育において住んでいる地域の歴史・文化・言語について学ぶことはほとんど無かったのである。また、しまくとうばが「生きたことば」であり、祖父母が話している「昔のことば」でなく、「自分たちのことば」としても機能するということを実感している。自分たちのことばであると実感できるようになれば、それを次の世代に伝えないといけないという意欲と責任感がでてきている。(3)と(4)については、沖縄県において盛んに行われている芸能活動に関する疑問・反省が述べられている。劇を通してしまくとうばを学び、沖縄の芸能文化をより深く理解できるようになった。その結果、自分がそれまでやっていたことが表層的なものであったことを認識したのである。(5)は興味深い気づきである。劇

で学ぶ前もお盆などの親戚縁者が集まる行事に参加していたが、その意味・意義をあまり理解しようとはしなかった。ところが、劇を通して沖縄の行事を再認識することにより、その意味（価値）を理解したので、より積極的に参加するようになったのである。

次に、劇に参加したことは、しまくとうばを母語または第2言語とする高齢者との交流が深まり、それが若者達の言語意識をさらに高まるという相乗効果をもたらしたことがわかる。

- (6) 劇を通して学んだことばを慰問している老人ホームやデイケアセンターで使い、高齢者からさらに学んでいる。
- (8) 老人ホームでより適切な敬語を教えてもらっている。
- (8) 劇で学んだしまくとうばをひーばーちゃんや老人ホームの高齢者に使うようになったら、おばーちゃんたちが私に話す内容が変わってきた。私がしまくとうばを話すようになって、おばあちゃん達がより深いところまで、自分たちにたいしてところを開くようになったと感じている。まえばは沖縄に住んでいるので沖縄人だと思っていたが、「沖縄人」をより深い意味で考えるようになった。
- (9) 自分のおじーちゃん・おばーちゃんのことを知りたくなって、より話すようになり、あたらしい表現を教えてもらっている。
- (10) 母親が祖母としまくとうばを使っているが、私にも使うようになった。生活にリンクしていることを感じるようになった。語彙とか表現が豊かになった。
- (11) しまくとうばの多様性を実感として学んでいる。

老人ホームやデイケアセンターで劇を通して学んだしまくとうばの表現を使い、それに高齢者が反応しているということは、劇に参加した若者達にしまくとうば能力がついていることを示している。若者達は、自分たちがしまくとうばで高齢者に話しかけ、それに反応した高齢者から別の表現等を学ぶことにより、しまくとうば能力がさらに向上していると感じている。(8)は劇で学んだしまくとうばが高齢者とのより深い「心の交流」をもたらし、それが若者の沖縄人意識（アイデンティティ）の再認識につながっていることを示している。しまくとうばを学び使うことは、若者にことばとは何か、自分とは何かを気付かせる効果があるのである。(9)と(10)は、若者がしまくとうばを学び使うことにより、家庭内での言語使用がより豊になることを示している。父母・祖父母のみが使っていたしまくとうばを、若者も家庭内で使うようになり、若者は父母・祖父母からあたらしい表現・語彙を学び、しまくとうば能力がさらに高まるのである。発言者は「生活にリンクしている」と表現しているが、まさに「生きたことば」となっている証であろう。

次に、若者のしまくとうば使用についてであるが、参加者のグループ内では簡単なフレ

ーズを使うようになってきている。しかし、グループ外ではしまくとうば使用のハードルはまだ高そうである。

(12) メンバー間では、「まーんかい ういが（どこにいるの）」などのフレーズを使うようになってきている。妹もハンズオンに参加しているが、妹と二人が使うようになった。四人家族なので、今は使わない両親も使うようになるかも知れない。

(13) 高校の友達に劇の告知をすると「何の役に立つの」と訊かれて、落ち込んだ時もあったが、今は、このような友達をどう巻き込んでいこうかと考えるようになった。

上記のようにしまくとうばを学んだ若者と異世代（父母・祖父母世代）の間ではしまくとうばを介したコミュニケーション行為が起こっている。しかしながら、しまくとうばを学んだ若者とその他の若者（おそらくしまくとうばを学んではいない）の同世代間では、しまくとうばが使われることはないのである。このことは沖縄県におけるしまくとうば復興の課題であろう。保存継承の担い手となる若者の関心を高め、彼・彼女らがしまくとうばを少しでも使うようになるにはどのような取組が必要となるのかを検討し、それを実施することが求められている。インタビューに答えた若者のなかには本屋でしまくとうばに関する本を見たり、買ったりするようになった者もいる。一旦関心が芽生えれば、自ら学ぶようになるのである。この点を考えても、どのようにして関心を持たせるかが課題となる。

最後に、沖縄ハンズオン NPO の若者達がハワイで沖縄の言語・文化の継承に取り組んでいる御冠船歌舞団（うかんしんかぶだん）に招待されしまくとうば劇を上演したことについて述べたい。Ishihara（2007）で述べられているように、1900年に沖縄からハワイへ移住が始まった。沖縄系は現在では5世・6世も誕生しているが、コミュニティの結束が強く、沖縄県人会は日系人会のなかでも最大級の組織で、沖縄の言語・文化に関連する活動も活発に行われている。しかし、ハワイのアメリカ社会及び日系社会の中でマイノリティであった沖縄系の2世・3世の殆どが祖父母のこぼを継承することはなかった。ハワイにおいても、沖縄語は「継承する必要（価値）のないこぼ」であると見なされていたのである。現在では沖縄県人会やハワイ大学で沖縄語や琉球芸能（唄三線・舞踊・琉球琴）が教えられ、祖先の言語文化を学ぶ沖縄県系人も増えてきている。このような状況で沖縄ハンズオン NPO がハワイに招待され沖縄系移民をテーマにしたしまくとうば劇を上演したのである。インタビューで、「ハワイで沖縄文化の継承に努めている団体に招待されて劇を上演したが、ハワイの沖縄系の人達の思いを感じて、沖縄の私たちが学ぶ意義を知った。」という発言があった。自分たちの学びは沖縄を越えて、沖縄の若者が演ずる劇を通して、ハワイの沖縄系コミュニティが自らの歴史を学ぶ機会を与えたのである。また、沖縄の若者達は、沖縄でしまくとうばを保存継承することは、沖縄のためだけではないことを認識したのである。

2. 2. ハワイの沖縄系 4 世

米国ハワイ州ヒロ市（ハワイ島）出身の沖縄系 4 世である Samantha Akemi Maesato に

インタビューした²。彼女は、高校卒業後、東京の大学に留学したがそこではしまことばに触れる機会はなかった。大学卒業後2年前に琉球大学で学ぶために沖縄に来た。琉球大学の学生サークルで1年半分くらいしまことばを学んだ。しまくとうばを学び始めたのは、沖縄から移住してきた曾祖父母たちが使っていた沖縄語に興味があったからである。自分のしまくとうば能力をさらに向上させるために、宜野湾市うちなあぐち会が2017年8月から11月にかけて実施した「うちなーぐち市民講座-芝居を通してうちなーぐちを学ぼう-」に参加した。その講座でもしまくとうばを学び、しまくとうば劇の上演に役者として参加したが、台詞は少なかった。

Maesato はインタビューで次のように語った。

- (14) 2名の講師は日本語で芝居を教える。
- (15) 講座の前半はしまくとうば表現について学び、後半は劇の上演に向けた練習をした。
- (16) 語学の指導はないので、初心者では難しいと思う。
- (17) 文法について学ぶことはなかったが、琉大のサークルで学んである程度の基礎はできていたので、一から始めると言うことではなかった。
- (18) 参加者の多くは60代から70代で、自分から話すことはできても、聞くことはできない。その人たちに発音とイントネーションを教えてもらった。
- (19) 60代70代の参加者たちは、反省会で「自分から自由に表現できるようになった」と語った人たちが複数名いた。講師の先生も、参加者が表現力がついてすらウチナーグチがでるようになったと言っていた。
- (20) 自分の台詞は少なかったが、他の人たちの台詞を聞くことによって、本とか資料とかでは学べなかった、自然な会話、生きたことばを学べるようになった。
- (21) 一番、効果があったのは講座の指導者や参加者から発音・イントネーションを教えてもらったこと。語彙も増えた。本とか資料とかでは発音・イントネーションは学べなかった。
- (22) 芝居で覚えた表現を使うようになった。琉大のサークルでも芝居で覚えたことばを使うようになった。
- (23) 芝居の仲間達と話す時は日本語であった。私がウチナーグチで話しても、日本

² 氏名を出すことは本人の了承を得ている。

語で返してくる。講師の二人も、私とウチナーグチで話しても、途中から日本語になる。

(14) については、しまことば劇の指導者は、しまことばを使って指導することが理想的ではあるが、参加者はしまことばを学びに来ているので、台本を通して発音・イントネーションで教えることで参加者が自信を持って発話できるようにする（後述）を優先すべきであろう。(15)～(17)の発言は、しまくとうば劇は、ある程度の言語知識を習得してから参加する（させる）のがより効果を高めることを示唆している。全くの初心者として参加するのではなくて、劇の練習に入る前に、ある程度の言語学習をするということである。沖縄県においては、しまことば講座を開設している公民館は、講座の成果を示すためにしまことば劇を上演することが多い。(18)と(19)は、しまことば劇に参加することが、40代以上に多いとされる（琉球新報2012, 2017）、「聞けるけど話せない」いわゆる受動的母語話者が「話す」ようになる効果があることを示している。聞いて理解することはできるので言語知識は有しているが、話す機会がなくて、話せなかった（話せないと思っていた）者が自発的に話すようになったのである。このような参加者はこれ以降も日常生活においてもしまことばを使うようになることが予想できる。このような効果は消滅の危機に瀕した言語の保存継承に関して重要なことである。話者数が増えることになるからである。また、話者数が増えることは、しまことばが生活言語として使われることが多くなり、話者数がさらに増加することが期待される。

(20)と(21)については、外国語習得における劇を通じた学びの効果に関する上記の先行研究でも述べられている。母語話者または母語話者に近い言語能力を有する者から正しい発音・イントネーションを教わることで自信を持って声を出すことができるのである。劇では自分の台詞だけでなく、他の演者の台詞も覚える必要がある。また、実際に自分以外の台詞を聞くことによって「聴く力」が向上する。劇では台詞が会話としてつながるので、自分が発話し、他人にことばを聞くことによって「生きたことば」を学ぶことができるのである。

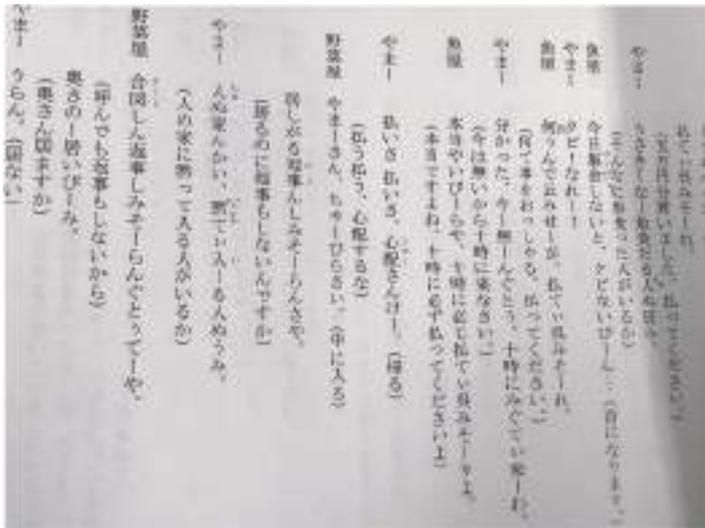


図2 「盗人やまー」の台本

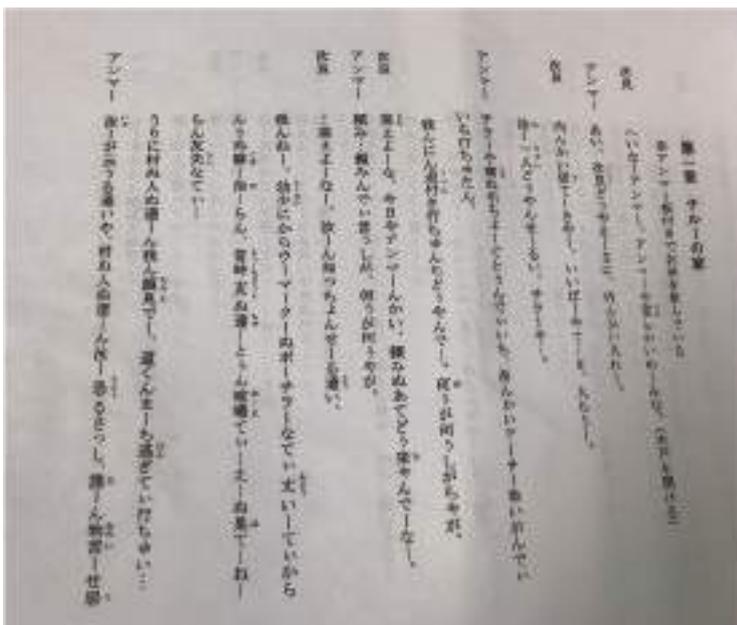


図3 「恋時雨」の台本

Maesato は二つの劇に参加したが、台本の形式が異なっていたようである。図2が示すように「盗人やまー」の台本では台詞に日本語訳が付され、一方、図3が示すように「恋時雨」では、台詞はしまくとうばのみで記されている。Maesato は「盗人やまー」のほうが台詞を覚えやすかったと述べていた。意味を理解して覚え、発音・イントネーションは指導者や他の演者に教わり覚えることができたからである。一方、「恋時雨」については、わからない語彙や表現の意味を、指導者や他の演者に教えてもらい、それから発音・イントネーションも覚えたようである。しまことばに堪能でないものが、限られた時間で台詞を覚えるには、日本語訳が付されていた方が効果は高そうである。

(22) と (23) については、劇を通して学んだしまことばを当該の劇以外で使う機会があるかどうかの課題である。Maesato によると、受動的母語話者であった参加者は、劇以外の機会ではしまことばを使うことが多くなっていたようである。しかし、彼女に対しては、講師も他の参加者も日本語で話すことが多かったようである。(23) にあるように、しまことばで話し始めても、途中から日本語に変わっていたということであるが、より高い能力を有する者の寛容さが必要とされるだろう。

3. まとめ

上記の二つのインタビューからしまことば劇に関する言語継承の効果として見えてきたことは下記の通りである。

- 1) 方言劇に参加することの効果はある。しかし、その効果がでるためには事前学習を通して劇の内容についての歴史的・文化的背景を学ぶ「準備」が必要である。
- 2) 台本の読み合わせに入る前にある程度の「方言講座」を実施し、初心者が方言に関する知識を持てるようにする。
なお、沖縄県において実施されている「方言講座」では、前半を方言指導、後半を成果発表の場として方言劇の上演をしているものが多い。
- 3) 台本は方言-日本語版と方言版の二種類が可能であるが、初心者は前者を使った方がよい。
- 4) 方言に堪能な演者は積極的に発音指導（イントネーションを含む）を行う。
- 5) 「聴けるけど話せない」という「受動的母語話者」は、劇に参加して話せるようになった者が多い。このような人達を劇の役者とすることで少しずつ話者数が増えるかもしれない。
- 6) 若者の参加を奨励する。ただし、方言に関する知識を習得する機会も与える。方言劇に参加する若者は方言への関心が高い。
- 7) そのような若者は、方言を祖父母だけのことばではなくて自分のことばとして認識するようになる。
- 8) 親戚が集まる機会に高齢者と方言で話ができるようになり、喜ばれている。
- 9) 劇に参加した高校生が、クラスメートに方言で話しかけたら「何の役に立つの」と言われている。若者は意識改革が必要かもしれない。そこは国語科目の新指導要領が大きな役割を持つだろう。

また、しまことば劇に参加することは、しまの言語を学ぶ機会であるが、しまの歴史・文化を学ぶ機会でもある。沖縄ハンズオンの若者達の意識の変化は、ことばの継承という効果だけでなく、言語を媒介とする文化やアイデンティティの継承にもしまことば劇が有効であることを示している。

参考文献

- 『朝日新聞』（2009年11月30日）「方言、劇で川柳で学ぶ 小学校で重点化 取り組み多彩」
- 安藤栄子（2014）「英語劇を取り入れた授業の効果」『国際関係研究』（日本大学紀要）35(1):41-49.
- 井村哲也（2004）「英語ドラマ活動は、中学生の英語習得・英語学習にどのような影響を与えるのか」日本英語検定協会 *STEP BULLETIN* 16: 197-210.
- 『沖縄タイムス』（2017年8月28日）「沖縄の心紡ぐ家族愛 演劇集団「創造」第39回公演「椎の川」初の全編しまくとうば」
- 『沖縄タイムス』（2017年9月13日）「しまくとうば振興図る 県庁に普及センター設置」
- 川村一代・小林ゆかり・北岡美代子（2014）「オリジナル劇の実践から見えてきた外国語活動の進め方-“Hi, friends! 2” Lesson 7の3つの実践をもとに-」『小学校英語教育学会誌』14: 4-19.
- 暇 絵里（2016）「『語劇』による教育効果の多様性」『人間文化研究』（桃山学院大学紀要）5:57-85。」
- 西崎有多子（2012）「小学校外国語活動における『桃太郎』をつかった授業展開-英語劇化への過程と民話としての側面-」『東邦学誌』（愛知東邦大学紀要）41-3:1-21.
- 丹羽佐紀（2012）「劇を取り入れた英語授業の試みについての一考察：効果と課題をさぐる」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』22:75-81.
- 文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領』
- 文部科学省（2017b）『中学校学習指導要領』
- 米田佐紀子（2008）「英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み-コミュニケーション能力からみた発音・語彙・文型の定着を目指して-」『北陸学院短期大学紀要』40:65-84.
- 『琉球新報』（2017年8月30日）「しまくとうば継承したい 小学生が創作劇披露へ」
- Ishihara, Masahide (2007) Linguistic Cultural Identity of Okinawans in the U.S. In Joyce N. Chinen (ed.) *Uchinaanchu Diaspoa: Memories, Continuities, and Constructions. Social Process in Hawai'i* 42:231-243.

文化庁委託事業報告書

平成29年度
危機的な状況にある言語・方言の
アーカイブ化を想定した実地調査研究

2018年3月
琉球大学
国際沖縄研究所